
彼はグランパ!!

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼はグランパ！！

【Nコード】

N6036T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

葉月ルコは、青葉台大学付属青葉台高等学校の三年生。

そして数学教師の如月隆羅はルコの育ての親で、

彼女の親友・水無月 海を1年前に川で溺れかけているのを助けた事で2人の秘密の付き合いが始まる。

如月には人に言えない秘密があり、ルコにも秘密があった。

光と影

真夜中の埠頭、夜空には軍用ヘリのアパッチが飛び。

倉庫街には大型四輪駆動車のハンヴィーが待機している。

そして13号倉庫の中では漆黒の蝶が舞っていた。

黒いコートを翻し2挺のベレッタM92FSが火を噴く。

「黒い死神……」

「ツインドラゴン……」

耐え切れず逃げ惑う男達が口々に叫んだ。

「敵うわけが無い、逃げる！」

それでもまだ抵抗する輩には情け容赦無い銃弾とナイフが飛んだ。

「貴様もただじゃ済まされないぞ！」

1人の男が叫ぶと漆黒の男が黒い手帳を開いてみせる。

「特機だと…… あり得ない……」

男から戦意が消え力尽きて崩れ落ちた。

「シルフからノームへ西に車が数台、逃走中」

「了解」

アパッチからハンヴィーに指示が出るとハンヴィーが逃げ出した車を殲

滅に向かう。

しばらくすると任務終了の連絡が入り。

13号倉庫の中から漆黒の男が出てくる。

男の顔には任務を終えた達成感などは無く。

ただ冷たく哀しげな目をして黒い大型バイクで埠頭を後にする。

そして翌朝、シャワーを浴びて熱いコーヒーを飲むと男の顔は表の顔に戻っていた。

再会

朝、青葉台大学付属青葉台高等学校へと生徒や先生が歩いていく。

「おはようございます。如月先生^{きげいせい}」

「はい。おはよう」

「やった！ 如月先生と挨拶しちゃた。どうしよう」

「ええっずるい、私も挨拶して来る」

「あれ、居ないよ。本当に素敵だよ、如月先生って」

「そうそう、とってもクールで背が高くて」

「落ち着いた大人って感じで」

「数学の授業も凄く分かりやすくてさ」

そこに2人の女の子が仲良くお喋りをしながら登校してきた。

「あつ、ルコだ」

「ルコ。おはよう」

「おはよう」

「海も、おっはー^{かい}」

「おはよー」

「良いよなあ。ルコと海は如月先生と同じマンションなんですよ」

「それに、ルコの元……」

「元はやめてよ。今でも私は……」

私は、葉月ルコ 18歳。ここ青葉台大学付属青葉台高等学校の3年生。

朝から女生徒にキヤーキヤー言われている数学の如月先生は、私の育ての親なの下の名前は隆羅^{たから}。

身長180センチ、いつもスーツを着ていて、髪は綺麗にセットしていて顔はまあそこそこかなあ。

でも学校の女子からは大人気なんだけどね。

色々と秘密があつて。そして、私にも人に言えない秘密があるの。それは私、ママなの。

そう如月先生はグランパ。
そして、私の大親友の水無月みなづきかい 海はなんと如月パパの恋人なんだ。
2人の出会いは高校2年のちょうど梅雨の時期だったかなあ。

「もう、うちの家族は何で、いつも、いつもそうなの、私こんな家
もう嫌」

海は家を飛び出し梅雨空の中、通学路の途中の土手を泣きながら歩いて
いた。

「いつも、喧嘩ばかり。どうしてこんなになっちゃったんだろう」
「ニヤアーニヤアー」

どこかで子猫の泣き声がした。

「あれ、どこで泣いているんだろう」

「あつ、居た。流されちゃうでしょう」

川の方を見ると子猫がダンボールに入れられて川を流れていた。

普段は、あまり深くない川だが梅雨の長雨で少し増水しているよう
だった。

夕方で暗くなってきたうえに雨が降りそうな河川敷には誰も居な
かった。

「この棒で」

棒を持って箱を引っ掛けようと必死になっていた。

膝まで水に入り追いかける。

しばらくすると箱が少しだけ頭を出している中州に引っかかり止
ていた。

「今なら、大丈夫かも」

海が少しずつ川に入っていく。

「キャアー」

深みに足を取られ流された。

そこに、黒い大型バイクが通りかかった。

「何しているんだ、危ないぞ」

「おーい！」

声を掛けた時に、女の子が流されるのが見えた。

バイクを止めヘルメットを取り、土手を駆け下りる。

上着を脱ぎ、靴を脱ぎ捨てて川に飛び込んだ。

少し流された所を助けだし流されてきたダンボール箱もつかみ川岸に運んだ。

「おい、おい。大丈夫か？」

水は飲んでいない様だ。おそらくパニックなり気を失っていたのだろつ。

「う、うう、うん」

しばらくすると溺れかけた女の子が気付いた。

「おい、大丈夫なのか？」

「えっ、私。どうして？」

「川で溺れかけていたんだ」

「う、うわああああん。怖かったよ」

気が動転していたのだろう女の子が泣きながら抱きついてきた。

「それだけ、大声で泣ければ、もう平気だな」

優しく抱しめて落ち着かせるとしばらくして落ち着いてきた様だった。

まだ、しゃくり上げているがもう安心だろつ。

「ミュー」

子猫の鳴き声がして女の子が男のシャツを見ると男のシャツの中で何かが動いていた。

「あつ、子猫？」

「ああ、こいつか中州に引つかかっていたのでついでに助けってきたんだ」

シャツの中から猫を出し、女の子の顔を見る。

ロングヘアーで端整な顔に見覚えのある生徒だった。

「あれ？ 君は、確かルコの友達なの？」

「ええっ、き、如月先生？ わ、私、21Aの水無月 海です」

「それで、なんでその水無月が川に入っていたんだ」

「あのう、その子猫を……」

「子猫を助けようとして自分が溺れたと」

「……」

水無月は俯いてしまい何も答えなかった、重々反省はしているようだった。

「たまたま、俺が通りかかったから良いようなものの危ないじゃないか」

「でも、子猫が……ヒック、ヒック」

「ああ、分かったからもう泣くな。とりあえずご両親に連絡して」

「嫌！ 嫌です。家には帰りたくありません」

水無月の顔はとても真剣で必死な顔だった。

「しかしなあ。……お前の家は確か……」

如月がしばらく考え込む。

水無月の両親の事情をルコから何度となく聞いた事があった。

「分かった。とりあえずルコの家に行ってそれから考えよう。このままじゃいくらなんでもずぶ濡れのままじゃ不味いだろう。それで良いな」

「はい」

バイクに後ろに彼女を乗せルコの自宅のマンションまで走る。

8階建ての高級マンションの地下駐車場にバイクを止め、エレベーターに向かうと水無月が不安そうな顔をして聞いてきた。

「ここがルコの家ですか？」

「ああ、そうだ。来た事無いのか？」

「はい、初めてです。でもなんで如月先生が」

「俺が、ルコの育ての親だったって言うのは知っているよな」

「それはルコから聞きました」

「俺も、このマンションの最上階に住んでいるんだ。ルコ達の部屋はその下の7階だ」

「ええ、そうなんですか」

エレベーターで7階まで上がりルコたちの部屋の呼び鈴を鳴らすが返事が無かった。

買い物か何かで出掛けているのだろうか。

彼女を見ると震えていた。

蒸し暑い時期とはいえ、ずぶ濡れでバイクに乗ったので体が冷え切ってしまったのだろう。

「まいったな。仕方が無い、先生の部屋でシャワーを浴びろ。いいかルコ以外には、この事は絶対に内緒だぞ」

「えっ、分かりました」

念には念をおして、風邪でもひかれては困るのでとりあえず部屋に連れて行き風呂にいれさせる。

濡れた服は洗濯し乾燥機に入れさせた。

「どうしよう、先生の部屋なんて」

「でも、先生の普段も見えて見たいな。うふふ」

「ちよつと、ラッキーなのかなあ」

冷えた体をゆっくり湯船で温めていると両親の喧嘩などどうでも言うように思えてきた。

それに憧れの先生の部屋に入れた事が嬉しくってしょうがなかった。でも、夢は直ぐに覚めて現実が目の前にある事も海は良く知っていた。

「先生……」

水無月が困った顔をしてバスルームから顔だけ出した。

「なんだ、どうかしたのか」

「あのう、下着は何とか乾いたんですけれど洋服が……」

「それでも、着ている」

「はい」

仕方なく如月が自分のスエットを部屋から持ってきて水無月に渡すと、ぶかぶかのスエットを着てバスルームから出てきた。

「だぼだぼです」

「当たり前だ」

「あの、先生。今日は……」

「悪いが、俺にも風呂に入れさせてくれ。寒くなってきた」

「あつ、すいません」

「ああ、それとルコの携帯に連絡入れておいたから、帰ってきたら迎えに来るそうだ」

「ありがとうございます」

湯船で冷えた体を温め風呂から出ると彼女がソファーの上で寂しそうな目をして膝を抱えていた。

不安と安心が入り混じった彼女の顔を見ると、昔に何処かで出会ったことがあるような気がした。

「コーヒーかココアでも飲むか」

「それじゃ、ココアをいただきます」

キッチンに向かい牛乳をミルクパンで温める。

視線に気付き顔を上げると水無月が如月を見つめている。

「なんだ、俺の顔に何か付いているのか？」

「そうじゃなくて、学校以外で先生の事見た事無いからなんだか新鮮で。それにとても若く見えるし」

「それは、学校ではおじさんだと言う事か？」

マグカップにココアを入れ熱々のミルクを注ぎ水無月に渡し、如月は大きなマグカップでコーヒーを飲んでいた。

「ありがとうございます。と、とんでもないですよ、そんな。皆から大人気の先生ですよ、おじさんなんて。年相応で落ち着いた大人って感じです」

「まあ、昔から年よりは若く見られたからな」

「先生、あの……」

「どうした」

「その、猫はどうするんですか？」

水無月が床でミルクを貰って飲んでいる子猫を見ながら、少し哀し

そんな目をして聞いてきた。

「そうだな、とりあえず俺が預かって飼い主になってくれる人でも探すか」

「じゃ、しばらくはここにその子ここに居るんですね」

水無月の顔がぱつと笑顔になった。

「水無月は、動物好きなのか？」

「はい、でもうちのマンションはペット厳禁だから。ここは平気なんでしょうか？」

「まあ、平気と言えば平気かなあ」

「いいな、でも何だか微妙な言い方ですね」

「そうだな。一応このマンションのオーナーは俺だし」

「ええっ！ 先生のマンションなんですか？」

「名義だけな、親父の管理しているマンションだよ」

そこで、チャイムが鳴った。

「如月パパ、海は大丈夫なの？」

天然パーマの軽くウエーブした髪を揺らしながら幼さが残る顔をしたルコが、ドアを開けると息を切らして慌て顔を出した。

「落ち着け、ルコ。大丈夫だ。おい！ 水無月、ルコが迎えに来たぞ」

「ハイ」

と元気良く返事をして、ダボダボのスエットのズボンを持ち上げながら水無月が玄関にやって来た。

「プツ、海。その格好は何？」

「しょうがねえだろ、俺の家にこいつに合う服なんて無いんだから。後は頼んだぞ、何かあれば連絡しろ相談くらいなら聞いてやるから」
如月はこの一言が後悔？ の元になるとはその時思いもしなかった。

「じゃ、水無月、ルコの家で着替えさせてもらえな」

「はい。先生、今日はありがとうございました」

「また、学校でな」

そして週末の土曜日になると、朝からルコが如月の部屋にやってきた。

「なんなんだ、こんな朝早く？　それも今日は土曜で学校は休みだろっ」

「如月パパが、海の事で相談があるなら聞いてくれるって言っていたから」

「で、こんなに早い時間にか。お・や・す・み・な・さ・い」

徐に寝返りをうって、もう一寝入りしようとするルコが俺の体を揺すった。

「駄目え！　これから海のパパとママに会って欲しいの」

「俺が、何で？」

「海がもうあんな家は嫌だって言ったら、ママがそれなら家にいらっしやいって言って。海の両親に電話してくれたんだけど。その時に学校の先生も近くに住んでいるし安全だからって言ったら、それなら先生も一緒なら話を聞きましょうって……」

「それで、沙羅と顔をつき合わせて水無月の両親に会いに行けと？」

お前らは、本当に昔から変わってないな。嫌だ、そんな面倒な事は」

「だって、海が可愛そうでしょ。それにパパが相談に乗るって言うたんでしょ、男に二言は！」

「ああ、分かった。準備するから待っている」

仕方が無い、男に二言は俺の口癖だった。

「えへへへ、優しいだから如月パパ大好き」

「俺は、嫌いだ」

「プー、意地悪。本気で言ってるでしょう」

ルコが拗ねたように頬を膨らませた。

近くの喫茶店で待ち合わせて話をする事になったのだが。

水無月、水無月の両親と沙羅、如月の5人の話し合いは直ぐに終わった。

如月は父兄からもかなり人気があり信頼されていた為だった。

「近くに住んでいらつしやる先生って、如月先生だったんですね」

「そうですが、私では何かご不満でも」

「いえいえ、そんな事はございません。むしろ安心したくらいですわ」

「では、海さんは私がお預かりしても宜しいのですか？」

沙羅が海の両親に確認を取る。

「如月先生も近くにいらつしやる事ですしね。あなた」

「ああ、そうだな」

「海の話、よろしくお願いいたします。生活費は毎月お支払いしますので」

「判りました」

「それじゃ、海。ご迷惑お掛けしない様にね」

「先生、私の為にありがとうございます」

「礼ならルコに言ってくれ。私もここで失礼する」

隆羅が席から立ち上がり水無月の両親に一礼をして喫茶店から出て行った。

その直ぐ後を海の両親が別々に目も合わせずに店を後にした。

「しかし、あの格好の時は、本当に冷たい男ね」

軽くウエーブのかかった長い髪をかき上げながら何処から見てもキヤリアウーマン姿の沙羅が言った。

「え、あの格好の時ですか？」

如月は学校の時と同じスーツを着ていた。

「そうよ。海ちゃんも直ぐに分かるようになるから、あいつの本性が。それよりこれからよろしくね。海ちゃん」

「はい、よろしく願います」

そして、その晩。ルコからいつもの様に一方的な電話が掛かって来た。

「如月パパ、明日の日曜日どうせ暇でしょ。お買い物に付き合っ

ね。それと晩御飯は皆で食べましょって、ママが」

「嫌だ」

「海がお礼をしたいって」

「そんな物いらないし、そんな必要は無い。それにお前以外のお前と同じ年の子と出かけるような事はしない。前にも言っているだろうが」

「それは知っているし、その問題はクリアしているから。海は子どもの頃事情があって2年ダブっているから学年で言えば2つ上だからね。明日、9時に駐車場で待っているからね。」

ガチャリとルコが一方的に電話を切った。

「おい、ルコ。クソ、またやられたか」

翌朝、ルコと海は駐車場に降りるためにエレベーターに乗っていた。

「ねえ、ルコあんな電話で本当に如月先生来てくれるの？」

水無月が不安そうな顔でルコに聞いた。

「大丈夫だって、ルコのお願ひ聞いてくれなかった事なんて一度も無いもん」

「うそー！ 凄いだルコって。でもそうだよ、パパなんだもんね。ルコのパパとは結婚もしていたんだしね」

「うーん、そこは微妙かなあ」

「えっ、何で？」

「結婚は形だけだったから。私を育てる為に夫婦で居てくれたの、寝室も別、生活も半分半分だったからね」

「でも、そんな事って……」

「理由は絶対に教えてくれないんだ。でも、凄い感謝はしているの、私のために10年もそんな生活してくれたんだもん。それに今のパパと如月パパはとても仲が良いしね」

「そうなんだ、なんか不思議だな。あの如月先生から想像もつかないや」

「今日、これから会ったらもっとビックリするよ。絶対に」

「ええ、なんで？ 教えてよ」

「会ってみてからの楽しみ」

「ずるいよ、ルコ」

「ほら、海行くよ」

エレベーターを降りて海の手を取り駐車場に向かう、そこには1人の若い男が立っていた。

派手なオレンジのキャップを深めに被りメガネを掛けてTシャツにストライプのシャツをだらしなく着て、Gパンに黒のスニーカーを履いていた。

年は20代後半か30歳位だろうか。

「お待たせ！」

ルコが男性の腕にしがみついた。

「ええつ、ルコ。誰なのその男の人、彼氏なの？」

「何を驚いている、水無月は？ 行くぞ」

海の耳に届いたその声は紛れもなく如月先生の声だった

「えっえええー！」

海の悲鳴にも似た叫びが地下駐車場に響いた。

そして腰を抜かしその場に座り込んでしまった。

「如月パパ。海。駄目みたいよ」

「しょうがないヤツだな」

海に近づき腰を持ち上げ海を立たせる。

「えっと、あの、あの」

「大丈夫か、しっかり立ってくれ」

「は、はい」

海の顔が湯気が出るんじゃないかというくらい赤くなった。

「海、何を真つ赤になっているの？」

「だ、だって。せ、先生が」

海が動揺してシドロモドロになり慌てふためいていた。

「そんなに驚く事か？ 俺にだってOFFの時間はあるんだ、いつもあんな堅苦しい格好はしたく無いからな」

「そうなの。海、この格好が私のパパの時の格好なの」

「その言い方にも語弊があるな、これが俺の普段着だ。昔からな」

「早く、行こう如月パパ」

「ああ、行くぞ。水無月」

「あ、あのう先生」

「水無月に一言だけ言っておく。今は先生じゃなくて如月隆羅だ、いいな」

「は、はい。き、き。如月さん？」

「如月でも隆羅でもいいから行くぞ。ほら手」

「は、はい」

差し出された手に海は恥ずかしそうに少しだけ手を繋いだ。

はじまり

あれが2人の最初の出会いなのかなあ。

しばらくして夏休み前に私が妊娠している事がママにバレて。今の学校には居られなくなっちゃうところだったんだけど。ママの配慮で留学と言う形で海外の学校に行く事になったの。だって今の友達とこれでお終いなんて嫌だったんだもん。そんな時にあの事件が起きたの。

「変ね」

「どうしたの、ママ」

「最近、海ちゃんのご両親と連絡が付かないのよ、お金の振り込みも不定期みたいだし。まあ、お金なんて最初から貰う気無かったから別にいいのだけど」

「今度の土曜日にでも、海ちゃんとルコで海ちゃんのお家に行ってみてくれないかしら」

「うん、分かった」

そうして、次の土曜日に海の両親が住んで居るマンションに向かったの。

「ここが、海のお家なの？」

「うん、ルコの所よりは凄く狭いけどね」

「ここが、そうだよ」

「出かけているのかなあ」

ドアの前でチャイムを鳴らす但返事が無かった。

海が仕方なく鍵をだし開けようとするが鍵が合わない。

「あれ、変だな。合わないや」

しばらくしていると管理人が2人を見つけ声を掛けてきた。

「あれ、海ちゃんじゃないか。今まで何処に行っていたんだい」

「管理人さん、鍵が合わないんだけど」

「それが……実は別々に出て行ってしまった。しばらくしてから業者が荷物を運び出しに来たんだよ。最後の家賃は支払済みだったし、業者に聞いても何処に行ったのかまでは分からないって言われてね。中を見てみるかい」

「はい」

管理人がドアを開けるとそこにはガランとした部屋があるだけで何一つ残っていないかった。

「わ、私。どうすれば……」

ルコが海の顔を見ると真っ青になり震えていた。

すると突然、海が走ってマンションを飛び出した。

「海、海！ 待って！ どうしよう。そうだ、ママに」

ルコがマンションの前まで追いかけて辺りを見渡すが海の姿は何処にも見えなかった。

ルコが慌てて沙羅に携帯で電話をする。

「ママ、大変なの。海が、海が」

「ルコ、落ち着いてしゃべりなさい。何があったの？」

「海のお家に行ったら、海のパパもママも出て行ってしまっていて部屋には何も残されていなくて。海が飛び出して行っちゃたの」

「ルコ、良く聞きなさい。その辺りや海ちゃんが行きそうな所を探しなさい。ママも何とかするから分かった」

「うん、探してみる」

沙羅は電話を切ると直ぐに上の階へ駆け上がり隆羅の部屋のドアをドンドンと叩いた。

「うるせえなあ、誰だ。まったく」

「隆羅！」

「なんだ、沙羅か。うるせえぞ」

隆羅が迷惑そうな顔をしてドアを開けると沙羅が慌てて隆羅の肩を掴んだ。

「海ちゃんが大変なの。あなたも探しなさい」

「なにが大変だつて？」

「海ちゃんの両親が居なくなつて荷物も何もかも無くなつていたのよ。もしかしたらあの子」

「分かった、同じ学区内だからそんなには遠くには行かない筈だ。直ぐに探しに行く」

着替えをし、直ぐにバイクをだした。

しばらく辺りを探しているとルコに会った。

「おい、ルコ。居るか？」

「パパ駄目、居ないよ。どうしよう」

「お前は学校の方を探せ、俺は反対側を探すから」

「うん、分かった」

ルコと手分けをして探し出す。

しばらくすると隆羅の頭にあの河川敷が浮かんできた。

「まさか……」

河川敷に向かいバイクを飛ばし土手にバイクを止めて河川敷に降りて水無月を探した。

「水無月！」

「居ないのか。水無月！」

「クソー、ここじゃないのか」

耳を澄ますとバシャバシャと川の中を歩くような水音が聞えた。見ると誰かが深みに向かい歩いていていた。

「あの、バカ」

隆羅が走り出し川の中を進む。深みの手前で何とか追いついた。

「何しているんだ、水無月！」

「嫌、もう嫌。死なせて」

「甘ったれるな」

「もう、死ぬの。何もかも嫌なの、離して」

誰の言葉も聞く耳を持たない海の頬を如月が打ち抜いた。

「いい加減にしろ。ルコも沙羅も皆、心配してお前を探しているんだぞ。お前が死ねば悲しむやつが居るんだ。命を粗末にするんじゃない」

ない」

泣き崩れる寸前で隆羅が抱しめた。

「ゴメンなさい……」

「帰るぞ。いいな」

海を抱き上げてバイクを止めてある土手まで運び沙羅に連絡を入れる。

「沙羅か。俺だ、見つけた。これから連れて帰る、ルコに連絡頼む」
それだけを告げて電話を切った。

「水無月、良く聞いてくれ。これからルコの家に戻る良いな、それからこれからの事を考えよう。けっして悪い様にはしない、俺を信じてくれ」

「うん」

か細い声だが海はしっかりと答えた。
バイクに乗せマンションへ向かう。

ルコの部屋まで連れて行くと沙羅が出迎えルコが水無月を部屋に連れて行った。

「今日は、あのぼんくら旦那は？」

「最近は、会社に詰めているわよ」

「相変わらず、仕事の鬼だな」

「あなただってそうじゃない」

「俺は違う。それより水無月は大丈夫なのか？」

「今は、落ち着いているみたいけれどなんとも言えないわ」

「そうか、何かあれば連絡をくれ」

「ええ、分かったわ」

「じゃ、宜しくな」

「今日は、ありがとう」

「沙羅らしくねえな、アイツは俺の生徒だぞ、当たり前的事をしたただだ。じゃな」

突然、深夜にそれは起きた。隆羅の枕元の携帯が鳴った。

「パパ、今すぐに来て。海が大変なの」

「分かった」

部屋を出て階段を駆け下りてルコ達の部屋のドアを開ける。

そこは大地震でも起きたかの様になっていた。

床には色々な物が散乱していてルコは玄関先にしゃがみ込んで震えていた。

「沙羅！ 沙羅！」

「ここよ」

声がる奥の部屋に行くと手に包丁を持った水無月が立っていて、

沙羅が何も出来ずにただ見ているだけだった。

「何があった？」

「少し前に、急に暴れだして手がつけられなくなったの。ルコはあの体だし」

「分かった。これ以上、水無月をここにおいて置く訳にはいかない。俺が預かる」

「隆羅、あなた何をするつもりなの危険よ」

沙羅が止めるのも聞かずに、隆羅がゆっくりと海に向かい歩き出す。

「こつちにこないで！」

海が震えながら包丁を突き出した。

隆羅が海の前まで進み躊躇することなく左手で包丁をつかんだ。すると手から赤い血がポタポタと落ちた。

「こんな事は、止めるんだ。いいな水無月」

「隆羅。あなた……」

沙羅が目をそらす。

隆羅が包丁をつかんだまま右手で海を抱き寄せた。

包丁を持っていた海の手から力が抜けて、海が気を失った。

「本当に、あなたって人は何でそんな無茶ばかりするの？」

「こいつを救えるのは、今、俺しか居ないそれだけの事だ」

「こつちにそれを。それと手当てをするからダイニングへ来なさい、

いいわね」

沙羅が包丁を受け取りダイニングへ向かった。

「ああ、分かったよ」

海を抱きかかえたまま、ダイニングへ向かう。

ルコがダイニングのテーブルで座って様子を心配そうに伺っていた。

「パパその手……」

隆羅の左手が血で真っ赤になっている。

「大丈夫だ、たいした事は無い」

「早く手を出しなさい」

水無月を抱きかかえたまま左手を沙羅の前に出すと、ピンセットにコットンを挟み沙羅が消毒をする。

「痛たたたた、もう少し優しく出来ないのか？」

「自業自得でしょあんな無茶して。でも傷は深くないみたい」

「当たり前だ、俺を誰だと思ってるんだ」

「はいはい、そうだったわね。すっかり忘れていたわ」

沙羅がわざとピンセットのコットンを傷口に押し付けた。

「だから、痛たたたた……」

「ふふふ。パパ、子どもみたい」

「子どもが子ども言うな」

「そうだね、ふふふ」

「で、隆羅これからどうするの。海ちゃんの事？」

「俺が預かると言っただけだが」

「でも、それじゃあ」

「何か問題でもあるのか？ ルコの体が心配だし、それにルコはしばらくあっちだろう。それに沙羅には仕事があるしな、それに俺なら学校でも見ていてやる事も出来るしな」

「分かったわ、あなたにお願いするわ。それがあなたにも海ちゃんにもいい方法かもしれないしね。はい、終わったわよ」

沙羅が隆羅の手に包帯を巻いてテープで止めた。

「いつも悪いな心配掛けて」

「それはお互い様でしょ」

「そうだな、じゃ連れて行くぞ。荷物は明日にでも取りに来るから。部屋の片付けは悪いが頼むぞ」

「大丈夫よ。これくらいね、ルコ」

「うん」

隆羅が海を抱き上げ部屋を出て行くとルコが心配そうな顔で沙羅に聞いた。

「ねえ、パパ大丈夫かなあ」

「大丈夫よ、それに隆羅の中ではもう決めちゃっているみたいだしね」

「それって意味わかんないよ」

「あなたのパパは、たぶん海ちゃんから離れる気は無いと言う事よ」

「ええ、それって。付き合うと言う事？」

「あの目は、あなたを育てると私に言った時と同じ目だったわ。あなたを10年育ててくれたパパを信用しなさい」

「でも理由は教えてくれないくせに」

「それは、その時期が来たら教えるわよ。それにママは言ったでしょ、あの2人は一緒に居た方が海ちゃんの為にも隆羅の為にもいいのよ」

「でも、そんな事学校にばれたら」

「その時はその時よ、隆羅だって覚悟がなきゃ預かるなんて言わないわ。だから私達が精一杯フォローしてあげないとね、それに私達と住んでいると言っておけば問題は無いわ」

「うん、そうだね。ママ片付けしよう」

「そうね、やりですか」

沙羅が笑顔を浮かべて腕まくりをした。

隆羅は、灯りを落とした部屋の中で床に座りベッドに寄り掛かりながら海を抱しめていた。

しばらくすると海が目を覚ました。

「えっ、先生。私」

「何も言わなくていい。もう何も問題は無いからな」

「でも、ルコや沙羅さんに酷い事を」

「大丈夫だ、誰もお前を責めたりはしない」

「あっ、先生。手は」

「大丈夫だ、かすり傷だ」

「わ、私……みんなに……迷惑かけて……」

「泣きたい時には泣けば良いんだ、水無月の好きなようにすればいい」

海はしばらく隆羅の胸に顔を埋めて静かに泣いていた。

「先生。私、1人ぼっちになっちゃった。パパもママも居なくなつて、思い出まで無くなっちゃった」

「ルコがいるし沙羅だっている、友達だつて居るだろ。1人じゃない。それに思い出なんてこれから作れば良いじゃないか」

「でも沙羅さんはルコちゃんのママで友達は家族じゃない」

「なら、俺がいつも側に居てやる。駄目か、こんなおじさんじゃ」
「……………」

海の体が震えていた。

「どうした？」

「嬉しいの、先生にそう言つて貰えただけで、ありがとう。だつて先生は皆の先生でルコちゃんのパパだよ。私だけのものじゃない、そんな事出来ないよ」

「学校では先生だが、今は如月隆羅だと言つたはずだぞ、それにルコには新しい父親だつて居る。俺は独り者だしな」

「いいの、先生？」

「海と一緒にこれからいっぱい思い出も作っていこう」

「私、気持ち止められなくなっちゃうよ。本当に信じていいの」

「だけど学校では先生だからな。いいか辛い事もたくさん起こるかもしれない、その覚悟があるか」

「私は先生の事が好き。それだけで覚悟なんていらないの、それだけいいの」

「分かった」

「でも、先生は私の事どう……」

優しくキスをされ言葉を消されてしまった。

「先生……隆羅、隆羅が好き」

そして海は号泣した、心の傷を癒すかの様に。

翌朝、チャイムが鳴り叩き起こされた。

「誰だ、こんなに早く。またルコか？」

隆羅が寝返りを打つと海も目を覚ました。

「あれ、ここは。先生？」

「目が覚めたか」

海の目の前には隆羅の顔があつた。

「……………私」

「どうした、そんな顔をして」

顔が真っ赤だった。海を優しく抱しめる。

しつこくチャイムが鳴っていた。

「はいはい、今、出るて」

隆羅がドアを開けるとルコが心配そうな顔をしていた。

「あの、大丈夫だったかなあって」

「何がだ？」

「海の事が心配で」

「おい、海。ルコが来ているぞ」

奥から海が姿を現すとルコが目をまん丸にして何かに驚いていた。

「おい、ルコ。何をそんなに真っ赤になっているんだ？」

「だって、その2人の格好って……」

隆羅の格好はTシャツにボクサーパンツ、海は隆羅の大きなシャツを着ているだけだった。

「何か、不味いか？ 着替えを持ってこなかったから、俺のシャツ

をパジャマ代わりに着せたんだが」

「で、でも一緒に寝ていたんでしょ」

「まあ、ベッドは1つだからな」

海が恥ずかしそうにもじもじしながら隆羅のシャツを後ろから摘んでいた。

そんな海の姿をルコが見て。

「もう、そんな事……」

「はあ？ 何を言っているんだ。お前だって泊まりに来て一緒に寝るだろうが」

「だって、それは親子で」

「親子と言っても、血のつながりは無いぞ。同じ事だろう」

「もう、パパのバカ。海、もう大丈夫なの？」

「うん、昨日はゴメンなさい」

海が深々とルコに頭を下げて謝った。

「いいよ、気にしていないから。私もママも」

「ちょうどいい、海、ルコの部屋から着替えや荷物を取って来い」

「それって？」

海が不思議そうな顔をして隆羅の顔を見上げた。

「今日から、海はこつちで暮らすんだ。嫌か？」

「嫌じゃないけど、先生に迷惑が」

「今さら何を言っているんだ。バーカ」

「如月パパ。そんな酷い言い方しないで、海だって昨日の今日でまだ」

「ルコも、バーカだなあ。本当に、お前は海の何を見ていたんだ。

海はそんなに弱い女の子じゃない。今までだって両親のゴタゴタはあった筈だ。でも学校ではそんな素振りさえ見せずに笑顔で居た。違つか、まあ、今回の事はしょうがないにしてもだ」

「如月パパはちゃんと見ているんだ。海の事」

「ストップ！」

「海だけじゃない、生徒みんなだ。それに海には伝えたはずだ、俺

が側に居てやると。そして学校では辛い事がたくさん起こるかも知れないその覚悟も聞いたが。さあどうする、俺の気が変わる前に着替えと荷物を取りに行くか、沙羅達と3人で暮らすか。チョイスしろ」

「海、どうするの？」

「ルコ。私、隆羅と一緒に居たい」

「早く取って来い」

「うん！」

海が着替えをしてルコと2人で駆け出した。

「ねえ、海。本当に大丈夫なの？ 如月パパはONとOFFじゃ全くの別人だよ。私でさえ辛かったのに」

「ルコ、ありがとう。でも今はもう隆羅しか居ないの」

「そっか、分かった。応援するね」

しかし、ルコが言っていた言葉は思っていた以上に厳しかった。

すれ違い - 1

海と隆羅と一緒に暮らし始めてしばらくしてから問題が出てきた。教師と生徒の恋愛がこんなに難しいのだと思い知らされた。

それは学校で如月の数学の授業中に起きた。

「ええ、ここの公式と数式はテストに必ず出すからキチンと憶えておくように。それと次のページの……おい、水無月、聞いているのか？」

海は隆羅の事を考えていて授業そっちのけで上の空だった。

それは仕方の無い事なのかもしれないが……

「水無月？」

「水無月！ 先生の授業が気に入らないなら帰れ！」

如月の怒鳴り声が響き渡り、教室の中が水を打ったようになった。

そこで、チャイムが鳴った。

「はい、今日の授業はここまで」

不機嫌な顔をしたまま如月が教室を出て行った。

「水無月さん、どうしたの駄目だよ授業ちゃんと聞いてないと。如月先生の授業は人気あるけれど授業態度が悪いと凄く怖いんだからね」

「私も、久しぶりに驚いちゃった。如月先生って格好いいけれど真面目だからね。怒らせちゃ駄目だよ海ちゃん」

友達に散々言われたが、それよりもこんなに遠くに隆羅を感じる事が辛かった。

また、別の日の放課後。

誰も居ない廊下でのこと。

「ねえ、隆羅、隆羅ってば」

「おい、水無月。ここは学校だ、はじめはちゃんと付ける。ここで隆羅呼ばわりされる覚えは無い。用が無いのなら、早く帰りなさい」

「でも、誰も居ないじゃない！」

「ここは、校内だ。いい加減にしろ」

如月が立ち去ると海は立ち尽くし、とても辛くそして切なくなり止めども無く涙が出てきた。

しばらくすると学校では知る人の居ない人気者の如月の事だ、生徒や職員の間でも話題に上るようになった。

「如月先生、最近は少し厳し過ぎやしませんか？ あの水無月は両親が失踪してしまって大変なのだからもう少し配慮を」

「お言葉ですが、授業態度の悪い者に厳しくするのは当然かと思いますが。何か私の方針にご不満でも」

「いや、そういう訳じゃ無いのですが」

「では、問題ないですね」

「はあ、確かに」

「しかし、如月先生は真面目ですからな。しょうがないかもしれませんが」

先生方でさえこの有様だった、ましてや生徒の間では。

「最近、如月先生って怖いよね」

「でも、水無月さんも可哀そうだよ」

「そうそう、だってお父さんもお母さんも蒸発しちゃたんでしょ」

「ええ、嘘。それ本当なの？」

「そこに、あの如月先生の厳しい態度。私、少し先生の事が嫌いになったかも。先生だって事情は知っているはずなのに」

「私、クラスメートとして先生に抗議してくる」

「嘘、本当に行くの？ じゃ私も一緒に行く」

そして、海のクラスメート数人が職員室に向う。

その頃、如月は職員室の自分の机で書類を書いていた。

「失礼します。如月先生、お話があります」

「どうしたんだ？」

如月が手を止めて女生徒の方に椅子を回して向き合い手を膝の上に

置いた。

「水無月さんの事なんですけれど、もう少し考えてあげて貰えませんか？」

「あまりにも、最近の水無月さんに対して酷すぎます」

女生徒達が矢継ぎ早に言った。

「先生は、誰か1人に対して厳しくするとか、曩厩するとかはしてないつもりだが」

「でも、水無月さんは最近ご両親の事とかで大変なんだし」

「じゃ、お前たちは先生にどうして欲しいんだ？」

「もう少し、水無月さんに優しくしてあげて下さい」

「それは、曩厩に当たるんじゃないのか。もし、先生が優しくして周りから不満や水無月に対して嫌がらせなどが起きた場合、誰が責任を取るんだ」

どう答えて良いのか判らず。女生徒達は顔を見合わせる。

「それは、どうすれば良いか分かりません。でも、私達は決してそんな事しません」

「それに、最近の水無月さんを見ていられないんです」

「それは、水無月の事を思つての事なんだな」

「はい」

数人の女生徒が頷き声が揃った。

「分かった、考慮してみるから。教室に戻りなさい、これからも水無月の事宜しくな」

「はい、先生。ありがとうございます」

女生徒が嬉しそうに職員室を後にすると如月は少し苦笑いをした。

「やれやれ、少しきつ過ぎたかな」

隆羅の部屋では2人の間にすれ違いが多くなってきた。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

「ご飯どうする？」

「悪い、今日はもうシャワー浴びて寝かせてくれ。会議が長くてな、教頭のバカが永遠としゃべりやがって、悪いな海。この埋め合わせは必ずするから」

「うん、分かった。おやすみ」

週末頃になると、会話も殆ど無くなり海は隆羅と目も合わせなくなっていた。

「海、海？ 聞いているのか」

「はい、聞いています」

「最近、学校でも同じような態度だな」

「それは、隆羅……」

「俺がどうしたって？」

「何でも、ありません。今日はもう寝ます。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「こりゃ、重症だな」

海が虚ろな顔で寝室に歩いていく。

海が寝室に入るのを見届けて隆羅がため息を吐くと、携帯が鳴った。携帯を見るとルコからだった。

「もしもし、ルコか？」

「パパの馬鹿！ クズ！ 人でなし！」

「その声はルコちゃんですか？」

「何が！ ルコちゃんですか！ こらあ隆羅！」

「なあ、ルコ。もう少しだけで良いから待っていてくれないか」

「えっ、何を。どうして？」

隆羅のあまりにも真剣な声にルコが戸惑う。

「お前の時もそうだったが、今を乗り越えないとこれ以上先には進めないんだ。最初から学校で優しくしてしまったら辛い思いをするのはアイツなんだ。周りから必ず目の敵にされる。俺は自分の立場などクソ喰らえと思っているから優しくするのは簡単だ。しかし今、友達まで失くす訳には行かないんだ。その為ならいくらでも俺は悪者になってやる。俺が周りから何を言われようが構わない。だけど

今が一番大事な時なんだ。一時の感情に流されてしまったら失う物が大き過ぎるんだ」

「でも、パパ。海がもし分かってくれなかった時はどうするの？」

「いった筈だ。いくらでも悪者になると」

「それじゃ、パパが……」

「俺は良いんだよ。今まで周りの人間からいろんな物を奪って来たのだから。今は分からなくても、きっと分かってくれる時が来るさ」

「パパはそれで良いの？」

「ああ、これが俺の覚悟だ」

「パパ、ゴメン。切るね」

ルコは胸が押し潰されそうでこれ以上、隆羅と話をする事が出来なかった。

「ああ、またな」

ルコは電話を切り泣いていた。

自分の知らない隆羅の辛い思いを感じていた。

そこに「ルコ、ただいま」と沙羅が仕事から帰ってきた。

「ママ！　パパが、パパが……」

ルコが泣きながら沙羅に抱きついた。

「どうしたの？　帰って来るなりいきなり泣き出したりして」

「パパが可哀そうだよ、あんまりだよ」

「海ちゃんの事ね。しょうがないわね、本当に不器用なんだから」

沙羅がルコの肩を抱きリビングに連れて行きソファ―に座らせて沙羅もルコの横に腰掛け、優しくルコの肩を抱き寄せた。

「人からいろんな物を奪ってきたって」

「そう、そんな事を。ルコ、自分の時の事を思い出して御覧なさい、もし最初から隆羅があなたに優しくしていたら周りの子は思うのかしら。いい気分はしないと思うけれど」

「そうか、私はパパの娘だから特別なんだって妬まれて虐められていたかも」

「そうでしょ、隆羅だつて四六時中は見てられない。虐められて
いると知れば気に掛ける、気に掛ければ掛けるほど泥沼にはまって
行くわ。そして、一番辛い思いをするのは誰かしら？」

「私だ……」

「そう、今で言えば海ちゃんよ」

「だから、私にも最初あんなに厳しくしたんだ」

「海ちゃんに厳しく接すれば皆の目は隆羅に厳しく、海ちゃんには
優しくなる」

「でも、それで海が、もし」

「それが、『俺の覚悟だ』なんて言っていたでしょ。隆羅は」

「うん」

「そういうヤツなのあの男は。誰からも何も奪ってはいない、私は
素敵な10年をあいつに貰ったわ」

「素敵な10年？」

「ええ、たとえ形だけとは言え。ただそれだけで10年も一緒にい
る訳無いじゃない、辛い事もあったけれど、それ以上に楽しくて素
敵だった」

「じゃ、何で」

「それは、言わない約束でしょ」

「そうだったね」

「今は海ちゃん以上に、辛いのはアイツなの。誰からも良い目では
見てもらえない、そして海ちゃんからもね。だから応援してあげま
しょう。そして私達に出来る事をする事、良いわね」

「うん、そうする」

隆羅達の部屋では。

隆羅が寝室に入ってくると海が先にベッドで横になっていた。
ベッドの横に腰を下ろす。

「海、もう寝たのか？」

「ううん、何？」

「あんな、話が……」

「もう、あんまり優しくしないで」

海のその一言で隆羅の言葉が切り捨てられ、隆羅の瞳に影が差した。
「そうか、分かった。今度の日曜、外で話がしたい。予定を空けておいてくれないか」

「う、うん。分かった」

隆羅が寝室を出て行き、そしてリビングのソファで横になる。

海にはもう耐える自信が無かったのだ、これ以上優しくされれば辛くなるだけだと。

独りになるとどうしたら良いのか判らず涙が溢れてきた。

すれ違い - 2

そして約束の日曜日がやって来た。
隆羅が作った朝食を2人で食べる。会話は殆ど無く黙々と食事をする。

「下の駐車場で待っているから」

「うん、分かった」

隆羅が先に部屋を出て行った。

「こんなに呆気なく終わっちゃうものかな恋って」

気が重いまま海がエレベーターに乗り駐車場へ向かうと隆羅は見慣れない外国の車に乗って待っていた。

「隆羅、この車は？」

「俺の車だが」

「そう」

「乗ってくれ」

「うん」

隆羅の車のコンポから曲が流れていた。

ジャパニーズヒップホップだろうが確かミス・マンディーだと海は隆羅から聞いた事があった。

隆羅は何もしゃべらなかつた。

「ねえ、どこまで行くの？」

高速に乗りしばらく走っていた。

「もう、少しで着くよ」

「浮島？」

標識にそう書いてあった。

長いトンネルに入り、そしてトンネルを抜けるとそこには、海が広がっていた。

「隆羅、ここは？」

「東京湾の人工島、海ほたるだ」

駐車場に車を止めエレベーターで上に行き、海が見えるテラスに出た。

夏の日差しが眩しいが、潮風がとても心地よかった。

「あの、白い建物は何？」

「あれは、トンネルの換気口の為の人工島だよ」

「ねえ、隆羅。私に話って？」

海が先に話を切り出した、本当は聞くのがとても怖かった。でも聞かないと先に進めない気がしたからだった。

隆羅がいつに無く真剣な眼差しになった。

「今、このままでいれば、もっと辛い思いをさせてしまうかもしれない。だから、ここでもう一度海の気持ちを聞きたい。俺と一緒に暮らすか、それとも沙羅の家で暮らすか」

「それは、私の覚悟が足りなかったって事？」

「そんな事はない、ただこれ以上、辛い思いはさせたくないだけだ」海が唇をかみ締めて両手を握り締めて隆羅に向き合っていた。

「ずるい！ そんなのずるいよ！ いつも、いつも私の気持ちばかり聞いて、隆羅の気持ちは何処に在るの？ 私に向いてくれているの？」

それは、最初から感じていた気持ちだった。

「そうだな。すまなかった、もうこれで終わりにしよう」

隆羅の目がとても哀しそうな目になっていた。

その時、隆羅の携帯が鳴った。

「もしもし。パパ、ルコだけど」

「どうしたんだ？ ルコ」

「海と一緒になの？」

「ああ、そうだが……」

「海に変わって。お願い」

隆羅の声には張りが無く寂しげに聞こえた。

「海、ルコからだ」

隆羅が海に携帯を渡す。

「もしもし、ルコ。どうしたの？」

「ねえ、海。今どこに居るの？」

「隆羅と東京湾の海ほたるって言う海が見える所だよ。隆羅が外で話があるからって」

「その話って、もしかして」

「そう、私の気持ちを聞きたいって。でも……終わりにしようって言われちゃった」

海の声も隆羅以上にとても寂しそうだっただ。

「駄目！ 絶対に駄目！」

ルコが今までに聞いた事の無いような強い口調で海に言った。

「ええっ、何で？ ルコがそんな事言うの？」

「海、良く聞いて。私、ママに言われたの前にパパのONとOFFは別人だから辛いよって言ったのは間違いだったの。もし、パパが最初から海に優しくしたら周りの人からどう見られると思う？」

「えっ、それは」

「たぶん、みんな妬んだりやつかんだりして海にいい感情は持たないよね。そして確実に虐めや嫌がらせの対象になる。そして、パパがそれを気にすればするほど状況は悪くなる、一番辛い思いをするのは誰か考えてみて」

「それは、私……」

「そう、そして友達まで失う事になる。パパはそんな事だけにはしたくないって、海にはこれ以上辛い思いはさせたくないって。俺はいくらでも悪者になるって、それで海が離れていくならしょうがない。いつか判ってくれる時があるだろうって」

「私、自分の事しか考えていなかった。隆羅がこんなにも……」

「そう、海はパパに愛されている、パパは口には出さないけれど海の事が好きなんだよ、誰よりも。だから絶対に駄目！ さよならなんて判った？ 海」

「うん……ありがとう……」

海の感謝の言葉は声にならなかった。

「隆羅……」

「答えはでたか？」

隆羅が哀しい目で海の目を見つめて言った。

海の目からは大粒の涙があふれ出ている。

「嫌ああ、1人は嫌あ。ゴメンなさい。隆羅の気持ち考えていなかった。ルコに教えられたの」

海は立ち尽くし拳を握り締め、溢れ出る涙がテラスの床に落ちた。

「私は隆羅が好き。どうしようもなく好きなの。でも……隆羅の気持ちが見えないの。隆羅の心が読めないの。ちゃんと言葉で言ってくれなきゃ分かんない。隆羅の口からちゃんとお願いだから。もう、何も失いたくない。隆羅まで失ったら私どうすれば良いの？ 独りぼっちは、嫌だ……」

海は泣きながら隆羅に精一杯の自分の気持ちをぶつけた。

「ルコに、また助けられたな」

隆羅が海の肩に手を置いて真っ直ぐに海の顔を見つめる、その瞳からは優しさが溢れている。

「海、良く聞けよ。一度しか言わないからな」

「うん」

「海の事が好きだ。絶対に離したくない」

「隆羅あああああ」

ありつたけの力で海が隆羅に抱きついた。

「海、顔グジュグジュだぞ」

「良いんらもん」

「海？」

隆羅が海の名前を呼ぶと海は隆羅の顔を見上げた。

「うん、な……」

また、言葉を消されてしまった、前よりも熱く確かな物に。

そしてしばらく人目も気にせず抱き合っていた。

「なあ、海？」

「何？」

「さつきから、どこかで誰かの腹の虫が鳴いているみたいだが。気のせいかな？」

「隆羅のじゃないの」

「俺の腹の虫は、あんなに可愛く鳴かないが」

「……じゃない」

「聞えないんだが」

「しょうがないじゃない！ 安心したらお腹が空いたの。若い証拠なの！」

「若いね、はいはい。そういう事にしておきましょう、お嬢さん」

「直ぐ、棘のある言い方する」

「いえいえ、決してその様な事は」

「隆羅のバカ！ 大嫌……」

「嫌いですか？」

「意地悪、そんな訳……」

「ほら、飯食いに行くぞ」

「うん、行こう！」

隆羅が腕を腰にあてた。

すると海が嬉しそうに腕にしがみついていた。

海が見えるレストランで食事を楽しみ、海ほたるで2人だけの時間をゆっくりと過ごした。

学校でも隆羅の態度に変化が見られるようになってくると生徒や職員も優しく見守ってくれた。

「水無月さん、良かったね。最近、如月先生優しくしてくれて」

「それは、みんなのお陰だよ。先生に話しに行ってくれたんでしょ」

「だって、友達じゃん」

「ありがとう」

「でもさあ、あのままだったらかなりヤバかったよねえ」

「そうそう、先生方からも如月先生に批判が出ていたんでしょ」

「ええっ、それって本当なの？」

海は全く知らなかった、そこまで隆羅の立場が追い詰められていたなんて。

「ほら、如月先生って保護者にも人気があるし信頼もされていたから、PTAからも話が出ていたって教頭がブツブツ言っていたもん」

「下手したら、吊るし上げもんだったらしいよ」

「そんな事に、なったら先生は」

「まあ、ならなかったから良いんじゃない」

「そうそう、このまま先生と付き合っちゃえば。ルコだって留学で居なくなっちゃうんだしさあ。海だって先生の事好きなんでしょ」

「そんな事、無理無理。だって私なんか……」

「でも、直ぐ近くなんでしょお家」

「そうだけど、年も違うし。みんなと友達でいたいもん」

「そうだよな。みんなの憧れだもんね、先生は」

「おい。チャイムはとくに鳴っているはずだが」

「スイマセンでした。如月先生」

「じゃ、授業を始めるぞ」

みんなを見る目がそうなのかも知れないが。

海には特別に感じていた、優しい目で私だけを見守っていてくれるのだと。

ルコ：1

それからしばらくして、私は留学したの。

留学先はハワイ。

気候も安定していて日本から近くは無いけれどここにはママの知り合いがいっぱい居るから安心なんだって。

そして留学して数ヶ月が過ぎて11月も終わろうかと言う時。

そんな留学も……

沙羅は、経営コンサルティングの仕事をしていて、その為毎朝のニュースは欠かさず見ている。

今朝もいつもと同じ様にニュースを見ていた。

「今日未明、神奈川県川崎市の化学工場で爆発があり、死傷者が出た模様。死傷者の氏名は……長谷 忠志（19）」

「そんな……」

沙羅がニュースを見て愕然としていた。

そして、直ぐに電話をかけるが何度もコールしているのに電話は繋がらなかった。

「こんな時に、なんで出ないの。役立たずなんだから、育朗いくろうのバカは」

そして部屋を飛び出し階段を駆け上がり沙羅が隆羅の部屋のドアを叩く。

「隆羅！ 隆羅！ 起きてちょうだい」

「はい」

海が少し驚いたような顔をして出てきた。

「隆羅はいる？ お願ひ早く起こして」

「はい！」

沙羅の尋常じゃない動揺に驚き海が直ぐに隆羅を寝室に呼びに行く。

「隆羅、隆羅！ 起きて！」

ベッドでまだ寝ている隆羅を揺すって起こした。

「どうした、海？」

「沙羅さんが、大変そうなの」

「沙羅が……はいはい」

隆羅がゆっくり起き上がりリビングに向かい、リビングに居る沙羅に声を掛けた。

「どうしたんだ？」

「忠志さんが亡くなったの」

沙羅が動揺してガタガタと振るえながら泣いていた。

「沙羅。ちゃんと、説明しろ」

隆羅が訳が判らず沙羅の肩をつかんだ。

「ニュースで、ニュースで……」

「海！ 直ぐにテレビをつける」

「うん。分かった」

海がテレビをつけると直ぐに川崎で起きた化学工場の爆発事故のニュースが流れた。

「何て事に」

「隆羅、どうしたの？」

「ルコの彼氏だ。長谷 忠志は」

「ええっ！」

海は言葉を失った。

隆羅が沙羅の肩を掴み言い聞かせるように沙羅の顔を見ながら言った。

「沙羅、落ち着いて良く聞け。お前がそんな状態でどうする、俺はこれからルコの所に飛ぶ。いいかルコと留学先の学校には俺が説明してくるから。お前は忠志の家に連絡して詳しい事を確認しろ。育郎には連絡付かないのか？」

「ええ……」

隆羅の言葉に沙羅が力なく答えた。

「シッカリしろ！ お前がルコの母親なんだぞ！ お前が揺れてど

うする？ 分かったか」

隆羅の言葉で沙羅の瞳に光が戻った。

「海、悪いが、しばらく沙羅に付いて居てくれ。学校は……」

「学校なんてどうでもいい。今はルコの事が最優先でしょ」

「よし、頼んだぞ」

隆羅は簡単に準備を済ませて取るものも取り敢えず部屋を飛び出した。

「沙羅さん、しっかりして」

「ありがとう。取り乱して悪かったわ。私がしっかりしないとね」

隆羅は、空港に向かって車を走らせていた。部屋から出て直ぐに電話をする。

「親父か。すまない大至急ハワイまでのチケットが欲しい。ルコの彼氏が事故で死んだ。これからルコを迎えに行く。帰りのチケットも頼みたい」

直ぐに折り返しの電話が鳴った。

「ああ、親父か。今、どこに居るかって？ もう直ぐ嵐川だが、その河川敷に居る？ ふざけるな、そんな事。ああ、分かったから車を河川敷に止める、しばらくするとそれはやって来て目の前に強制着陸した。」

「親父のヤツ、いくらなんでもやり過ぎだろ」

それは何処からどう見ても開発中の最新戦闘機にしか見えなかった。

「若、お車はお預かりします」

黒いスーツ姿の男が頭を下げる。

「空港に、ワゴンを回しておいてくれ」

「はい、畏まりました」

スーツ姿の男に車の鍵を渡し隆羅が戦闘機に乗り込む、轟音と共に飛び立つちソニックブームの爆音を残し飛び去った。

「しかし、給油機まで。まるで演習だなこりゃ。帰りも、これって事はないよな……」

強烈なGに耐えながら数時間でハワイに着いた。

迎いの車に乗りルコの留学先の学校に向かう。

そしてルコに会うより先に学校に説明をし学校が終わるのを待った。

「バイバイ！ ルコ」

「バイバイ」ルコがラフな格好でクラスメイトと学校から出てきた。
「ルコ！」

「ええ！ なんでパパがここに居るの？」

手を振っているスーツ姿の隆羅を見てルコが驚いていた。

当たり前な反応なのだろう隆羅は日本の学校に居るはずなのだから。

「顔を、見に来た。いけないか？」

「そんな事は、無いけれど。何かあったの？」

突然の事で、ルコは不審に思った。今日は平日で……

「とりあえず、お前のステイ先に行かないか？ お世話になっている人に挨拶もしたいし」

「うん、いいけれど」

車でステイ先に向かう。ルコを待つ間にステイ先の沙羅の友人宅にも連絡は入れてあった。

「おかえり、ルコ。それとミスター キサラギ」

「いつも、ルコがお世話になっています。ミス ヤヨイ」

ミス ヤヨイがゆったりとしたワンピース姿で出迎えてくれ、隆羅が頭を下げる。

ルコがいつもと違う雰囲気戸惑っていた。

リビングに通され、ヤヨイがお茶を出してくれた。

「ねえ、パパ。何かあったの？ 変だよ、こんな時間にパパがこんな所に居るの。学校はどうしたの？」

「ルコ、落ち着いて聞いてくれ。今朝、忠志の職場の化学工場で爆発事故があり、その事故に巻き込まれて忠志が亡くなった」

「嘘……」

「明日の便で、日本に戻ろう。学校にもヤヨイにも先程、パパが説

明をして手続きはしてあるから」

「嘘だよね、嘘だって言つて。パパ」

ルコが隆羅に詰め寄ろうとするとヤヨイが優しくルコを抱しめた。

隆羅の顔は真剣そのものでその瞳には一切の揺るぎが無く事が真実である事を伝えていた。

「パパだって信じたくないが、沙羅が確認をした。本当なんだ」

ルコは泣く事もなく、あまりにも大きなモノを突然に失い痛みを感じる事も出来ないでいた。

その晩は、ルコに付き添っていた。

翌朝、空港に向かう、ヤヨイが荷物の準備をしていてくれた。

ヤヨイに礼を言い後日沙羅から連絡をする事を告げてヤヨイの家を後にする。

飛行機の中でもルコは一言もしゃべらなかつた。

ルコ - 2

日本に着いた日の夕方、隆羅とルコは砂浜に寄り添うように座り海を眺めていた。

「寒くないか？」

「うん、寒くない」

「そうか」

「ねえ、パパ。まだ信じられないよ」

「ああ、本当にな」

「あんなに楽しみにしていたのに、なんで？ どうして？ 私が何か悪い事でもしたの？ パパ、私これからどうしたら良いの。もうこの子にパパは居ないんだよ」

ルコがお腹をさすると隆羅が真っ直ぐにルコの顔を見つめる。

「それは、ルコお前自身が決める事だ。今は辛いだろう、でもお前はもう既にママなんだ。お腹の赤ちゃんはもう直ぐこの世に生まれる。立ち止まっている事は出来ない、お前のママの沙羅だって1人でお前を育てて来た。お前のそばには沙羅もいる、育郎もいる。俺も力になれる事なら何でもする。泣きたい時には思いっきり泣いて笑いたい時にはみんなで大笑いしていればいいんだ。ルコがルコのままでいればいいんだよ」

「パパ、パパ、わたし……」

隆羅がルコを抱きしめるとルコは涙が枯れる程泣いた。

お昼頃に空港に着き沙羅に連絡を入れ。

その足で隆羅とルコは忠志の実家に向かった。

しかし、会わせてもらいう事すら許してもらえなかった。

元々、2人の関係に好意的ではなかったが、ルコの妊娠をきっかけに忠志も家を飛び出して会社の寮に入ったままだった。

「少しでも、お願いいたします」

隆羅は誠心誠意頭を下げた。

「お断りいたします。息子を誑かせて、その上、妊娠ですって。冗談じゃない」

「そこを何とか、お願いできないでしょうか」

「何が目的なの？ お金？ ほら、手切れ金よ」

忠志の母親が封筒を隆羅の顔に投げ付けた。

「パパ、もういいから。帰ろう」

ルコが声を掛けてきて隆羅が封筒を拾い上げ母親に返した。

「お金は頂けません。お腹の子はこちらで責任を持って育てます。

金輪際こちらに伺う事も無いでしょう、ルコやお腹の子に関わりを一切持たれません様にお願いたします。もし何か手出しをするようでしたらそれなりの対応をさせて頂きます」

相手の目を見て隆羅が毅然とした態度で母親に話した。

「ルコ、行こう。ここにも無意味だ」

「うん」

そしてその足で、海に向かった。

ルコは泣き止まなかった。

それでも立ち止まっている訳には行かない。

「ルコ、良いか。しばらくパパの実家で生活してくれ、あそこなら安全だし勉強も出来る。学校に知られる心配も無い、沙羅も育郎も出入り自由だしな」

「えっ、でもそれじゃ」

「言ったはずだ。俺に出来る事なら何でもすると、沙羅は実家で待っているから。なあ、行こう」

「うん」

隆羅の実家に向かう、車で1時間ほどで到着した。

いつ見ても大きな門の前でクラクションを鳴らすと門が開き、車で門の中に入り玄関先に車を着けると直ぐに中から沙羅達が現れた。

「ルコ、大丈夫？」

沙羅が心配そうに声を掛けてきた。

「うん、もう平気だと思う。いっぱい泣いたから少し落ち着いた」

「お袋。すまないがしばらく宜しく頼む」

「そんな事にしないでいいの、ルコちゃんはお前の子どもなんだから。母さん達に任せなさい」

「おば様。お世話になります」

「ルコちゃん、そんなに気を使っちゃ駄目よ。ここはあなたの家でもあるんだから沙羅さんも気を使わない事、いいわね」

「はい、分かりました」

沙羅は落ち着いているルコの姿を見て少し安心した。

「沙羅、海はどうしている？」

「今日、帰ってくる事を伝えてあるから部屋に戻っていると思うけど」

「そうか、分かった。ルコ、今日はゆっくり休むんだぞ。いいな」

「うん、パパありがとう」

「ああ、じゃ俺は海の事も気になるし帰るぞ。沙羅、後の事は宜しくな」

「ええ、分かったわ。本当にありがとう、隆羅が居てくれて助かったわ」

「これからが、正念場だからな」

「そうね、気を引き締めて行かないとね」

「じゃな、お袋。また後から顔を出すわ」

「ねえ、こんな時にナンなんだけれど。ちゃんと海ちゃんと言っ子も紹介しなさいよ」

「お袋、分かった。また後でな」

隆羅が車で屋敷を後にする。3人で隆羅を見送った。

「さあさあ。ルコちゃんも沙羅さんもあがって奥で少し休みなさい」
「はい」

屋敷の長い廊下をルコと沙羅が歩いていく。

「ねえ、ママ」

「何？ ルコ」

「如月パパの実家って凄く大きいよね、何をしているお家なの？」

「大雑把に言うと、日本の何割かを仕切っている企業グループかな
表も裏も。そして、ママの仕事先の1つでもあるの」

「それ、アバウト過ぎるよ。でも裏って何？」

「大きな会社になればなるほど奇麗事だけではやって行けないとい
う事よ」

「じゃ、如月パパは跡取りなの？」

「それが嫌で、安月給の先生なんてしているんじゃない」

「でも、安月給には見えない生活しているけれどなあ」

「それは、悪さしているからでしょ」

沙羅が悪戯っ子みたいな目をして言った。

「悪さって何？」

「先生がしちゃいけない副業をいっぱい」

「そうだね、でもそれは育パパの責任もあるんじゃないの？」

「そうね、ふふふ」

沙羅は胸を撫で下ろした、あまり普段と変わらないルコだったから
だ。

「あのね、ママ」

「なあに、ルコ」

「車でここに来る途中でパパに言われたの」

「どんな事を？」

「降りかかる運命からは逃げられない。でも、人はその運命と戦う
事は出来るって。パパ、忠志の家で私の為に頭を下げてくれたの。
お金を顔に投げ付けられても動じ無かったんだよ、凄いと思った。
そして2度とここには来ないし、私たちに手出し無用だからって言
ってくれた。だから私も戦うの私はもうママなんだから立ち止まっ
てなんか居られない。ママも育パパもいるし、如月パパはこんな
も助けてくれている。だから、その気持ちに答えたいの」

「素敵な、パパが居てくれてよかったわね」

「うん、感謝しなきゃ、そして頑張らないとね」

「そうね、ママも頑張らなくちゃ」

沙羅は思い出していた、隆羅がルコを育てると言った時の事を。その時と同じ様な事を娘のルコにも言っただけで助けてくれたのだと。

「海、帰ったぞ」

隆羅が玄関のドアを開け部屋に上がると海が直ぐにで迎えた。

「おかえり、隆羅。ルコは大丈夫だったの？」

「ああ、もう大丈夫だろう。今は俺の実家に居るよ」

「隆羅の実家？」

「そうだ、俺の実家でしばらく暮らす事になるだろう。誰にもこの事は内緒だからな」

「うん、そんな事は分かっているから平気だよ」

「はあー、疲れた」

隆羅がソファに体を投げ出しネクタイを緩めた。

「コーヒーでも飲む？」

「ああ、サンキュー」

海がキッチンでコーヒーを入れる。

「はい、おまちどうさま」

マグカップを隆羅に手渡しする。海は隆羅の前に立ったままで居た。

「おお、いい香りだ。美味いなやっぱり海が入れたコーヒーは」

「そうかなあ、あんまり変わらないと思うけれどなあ」

「なあ、海。何でさっきから立ったまんまなんだ、座ればいいだろう」

「うん、そうだね」

「ほら、こっちに来い」

「うん！」

海が嬉しそうに隆羅の横に座った。

「えへへ、隆羅の匂いがする」

海が隆羅の肩にちよこんと頭を乗せた。

「俺の、加齢臭がするか？」

「隆羅から、そんな匂いがするはず無いじゃん」

「冗談だよ。でも、海とこうしているのが一番落ち着く……」

「隆羅？」

「スゥ、スゥ」

「あれ、寝ちゃったの隆羅。そうだよ、大変だったもんね」

最初は海の肩に寄り掛かり、そのうちに海の膝枕で眠っていた。

「でも、こうしていると隆羅って可愛いな。いつまでもこうしていたいなあ」

内緒 - 1

そうして、パパの実家で暮らしながら勉強も講師の先生に来てもらって見てもらって。

順調にお腹の赤ちゃんも大きくなり年が明けてしばらくして茉弥が産まれたの。

でも、もう少し茉弥が大きくなるまでここに居なさいって言われて春から学校にもどる事になったの、嬉しいな。

でも大変な事もいっぱい起こっちゃうんだけどね。

それは、私が学校に戻る少し前の事なんだ。

「隆羅、隆羅つてば。起きて」

海が寝室で寝ている隆羅を起こしにやって来た。

「あのな、たまの休みぐらい寝かせろよ」

「だって、迎えに来るんでしょ。ルコが」

「そんな、約束はしていないぞ。海も一緒に寝ろ」

隆羅が海の手を引っ張った。

「きゃー もう、隆羅。止めて」

ベッドの中に引き込まれて隆羅が抱きついてきた。

「嫌なのか？ そうか海が嫌なら仕方が無い」

「嫌じゃないけれど」

「じゃ、キスしても良いか？」

「あのう隆羅、ルコが……」

「後ろに居るんだろ知っているよ、だからこうしているんだ。チュッ」

海にいきなりキスをするとう海の顔が茹蛸の様に真っ赤になった。

「如月パパ、知っていてそんな事するかなあ。バカカップルでもあるまいし」

「不法侵入よりマシじゃないか、バカカップルは罪にはならないから

な」

ルコが茉弥を抱っこして呆れた顔をしてベッドの脇に立っている。

「ほら、早く準備してよ。茉弥が待ちくたびれているでしょ。それに海、顔が真っ赤だよ」

「俺は、海とこうして居たいんだ」

「今日の、茉弥の検診に付き合つてと言ったでしょ」

「俺は、行くとは言っていないが。そんな事、タコに頼め」

「タコじゃなくて宅、育パパは車持っていないんだもん」

「判った、海に決めさせよう。海はどうしたい？」

「隆羅のイジワルう」

「冗談だ、行つて来る」

「行つてらっしゃい。隆羅」

海のおでこにキスをして隆羅が起き上がり着替えをして出かける準備をし始める。

「はあゝパパ達はまるで新婚さんね。それとリビングでもう1人お待ちかねの人が居るけど」

「タコかあ。しつこいなアイツも」

着替えを終わらせてリビングに向かうとソファーにグレーの背広姿のメガネをかけた生真面目そうな男が座っていた。

「タコ、しつこいぞお前」

「穴を開ける訳には行かないんだよ。サギ」

「お前が仕事の鬼だから、俺がルコと茉弥のお守をしなきゃならないんだぞ。分かっていいるのか？」

「それより、原稿は」

「お前、それを娘や孫の前で言うか普通」

「しかし、だなあ」

この、如月パパと揉めているのがルコの今のパパ。

育パパ、名前は『宅 育郎たく いくろう』如月パパとは腐れ縁らしいけれど昔は2人でかなりヤンチャな事していたみたい。

でも2人のパパが仲良しって不思議だよな。

そして育パパは本の編集のお仕事をしているの。

そして育パパが待っている原稿とは最近流行のライトノベルの原稿なの。

実は、如月パパはライトノベルの小説家なの。

でも嫌々なんだけどね。

それは、如月パパと海が付き合い始めた頃のお話なの。

「サギ、頼むよ。お前、先生なんだから書き物得意だろ」

「バーカ、俺の専門は数学だ。お前が何とかしろ、編集の癖に」

「その編集が頼んでいるんだろ」

「あーあ、ヤダヤダ仕事の鬼は。友達にまで仕事を押し付けるかなあ、このタコが」

「これで、穴でも開けてみろリストラだぞ。確実に」

「今度は、泣き落としか？ それに教師の副業は認められてないんだよ」

「隆羅、頼むよ。この通りだから、名前を伏せておけば大丈夫だから」

宅が土下座をした。

そんな宅の姿を海が見て隆羅の顔を海が見つめる。

「海、そんな目で俺を見るな」

「可哀そうじゃん。ルコのパパが」

「あのな、それとこれは別だ」

「これで良いじゃん。隆羅が書いてる物語」

海がCD-Rを手を持っていた。

それは隆羅が暇つぶしに書いていた物語だった。

「バカ、それは」

「海ちゃん、それ頂きね！」

海の手からCD-Rを盗り育郎がもの凄い速さでリビングを飛び出すと、その後を隆羅が追いかける。

「タコ！ 待つてこら！ 待つてたら！」

隆羅が叫ぶが宅は聞こえないのか、それとも無視をしているのか振り返りもせずに玄関を飛び出して行った。

「くそ！ 相変わらず逃げ足も速いな」

「海、お前。覚えておけよ」

「だつて……」

「だつても、へつたくれも無い。少し出てくる」

隆羅が腕組みをして不機嫌な顔でリビングに戻って来て海を睨みつけた。

すると踵を返して部屋から出て行こうとする、隆羅が本気で怒っていた。

「じゃ、私も一緒に行く」

「海は来るな！」

「隆羅が怒った！」

「当たり前だ！ 人の物を勝手に持ち出して」

「ご、ゴメンなさい」

学校以外で初めて怒られて海はシュンとしていた。

そんな海の顔を見て隆羅がため息をついた。

「反省しているんだな」

「はい、スイマセンでした」

海が不安に揺れ瞳を滲ませながら頭を下げた。

「分かった。それなら良いだろう」

「許してくれるの？」

海が隆羅の顔を伺う。

「ああ、あれはまだ途中までしか書いてないからな。しょうがない気晴らしに飯でも食いに行くか？」

「うん、ファミレスが良いなあ」

海が少しだけ笑顔になった。

「そつだ、あの話の主人公な。俺と海の名前だからな。覚悟しておけよ」

「えっ、今なんて言ったの？」

「だから、主人公の名前」

「どうして、そんな事するの？」

「お遊びで書いていたからな、名前考えるのが面倒だったんだ」

「隆羅のバカあ」

「海がタコに渡したんだろ」

「……のバカ」

「海がな」

「今日のご飯は高級料理！」

「近所のラーメン屋だな」

「ブー」

海が少しやけくそ気味に叫ぶと隆羅がありえない事を言う、久しぶりに2人で食事だというのに。

海が膨れて隆羅を睨んだ。

「じゃ、その足元の小動物でも食うか」

「マロンは駄目！」

「ニヤアー？」

茶トラの生き物が海の足元でじゃれついていた子猫が鳴いた。

あの川で海が助けようとして溺れた時の子猫だった。

海と一緒に住む事になり、なし崩し的に隆羅の家の住人になっていたのだ。

「猫にマロンって」

「だって栗みたいに茶色いからマロンは駄目なの？　じゃ、シヨコラ」

「ぷっ」

海の言葉に隆羅が吹き出した。

「何が可笑しいのよ」

「シヨコラって名前の子猫もあの物語に登場するんだ」

「隆羅のバカ」

「さあ、飯食いに行くぞ。マロングラッセかガトーシヨコラかは知

らないが、お前は留守番な。いつその事モンブランにでもしたらどうだ、こいつの名前」

「隆羅のイジワル」

「お前があんな物持ち出すからだ」

「大丈夫だよな、たぶん。ねえ何を食べに行くの」

「海の好きなものでいいぞ」

「えへへ、隆羅大好き」

海が隆羅の腕に満面お笑顔で飛び付いた。

内緒 - 2

それが、大丈夫じゃなかったみたいなの。

雑誌に掲載されて話題になって連載が決まって、ライトノベルとして出版される事にもなっちゃたみたい。

学校でも大騒ぎになりかけたけど、如月先生と女子生徒じゃありえないだろうと言う話しになったみたい。

お話も沖縄の事や主人公達の歳もかなり違ってたみたいだね。

その連載の原稿を取りに来ていた訳。

その題名は『アクアマリンの瞳に抱かれて』ペンネームは『仲村歩』。

なんでも如月パパが好きで良く聞いたロックミュージシャンの名前を擦ったんだって。

「ルコ、茉弥、行くぞ。こんなクソ親父捨てておけ」

「そんな言い方しないで。如月パパ」

「いいんだよ。家族より原稿だと、この仕事馬鹿が」

「宅さん。はい、これ原稿のCD」

海が、待ちくたびれて困惑気味の宅に優しい笑顔でCDを渡した。

「海ちゃん、本当にありがとう。海ちゃんが天使に見えるよ」

海に礼を言っ受けて取ると宅は直ぐに隆羅の家を飛び出し出版社に向かった。

「はあー、何で渡すかなあ。これから俺はお守りだって言うのに」

「ちゃんと、書いてあるじゃん。如月パパ」

「当たり前だ。仕事は仕事だからな」

「大人じゃん」

「そのうち、ルコも登場させてやるからな」

「それだけは止めて。絶対にバレちゃうよ」

ルコが抱っこしている茉弥の顔を覗き込むと眠たそうにウトウトと

し始めていた。

「茉弥がニーブイカーブイしているから行くぞ」

「何？ その変な言葉」

「沖縄の言葉でウトウトと居眠りをしていると言っ意味だ」

「何で、隆羅はそんなに沖縄の事知っているの？」

「企業秘密です」

「ケチんぼ」

「海には嫌われたくないしな」

「どうして？」

「企業秘密だ。ルコもう行くぞ。午後からは海とデートだからな」

「隆羅、デートなんて話聞いてないよ」

海が驚いて目をまん丸にしている。

隆羅から今日の予定なんて何も聞いていなかった。

「準備して待つておけな」

「準備つて何処に行くの？ 教えてよ」

隆羅が海に投げキッスをして答えを返さずにルコと部屋から出て行った。

「もう、隆羅のバカ。でもデートならいいかなあ。何着て行くこうかなあ」

海が嬉しそうに寝室に行き洋服を選び始めた。

マンションの地下駐車場で隆羅が茉弥を抱っこしてあやしなから車に向かっていた。

「しかし、何でチビやガキに、こうも好かれるかなあ」

「小さな子に好かれるのは、子どもがこの人は優しいと感じるからじゃない。ガキンちよでも如月パパは1人の人間として同じ目線で対等に扱うでしょ、だからだよ多分ね」

「子どもだろうが大人だろうがそんな事は関係ないんだよ。大人でもガキなヤツが居るし子どもでも大人の考えをするヤツも居る。人間と人間だからな本当は上下なんて無いんだよ」

「そんな事、言うのパパぐらいだよ」

「茉弥、そうなのか？」

「きゃっ、きゃっ」

隆羅が茉弥の顔を見つめると茉弥が声を上げて喜んだ。

「ご機嫌だな。茉弥」

「茉弥も如月パパの事、大好きだもんね」

「さあ、行くか」

「うん、パパこの車なんて言うんだっけ」

「ケーターハムスーパードカー」

「そう、茉弥のお気に入りなの」

「それで、俺に検診に付き合えと、でも会場に俺は入らないからな。乗ってくれ出すぞ」

いつも検診は隆羅の実家に近い所に行っていた。

本来なら住んでいる地域の検診に行くべきなのだろうがそれは出来なかった、もしルコに子どもが居る事が学校にでも知れたら大騒ぎになるからだ。

こんな事は如月家に見れば造作の無い事だった。

1時間ほどで検診会場に着いた。

「ほら、行つて来い」

「本当に来てくれないんだ」

「お前の旦那に間違われるから嫌なんだ」

「茉弥にはパパが居ないからね」

「ルコ、今なんて言った？ 茉弥になんて事言うんだお前は。本気で怒るぞ」

ルコの何気ない言葉を聞いて隆羅が真顔でルコを睨み付けた。

「ご、ゴメン。本当にゴメンなさい」

「今度、言ったら。いくらルコでもただじゃ済まさないからな」

「ゴメンなさい、2度と言いません」

ルコがシュンとして俯くと、隆羅が車から降りて茉弥に「おいで」

と手を出した。

茉弥が嬉しそうに隆羅に体を預け、隆羅が茉弥を抱っこして歩き出す。

「パパ、待ってよ」

「置いて行くぞ」

慌てて車から降りて隆羅に駆け寄り、ルコが隆羅のシャツの裾をつかんで歩いた。

駐車場から直ぐに会場の入り口があり隆羅はそこで待つことにした。

「ここで待っているから。行って来い」

「うん、茉弥『行って来まーす』って」

「しかし、ルコと茉弥も目立つが俺への視線の怖い事、だから嫌だったんだ」

隆羅がブツブツ独り言を言っていた。

周りのママ達の視線が会場の入り口に居る隆羅に集まった。

「ねえねえ、あの男の人。どなたの旦那さんなんでしょうね」

「そうね、ちょっと気になるわよね。素敵な人だし」

「それに、あそこのママ若いわね。幾つかしら？」

「ちよつと、聞いてみましょうよ」

「そうね、少しだけなら」

数人のママさん達がルコと茉弥に近づき話しかけてきた。

「こんにちは」

「えっ、こんにちは」

ルコが戸惑っているとお構いなしにママさん達が話を続けた。

「ちよつとお話いいかなあ」

「はい、いいですよ」

「こんな事、聞くのは失礼かもしれないんだけど。歳はお幾つ？」

「えっ、もう直ぐ18ですよ」

「若いのね、それとあそこの男の人とはどう言う？」

「パパですよ」

「やっぱり、この子の」

「いえ、私の」

「ええっ、じゃこの子の？」

「グランパ、お爺ちゃんですよ」

「えっええええー！」

「私達は検診終わったんでこれで失礼しますね」

数人のママ達の驚愕の叫びが会場に響き渡った。

ルコがママ達に一礼をしてその場から立ち去り隆羅の元に歩き出した。

「如月パパ、お待たせ」

「茉弥終わったのか。帰ろうなあ」

隆羅が茉弥の顔を覗きこみあやすと茉弥が嬉しそうな顔をする。

「本当にお爺ちゃんみたいだね。如月パパ」

「本当につて酷い言い方だな。茉弥は俺の孫なんだから」

「俺のかあ、嬉しいな」

ルコは実の父親の顔も憶えていなかった。だから余計に隆羅の事が本当の父親の様に思えるのだろう。

そして茉弥もまた父親の顔すら知らないで育っていく、だからこそ隆羅が『俺の』と言ってくれた事にとっても感謝し心から喜んでいた。

「茉弥には、優しいグランパが2人も居るんだもんね」

「そうだ、タコにもちゃんと言っておけよ」

「でも、忙しいみたいだし」

「俺はそんなに暇に見えるのか？」

「そうつ、訳じゃ無いんだけど。話があまり合わないの、若い子とかの話題はあまり知らなし音楽とかも何だかね」

「そつだな、タコはそうついう事に疎いからな」

「とても、優しくしてくれるんだけどね。まだ、慣れないんだ」

「仕方が無いさ、まだ2年位だろ」

「そつだね、ママの旦那さんって感じかな」

「そつか、ルコももう大人だしな。それで良いんじゃないか」

「うん、私は私のままで居ればいいんだよね」

「そつだ、ルコはルコなんだからな」

「海が待っているから帰るぞ」

「そつだね」

検診会場から車で海の待つマンションへ向かった。

内緒 - 3

♪ 海の嬉しそうな鼻歌が部屋に流れていた。

海は着替えを済ませ準備を整えて隆羅の帰りを待っている。

その時、ドアが開く音が聞えた。

「隆羅は、まだかなあ。あつ、帰ってきた」

「海」

「はい、お帰り！」

「準備は出来ているのか？」

「うん、出来てるよ！」

高校生らしい清楚な感じの白地に花柄のワンピースを着た海がくりと1回転して見せると、長い髪が綺麗に孤を描いた。

「やけに嬉しそうだな」

「だって隆羅とデートだよ。それで何処に行くの？」

「とりあえず、俺の実家だけど。その後でどこか外で飯でもって、海？」

海がデパートのマネキン人形のように固まっていた。

「海、どうした？」

海は頭の中が真っ白になって動揺を隠せず戸惑っていた。

「た、隆羅の実家って？」

「お袋が、海に会わせろって煩いんだよ。1回会わせれば大人しくなるから行くぞ」

「あの、その、隆羅のご両親に紹介してくれるって事なの？」

「そうだが、何か問題でもあるのか？」

「私なんかで良いの？ 本当に」

「海じゃなきゃ誰を紹介するんだよ」

「でも、私、自信ないよ」

「俺が好きになった、大切な人じゃなきゃ紹介なんかしないよ」

隆羅の言葉を聞いて海の目から涙がポロポロと零れた。

「泣くな」

「だって、隆羅はあまり言葉にして言ってくれないから私……」

「涙を拭いて、行くぞ」

「うん」

隆羅の車に乗り隆羅の実家に向かう為に都内を走る。

「ねえ、隆羅。この車って変わってるよね」

「そうか、俺はこの風を切って走る感覚が好きなんだけどな」

「でも、昔のレーシングカーみたいだよな」

「ケータールームスーパードイツと言うんだが、海は嫌いかな？」

「大好きだよ、バイクもこの車も隆羅も」

「最後に余計なのが入っていたな」

「いいんだもん。そう言えばあのバイクもあんまり他で見かけないね」

「ビューエルと言うアメリカのバイクだよ」

「ふーん、そうなんだ。隆羅の実家って何処にあるの？」

「都内だぞ」

マンションを出てしばらく車で走ると江戸時代のお城の様な高い白壁の塀が続いていた。

「凄い、壁だね。今どき珍しいよね。時代劇の大名屋敷みたい」

「そうか」

「そうだよ、なんとも思わないの？」

「まあ、なんとも思わないかと聞かれれば、そうだなとしか返事の様が無いな」

少しすると白壁の先の巨大な木造のお城の門の様な所に着くと隆羅が車を止め、クラクションを鳴らす。

「ねえ、隆羅。ここってまさか」

「俺の、実家だが」

「ゴメン、ちょっと止まってくれ」

重そうな門が開くと隆羅が車を門の中に進めると海が慌てている、

隆羅が海の顔を見ると不安そうな顔をして瞳が揺れていて胸に手を当てて深呼吸をしていた。

隆羅が車を停めて海の顔を心配そうに覗き込んだ。

「どうした？」

「あの、た、隆羅の実家って何をしているの？」

「大雑把に言うとな日本の何割かを仕切っている企業かな」

「日本の何割かってそんなあ……私、なんだか怖いよ」

当たり前前の感情だった、普通の高校生の女の子がこんな大きな屋敷に初めて連れてこられて怖くない訳が無いからだ。

「言っただろ、大切な人しか紹介しないって。それに沙羅もルコも茉弥もこの家には来ていたんだし」

「それは、隆羅の家族だからじゃない」

「今は、海が俺の家族だろ」

「そう言ってくれるのは、嬉しいのだけど」

「お袋が待っているから行くぞ」

「う、うん」

「怖がる事はなにも無い、ありのままの海で居ればいいんだよ」

優しく隆羅が海に言い、しばらく車を走らせて車を玄関前に回した。これを玄関と言うのだろうかそんな感じの大きな玄関だった。

江戸時代にタイムスリップしたかのような感覚さえあった。

「若、お車の鍵を」

「ああ、わかった」

「奥様と旦那様は奥の座敷でお待ちになられております」

黒っぽいスーツ姿の男の人が出迎え隆羅が車の鍵を渡すと、スーツ姿の男が車に乗り込み何処かに車を運んでいった。

隆羅が屋敷に上がりドンドンと歩いていく、海は着いていくので精一杯だった。

「隆羅、待つて。お願いだから、早いよ」

「ほら、手」

「うん」

隆羅が海の手を掴むと海に合わせてゆつくりと歩いてくれる様になった。

「隆羅、さっきの男の人が隆羅の事、若って呼んでいたね」

「元々は裏ぼい仕事をしていたからな」

「裏ぼいって、もしかして」

「そうだ、たぶん海が考えている事が正解だ」

「そんな……」

「今は表の企業だからな。でもここは昔のままなんだ」

「本当に大名屋敷みたいな大きなお屋敷なんだね」

「そうか、普通じゃないか」

「全然、普通じゃないよ！」

長い廊下をかなり歩いて、1つの部屋の障子の前で隆羅が止まった。外には広大な日本庭園が広がっていた。

「お袋、入るぞ」

「タカちゃんなのどうぞ」

その座敷は、ちょっとした宴会場位の広さで真ん中に大きな木のテーブルがあり。

白髪の大柄な男の人が上座に座っていて、その脇にとても若い女性が艶やかな着物を着て凜とした表情で座っていた。

隆羅は海の手を引きながら2人の前に座り胡坐をかく、海は隆羅の少し後ろに畏まり正座した。

「親父、久しぶりだな」

「ああ、そうだな」

「何をそんなに緊張しているんだ、親父？」

「タカちゃん、先にちゃんと紹介しなさい」

「彼女が、今、俺と暮らしている水無月 海だ」

「始めまして。水無月 海と申します」

海が緊張した面持ちで隆羅の両親に深々とお辞儀をした。

「そんなに、畏まらなくていいのよ。たしかルコちゃんの同級生だ」

「たわね」

「はい、でも本当は学年は2つ上なんです。子どもの頃、体が弱く小さくて両親が心配して小学校入学を1年遅らせてそれでも休みがちで卒業が1年延びて」

「そうなのだからタカちゃん、ふうん。そう言う事なのね。変だと思っていたの、ルコちゃんと同じ年なんてありえないって言うていたからね。今、体は大丈夫なの？」

「はい、大丈夫です」

隆羅の母親が唇にポンポンと人差し指をあてて妙に納得していた。

「お袋、自己紹介くらいしろよ」

「あら、そうだったわね。私が隆羅の母親の如月綺羅きさらぎき、そしてここで冷や汗流しているのが父親の如月 結きさらぎ ゆうよ。ルコちゃん達は、おば様・おじ様と呼んでくれているわ。海ちゃんも好きなように呼んでくれて構わないから。それとも少し、こちらにいらつしやいな。ね」

そう言われて隆羅の横まで前に出て隆羅のシャツの裾を握り締める
と父親がとても低い声で話し出した。

「おい、隆羅後でTの仕事の話があるからな」

「親父、海の前で今度その話をしたらここ叩き潰すぞ」

今まで聞いたことの無い隆羅の冷たい声に海はビクンと体を強張らせた。

「タカちゃん駄目よ、海ちゃんが怖がっているでしょ。あなたもこんな時にそんな話持ち出さないの」

「す、すまなかった。つい緊張してしまっ」

隆羅の父親が借りてきた猫の様になっていた。

「タカちゃん、もう良いかなあ」

綺羅が体をモジモジさせて子どもの様に瞳を輝かせてウズウズしていた。

海は不思議そうに横に座っている隆羅の顔を見上げた。

「ああ、好きにしる。海、お袋の側に行っちゃってくれ」

「でも……」

「怖がる事はないさ。獲って喰われたりしないから」

隆羅に促され海がドキドキしながら綺羅の横に座ると「ひゃあ」海がいきなり奇声を発した。

綺羅がいきなり抱きついて来たのだ。

「海ちゃんって凄く可愛い！ もう我慢できないんだもん」

「た、隆羅、こ、これって何なの？」

「アハハハハハハ」

「隆羅ってば！」

隆羅は海の顔を見て大笑いしていた。

綺羅が海に頬擦りしている、海はどうしたら良いのか判らずにただされるがままだった。

「隆羅、ワシも疲れたぞ」

そう言いながら隆羅の父親が足を崩した。

「それが、お袋の素だよ」

「ええつ、だって大きな会社の会長さんなんですよ」

「それは、そうだけど。親父とお袋の方が海より緊張していたんだ。だから俺が少し親父達をからかって真面目にしていないと嫌われるぞと吹き込んでおいたのさ」

「タカちゃん。あれは嘘だったの？ 酷いよもう。彼女を連れて来るって言うから頑張ったのに」

隆羅の母親の綺羅が子どもの様に頬を膨らませた。

「お袋が、合わせろって煩いからだろ」

「でも、初めてだよ。タカちゃんがこうして女の子を連れてくるの」

「それって本当なんですか？ でも沙羅さんは？」

海が綺羅に抱きつかれたまままで綺羅に尋ねた。

「沙羅さんの時は電話で結婚したからって、その後でみんな連れて遊びには来てくれたけどね」

「た、隆羅。私、嬉しい」

「俺はちゃんと言ったはずだぞ」

「うん、ありがとう」

その時、障子の向うから男の声がした。

「旦那様、お電話が」

「ああ、分かった。今、行く。すまないが仕事だ、これで失礼するが海さんゆつくりして言ってくれ」

隆羅の父親が海の頭を撫でて優しい眼で海の顔を見て部屋を出て行った。

「あらあら、パパはお仕事の顔になっちゃた。タカちゃんゆつくりして行くんでしょ」

「いや、こんな無駄に広い所に居ても暇だからな。海と出掛けるぞ」「ずるい、ママも一緒に」

「お袋もこの後、予定が入っているんだろ。間に合わなくなるぞ」

「あら、いけない。そんな時間なのね、海ちゃん隆羅をよろしくね」「はい」

「じゃ、もう1回だけ。それ」

「ひやあゝ」

綺羅が嬉しそうにまた海に抱きついてきた。

「お、おば様」

「それじゃ、またね。バイバイ」

隆羅の母親の綺羅がそう言い残し部屋を後にした。

「ねえ、隆羅。おば様って……その失礼かもしれないけれど何歳なの？」

「お袋は、確か**歳かな」

「ええっ、信じられない。あんなに若く見えるのに？」

「元々、童顔だからな。昔の写真とあまり変わって無いからな」海はふっと思った。

紛れも無く隆羅は2人のDNAを受け継いだ2人の子どもなんだとおじ様と似た体つき。そしてあの優しい眼。おば様の若さ。

そしてONとOFFの正反対の性格でもその中に脈々と流れている

大きな包み込む様な優しさ。

それを実感できたのだ。

でも、Tの仕事って何なんだろうと言う疑問も残った。

それでも嬉しさと隆羅の真摯な気持ちに触れられてとても幸せだった。

「さあ、海。そろそろ行くか」

「隆羅、今日はありがとうネ」

「そうか、また遊びに来てやってくれ。お袋達も喜ぶから」

「うん、でも1人じゃ無理だよ」

「それなら、今度はルコ達と来れば良いさ」

「そうだね」

内緒 - 4

隆羅の実家を後にする頃には日が傾き夕方になっていた。

少し裏通りにあるビルの駐車場に車を入れる。ビルの横には首都高が走っていた。

「海、すまないがここで少し待っていてくれ。車を置いて来るから」
「うん、判った」

海が車を降りて少し車から離れて返事をする。隆羅が緩やかなスロ―プを車で上がっていった。

しばらくすると、ビルの駐車場入り口で隆羅を待っている海にガラの悪い数人の男達が海に近づいて来た。

「彼女、こんな所で何してるの？」

「人を待っているんです」

「こんな綺麗な女の子を置いてきぼりにするようなヤツほっておいてオイラ達と遊ぼうよ」

「結構です。止めて下さい」

男の1人が海の腕をつかんだ。

「行こうぜ、なあ、良いだろ。楽しい事教えてやるよ」

「嫌です。人を呼びますよ」

「こんな所じゃ人なんて来ねえよ」

そこにメガネをかけたスーツ姿の男性が歩いて近づいて来た。

「あれ、海ちゃん。こんな所でこんな奴らと何しているの？」

「た、宅さん」

「ああ、なんだ。このおっさん」

「サギは一緒なんですよ？」

「今、車を置きにココの駐車場に」

海と宅が男達を無視して話をしていると回りの男達が苛立ち始めた。

「いい加減にしろ。このおっさん」

「ちよい、面かせや」

「キヤア」

「その汚い手を離せ」

男が海の手を引っ張ると海が声を上げた。

直ぐに宅が男を睨み男の腕をつかむ。

男の顔が苦痛に歪み手を離れた瞬間に、海が宅の後ろに隠れた。

「ふざけるな、ツラ貸せや！」

「やれやれ困ったもんだ」

「宅さん……」

海が不安な目で宅を見ると宅が優しい目で海を安心させようとする。

「大丈夫だから。直ぐにサギも来るからね」

とても、落ち着いた大人らしい言葉だった。

隆羅が駐車場の空きをやつと見つけて車を止めて下に降りて来ると、数人の男に取り囲まれて何処かに連れて行かれる海と宅の姿が見えた。

その内の1人が仲間でも呼びに行くのだろう横道に走り去った。

「やれやれ困ったもんだ」

男達に気付かれないように後をついて歩いていく。

しばらく歩くと人気の無い高架下に数人の男がすでに集まっていた。

「こらあ、おっさんボコボコにしてやるからね」

「はあー、しょうがない」

宅が呆れ顔で上着を脱ぎネクタイを緩めて上着を海に渡した。

「海ちゃん、これ預かっておいて」

「ええ、でも」

「大丈夫、もう直ぐ来るからね」

「えっ、誰がですか？」

「ほら、来た」

宅が後ろも見ずに言った。

すると、2メートル近くあるフェンスの向うから隆羅の声がした。

「海、何をしているんだ。そんな所で」

「隆羅。助けて」

「タコ、何の騒ぎだ。これは」

「海ちゃんが、この汚い兄ちゃん達に絡まれていたんだ」

「何をコラア。汚いだと」

宅の言葉に男達が一斉に殺気だった。

「サギどうする、ただじゃ帰れそうに無いぞ」

「仕方が無い久しぶりにコンビ復活するか」

次の瞬間、隆羅がフェンスに手を掛けると軽々とフェンスを跳び越した。

「ええつ、隆羅？」

海が驚いて隆羅を見る。

「えへえへえ」

海の後ろから気色悪い声がした。

その瞬間、海の頭の上を突風が吹き抜けたかと思うと男が蹴り飛ばされた空き缶みたいに吹っ飛んだ。

目の前にいる宅がくると回転していた。

宅が回し蹴りを男の側頭部に叩き込んだのだ。

「た、宅さん？」

「殺つちまえ」

男達が一斉に襲い掛かって来た。

海の体がフワッと宙に浮き男達の頭の上を跳び越した。

隆羅が海を抱き上げ走り出しジャンプしたかと思うと高架の橋脚に足を掛け、一気に男達の頭の上を走り抜けた。

宅の方を見ると宅が地面に片手を着いて足を蹴り出し、地面すれすれを高速回転すると男数人が吹き飛んだ。「海、平気か？」

「うん、でも隆羅」

「大丈夫だ、少し遊んで来るからここに居てくれ良いな」

隆羅が頬に軽くキスをした。

「うん、分かった。気をつけてね」

「タコ！ まだ片付かないのか？」

「サギ！ お前も片付けるの手伝え」

あっという間だった。

宅はまるでダンスをしているかのようなアクロバティックな蹴りだけで相手をなぎ倒し。

隆羅はフェンスや橋脚を使いまるで鳥が空を飛んでいるかのように男達を次々と倒した。

そして、残された数人の男が2人を見てガタガタ震えながら呟いていた。

「あ、あれは伝説の……」

「足技の蛸と空殺の鷺？」

「T・Dだ！」

「ツウ・ドラゴンに敵うわけが無い」

「逃げる！」

男達が蜘蛛の子を散らすように顔色を変えて逃げて行った。

「やれやれ」

「まだまだ、鈍ってはないな」

「そうだな」

「海、済んだぞ」

隆羅と宅がお互いの拳を突き合わせて、笑顔で喋りながら海の所に歩いてきた。

「2人って……何者なの？」

「ルコの元パパと今パパで、海の恋人じゃないのか」

隆羅が何事も無かった様に海に言い放った。

「それは、そうなんだけれど」

「しかし、サギ。あんな所に海ちゃん1人を危ないだろ」

「駐車場が混んでいて少し手間取ったんだ。海、怖い思いをさせて悪かったな、すまない」

「うん、もう平気」

隆羅が海に頭を下げて謝ると直ぐに海は安心しきった顔になり微笑

んだ。

「タコは、もう仕事良いのか？」

「ああ、もう終わりだ」

「久しぶりに、飯でも食いに行くか？」

「そうだな、お前のおごりだな。この辺に居るって事は、あの店に海ちゃんを連れて行こうとしてたんだろ。ほら、このあいだの原稿料だ」

宅が徐に封筒を投げると隆羅は軽々と受け取った。

「しょうがねえかあ。沙羅には連絡入れておけよ、余計な事は言わずにな。しかし相変わらず軽いな」

「軽い言うな、仕方が無いだろ。沙羅なら大丈夫だよ」

隆羅が宅から受け取った封筒をブラブラと振っていた。

「ねえ隆羅、ツウー ドラゴンって何？」

「俺と宅がヤンチャしていた頃の通り名だよ」

「海ちゃん。2人の呼び名がタコとサギだから自分が足技の蛸、サギが空殺の鷺。誰が付けたのかは、知らないけれど2人合わせてツウー・ドラゴンだそうだ」

「2人でこちら辺、一帯しめていたからな」

「そんな事、していたんだ」

「ただ、ガラの悪いのを懲らしめていただけさ。昔の話だ」

「でも、サギは……」

「悪い、タコ。その話は止めてくれ」

「すまん、すまん」

「飯でも食いに行くぞ。海」

「うん！」

海が隆羅の腕にしがみ付くと3人並んで歩き出した。

「隆羅、何をご馳走してくれるの？」

「ラーメンかなあ」

「ブウー、馬鹿」

「じゃ、高級フレンチが良いのかな？」

「その、格好で？」

海が隆羅の格好をまじまじと見ている。

隆羅は何がいけないのか普段着のシャツを広げていた。

「いけないか？」

「そりやそうだ、サギ。その格好じゃ入れてくれないぞ」

「駄目か。じゃ、いつもの所だな」

「最初からそのつもりだったんだろぅが」

「ねえ、そこって何のお店？」

「行けば分かるさ」

そこは路地裏の雑居ビルの地下にあるあまり目立たない洋食屋で、看板には『ボスコ』と書かれていた。

「ここは？」

「俺らの、昔からの馴染みの店だよ。最近のご無沙汰だけだな」

隆羅がドアを開けて店に入っていく。

店内はログハウスの様な内装でとても落ち着いた雰囲気で、ゆったりとした木のテーブルと椅子が並んでいた。

「ちわーす。マスター」

「おおつ。サギにタコか！ 久しぶりだな」

赤いチェックのシャツにGパンで生成りのキャンパス地で作られたエプロンをつけた、見るからに山男ばい髭面が少し驚いた様な笑顔で片手を上げて挨拶をしていた。

「おひさしぶりです、ご無沙汰しています」

宅がカウンターでマスターに挨拶をしていると、隆羅と海は奥のテーブルに座ってメニューを見始めていた。

「タコは相変わらずだなあ。あれ？ あの子は誰なんだ？」

「サギの彼女すよ。マスター」

「へえっ？」

「マスター。鳩が豆鉄砲食らったみたいに固まらなくても」

「だ、誰の彼女って？」

「だから、サ・ギの彼女」

「アハハハ冗談はよせよタコ。どう見てもサギの娘にしか見えないぞ」

「そうですよ、だって俺の娘になるルコの同級生ですから」

「未成年？」

「まあ、そんなところですかね。色々と訳ありで」

「相変わらず、サギも型破りなヤツだな。しょうがねえか」

「今日は、実家にでも連れて行っていたんじゃないですかね」

「それって、おいおい本気という事か。でも裏の事は……」

「それは、言えないでしょ」

「しかしだな」

髭面の山男のようなマスターが良く見ると可愛らしい瞳を細めた。

「あの、海ちゃんなら大丈夫ですよ。サギが唯一見込んだ女の子ですから。それに俺も沙羅も側に居ますしね」

「そうか」

隆羅と海の方を宅とマスターが見ると、楽しそうに2人してメニューを見ていた。

「ねえ、隆羅。ここは何が美味しいの？」

「何を選んでもはずれは無いけれど、ドミグラスソースを使ったハッシュドビーフとかビーフシチューとかだな、オムライスもお勧めだぞ」

「そうなんだ、何にしようかな」

海がメニューを見つめて何にしようか考えていると宅がテーブルにやって来て隆羅の前に座った。

「おっ、タコ。話は終わったか」

「まあな、注文は決まったか？」

「とりあえず、ビールと行きたいが車だしな、いつものヤツで」

「サギが頼むなら自分もそれで」

「ええっ、いつものって何？」

海が少し驚いたような顔をして隆羅と宅の顔を交互に見ている。

「2人の為のスペシャルメニューだ」

「じゃ、私も仲間に入れてよ」

「OK！ マスター。いつもの2つに、いつものスモール1つ」

「あいよ」

山男のマスターが返事をするカウンターの直ぐ後ろのキッチンに入っていた。

「でも、隆羅がヤンチャなのはなんとなく分かるけど、宅さんもヤンチャだったんですね。驚いちゃいました」

「海も酷いな、俺の何処がヤンチャに見えるんだよ。一応、これでも教師だぞ」

「だって、その格好は？」

「これは、普段着だって言っただろう」

「でも、宅さんは普段でも落ち着いているから」

「まあ、こいつの実家は日本舞踊の宗家だしな」

「ええっ！ 宅さんの実家も凄いな」

海が驚いて宅の顔を見上げると、宅が大人らしい涼しい顔をしている。

「サギの所に比べればとんでもなく庶民だけどね」

「その、庶民が舞踊を習わずに、カポイエラなんか修得するか？」

「それは、家が嫌だったからじゃないか、お前と変わらないだろ」

「まあ、そうだな。タコは昔から冷静で落ち着いているからな」

「でも、出逢った時は喧嘩ばかりしていたよな」

「そうだな、嫌味なくらいクールだったからな。お前が」

「誰かさんが熱くなり過ぎるんだ」

「ふふふ、可笑しい。2人は正反対の性格なんだね、昔から変わらないままで2人は居るんだろうな」

「そうかもな」

そんな話をしているとマスターが熱々の出来たての料理を運んできた。

「はい、お待ちどうさま。いつもの2つにスモール1つ」

「うわぁ、美味しそう」

「これが絶品なんだよな、タコ」

「そう、ここはこれじゃないとな」

フワフワに仕立てられたオムレツが乗っている特製のオムライスに、美味しそうな香りが立ち込めるハッシュドビーフがかけられていた。「いただきます。す、凄く美味しいよ！」

海がスプーンで一口食べるとそう言っただけで幸せそうな顔をした。

「そうだろ、これがこの超お勧めだ」

「おいおい、それはＴ・Ｄスペシャルだからな。あんまり人に言うなよ」

「そんな事は分かってるで、マスター」

「そう言えば隆羅。おじ様が言っていたＴのお仕事って何？ 隆羅 凄く怖い顔していたけど」

「それは……」

隆羅が突然の海の問いに困った顔をしていると宅が助け舟を出した。「海ちゃん、それは仕事の後片付けや掃除みたいなもんだよ。誰でもそんな仕事は嫌いだろ」

「そうだね、私も片付けや掃除は得意じゃないから」

「なあ、サギ」

「ああ、そうだな。いつも面倒ばかり親父は押し付けるからな」
楽しい食事が終わり店を出て宅と分かれて、隆羅と海は駐車場へ向かい車でマンションへ帰る。

「なあ、海はやっぱ俺がしている教師以外の仕事とか気になるんだよな」

「うん、だって今日だって凄く驚いたんだよ。あんなに喧嘩が強いなんて想像も出来なかったし、先生の顔しか知らなかったから。それに好きな人の事を知りたいと思うのは普通じゃないの？」

「そうだな」

海が隣で運転している隆羅の顔を見ると何処と無く気のせいかもしれ

れないが寂しそうに見えた。

「でも、隆羅がしゃべりたくない事は無理に知りたとは思わないよ。それに、隆羅はあまり私の事も聞いてくれないし」

それは海の切実なとても切ない声だった。

「ゴメンな海。こんな言い方しか出来ないのだけれど、1人の女の子をこんなに本当に好きになった事が無いからどうして良いか正直な所分らないんだ。でもこれだけは分かってくれ。俺は目の前に居る海の事が好きなんだ」

隆羅の言葉に海は天と地がひっくり返るくらい驚いた。

「ええっ？ でも今までだって誰かを好きになつた事はあるんですよ」

「無いと言わない。こんな歳だからな、でもこんなに海を失うのが怖いと思つた事は無いんだ」

「でも、それは私も一緒かな。男の人と付き合ふの初めてだし、それにあれがファーストキスだったし」

「そうか、申し訳ない事をしたかな」

「そんな、言い方嫌い。好きだからしたんでしょ、違ふの？」

海の声がとても揺れている。

「そうだ、好きだし守りたかった。どんな事してもな」

「これから、守ってくれるんでしょ」

「ああ、当然だ。お姫様が呼べば、たとえ火の中、水の中。銃弾の嵐だつて潜り抜け助けに参る所存です」

「また、匂うよ。ぷんぷん」

「オヤジだけに、オヤジギヤグ？」

「もう、馬鹿。隆羅の事、オヤジなんて思つてないもん」

「ありがとうな」

「当たり前でしょ。そんな風に思ふわけ無いじゃん。世界で1番、愛してる人なんだから」

海が自分で言つて真つ赤になって俯いた。

「愛してるか」

「うん、だつて……」

マンションに着き、車を地下駐車場に入れ車を止める。

隆羅が海の言葉を遮る様にキスをして抱しめ車に乗ったまま抱き合
った。

すると後ろから咳払いが聞え振り向かず
に隆羅が言い放った。

「また、ルコか？ 邪魔するな」

「なんで、顔も見ずに分かるのよ！」

「いつも、邪魔をするのはルコだけだからだ」

「ママが、そろそろバカップルが帰ってくるから呼んで来いって、
来て見ればこれだもんね」

ルコが呆れた顔で2人を見ている。

いつもより言葉に棘があった。

「悪いのか？ 恋人同士がキスしていたら」

「人目も気にしないでする普通は？」

「ここには今、ルコしか居ないじゃないか」

「ああ、もううるさい！ それよりママがカンカンなんだけど。今
日、大暴れしたんだつて？」

ルコが頭に鬼の角みたい
に両手の人差し指をあてて不機嫌な声で言
った。

「あのタコ、本当にタコ助だな。使えない」

「でも、それは私が絡まれて」

「それも、ママの前で説明してね。海」

「ルコ、何をそんなに怒っているの？」

「今日は3人で何か美味しいもの食べて来たらしいじゃん」

「海、とりあえず沙羅の所に謝りに行こう。ルコの食い物の恨みも
怖いけれど、沙羅の逆鱗の方がもっと怖いからな」

「う、うん。分かった」

隆羅と海が車から降りてエレベータに向かうとルコが後を追いか
けて来た。

「海、何でそこで納得するかなあ」

「ルコ、いい加減にしろ。海は何も悪く無いだろ。今度は海とルコを連れて行くからそれで文句は無いだろ」

「やったー。如月パパ約束だよ、茉弥も一緒にね」

ルコが不機嫌な顔から一転して喜んで飛び跳ねた。

「ああ、了承した。まったく現金なヤツだ」

「海、説明しに行くぞ。早く行かないとタコが可哀想だからな」
「うん」

沙羅にこつてりと絞られたが、今回は海が柄の悪い男に絡まれてそれを助ける為にという事で不問にされた。

しかし、宅は相当絞られたと見えてぐったりとしていた。

そして2人も部屋に帰りリビングのソファでゆっくりとコーヒーとココアを飲んで寛いでいた。

「しかし、なんでばれるような事するかなあ。タコは」

「真面目だから、嘘が付けないんじゃないの？ 誰かと違って」

「誰かって誰の事だ。海」

「知らないっ」と

「そうだな、嘘か」

隆羅の眼がいつに無く遠くを見つめていた。

「ええ、隆羅。どうしたの？」

「別に、なんでもないぞ」

「それならいいんだけど」

「海、すまないがこれから少し出かけてくる。先に寝ていてくれ」

「何処に行くの？」

「大した用事ではないんだが、親父の仕事の片付けがあるんだ」

「こんな、時間から？」

海が驚いて時計を見るともう直ぐいつもなら眠るような時間になっている。

「こんな時間じゃなきゃ出来ない仕事もあるんだよ」

「そうなんだ、分かった。行つてらっしゃい」

「悪いな」

「そんな事言わないで。仕事ならしょうがないでしょ、気をつけてね」

「そうだな。行ってくる」

隆羅の後姿がとても哀しく感じられた。

それは何故か分からなかったが海自身も言い知れぬ不安に包まれていた。

しかし、その不安も朝目覚めると何処かに消えていた。

何時に帰って来たのかは分からないけれど隆羅に抱しめられ大好きな隆羅の腕の中で眠っていた。

そしてもう直ぐ新学期が始まる。

高校生活の最後の1年がスタートする。

新学期と誤解 - 1

新学年の新学期から私も学校に行くの楽しみだな、皆覚えいるかなあ私の事を。

新入生も入ってきて最上級生になるんだけど、パパの古い友達の仕事で学校中が大騒ぎになってしまうの。

「おはよう、海」

「おはよう、ルコ。今日から学校なんだね」

「そう、久しぶりだな。でもなんだかワクワクするよね」

「そうだね、同じクラスになれると良いよね」

「海は、私より担任が誰かの方が気になるんじゃないの？」

「でも、やっぱり親友のルコと同じクラスになりたいなあ」

「おお、言ってくれるじゃん。恋人の余裕かなあ」

「そんなじゃないよ」

「そのこの2人、早くしないと遅刻するぞ」

「いけない、走るよ海」

「うん」

バイクに乗った隆羅が声を掛けると、海とルコが隆羅の乗ったバイクを追いかけるように走り出した。

青葉台大学付属青葉台高等学校の中庭に大きな掲示板が出され2年生と3年生のクラス分けが貼り出されていた。

「ああ、ルコだ。久しぶりだね」

「留学していたんでしょ。凄いね」

友達が次々と声を掛けてきた。

「えへへ、でもいろんな事があって凄く大変だったんだよ。また1年ヨロシクね」

「ルコ、早くクラス分け見に行こう、入学式遅れちゃうよ」

「ゴメン、また後でね」

掲示板の前で海と一緒にクラスを確認する。

「えーと、葉月、葉月」

「ルコ、あったよ。また一緒だ、クラスは3ーAだよ、それに……」

「海、何をモジモジしてるの？ あっ担任、如月だ」

「えへへ、やっぱり嬉しいな」

「もう、顔。真っ赤だよ」

すると、この前まで同じクラスだった同級生が声を掛けてきた。

「ええっ、ルコと海は担任、如月先生なのズルイな。私なんかB組だから現国の霜月のハゲだよ、同じ所に住んでいて学校も一緒なんて神様不公平だぞぉー」

2年の時のクラスメイトが大声で叫んだ。

「もう、恥ずかしいよ。大声で」

「良いよね、海は憧れの如月先生とだもんね」

「でも、真面目にしないでないと前みたいに怒られちゃうからね」

「まあ、それもそうだね。それじゃ、クラスに行かなくちゃ。バイバイ」

「海、私達も早く行かないと。新学年早々、如月の雷が落ちるよ」

「そうだね、それダッシュだ」

急いでクラスに向かう、教室に入るとまだ席順も決まっていなくて男子も女子も適当に座ってザワついていた。

「おはよう、とりあえず出席を取るから出席番号順に座ってくれ」

如月先生が教室に入って来て出席を取り始め、それに合わせて席に着いていった。

そしてみんなが席に着くと教室を見回して、みんなの顔を見ながら歩き出した。

「留学に行っていた葉月も3年からのクラスなんだな。まあ、色々ともみんなも聞きたい事があるだろうが、葉月の事だ。どうせ遊びが忙しくて勉強どころじゃなかっただろうから、みんなもあまり期待はしないようにな」

「如月のヤツ、またあんな事を」

クラスのみんなが大笑いして、ルコが如月の顔を睨みつけてブツブツと言った。

「葉月、何か言ったか？」

「いえ、別に」

「最上級生なのだから新１年生や下級生の２年生に恥ずかしくない行動をするように」

「こらあ、水無月もボーとしていない」

海が出席簿で頭を軽く叩かれ頭に手を当てて照れ隠しをした。

「えへへ、スイマセン」

「それじゃ、体育館に行くぞ」

「はい」

みんなが返事をしてぞろぞろと体育館に移動をはじめた。

体育館に行くのと直ぐに在校生の席に着く、最上級生にもなると落ち着いていたものだった。

そして入学式が始まった。

不思議な事に毎年、司会進行役は如月の仕事だった。

「新入生入場」

如月の声が体育館に響いた。

そして、初々しい新入生が入場して来た。

席に着き始めるが、ザワついていて特に女子の声が耳に付いた。

「あれが噂の如月先生？」

「やっぱり本物は格好良い！」

など殆どが如月に関する物だった。

付属校の為、小・中・高と殆どエスカレーター式になっているので如月の話は、下の学校まで広がっていた。

そして新入生が全員席に着くがザワつきは収まらなかった。

「新入生、静かに！」

如月の厳しい声が体育館中に響き、静まり返った。

「君達は、これから高校生なのだから小・中学生の下級生に見られても恥ずかしくない行動をとる様に」

これも不思議な事に毎年繰り替えされている光景だった。

この時に新入生は如月先生の厳しさを始めて体験する事になる。

保護者にも人気のある如月先生だけに学校側のアピールの場なのかもしれない。

入学式も無事終わり、生徒達はホームルームの為に教室に戻って雑談をしていた。

「しかし、今年の1年もまた如月か、何処が良いのかね」

男子が嘆いていた。

「大人で落ち着いていて真面目な所が良いんじゃない」
女子が即答する。

「そんな、物なのかな。俺らはまだまだ子どもって事ですか」

「そういう事を言うから、子どもで駄目なんじゃん」

「はいはい、そうですよ。なあ、葉月はどう思うんだ」

「私に聞くなあ！」

突然、振られたがルコは如月に言われた事に腹を立てて虫の居所がすこぶる悪かった。

「如月に、何か言われると直ぐこれだ。おお怖！」

「マジで、殴るぞ」

「ルコ、止めときなよ」

ルコが席を立とうとするのを海がどうにか宿める。

「如月のヤツ、馬鹿にして」

「でも、おかげであまり留学の事を皆は聞きに来ないじゃん」

「そうなんだけど、ムカつくんだよね」

「ルコは、分かっているくせに」

「分かっているから、余計に腹が立つの！」

「でも、凄い切り替え様だよね」

「二重人格みたいなもんだからね」

「まだ、知らない事いっぱいなんだろうな。知りたいけれど知るのが怖いって感じかなあ」

海が少しだけ寂しいような怖いような曖昧な顔をした。

「そうだよな、私もまだ、何でママと結婚したのか知らないしなあ」

「ええっ、そうなんだ」

「絶対に教えてくれないんだ、時期が来たらの一点張りで」

「ん、んん！ ホームルームを始めても構わないかなあ。葉月に水無月？」

ルコと海が振り向くと如月が後ろに立って眉をヒクヒクさせていた。

「はい、スイマセンでした」

話に夢中になって如月が教室に来た事に気がつかなかった。

こんな感じで始まった、高校最後の1年なんだけれど。

それはそれで大変な出来事が、いっぱいあつてハラハラ、ドキドキな感じかな。

新入生も新学年も学校やクラスになれて、だいぶ落ち着きが出てきた4月の後半の大型連休前の放課後。

校内の廊下でルコが海を待っているとそこに如月が歩いてきた。

「葉月、すまないが水無月に友人とこれから会わなければならぬので、帰りが遅くなると伝えてくれないか」

「そんなの、直接言えば良いじゃんか」

「言えれば、葉月に頼まないさ。こんな会話を水無月としていて誰かに見られてみる大騒ぎになるだろ」

「私なら良いんだ、別に」

「葉月と俺が、親子だったという事はみんな知っているからな」

「ふうん、『だった』なんだ」

「分かった、もう頼まない。俺が悪かった。すまない」

如月がルコの肩にポンと手を置いて少し肩を落としたため息をつきながら立ち去ろうとする。

「ゴメン。学校じゃ他人行儀だから、ちょっとと言って見ただけ。ち

やんと海には伝えるからね」

ルコが慌てて振り返り言うと、如月は振り返りもせず片手を上げて答えた。

それからしばらくすると海がやってきた。

「ルコ、ゴメン待った？」

「遅いぞ、さっきまで如月が居たのに」

「ええつ。で、何か言ってた？」

「そう来るか。今日は友達と会うから遅くなるって」

「そうか、1人でお留守番だ」

「家に来れば良いじゃん、茉弥も喜ぶし」

「そうだね、じゃ帰ろう」

2人仲良くお喋りしながら昇降口に向かい歩き出した。

隆羅は最寄り駅から少し離れた遠い駅の駅前に居た。

フクロウの顔が書かれている交番の前で腕組みをしながら人を待っている。

「しかし、相変わらず時間にルーズなヤツだな」

待ち合わせの時間から15分が過ぎようとしていた。

そこに小柄だがすらっとした体型で、髪はショートボブのメガネを掛けていて目がクリツとした。

歳の割には可愛らしく服装も春らしいワンピースにベージュのカーディガンを羽織っている女性が走って来た。

「はあ、はあ、はあ。ゴメン、隆羅待った？」

「雅みやび。久しぶりに会うのに、相変わらずだな」

「だから、謝っているでしょ」

「今日は、何の用事なんだ？」

「買い物と食事に付き合ってたって、電話で言っただしょ」

「未だに彼氏は居ないのか？」

「居ないから隆羅に頼んだの。それに、こっちに出てくるのは久しぶりだから、この辺良く分からないし」

「つまり、道案内兼荷物もちで飯を奢れと」

「そんな所かな。時間があまり無いから行こう」

「お前が、遅刻してきたんだろぅが」

「うふふふ、そうでした」

雅が隆羅の腕をつかんで引つ張り歩き始めた。

隆羅と腕を組んで嬉しそうに歩き出す。

「で、何処から行きたいんだ？」

「とりあえずハンズかな、それとデパート系をひと通り」

「また、画材探しか？ ネットで探せよ」

「苦手なのパソコンって。それに実際に目で見て触って見なきゃ分からない事が多いのよ。繊細な物なんだから」

「了解しました。雅にその事を語らすと止まらなくなるからな」
すると雅が隆羅の顔を見上げた。

「そう言えば、今回の個展には来てくれるの？」

「行きたいのは山々なんだが、忙しくてな」

「1回も来てくれた事無いよね」

「悪いとは思っているんだぞ。古い付き合いなのに」

「そうだね、腐れ縁みたいなもんだもんね」

「兄妹みたいな感じだしな」

「そうそう、恋愛関係なんて考えられないもんね、隆羅じゃ」

「悪かったな。そのままお返しするよ」

「ふふふ、不思議な関係だね」

「ああ」

「隆羅は彼女って、そう言えば結婚していたっけ」

「別れたぞと言うか、友達に戻ったと言うか」

「そうなんだ、最初聞いた時はビックリしたもん、子どもを育てる為に結婚だなんて」

隆羅の顔を見上げて雅が目細めながら言った。

「まあ、その話は良いじゃないかなあ、ついたぞハンズに」

「やっぱり、いつものなの？」

「そうだな、いつものだ」

ハンスに入り、エスカレーターで最上階まで行き、各フロアーを見ながら下に降りて行くのが隆羅の昔からの癖と言つか、ハンスやデパートを見て廻る方法だった。

「この方が、楽だろ」

「そうかなあ、まあ良いけれどね」

「大阪にもハンスはあるんだろ」

「あるけれど、今回は打ち合わせなんかがあつて東京に来たの。そのついでかな、隆羅の顔も見たかったしね」

「今日は、何の画材を探しに来たんだ」

「画材じゃないんだけど、何か変わった物で使える物をね」

「そうなのか、大変だな。アーティストも」

「今の時代は何でもありだからね、それにそのアーティストというのは止めて欲しいの。私は自分が描きたい物、創りたい物を自由にしているだけ」

ひと通りハンスの店内を見て回り、今度はデパートへ行くために駅ビルの方へ歩く。

「ねえ、隆羅。今日は何をご馳走してくれるの？」

「何が、食べたいんだ？」

「イタリアンが良いかな」

「イタリアンなら雅に打って付けの店があるぞ」

「じゃ、行こう！」

雅が片手を挙げて楽しそうに叫んだ。

「行こうって探し物は良いのか？」

「腹が減っては、戦は出来ぬだもん」

「分かった、じゃ行くか。場所は駅の反対側だ」

学校帰りに寄り道している青葉台大付属の女子生徒が、雅が隆羅と腕を組みながら駅前を歩いている姿を偶然見つけた。

「ねえねえ！ あれって如月先生じゃないの？」

「うわあ、本当だ。こんな所にいるの見つかったらやばいよね。でも、何だか2人ともとってもいい感じ。先生も楽しそうだしデートかなあ？」

「その前に、誰なんだろうあの綺麗な人。やっぱ如月の彼女かなあ」「彼女、だったら。カシヤとこうよ」

「そうだね、これはビッグニュースだもんね」

携帯を取り出し2人に気付かれないように如月と雅を写した。

「ねえ、これから何処に行くのかなあ？」

「ちよっと、興味津々。追いかけて見ようよ」

「少しだけだよ、遅くなるとママに叱られるから」
2人を見失わない様に追いかける。

駅ビルを抜け西口に向かい、歩いて直ぐの場所にある芸術劇場の前に着いた。

「隆羅、ここって芸術劇場じゃないの？」

「そうだが、中に入ってみれば分かるよ」

劇場の中に入り2階へと上がるとお店が見えてきた。

「ここに、トラットリアなんかがあるなんて素敵」

「雅が好きそうな場所だろ」

「隆羅、ありがとう」

そのトラットリアはとても天井が高く壁一面にはアートな壁画と、開放感があり芸術の香りが広がる空間になっていた。

雅は白のグラスワインの トレッビアーノダブルツツォ、隆羅はチンザノドライをロックで注文した。

食事はフルーッとマトとモツアレのカプレーゼ、鮮魚のカルパッチョ、パスタはスパゲッティ プッタネスカとゴルゴンゾーラのペンの2品を頼んだ。

「じゃ、チンチン」

イタリアンな乾杯をして食事をする。

「ねえ、そう言えば聞くの忘れていたけれど、隆羅は彼女居ないの

？」

「居るぞ、ちゃんと」

「そうなんだ、でもこんな所見られたりしたら不味く無いの？」

雅が不思議そうな顔をして隆羅に聞いてきた。

「何故？ 友達と食事しちゃいけないんだ。俺にだって付き合いはあるんだから」

「でも、彼女からしてみれば他の女性と食事って面白く無いと思うけど」

「じゃ、俺に彼女以外との友達付き合いをすると、そんな事は不可能だろ」

「まあ、そうなんだけれどね。今度、紹介しなさいよちゃんと」

「まあ、そのうちな。色々あって周りには秘密にしている事多いしな」

「何それ、怪しいなあ」

雅が何か如何わしいものでも見るような目で隆羅を見ると、隆羅は気にせずにパスタを口に運んでいた。

「このプッタネスカ美味しいぞ」

「どれどれ、少し頂戴」

そんな他愛の無い会話をしながらの食事も終わり。

駅ビルの中にあるロフトやデパートなどを見て回り駅で別れる。

「また今度ね、隆羅。週末まで個展やっているから時間があつたら見に来てね」

「ああ、分かった。頑張れよ、またな」

マンションに着いたのは10時を少し過ぎた頃だった。

部屋には明かりがついておらず、海の姿は無かった。

「ルコの所にも行っているのか、とりあえず風呂でも入るか」

ベッドに上着やネクタイ、シャツを脱ぎ捨てバスルームに行きシャワーを浴びる。

その頃、海はルコ達の部屋で茉弥と遊んでいた。

「ルコ、そろそろ隆羅が帰ってるかもしれないから帰るね」

「そうだね、明日も学校だしね。おやすみ」

「おやすみなさい、茉弥ちゃんバイバイ」

「キヤッ、キヤッ」

茉弥がはしやぎながらバイバイをしている。

茉弥に手を振りルコの部屋を出て自分の部屋に戻ると玄関に隆羅の靴があった。

「ああ、帰って来てる」

「隆羅、お帰り……あれ？ お風呂かな？」

寝室に入るとベッドの上いつもの様に洋服が脱ぎ捨ててあった。

「もう、直ぐにハンガーに掛ければ良いのに。皺になっちゃうじゃん」

スーツの上着をハンガーに掛けようとした時、スーツから微かに香水の香りがした。

「あれ、何で。電車の中で付いたのかなあ」

その時、隆羅がバスルームから出てきた。

「お帰り、隆羅」

「ただいま、海。どうした？」

隆羅が海の顔を見ると一瞬だけ哀しそうな顔になった。

でも直ぐにいつもの海に戻ったので、隆羅は気にも止めなかった。

「服はハンガーに掛けないと皺になっちゃうでしょ」

「悪いな、いつも」

「今日は、どんなお友達だったの？」

「古い付き合いのヤツで自由人かなあ」

「そうなんだ」

隆羅が寝室のベッドに腰を下ろして海の顔を見ながら普段と変らない口調で話しかけてきた。

「それより、連休明けにテストがあるが大丈夫なんだろうな」

「一応、勉強しているけれど」

「数学だけは頑張ってくれよ」

「数学だけで良いの？」

「まあ、他は程ほどでな」

「それが先生の言う言葉かなあ、まったく」

「いや、流石に教えている方は凹むぞ。ルコの際は散々だったからな」

「点数が悪かったらどうするの？」

「家でも先生バージョンになって、厳しくお勉強だ」

「ブー。それは嫌です」

海が口を尖らせて頬を膨らませた。

「じゃ、頑張ってくれ。疲れたから先に横になるぞ」

「隆羅、少しだけ待ってよ。直ぐにお風呂に入ってくるから」

「分かった。待ってるよ」

海が急いでバスルームへ走って行った。

学校の後、散々歩き回ってアルコールも少し入っているせいか眠たくなって来た。

欠伸をしながら眠気を我慢して海が出てくるのをベッドで横になりながら待った。

「あれ、隆羅。寝ちゃったの？」

「起きてるぞ」

とても眠そうな隆羅の声だった。

「もう、今日はあんまりおしゃべり出来なかったのに」

「海が友達と遊ぶように、俺にも付き合いがあるんだからしょうがないだろ」

「それは、そうだけど」

「ほら、寝るぞ」

隆羅が海の手を引っ張られて隆羅に軽く抱しめられる。

「まだ、髪の毛濡れてるのに」

「大丈夫だよ、もう半乾きだろ」

「本当に、隆羅って子どもみたいな所あるよね」

「嫌いか？ そんな所は」

「嫌いじゃないけどさ」

「なら、良いじゃないか」

海のおでこにキスをすると隆羅の眼が既にトロンとしてきていた。

「ねえ、隆羅。浮気なんてしないよね」

「しないよ、そんな事。おやす……」

「寝ちゃった。もう隆羅のバカ」

海が少し怒って隆羅の鼻をつまむと海も直ぐに夢の中に入っていた。

新学期と誤解 - 2

翌日、青葉台大学付属青葉台高等学校では……

学校中の生徒が右往左往して天と地をひっくり返した様な大騒ぎになっていた。

「凄かったんだよ。超綺麗な女の人と腕組んで楽しそうに歩いてて、芸術劇場の中にあるお洒落なイタリアンレストランで乾杯して。ドラマみたいだったよ、格好良過ぎるよね、絶対あれは如月先生の恋人だよ」

「ほらほら、この凄く綺麗な女の人が如月先生の恋人だよ」

携帯の画像を自慢げにお披露目している。

「ええっ、凄い。私に写メしてお願い」

あつという間に、2人が腕を組んで歩く写真と隆羅の恋人の話は学校中を駆け巡り。

この話を知らない者はいないくらいになっていた。

そこに何も知らずにルコと海が楽しそうにお喋りをしながら教室に入ってきた。

「ルコ、聞いた？ 如月先生の恋人の事」

「ええっ？」

聞かれたルコでは無く、隣に居た海が驚いた。

「ほら、これがその恋人」

携帯の画面を開いて見せる。

画面には腕を組みながら歩いている隆羅と見知らぬ女の人の姿が映し出されている。

「でも、これだけじゃ恋人が分からないじゃん」

「あのね、C組みの子がレストランで2人きりで楽しそうに食事している所を見たんだって」

海の頭に昨夜のスーツの残り香の事が浮かんできた。

ルコが海の顔を見ると海の微妙な表情の揺れを見逃さなかった。

「海！ 海？ ちょっと来て」

「ええ？ 何？ ルコ」

突然ルコに腕を引つ張られて上の空だった海が我に返る。

人気の少ない渡り廊下でルコが海に詰め寄った。

「海、これはいったいどう言う事なの？」

「ルコ、そんなに怖い顔しても私よく分らないよ」

海は訳が判らず戸惑っているとルコはそんな事お構いなしに海に言い寄った。

「昨日の夜はなんか変わった事無かった？」

「別に変わった様子も無かったけれど、私が部屋に戻った時はシャ

ワー浴びてたし。でも……」

「でも、何なの？」

「上着が脱ぎ捨ててあつて、香水の匂いが少ししたけど」

「まあ、写真であれだけ、腕にしがみ付けば香水くらい移るよね。

パパは何て言っていたの、その人の事？」

「古い付き合いの自由人だつて」

そこで、ルコが少し落ち着きを取り戻した。

「そうか。でも、上着が脱ぎ捨ててあつたんなら本当にただの友達かもね」

「ルコ、何で？」

「だって、浮気したのなら海にはれない様に、上着なんか投げ捨てて置かないでしょ」

「そうだけど、いつもの事だし……」

海は不安で堪らなかった、それでも隆羅を信じたい気持ちでいっぱいだったのだ。

「やっぱり心配だね」

「でも、隆羅は浮気なんかしないって、私は信じるけど」

「本人に確認しよう！」

「ええ、そんな事して大丈夫なの？」

「白黒つけなきゃ、私の気が納まらないの」

職員室の先生方も生徒達に負けず劣らず如月先生の恋人の話で持切りになっていた。

そこに如月が職員室に入ってきた。

「如月先生、おはようございます」

「おはようございます。今日は何だか学校中が騒がしいですね」

「何を暢気な事言っているんですか？ 騒ぎの張本人は先生ですよ」

「私がかしましたか？」

「生徒が先生のデートの現場を見たとか、腕を組んで歩く写真まで」

「私が女性とデートしたら可笑しいのですか？ プライベートな事は学校と関係無いじゃないのですか」

「まあ、それはそうなんですが。人気者の先生だけに大騒ぎに」

「先生方も浮き足立っているなんて事はもちろん無いですよ」

如月がこれ以上浮き足立たないように先生方にしっかりと釘を刺しておく。

「そ、そんな事はもちろん」

「では、沈静化させて下さいね。プライベートの事で大騒ぎするなと、お願いできますよね」

「も、もちろんですよ。ね、皆さん」

「はい」

如月が少し厳しいぐらい真面目な表情で言うと、教頭が同意を求めると直ぐに先生方も返事をした。

普段から生真面目で通している如月には何も言えなかった、それに学校の評価を下げるわけにも行かないからだろう。

如月が落ち着きが無くザワ付いている教室へ向かう。

「おはよう」

「おはようございます」

如月が教室に入ってきたのに気付くと騒いでいた生徒が席に着いた。

「ホームルームの前に言っておきたい事がある。先生のプライベートな事で大騒ぎになっている様だが、先生にも色々な友人が居る。その友人との付き合いを詮索するのは結構だが公の場で大騒ぎするのはどうかと思うんだが」

「先生の恋人なんですよ？」

クラスの男子が声を上げて聞いてきた。

「友人だと言ったはずだが。この際だから聞きたい事があれば答えておこう、それで君達が納得するのなら」

如月がしっかりとクラスの生徒達を見て言った。

「腕を組んで歩いて恋人じゃ無いなんて誰も信じませんよ」

「信じようが信じまいがそれは君達の勝手だ。彼女とは古い付き合いで妹の様なもので恋愛感情はお互い一切無いが、他に聞きたい事は」

「何処に住んでいて、何と言う名前ですか？」

「そこまではプライバシーに係わる事は答えられない。関西在住の女性だ、前回会ったのは数年前だ。このくらいで良いかな」

「先生には恋人は居るのですか？」

「その質問は的外れだと思うが。先生に恋人が居たらいけないのかな？ 何か問題でもあるのかな？ 僕から皆に聞いてみたいんだが」

逆に質問されて誰も何も言えなくなった。
当たり前である、独身の大人の男性に恋人が居たらいけないなんて事は無いのだから。

生徒の中では収束に向かっていている様だったがほんの一部ではまだ燦っていた。

予鈴が鳴りホームルームが終わり如月が教室を出ようとすると、ルコが如月に話しかけてきた。

「如月先生、後で少し話したい事があるのですが」

「分かった。昼休みに生徒指導室を空けておくから」

「ありがとうございます」

ルコが業とらしいくらい深々と頭を下げる。とても重い空気だった。

如月の恋人の話が広まるのもアツと言う間だったが終息するのも早かった。

如月の毅然とした態度や先生方の協力があったからだろう。

昼休み昼食後に生徒指導室にルコと海がやって来た。

「失礼します」

生徒指導室に入るとソファーに腕組みをして如月が座っていて手を差し出し座るように促した。

「話ってなんだ、ルコ？」

「学校で苗字で呼ばないんですね」

いつもと違い強い口調だった。

「先生にじゃなくて如月隆羅に話があるんだろ」

「海が不安になって居ます。説明をして下さい」

「教室で話した事が全てだが」

「本当に何も無かったんですね」

「言った筈だぞ。信じるも信じないもお前達次第だと」

「それは、そうだけどパパが疑われるような事したんでしょ」

ルコが真っ直ぐに隆羅の目を見ながら詰め寄った。

「誤解を受けるかも知れないが友人と会うのに許可が居るのか？」

「でも、女の人と2人って……」

「彼女は妹と同じ様なものなんだ。名前は睦月 雅むつき みやび、和歌山に住んでいて本人は嫌がるが芸術家、アーティストだ。知り合って15年位かな、今まで1回も恋愛感情をお互いに持った事が無い。それでも信じてもらえないならしょうがないな」

「じゃ、パパ。海が他の男の人と2人で出かけたらどうするの？ 嫌じゃないの？」

「ねえ！」

ルコが強い口調で隆羅に詰め寄ると隆羅が海の目を射抜くように見て海の気持ちを聞いてきた。

「海はどう思っているんだ？」

「私は隆羅を信じたいけれど……」

「パパ答えて！ 海が他の男とデートしたらどうするの！」

ルコがソファの前のテーブルを叩いて立ち上がり叫んだ。

「俺は海を信じるが。海がデートしたいのならすれば良い、好きに
しなさい」

とても静かに隆羅が答え、深くため息をついて哀しそうな顔をして
生徒指導室を出て行ってしまった。

生徒指導室に残されたのルコと海にしばらく沈黙が訪れる。

ルコが先に口を開いた。

「海、ゴメン。パパの気持ち試すような事しちゃった。どんなに海
の事が好きなのか分かっているのに。また、あんなに哀しい顔にさ
せちゃった」

ルコの目から涙が零れている。

「大丈夫だよ、ルコ。隆羅は信じるって言うてくれたのに、信じる
って言えなかった。私がバカだ……」

海の頬にも温かいものが流れていた。

次の日から、如月はいつもの様に淡々と授業を行い。

そして家ではパソコンの前で連休明けのテストを作っていた。

テストは生徒でもある海に見せる訳にもいかず、海が居ない部屋で
海と会話をする事も無く如月は作業をしていた。

そんな事が数日続き週末の土曜日を迎える。

ルコと海は友達に部活の手伝いを頼まれて休日の学校に来ていた。

「海、あれからどうだったの？」

「隆羅は家でテスト作っているから、あまり顔も合わさないし話す
事あんまりしないよ」

「そうか、テストが出来たら大丈夫だよな」

「どうなんだろう、それは私にも分からない。でもね、前に隆羅の
実家に行った時に言われた事があるんだ」

「何て言われたの？」

「私を失うのが怖いって。その時の隆羅の瞳が凄く揺れていた。こんなに私の事を守ってくれてとても強い人だと思っていたのに、こんなに弱い人なんだなって優し過ぎるんだよね。でも、優しくないとおんなに強くなれないんだと思う。だからいつも側に居てあげたいの。それが出来ない今がとても辛い」

海が涙を必死に堪えた。

「私も何をしているんだろうって、あれから思っちゃった。私を育てる為に10年もパパで居てくれた人の言葉を信じられないなんて、それに海とパパの事を応援するって決めたのに。許してくれるかなあ、ママに相談してみようか」

「そうだね。でも、私は隆羅に謝りたいな、『信じている』ってちゃんと伝えなきゃ」

その時、友達が声を掛けてきた。

「ルコ！ 海！ 今日はどうもありがとうね、もう大丈夫だから」

「うん、分かった。また、月曜日にね」

「海、帰って。ママに話を聞いてもらおう」

「うん、そうだね」

体育館を出て下駄箱に向かい靴を履き替えて、昇降口を出て校門へ向かう。

校庭や体育館からは運動部の元気な掛け声が聞えていた。

校門に目を向けると信じられない光景が飛び込んできた。

隆羅が登校に使っているバイクで私服に革のジャンパーを着て待っていたのだ。

ルコと海が駆け出した。

「こ、こんな所で何やっているのよ。バカ」

ルコが慌てて如月に注意した。

「バカでも何でも良いんだよ。海を待っていたんだ」

「私を？」

「そうだ、これを着てヘルメットを被ってくれ」

隆羅が温かそうな少し大きめの上着とヘルメットを海の方に差し出した。

「隆羅、私……」

海が何かを言おうとするが隆羅はそれ以上は何も言わず海の目を見つめたままだった。

「うん、分かった」

海が上着を着て髪の毛を束ねてヘルメットを着けた。

隆羅がヘルメットの後ろのスイッチを入れる。

「声、聞こえるよな」

「うん、聞える」

「少し、怖いかもしれないが。俺にしがみついていてくれ」

隆羅がバイクに乗りタンデムステップを降ろすと海が後ろに乗り隆羅の体にしがみ付いた。

「パパ、何処に？」

「大阪だ」

「ええっ、これから？」

「今日中か明日には戻る、沙羅に伝えておいてくれ。心配するからな」

「ねえ、パパ。今日のバイクなんだか音がいつもと違うけれど」

「特別仕様にしてある」

「特別？」

「じゃ、行ってくるからな」

隆羅がアクセルを開けると簡単に前輪が浮いた。

「ひゃあ」

海が驚いて声を上げると「大丈夫か？」と隆羅が左手で海の手を優しく触った。

「うん、大丈夫」

その隆羅の声はとても落ち着いていたいつもの優しい声で海は安心した。

首都高に乗り東名高速へと向かう用賀を過ぎ東名に入った。

「海、これから飛ばすからシッカリつかまっておけよ」

海が隆羅の体に回している腕に力が入った。

「あまり、ガチガチにならなくて平気だからな。俺の体から外に体を出すなよ」

「うん」

アクセルを更に開けシフトをチェンジするとグンと言う加速で周りの景色が後ろへと信じられない速さで飛んで行った。

「隆羅、今、どの位の速さなの？」

「180って所かな」

「ええ、大丈夫なの？」

「心配ない。バイクも俺の腕も確かだ。もう少し出すぞ」

隆羅がアクセルを吹かして更に加速していった。

「そうじゃなくてさ、もう知らないから。馬鹿」

信じられない速度のバイクに乗っている筈なのに怖いという感覚は無かった。

風になった様な感じと言えば良いのだろうか、高級な乗用車に乗っているかの様な安心感さえしたのだ。

海の心配していた物が追いかけてくる高速隊のパトカーだ。

しかし隆羅のバイクに追いつけずに少しずつ放されていく。

隆羅が胸ポケットからゴソゴソと何か手帳みたいな物を取り出すとバイクの速度が遅くなり、あっという間にパトカーが横に並んだ。

「貴様、止まらないか！ 路肩に寄せて停車しろ！」

警官がマイクで叫んでいる。

隆羅が手帳のような物を警官に見せると警官の顔が引きつり最敬礼をした。

手帳をポケットにしまいアクセルを再び開ける。

片手で警官に合図をするとパトカーはそれ以上追いかけては来なかった。

「隆羅、今のは何だったの？」

「通行手形を見せたただけだ。つかまっておけよ無敵モードで行くかな」

ありえない速さでバイクを走らせる。景色を眺める、そんな余裕は全くなかった。

速度の感覚など殆ど無くなり漂っている感覚だけになっていったのだ。

途中で給油をしてすぐにバイクを走らせた。

「海、大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

「何かあれば直ぐに言えよ」

「分かった、隆羅。あの湖みたいのは？」

「浜名湖だけど」

「えっ、浜名湖？」

「200キロ以上で走っているからな。もう少ししたら休憩を入れるから」

しばらく走りサービスエリアに入り再び給油を兼ねて休憩に入った。

「適当に、好きな物を食べてくれないか」

海は隆羅から財布を渡された。

「隆羅は？」

「ホットだけで」

「うん、分かった」

隆羅は何かを考えている様だった。海は軽く食事をして隆羅はコーヒーを飲んでいた。

「ねえ、隆羅。私ね」

「そろそろ行こうか」

隆羅の言葉に遮られてしまった。

名神高速に入っても隆羅はスピードを緩めなかった。

京都を過ぎ大阪に入り高速を降り中心街に向かう。

昼過ぎに東京を出た筈なのに夕方までには時間がかなりあった。

しばらくするとバイクはとても落ち着いたギャラリーの前で止まった。ギャラリーには睦月 雅 個展「優」と書いてあった。

「着いたぞ、海。降りてくれ」

「隆羅、ここってあの女の人の？」

「そうだ、彼女の個展会場だ」

ヘルメットを外してバイクにロックして隆羅が歩き出しギャラリーに入っていく。

海が慌てて隆羅の後を追いかけてギャラリーに入った。

ギャラリーにはとても優しい感じの絵や彫刻が展示されている、作品を見ただけで彼女の人となりを感じ取る事が出来た。

「隆羅、どうしてここに？」

「彼女と会わずのが一番良いと思ってな」

「た、隆羅！ 来てくれたんだ」

雅が隆羅を見つけて目をまん丸にして駆け寄って来て。

そして満面の笑顔で嬉しそうに隆羅の首に手を回して抱きついた。

「おいおい。このあいだ会ったばかりだろう」

「でも、個展に見に来てくれたのは初めてでしょ」

「まあな」

「あら、そちらの女の子は？」

海に気付き雅が慌てて隆羅から離れた。

「始めまして、水無月 海と言います」

海が緊張した面持ちで自己紹介をしてお辞儀をした。

「私は隆羅から聞いていると思うけれど睦月 雅と言います。宜しくね。隆羅まさか娘さんじゃないよね。あの、水無月さん。失礼だ

けどお歳は？」

「19歳です」

「ええつ。若い！ 隆羅この子って……こんな所で立ち話もなんだからこちらにどうぞ」

雅が驚きながらも直ぐに落ち着きを取り戻して会場内の小さなテールに隆羅と海を案内した。

「ゴメン、コーヒーを3つ頂戴」

雅がアシスタントに声を掛けた。

「隆羅、この子が彼女なんでしょ」

「そうだ」

隆羅が少しだけ沈んだ声で雅に言った。

「また、そんな顔してる。この間の事で何かあったのね、彼女と2人で話をさせてもらえないかなあ？」

「分かった。海、聞きたい事があれば雅に何でも聞いてくれ」

「う、うん」

海が戸惑いながら返事をする。隆羅が席を外して個展会場の作品を見に行ってしまう。

そこにアシスタントがコーヒーを持ってくると雅が海に真っ直ぐに向き合い話し始めた。

「どうぞ、飲んで」

「はい、ありがとうございます」

「水無月さん、何があったの？　もしかして、生徒さんに見られて大騒ぎになったとか」

「そんな感じです。でも直ぐに隆羅が生徒に説明をして収まったんですけれど、私とルコが隆羅を問い詰めてしまっ……」

「そっか、それであんな顔をしているのね」

「あんな顔ですか？」

「そう。あの顔は自分を責め続けている顔なの隆羅は決して人を責めない。いつも周りの人を優先して考える、そして何かあると直ぐに自分で抱え込む。そんな奴なのよ」

「良く知っているんですね。隆羅の事を」

海は不安に包まれて思わず雅から視線を外してしまった。

「隆羅から聞いているんですよ私達が付き合いが長い事は。でも今まで1度も恋愛感情を抱いた事なんて無いの。信じえもらえるかは水無月さん次第なんだけどね。不思議な関係といった方が良いのかな兄妹みたいな感じで血の繋がりになんて無いのにね変でしょ。水無

月さんは男と女の友情って信じられるかなあ」

「よく分からないけれど、とても素敵な事だと思います」

「そう、ありがとう。私は気兼ね無く隆羅に甘えるしわがママも言う。隆羅はいつも優しいからそれに答えてくれる。だから誤解される事も今まで何回もあった、でもこの関係は壊れなかった。それに私には心に思っている人がいるの」

「えっ、その人って」

「もう、2度と会えないわ。死んでしまったから。この事も隆羅は知っているわ」

「でも、それじゃ」

海は雅の顔を真っ直ぐに見ていた。

「そうね、寂しすぎる。もう10年以上前の事だもの。でも隆羅はそれで良いじゃないかって言ってくれた。そして俺に出来る事ならなんでもするから何かあれば連絡をくれって。本当はね、彼が死んでしまった時に私も死のうとしたの。隆羅が居なければ私は死んでいたわ。そして絵の道を教えてくれたのも隆羅だった。元々好きで絵を描いていたけれど周りの人には恥ずかしくて内緒にしていたのに、アイツだけは知っていたの。水無月さんは気付いた事無い？ アイツは周りの人の事を良く見ている、そして手助けしてくれる。何よりも最優先にしてね」

「いつも、私やルコの事を……」

「そうでしょ。そんな隆羅が本気で1人の女の子を好きになった」

「本気で？」

「本気じゃなければ、こんな所まで来ないわよ。あなたを失いたく無いからここまで連れて来たの、私と話をさせるためにね。今まで1度も個展には来てくれないのに水無月さんが羨ましいな」

「私どうしたら良いのか分からなくて」

「それは、水無月さん自身が考える事なんじゃないの？ 好きなんでしょ隆羅の事が」

「はい、大好きです」

海がどこまでも真っ直ぐな瞳で雅に答えた。

「なら大丈夫よ。素直な気持ちを伝える事、でも分かってあげてね
隆羅にも付き合いたいがあるという事を。私は今までと同じように隆羅
と付き合っていくつもり大切な友人だから、そして水無月さんとも
お友達になりたいなあ」

「私とですか？」

「ええ、駄目かしら。出会いは縁だもの。星の数ほどのって言うけれどそれでも実際に見える星の数は3000個、それに比べて人は60億人もいるのよ。出会いは奇跡なの。そして心から好きな人と出逢えるなんて奇跡以外にはあり得ないじゃない」

「何だか睦月さんって凄いです」

「隆羅の受け売りよ、プラトンの話しも聞いた事が無いの？」

「プラトンですか？」

海が首を傾げて不思議そうな顔をしている。

「ええ、プラトンの人間球体説よ。男と女は元来ひとつの球体だったって言うお話よ。『ある日、球体の男と女がとも仲の良い事に神が嫉妬して半分に切ってしまったの。以来この世には元の半身を求める男と女の半球体が彷徨っている。だから形・サイズ・色等々ぴったり一致する半球体にめぐり合うことはミラクルなんだ』って言うお話よ。これを聞いた時に、私の半球体はもう居ないのねって言ったら隆羅は笑い飛ばしたわ。そんな神か仏の様な悟った様な事を言ってるんでそんな事が私に分かるんだって、人生に絶対なんて無いんだ。運命からは逃げられないけれど、運命と戦う事は出来るだろう。でもまだ出逢って無いのよね、仕事では少しずつ認められているけれどね」

「素敵なども優しく感じる作品ですよ」

「ありがとう。でもあなたと隆羅の方が素敵よ、私も応援するからね」

「睦月さん」

「いい、ちゃんと伝えなさい言葉だね。分かってくれているなんて

思っちゃ絶対に駄目。必ず後悔するわよ。自分の言葉でしっかりと伝えなさい」

「はい、分かりました」

海が雅の目を真っ直ぐに見て答えた。

「隆羅。これから時間あるんでしょ」

ホールで作品を見ている隆羅に雅が声を掛けた。

「少しならな」

「食事に付き合ってね。この間のお礼もしたいから」

「礼なんてそんな仲でもないだろう」

「いいの。個展にも来てくれたし、彼女まで紹介してくれたから」

雅がアシスタントと何かを話しをして3人でギャラリーを後にする。そしてタクシーで京橋に向かい大阪城の直ぐ近くにあるビルの最上階のレストランに着いた。

雅がタクシーの中から携帯で予約を入れておいたのだろう。

直ぐに支配人らしき人が出迎えた。

「睦月様、ご予約有難うございます。大変申し訳無いのですが窓際の……」

雅の後ろに目をやり支配人がしばらく固まった。

隆羅が海と雅に分からない様に口に人差し指を当て支配人に何も言わないように目配せをした。

「しばらく、お待ちください」

そう言っ支配人が下がる。

しばらくすると窓際の席に案内された。

「大変お待たせ致しました。こちらへどうぞ」

「あら、窓際はいっぱいだと」

「はい、特別にご用意させて頂きました」

支配人に案内されたテーブルからは光り輝く大阪の街が一望できる席だった。

「凄い！ 綺麗な夜景。見てみて隆羅」

海が目を輝かせて嬉しそうに言った。

「綺麗だな、大阪の夜景も」

「良いでしょここ。さあ何を食べようか」

各々が食べたい物を頼み、3人で味見をしながら食事を楽しむ。

「水無月さんと呼ぶのも何だか余所余所しいわね。海ちゃんが良いかしら？」

「構わないですよ」

「それじゃ、海ちゃん。隆羅の先生ぶりはどうなの？」

「凄い人気ですよ。真面目でとても厳しいけど女生徒の憧れの先生かな」

「へえ、隆羅がね。私はどちらかって言うとOFFの時の隆羅しか知らないからなあ」

「別人ですよ、凄くなって思います」

「それは隆羅が自分にとっても厳しい人間だからね。でもとても優しいんですよ」

「そうですね。ちゃんと皆の事見ていてくれるし、適切なアドバイスもしてくれるから」

「そうなの隆羅？」

雅がわざと隆羅にふる。

「そうなのと聞かれても俺は当たり前してるだけだからな」

「その当たり前の事を当たり前前のように出来るのが凄いのよ」

「そうなのか、俺には良く分らんが」

「相変わらずね」

しばらく会話を楽しみながら食事をする。

食事が終わり食後にコーヒーを頼んだ。

「すまん、ちよつと電話だ」

隆羅の携帯がマナーモードで着信を知らせると隆羅がレストランの入り口に向かった。

「今日も、隆羅に助けられちゃったな」

「えっ、何故ですか？」

「このレストランかなり人気があつて中々窓際の席は予約出来ないのよ。電話した時も無理かもって言われたし、着いた時も始めに支配人は謝っていたでしょ」

「そう言えば、そうですね」

「あれは、隆羅を見て席を用意してくれたの。隆羅は私たちに気付かれない様にしていたみたいだけど隆羅って何者なのかしら？」

「実家は日本の何割かを仕切る企業だつて」

「ええっ、海ちゃん。隆羅の実家を知っているの？」

伏し目がちに不思議そうにしていた雅のクリツとした目が更に大きくなり輝いていた。

「はい、とっても大きなお屋敷でした。まるで昔の大名屋敷みたいな」

「ますます、本気なのね」

「そう言えば、おば様も女の子を連れて来たのは初めてだつて」

「それでも、すれ違ちゃたりするのね。大好きな証拠ね」

「そうなのかなあ」

「大好きだから不安になるんですよ。海ちゃんも隆羅も」

「そうですね。でも少しずつ隆羅の事を知って行きたいです」

「でも、人には言えない事もあつたりするわよ」

「私も思います。隆羅がとて哀しそうな顔をする時に、少し怖いけど」

「それでも乗り越えて欲しいな。隆羅と海ちゃんなら、お似合いだしね」

「からかわないで下さいよ。雅さん」

「あら、私は本気よ。本当はもっとラブラブなんだろうなって」

「それはその……」

海が赤くなり俯いてモジモジしていた。

「ビンゴなんだ。良いなあ2人を見てみると私も恋人欲しくなっちゃった」

「雅さんとはとても素敵で綺麗なんだから、きっと良い人居ると思

いますよ」

「ありがとう。でも、今は創作活動が楽しくてしょうがないの。しばらくは恋人はお預けかなあ」

そこに隆羅が戻ってきた。

「悪いな、親父からだったよ」

「また、仕事の話？」

「いや、連休中に少しでも顔を出せってお袋が煩いらしい」

隆羅と海の会話がいつもの会話になっていた。

「ゴメン、ちよっとおトイレ」

雅が席を立ち隆羅に判らない様に海にウィンクした。

海も気付き目で合図する。

「あのね、隆羅」

「なんだ」

「ゴメンなさい。疑うような事をして。でもね、凄く不安になるの」
海が隆羅に頭を下げて心から謝った。

「悪かったな、俺の方こそ不安にさせて」

「うん、私がいけないの。もう平気、隆羅はちゃんと私の側に居てくれるんだもん。それに私も隆羅の側にいつも居る。そうだね」
「そうだな」

「だから、自分ばかり責めるのは止めようお願いだから。どちらかが一方的に悪いなんて事は無いんだからネ。何かあったらお話して2人で考えよう」

「分かった。ありがとうな」

隆羅が海の頭を優しくクシャッと撫でた。

「えへへ、何だか隆羅に触られるの嬉しいな」

海が隆羅の手を触った。

「仲直り出来たみたいね」

そんな2人の所に雅が戻ってきた。

「雅に助けられたな」

「そんなのお互い様よ。さあ、お開きにしましょう」

「ご馳走様でした」

「また、東京に遊びに行くから、今度は3人で遊びましょ」

「はい」

「そうだな」

「ねえ、これから東京に帰るなんて言わないわよね」

「帰るが何か問題でも」

「寒いわよバイクじゃ、海ちゃんが可哀そうよ」

「平気です。隆羅にしがみ付いていれば温かいし」

「だ、そうだ」

隆羅が海の嬉しそうな顔を見る。

「ラブラブと言うより、まるでバカップル見たい」

「雅さんまでそんな事言わないで下さいよ」

「誰かにも言われているんだ」

「ルコや沙羅さんに言われます」

「いいじゃない、幸せだっていう事よ」

「幸せか、えへへ」

海が嬉しそうに隆羅の腕にしがみ付いた。

「東京でも何処へでも帰ってちょうだいな。お熱い事で、こちらこそご馳走様でした」

しばらくして、隆羅の家に小包が届いた。

差出人は睦月 雅とあり包みを開けると一枚の絵が入っていた。

とても温かく優しい絵で題名は「愛」と書かれていた、隆羅がリビングの壁に大切に飾った。

ゴールデンウィーク - 1

巷では大型連休なんて言ってるけれど。

ここだけは別、宅パパは仕事だし如月パパと海はラブラブだしここにも行かないのかなあ。

なんて思ってたなら旅行に連れて行ってくれることになったんだけれど……

またトラブルだらけ私にも責任があるんだけれど海はもっと大変な事になっちゃうの。

「久しぶりにゆつくり出来るな」

「そうだね、いろんな事があったからね」

遅い時間に起きて、隆羅と海はゆつくりとした時間をベッドの中で過ごしていた。

「誰かさんのおかげでテストも仕上がっているしな」

「いじわる」

海が隆羅に背を向けた。

「感謝しているんだぞ、こうしてゆつくり出来るんだから」

後ろから隆羅が海を抱しめる。

「ねえ、隆羅」

「なんだ？」

「もう少しだけ、その……」

「どうしたんだ、海」

「キスだけじゃなくて大好きだから」

「海が いいのなら構わないけれど、後ろで仁王立ちしている奴がなんて言うかな」

「ええっ？」

海の顔が真っ赤になり隆羅の後ろを恐る恐る見るとルコが怖い顔をして立っていた。

「ラブラブな所悪いんですけど」

「悪いと思うなら出て行ってくれ」

「むかつく！ いい大人がゴロゴロして楽しいの？」

「楽しいさ。これからいい所だったのになぁ、海」

「いい所つて。バ、バカじゃないの昼間から」

ルコの顔が音を立てながら火を噴いた。

「そんなの関係あるのか？ 夜かしちゃいけないとか」

「そ、そんな事知らない！」

隆羅の肩が震えていた、そして海の肩も。

「ふふふふふ」

「あははははは」

2人が笑い出した。

「からかっていたのね、酷いよ2人とも」

「いい所に、勝手に入り込んできて何が酷いだ。それはこっちの台

詞だ、いつもいつも」

「うつつ、それは、その」

「また、邪魔されたな。海」

「うん、また今度ね」

「ええつ、本当にそうだったの？」

ルコが驚いて床にへたり込んだ。

「いけないのか？ それより今日は何の用なんだ」

「ええつと、今度の3連休に皆で何処かに行きたいなあって相談しに」

「相談しに勝手に入ってきたと」

「ゴメンなさい」

「反省してはいるんだな。毎回毎回」

「そんな風に言わなくても良いじゃん」

語尾が小さくなりルコも気まずそうに体を小さくした。

「しかし、何でルコがここの鍵を持っているんだ？」

「ママが何かあった時につて」

「何も無いが」

「だから、ゴメンなさいって」

隆羅が枕元においてあった携帯で何処かに電話し始めた。

「今度の、3連休なんだが部屋は取れるかな。そうかそのスイートで良いから押さえてくれ」

そして別の所にも。

「俺だ、ワゴンを1台用意してくれ下の駐車場にいつものように頼む」

隆羅が電話を終えると海が不思議そうな顔をして聞いてきた。

「ねえ、隆羅。スイートとかワゴンってどこかに出掛けるの?」

「海は清里に行った事はあるか?」

「あまり、旅行した事が無いから」

「今度の3連休に清里や八ヶ岳に行かないか?」

「良いの? 行きたい。嬉しい隆羅」

海が隆羅に抱きつくところルコが「私は、まるつきり無視ですか」と頬を膨らませて拗ねていた。

「どうせタコは仕事なんだろ」

「そうだけど、だから何?」

「沙羅に伝えておけ、今度の連休に清里で良ければ連れて行くと」

「ええ、本当に? 如月パパ」

「用は済んだだろ。帰ってくれないか」

「もしかしてまた、始めるの?」

ルコが気まずそうに隆羅と海の顔を見ながら言った。

「バーカ。2人でブランチしに行くんだ、邪魔するなよ。準備しろ海」

「うん、直ぐに仕度するね」

海がベッドから飛び起き着替えを準備し始めた。

「ルコ。もう用事は済んだだろ」

「お邪魔しました」

ルコが剥れながらも嬉しそうに渋々と部屋を出て行った。

隆羅がベッドに座りボーとしていると、隆羅の目の前で海が着替えを始めた。

「なあ、海。恥ずかしくないのか？」

「なんで？ 好きじゃない人だったら恥ずかしいけれど。大好きな人の前なら恥ずかしくないもん」

「そういうものなのか」

「他の人はどうか判らないけれどね」

「まあいいか。そんな海を見ているのも嫌いじゃないしな」
海が赤くなった。

「もう、そんな事言われたら恥ずかしいじゃんよ」

「そうか、恥ずかしくないって言ったのは海だぞ。とっても綺麗だし可愛いぞ」

「隆羅のバカ」

顔が真っ赤になって、ワンピースに着替えが終わり隆羅の所に来た。
「じゃ、行くか」

隆羅がGパンを履きシャツを羽織、メガネを掛ける。

「どうしたんだ？」

海がモジモジしていた。

「隆羅が恥ずかしい事言うからでしょ」

「あまり、言葉にしないって言うから素直な気持ちを言っただけだな」

「綺麗で可愛いって」

「俺は海の事が好きだからな」

海にキスをして玄関に向かう。

「もう、いつもズルイ」

車で街に出掛け、オープンカフェでランチをする。

街路樹は若葉が青々として木漏れ日がキラキラと輝き、晴れていて爽やかな風が通り抜けとても気持ち良かった。

「この時期は、オープンスペースでも気持ちが良いな」

「なんだか、夢見たいだな。大好きな人とこんな所で食事なんて」

「そうなのかなあ」

「そうだよ、だって私まだ高校生だよ」

「そうだったな」

「隆羅って、私の事を子ども扱いしないよね」

「変か？ 子どもだって大人だって同じ人間じゃないか。それに女の子を子ども扱いするのは失礼だろ」

「そうだけど、普通こんなに歳が離れていたら子ども扱いするんじゃないの」

「どんな女の子もガールじゃなくてレディなんだよ。それに大統領でも社長でも近所のガキンちよでも、人と人として対等で居たいんだ。相手がどんなに地位があろうと媚びる必要は無いんだよ」

「隆羅は簡単に言うけれどそれって凄い事だと思うな」

「前にも言っただろ、当たり前前の事をしているだけだって」

「隆羅にとってそれがスタンダードなんだろうね、尊敬しちゃうな」

「光栄です、お嬢様。そろそろ買い物に参りましょうか」

「買い物って？」

「今度の旅行には、水着を持って行く事が条件なんだ」

「ええ、私持つてないよ水着なんて」

「だから、買い物なんだろ。欲しい洋服があれば一緒に見よう」

「本当に、嬉しい！ ありがとう隆羅」

食事を済ませ2人でデパートなどをブラブラ&ラブラブしながら買い物を楽しんだ。

出発の日の朝がやって来た。

「おはよう、隆羅。朝だよ」

「もう、時間なのか？」

「ルコ達が迎えに来るよ」

「そう言えば、今日は来ないなアイツ」

「隆羅にあんだけ言われたら来づらいよ」

「準備するか」

「うん」

殆ど昨夜の内に準備を済ませていたので、着替えをして駐車場に降りる。

「楽しみだな。ねえ、隆羅」

「そうだな」

「今度は、2人きりで何処かに行きたいな」

「大阪に行っただろ」

「ブー。あれは旅行じゃないもん」

エレベーターを降りると駐車場でルコ達が待っていた。

「おはよう！」

「海、そのワンピースとっても素敵どうしたの？」

「えへへへ。この前、隆羅に買って貰っちゃった」

海は生成り風の白いワンピースに藤色のカーディガンを羽織り初夏らしいサンダルを履いていた。

「いいな、海ばかり」

「お前には、タコと言う財布があるだろ」

「だって仕事、仕事って全然遊んでくれないんだもん」

「それは俺に言わずに、タコ本人か沙羅に言え。なあ茉弥」

「きゃあ、きゃあ」

茉弥が喜んで隆羅に両手を伸ばして笑った。

「茉弥まで、いいんだもん」

「しょうがない子ねえ、今度買い物に連れて行ってあげるからそれで機嫌を直しなさい」

「ママ、約束だからね」

「はいはい。隆羅そろそろ行きましょう」

「そうだな、じゃ車に乗ってくれ」

「車ってこれなの、凄い」

その車は大きなワゴンタイプの車で全員が乗ってもゆっくりと寛げ

そんな高級感たっぷりの車だった。

「小さな子どもが居る時は、大きい車が楽なんだよ」

「でも、凄い。中も何だかファーストクラスみたいだよ」

「後ろに荷物は積めるからな。それと茉弥はちゃんとチャイルドシートに座らせるよ」

「判ってるってパパは心配性だな」

「ねえ、隆羅。この車って？」

「会社の車だぞ。親父の」

「大丈夫なの？」

「何を心配しているんだ海は？ 親父はいつも無理難題を押し付けて来るんだ、このくらいの事なんでもないよ」

「無理難題な事って何かなあ」

「乗ったか、出発するぞ」

「ブー」。隆羅のけちんぼ

「海の事が大切だから言えない事もあるんだ。お願いだから、今は旅行を楽しんでくれないか」

海が頬を膨らますと隆羅が時折見せる寂しそうな顔をした。

「えっ、隆羅。ゴメンなさい」

その時ルコが後ろの席から顔を出した。

「ねえねえ、どうしたのお2人さん？」

「ちゃんと座ってくれ、海とどうやって2人きりになろうか話していたんだ」

「私達はお邪魔虫か」

「邪魔じゃないけど、目障りだな」

「同じじゃなか！ パパのバーカ」

「出発するぞ。いいか？」

隆羅が海の頭をクシュと撫でて優しい目を見た。

「うん、出発進行！」

海が声を上げた。

車を中央自動車道に向けて走らせる。

「静かだな、走ってないみたい。茉弥もご機嫌だし」

「そうね、こんなにゆっくりするの久しぶりだもんね。隆羅に感謝しなきゃ」

「沙羅、気持ち悪い事言わないでくれ。寒気がする」

「失礼ね。私だって時々は感謝ぐらいするわよ」

「変なの、私が小さい頃は良く連れて行ってくれたじゃん遊びに」
「そうだな」

「へえ、そうなんだ。いいな何か親子って感じ」

「海は、どうだったの？」

「小さい頃はそりや楽しかったけれど……」

海が少し寂しそうな顔をした。

「でも今は幸せでしょ？」

「うん、そうだね。昔は昔、今は今だもんね」

「そうだな。でも、皆それぞれ色々な体験をして乗り越えて今の自分があるんだ。そして自分で選択して生きてくる、そんな中で出会いが生まれるその出会い大切な縁なんだ。大事にしないと」

「先生みたいだよ如月パパ」

「先生見たいは失礼だろ。でも先生って言ったって先に生まれて少しいろんな経験をしてるだけだからな。間違える事も悩む事もある、同じ人間なんだ」

「隆羅って時々、哲学ぽい事言うよね」

「可笑しいか俺がそんな事言うのは？」

「凄いなって思っただけ。でも隆羅って時々子どもぽくなるよね」

「はいはい、そこまで。バカバカなのは分かるから」
ルコが茶々を入れると海が切って返した。

「ルコ、バカバカはバカップルより酷くない」

「だって、ちょこつと羨ましいかなあなんて」

「じゃ、バカ親子はどう？」

「海、頼むからバカ娘だけで勘弁してくれ」

「もう、パパのバーカ。バカ、バーカ！」

「海ちゃんの言うとおり、バカ親子よね。隆羅そろそろ休憩しない」

「そのつもりだ、もう少ししたらパーキングエリアに入るから」

しばらく走り、パーキングエリアに入り休憩をする。

車を駐車スペースに止めて車から降りる。

「さあ、ラーメンでも食べるかな。海も食べるか？」

「うん、行く」

「パパ、待ってよ。茉弥のオムツ交換したら行くから」

「先に、行ってるぞ」

「もう、ケチ」

隆羅と海が先にパーキングエリアの食堂に先に向かう。

ルコと沙羅が隆羅達の所に行くくと隆羅と海は既に食べ始めていた。

「なんで、先に行くかなあ」

食券を買い注文する。ラーメンを受け取って戻ってくると、隆羅はもう食べ終わっていた。

「茉弥、おいで」

隆羅が茉弥を抱っこしてあやし始めた。

「キャッ、キャッ」

「可愛いね、茉弥ちゃん」

「そうしていると、2人の子どもみたいね」

沙羅がからかうように2人に言った。

「そうか？ まだまだ先だと思うけどな」

「そうなの？ 隆羅」

「いつも邪魔ばかり入るからな」

「ゲホ、ゲホ」

ルコがこの間の事を思い出し思いっきり咳き込んだ。

「慌てて食べるからだ」

「パパが変な事言うからでしょ」

「事実を言ったまでだ。それにまだ海は高校生だしな、これからどうなるか分からないだろ」

「隆羅、それは本気で言っているの？ 私は……」

海が少しだけ不安そうな顔をした。

「どんな運命が降りかかるかと、パパは戦うんでしょ」

「当たり前だ。大切なモノを守る為なら何でもする、海の事は好きだしな」

隆羅の言葉に海が笑顔に戻った。

「それでも、どうしようも無い事が起きたらどうするの？ 隆羅は」

「沙羅。何とかなるさ、何とかならなかった事など無いだろ」

「それもそうね、出発しましょ」

ゴールデンウィーク - 2

高速を降りて少し走ると山の麓に沢山の鯉のぼりが見えてくる。鯉のぼりの下にある公園が綺麗なピンク色に染まっていた。

「鯉のぼりがあんなに沢山」

「隆羅、あのピンク色の花は何」

「この時期は芝桜が満開なんだ」

「凄く綺麗」

「鯉のぼりは500匹くらい居るらしいぞ」

「茉弥、見てごらん凄いね」

「はい、隆羅と海ちゃんそこに並んで。はい、チーズ」

沙羅がデジカメで写真を撮っていた。

「えへへ、嬉しいな。隆羅との写真」

「じゃ、皆で記念撮影するか」

沙羅からカメラと三脚を受け取り隆羅がタイマーをかける。

「せーの」

「はい、チーズ」

「パンジーや菜の花も咲いているんだね」

「ここは標高が高いからな、まだ春真っ盛りなんだよ」

「ほら、茉弥を抱いて居てやるから海と遊んで来い」

「やったー。海、行こう」

「うん」

「あまり遠くに行くなよ」

ルコが茉弥を隆羅に任せると海とルコが手を繋いで走り出した。

「相変わらず、ちゃんとパパしてくれるのね」

「当たり前だ、一応育ての親だぞ」

「でも良いの？ 海ちゃんの事」

「海はまだ高校生なんだ。高校生らしく遊んでくれた方が俺は嬉しいけどな、それに今の時間は今しか楽しめないからな」

「そうね、学生の時間って大切よね」

「ああそうだ」

「私も行って来よう。写真いっぱい撮ってあげなきゃ」

茉弥を抱っこしてベンチに座り3人が花畑を駆け回るのを眺めていた。

しばらくすると3人が息を切らして戻ってきた。

「はあ、はあ。やっぱり現役の子には敵わないわ」

沙羅が膝に手を当てて肩で息をしていた。

「パパ、お腹空いて来た」

「よし、美味しいパンでも買いに行くか」

「イエーイ！ レッツ ラ ゴー」

ルコがにこやかに拳を突き上げた。

車に戻り清里駅を目指す、駅の近くの山小屋の様なパン屋に着いた。

「ここは、地元でも有名なからな」

ベーカリー独特の香ばしい匂いあたり一面に漂っている。

「いい匂いがする」

「買いに行くぞ」

隆羅が茉弥を抱いて店に入っていく。

「うん」

「美味しそう、どれがいいかな」

「食べられる分だけ買えよ」

「ハイ」

飲み物も買い、車の中でパンを頬張る。車内がパンの香ばしい匂いで満たされていた。

「はい、隆羅の分」

「サンキュー」

「コーヒーはここに置くね」

海がドリンクホルダーにコーヒーを置くと隆羅も車を運転しながらパンを頬張った。

「なかなか美味しいな、このパン」

「なかなかじゃなくてかなり美味しいと思うよ」

「そうだな、海は今まで食べた物で何が一番美味しかったんだ？」

「あのね、隆羅が作ってくれるパスタ！ 凄く、美味しいんだよ。」

隆羅の料理は」

「ええっ、パパ料理なんか出来るの？」

「出来るさ、独り暮らし長いしな。それにルコは子どもの頃、良く食べていただろ」

「私、パパの料理なんて食べた事無いよ」

「はあ、沙羅、何とか言ってくれ」

隆羅が落胆しきつてため息をついた。

「ルコが小さい頃に食べていたお弁当は隆羅が作っていたのよ」

「へえ？ 作ったのママじゃなかったの？」

ルコが呆気にとられて沙羅の顔を見た。

「だって、ママはあまり料理得意じゃないしネ」

「遅くまで仕事、仕事で、朝起きられなかったただけだろうが」

「そうかも」

「そうだ」

「ママが作ったお弁当って自慢してたのに」

「作っていたじゃなくて、作らされていたが正解かな。雑誌を買って来ては、これ作れあれ作れてな、面倒臭い事この上ない」

「でも、凄く綺麗で美味しかったよ」

「苦労と努力は報われない物なんだな」

「だって、知らなかったんだもん。今度、作ってね」

「嫌だ。タコに作ってもらえ、アイツも料理得意だぞ」

「如月パパが良い」

「残念ながら、海の専属のコック&パティエなもんで」

「パティエってケーキも作れるの。もしかして誕生日やクリスマス
のケーキって……」

「そうよ、隆羅が作っていたの。おかげで買ってきたケーキは甘過

ぎるって食べなくなっちゃうし」

「だって、甘さ控えめで美味しかったんだもん」

「そう、とっても美味しいよね隆羅の作ったスイーツ」

「ああ、海だけ。ずるい私も」

「茉弥になら作っても良いぞ」

「じゃ、今度は茉弥の為に作ってよ」

「茉弥が食べられる様になったらな」

「ブー」

「拗ねていないで、今日のメインに着いたぞ」

車で少し走ると次の目的地に到着した。

そこはゴルフ場やオートキャンプ場などが集まっているハケ岳の麓にある総合リゾートセンターの敷地内にあった。

「ここは？」

「総合リゾートセンターの中のアクアリゾートに行こうかと、水着を持って来いって言っただろ」

「アクアリゾート？」

「温水プールと温泉だ。気持ち良いぞ」

「茉弥はどうするの？」

「プール用のオムツを着ければOKだ」

フロントで受付を済ませて、更衣室で着替えて中で待ち合わせる。

「お待たせ」

「茉弥は、興味津々だなあ」

茉弥はルコに抱っこされ辺りをきよろきよろとまん丸の瞳で見っていた。

沙羅も黒いシンプルなワンピースの水着に着替えてやって来た。

「ほら、海ちゃんもこっちにいらっしやい」

沙羅が海を呼んだ。

「う、うん」

海がちよっと大人ばい白のビキニを着て恥ずかしそうに出てきた。

「似合っているじゃないか可愛いぞ。海」

「あ、ありがとう。でも、なんだか恥ずかしいな」

「いいな、私なんか去年の水着なのに」

ルコは青いセパレートのシンプルな水着を着ていた。

「持ってないと言うから買ったんじゃないか」

「パパが選んだの？」

「俺は選ばないぞ、感想は言っただけだな」

「でも、パパもママもあんな歳には見えないよね。中年太りとかしないの？」

ルコが沙羅と隆羅の体をまじまじと見ていた。

「ルコは失礼ね、中年で。大変なんだから維持するの」

「沙羅は隠れて努力しているよな、俺は別に何もしていないぞ」

「嘘つかないの、筋トレはしているじゃないの」

「筋トレしてないと、あんな大暴れは出来ないもんね。パパ」

「ルコ、その話を蒸し返すなよ。行くぞ」

大きなプールがあり、吹き抜けになってとても室内とは思えないほど開放感があった。

連休初日という事もあってか人はそんなに多くは無かった。

「ねえ、パパって泳げるの？」

「少しならな」

「そうだよな、川で海を助けたんだもんね」

「ほら、茉弥。大きなお風呂ですよ」

初めてのプールでおっかなビックリの茉弥だったが少しずつ慣れてきた様だった。

「隆羅が泳いでいる所みたいなあ」

「少しだけだぞ」

海に言われて少しだけ泳ぎ始める、とても綺麗なフォームでターンを決めてながら泳いで戻って来ている。

海とルコはプールサイドに腰をかけておしゃべりをしていた。

「綺麗な泳ぎ方」

「パパの苦手な物ってないのかなあ」

「そうだね、頭も良くて運動神経抜群で喧嘩も強くって。背も高いし凄く若いしね」

「それって海？ お惚気？」

「ち、違うよ」

「でもそうだよ。皆の憧れの先生だもんね」

そんな話を話していると隣に沙羅が座って話しに加わってきた。

「隆羅にも苦手な物、あるわよ」

「ええっ、本当にママ？」

「女の子が苦手なの」

「女の子？」

沙羅の言葉に信じられないと言う顔でルコが驚いた。

「隆羅は、優しいけれど不器用だから初対面だったりすると、どうして良いか分からないのよ。だから少し怖く感じるの、慣れてくればそんな事は無いんだろうけどね」

「ママあんなに、女の子の扱い上手そうに見えるのに？」

「上手い訳じゃ無いわよ。ただ相手が男だろうが女の子だろうが相手を優先的に考えて動いているだけ。だから時々、海ちゃんとも衝突するでしょ。扱いが上手ければそんな事にはならない筈でしょ。」

そこが隆羅の弱点かなあ」

「でも、私はそんな隆羅が好き。あっ」

海が言っただけ失敗したと思ったが遅かった。ちょうど隆羅が戻ってきた。

「そんな所で、おしゃべりして楽しいか？ 海、どうした真っ赤だぞ」

「海にお惚気を聞かされていたの」

「茉莉、こちらおいで」

隆羅が茉莉に手を差し出すと茉莉が無邪気に両手を隆羅に差し出した。

「だあー」

茉弥が隆羅に体を預けると隆羅がお腹の上に茉弥を乗せ水に浮く。

「きゃっ！　きゃっ！」

茉弥がはしゃいで大喜びしている。

「パパって本当に凄いよね」

「さあ、あなた達も遊んでいらっしやい。ママはジャグジーに居るから」

「ルコ、泳ごう」

「うん」

しばらく海とルコが追いかっこなどをして遊んでいる。

隆羅は茉弥を連れてジャグジーに向かった。

「気持ちいいなあ」

「そうね、有難うね隆羅」

「何がだ？」

「ルコも楽しそう」

「いろんな事があつたからな。たまには羽を伸ばすのもいいだろ。あいつ等も俺達も」

「そうよね」

「しかし、タコの仕事病は治らないのか？」

「しょうがないじゃない、好きで忙しい訳じゃ無いんだから」

「好きで、忙しい様にしか見えないけどな」

「時間があれば、合流するって」

「まあ、タコの事だ無理だな」

「そんな言い方しないの」

「分かっているさ。沙羅より付き合い長いんだぞ、アイツなりに頑張っている」

「隆羅に出逢わなければ彼とも出会え無かつたんだし、あなたにあの時頼んで良かったわ」

「そうか、危険な目に遭わせたのにか？」

「でも、守ってくれたでしょ。命懸けで」

「自分で自分のケツを拭いただけだよ」

「でも、あの時は驚いたわ。ルコを育てる為に一緒に居るって言われた時は」

「皆、同じなんじゃないか。タコや沙羅、それにあいつに出逢わなければルコにも巡り合うことはなかった、そして海ともこうして居られなかった。そうだろ」

「そうね。何だか不思議ね出逢いって」

「そうだな」

「疲れた。何を話していたの？」

隆羅と沙羅がお喋りしている所にルコと海がジャグジーにやってきた。

「別に何も」

「怪しいなあ」

「何が怪しいんだよ」

「茉弥、気持ち良いか？」

ジャグジーの泡がくすぐったいのか茉弥が神妙な顔をしていた。

「直ぐに誤魔化すんだから。茉弥おいで」

ルコが隆羅から茉弥を抱き上げる。

「昔の話さ」

「聞きたいな。ねえ海」

「うん、でも話してくれる時で良いかなあ」

「海も2人の味方ですか」

「海は俺の味方だからな」

海の手を引っ張って抱き寄せた。

「ラブラブですか羨ましい事で」

ルコが拗ねて隆羅と海を羨ましそうに見ている。

「隆羅、ジャグジー気持ちいいね」

「2人だけがラブラブじゃなくて皆がラブラブなのよ。上に露天風呂があるらしいわ、行って見ましょ」

「ママがそう言うなら」

「じゃ、3時に上のドリンクバーで待ち合わせしよう。いいかな」

「賛成！」

露天風呂で体をほぐして、隆羅はドリンクバーでアイスコーヒーを飲んでのんびりしていた。

「隆羅、お待たせ」

そこに海がやって来た。

「体がポカポカ」

「海は何が飲みたい？」

「ん、グレープフルーツが良いかな」

「よし、分かった」

隆羅が席を立ちカウンターに向かうと入れ違いでルコ達が来た。

テーブルには海の姿がなくテーブルの上には隆羅が飲んでいたのであるうアイスコーヒーがぽつんと置かれている。

「海、パパは？」

「今、飲み物を買に行ってる」

「相変わらず、優しいね」

「ルコ、茉弥を抱っこしているから買ってきて頂戴。ママはアイスティー」

「はい」

しばらくして隆羅とルコが戻ってきた。

「ほら、海。グレープフルーツジュースだ」

「ありがとう隆羅」

「はい、ママ」

「悪いわね」

「これは、茉弥のオレンジジュースだ」

「えっ、パパありがとう」

「水分補給させないとな。特に風呂上りには」

「隆羅って何でも知っているんだね」

「知らない事の方が多いぞ」

「そうね、隆羅は皆が知っている事に疎かったりするからね」

「そうか、そこまでは酷く無いだろう。少し休んだらホテルに行つてゆつくりしような」

ホテルはそれ程離れていない場所にあつた。

総合リゾートセンターを後にして車で10分位走つただろうか。

標高1500メートルの所に建つていて屋上に天文台がありとても綺麗なリゾートホテルだった。

「何だかとても高級そうなホテルだね」

「隆羅、こんな時期によく部屋取れたわね」

ロビーに入るとルコがキョロキョロしていて沙羅も少々驚いていた。

「ああ、1部屋だけな」

「1部屋つて？」

「スイートだが不満でも」

「でも、高いんじゃないの」

「お前達が気にする事じゃないだろ。それに2部屋取るなら変わらないくらいだ」

フロントで隆羅がチェックインを済ませると「如月様、こちらへどうぞ」と言われ案内されて部屋に向かう。

部屋は和洋2つのベッドルームになっていて、リビングもとても広くゆつたりと寛ぐのに十分な広さだった。

「俺達は洋室を使わせてもらうけれど構わないな」

「ええ、ルコも洋室がいいよ」

「ルコ、わがままを言わないの。行くわよ」

「はい」

ルコが尻すばみに返事をして沙羅に促されて和室に入っていく。

「はあー、疲れたなあ」

「お疲れ様、隆羅。でも、凄いいよ。ちゃんとルコちゃんが羽を伸ばせる様に茉弥ちゃんの面倒を見てさ。ちゃんとパパしてるんだね」

隆羅は洋室に荷物を運びベッドに倒れ込むように体を投げ出すと海がベッドに腰を下ろした。

「そうか、でもルコが茉弥に構っていたら海だってあまり遊べないだろ」

「ええっ、そんな事まで考えてくれていたの？」

「高校生は高校生らしく元気に遊んで学んでそれが1番だろ」

「えへへ、やっぱり隆羅が1番大好き」

海が抱きついて来た。

ベッドの上でまったりとする。

「でも、隆羅とも遊びたいなあ」

「そうだな」

「こんな幸せな時間がいつまでも続くといいなあ」

「続くさきつと、その為にはどんな事でもするからな」

「ありがとう、隆羅」

海から軽く隆羅にキスをした。

沙羅達もルコと茉弥の3人で部屋でくつろいでいた。

「もう、ベッドが良かったのに」

ルコは未だに拗ねていた。

「本当にバカね、ルコは」

「ママ、何でよ！」

ルコが不機嫌そうな顔をして沙羅に噛み付いた。

「茉弥みたいな小さな子どもが居る時は和室の方が断然楽なのよ。」

オムツ替えもミルクを飲ませるのも何をするにしてもね」

「それで、パパは」

「当たり前じゃない、それに今日は茉弥の事気にせずに羽伸ばせたでしょ。まあ、海ちゃんの手も考えてだらうけどね」

「ええっ、そんな」

「ルコは当たり前だと思っているから気付かないのかもね。ルコが茉弥に構っていたら海ちゃんだって羽を伸ばしきらないでしょ」

「如月パパはそこまで考えてくれているんだ」

ルコが神妙な顔をして、隆羅に凄く申し訳ないような気持ちになっ

た。

「夜くらいは邪魔しちゃ駄目よ、ルコにもそのくらい分かるわよね」

「うん、私や海の為に遊びに連れてきてくれたんだもんね」

「それと、これ隆羅からよ」

「ママ、これは？」

「スリングよ、抱っこ紐みたいな物かしら。こうして抱っこすると楽でしょ」

沙羅がルコに渡したのは抱っこ紐と日本では呼ばれているスリングだった。

沙羅がスリングを使い茉弥を抱っこさせてみる。

「本当だ、肩も痛くない。でも何で？」

「もっと早くに渡して欲しかった？ 旅行先の方が役に立つでしょ。違う」

「そうだね、私ももっと勉強しなきゃ」

各々が部屋でゆっくりして茉弥の事を一番に考えて少し早めに夕食を取る事にする。

「おーい、食事に行くぞ」

「ハイ」

隆羅と海がリビングから声を掛けると沙羅とルコが出て来る。

ルコはスリングで茉弥を抱っこしていた。

「如月パパ、これありがとう」

「もう少し、ルコはいろんな事を学ばないとな」

「そうだね、でも大変そう」

「大丈夫だ。茉弥が大きくなるのと同じように、ルコも親になっていくんだ。誰でも同じ事さ、最初から親なんてそんな人間居ないだろ」

「そうだね、少しずつだね」

「隆羅、今日の夕食は何なの？」

「レストランでコースのはずだが」

「茉弥が居て平気なの？」

沙羅が心配して隆羅に尋ねた。

「大丈夫だ。ミルクは飲ませたんだろ」

「ええ、さつき」

「茉弥は大人しいからなあ。行こうか」

「ハ―イ」

ホテルのダイニングは大きなガラス張りで外の景色が良く見える開放感のある、とても落ち着いていた感じのレストランだった。

「如月様、お待ちしております」

係りの人に案内されて席に着くとホテルのマネージャーらしき人が現れて隆羅に声を掛けてきた。

「大変申し訳ございません。明日の朝食はいかが致しましょう」

「洋食と和食どちらがいい？」

隆羅が皆の希望を聞いてマネージャーに伝えた。

「じゃ、和食が1つの洋食が3つでお願いします」

「かしこまりました」

用件を聞くと直ぐにマネージャーらしき人が下がった。

「飲み物は何を飲む。好きな物を頼んで良いぞ」

「お酒、少しなら飲んでいい？」

ルコが目を輝かせながら聞いてきた。

「駄目だ、と言いたいが少しならいいだろう。俺がチョイスしてやる」

「やった！」

「隆羅、赤ワインもお願いね」

沙羅も隆羅に希望を伝えると隆羅が手を軽くあげウェーターを呼ぶ。

「キールロワイヤルとミモザ、それに黒い女王を」

「かしこまりました」

しばらくするとドリンクが運ばれてきた。

キールロワイヤルは海にミモザがルコ、そしてワインは沙羅と隆羅

が。

ワインのテイスティングを隆羅がしてソムリエに頷くとグラスに注がれた。

「じゃ、乾杯」

「乾杯！」

「これ、凄く美味しい」

ルコがミモザを飲んで驚いた。

「ルコのミモザはシャンパンとオレンジジュース。海のキールロワイヤルはシャンパンとカシスのカクテルだ、海の口に合うかな？」

「隆羅。カシスの香りが良くて凄く美味しいよ」

「このワインも美味しいわ、何だか素朴なのに深みがあって」

「今では殆ど作られていないブラッククイーンと言う葡萄で作られているんだ。国産のワインでも美味しい物を作っている所はいつばある。それに地元の食材は地元の飲み物でが旅行の醍醐味だからな」

料理が運ばれてくる。

フレンチのフルコースの始まりだ。

「これは、どうするの？」

ナイフやフォークがテーブルに沢山並んでいて海が戸惑っていた。

「お前達も、こんなコースを体験するのもいいだろ。外側から使うんだ使い方は沙羅や俺のを見て真似したら良い」

「ハイ」

料理が順序良く運ばれてくる、ルコは茉弥を抱いているせいか食べ辛そうにしていた。

「ルコ、茉弥を預かるう」

隆羅がルコの所に行き茉弥をスリングごと受け取り抱っこした。

「ありがとう、パパ。パパは食べ辛く無いの？」

「問題ないぞ。体の大きさの違いかな」

「隆羅、明日の予定はどうなっているの？」

沙羅が隆羅に明日からの予定を聞いてきた。

「特に予定は組んでいないけどな」

「じゃ、自由行動にしましょう。私はエステもしたいし」

「構わないが、ルコはどうするんだ？」

「この近くにも遊歩道とかあるみたいだから、茉弥とのんびりお散歩がいいなあ」

「この時期は、まだ寒いから温かくしておけよ」

「海はどうするの？」

「私は、隆羅と何処かに行きたいな」

「それだったら、この近くにトレッキングのコースがあるからそこに行くか」

「うん、行きたい。スニーカーも持ってきたし」

料理もメインディッシュの肉料理になり、半分くらい食べた所で茉弥が愚図り始めた。

隆羅が席を外してウェーターに耳打ちをしてレストランを出て行ってしまった。

「また、パパに甘えちゃった」

「大丈夫よ、隆羅もそのくらい心得ているわ」

隆羅の皿にはまだ半分くらい料理が残っていた。

「こちらお下げしても宜しいでしょうか？」

ウェーターが聞いてくると「どうぞ」沙羅が答えた。

「えっ、でもまだパパの料理が」

「いいのよ、たぶん席を外す時に係りの人に言っただわ、きつと」

デザートと食後のコーヒーと紅茶が運ばれてくる、デザートは4人とも違うものが用意されていた。

「わぁ、美味しそう。みんな違うんだ。海、少し分けっこしよう」

「うん、そうだね」

「パパはどうしたんだろう」

「あそこに居るよ」

ルコが海に言われて見ると他のお客さんに邪魔にならない所で、こ

ちらを見て茉弥をあやししながら海と目が合つと手を振っていた。

海が『デザートどうするの?』と口を動かすと隆羅は『食べて良いぞ』と口を動かした。

「隆羅のデザート食べていいって」

「ええっ、あれで海は判るの?」

「うん、短い会話で隆羅となら判るよ。隆羅のデザート分けて食べよう」

「凄だね、海とパパは」

「ラブ イズ パワーね」

沙羅がコーヒーを飲みながら言った。

ゴールデンウィーク - 3

部屋に戻り、リビングでくつろぐ。

「美味しかったね、でも今日はパパに甘えはなしだったな」

「ルコは、いつもだろう」

「えへへ、そうかなあ」

「露天風呂にでも行って来たらどうだ、今夜は確か女性の時間だと思っただが」

「じゃ、そうしようか。茉弥は私が面倒を見るわ」

「沙羅婆さんが？」

「隆羅。今なんて言ったの？」

沙羅が怖い顔つきになり隆羅を睨み付けた。

「グランマって言ったんだぞ。婆ちゃんなんて一言も」

「言ってるじゃない」

「事実、孫なんだからしょうがないじゃないか」

「沙羅ママって呼ばせるの」

「好きにしてくれ。沙羅婆さんや」

「本気で怒るわよ」

「早く風呂に行かないと混むぞ」

「早く行くよ、ママ」

ドタバタと3人が部屋を出て行った。

「さあ、俺も風呂でも入るか」

隆羅は部屋のバスルームへ向かう。

眺めの良い露天風呂でゆっくりして、海達が露天風呂から部屋に戻ってきた。

「気持ちよかったね」

「そうだね、ルコ」

「隆羅、戻ったわよ。あら、居ないわね」

海が洋室に入りすぐに飛び出してきた。

「海、何処に行くの？」

「隆羅が散歩しているの、私も」

「海、待ちなさい。上着を着て行きなさい、寒いわよ」

「うん」

沙羅に言われ海が上着を掴んで部屋を飛び出した。

沙羅とルコが不思議に思い窓を開けて外を見ると確かに中庭に人影が見えた。

「あそこに誰かが居るのは分かるけど。どうして、あれがパパだつて分かるのかなあ。不思議だよね」

「きつと、深い所で繋がっているのよ」

「でも、まだここは寒いんだね」

「そうね、標高も高いし山の中だからね」

ルコが身震いをして自分の肩を抱きしめた。

海がホテルから庭に出て辺りを見渡し隆羅を探す。

「あれ、何処に居るんだろう」

「隆羅、そこに居るの？」

少し歩くとベンチが見えてきた。

海が声を掛けると手を上げて隆羅が返事してくれた。

「何を、していたの？」

「星を見ていたんだ」

見上げると満天の星空だった。

「凄い綺麗！ でもこれでも3000個の星なんだよね」

「そんな事、良く知っているな」

「雅さんに聞いたの、隆羅の受け売りだつて」

「そうか」

「それと、プラトンのお話も。クチュ」

「湯冷めするぞ、こっちに来い」

海が可愛らしいくしゃみをして隆羅の横に座ろうとすると膝の上に

座らされ、隆羅の上着で包まれた。

「隆羅、温かい」

海の髪からシャンプーの香りが隆羅の鼻をくすぐった。

「綺麗だな」

「そうだね、隆羅はもつと綺麗な星空見た事があるの？」

「あるぞ、昔な」

「何処で？」

「沖縄の島で」

「へえ、凄いいんだ。だから沖縄の事知っているんだ」

「何年か住んでいたからな」

「ええっ、住んでいたの？」

「ああ。今度一緒に行こうな」

「うん！ 私も満天の星を見たい」

しばらく2人で星を見ながら抱き合っていると、隆羅がウトウトし始めた。

「隆羅、こんな所で寝ちゃ駄目だよ」

「ああ、悪い。海を抱いていると温かくて気持ち良くなってな」

「隆羅がニーブイカーブイしてる」

「そうだな、戻るか。ん、どうした？」

海が隆羅の目を見つめていた。それに答えるように隆羅が海を優しく抱しめてキスをした。

「さあ、戻ろう。寒くなってきた」

「うん、そうだね」

2人手を繋いでホテルへ戻る。

部屋に戻るとルコと沙羅が茉弥をあやして遊んでいた。

「お帰り」

「ただいま」

「ラブラブですか？」

「うん」

「隆羅、眠そうね。早く寝たら？ 朝からずーと運転していたから

疲れてるのよ」

「そうだな、そうするよ。じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

海も隆羅の後を付いて行く。

「えっ、海もおやすみななの？」

「えへへ、隆羅と一緒にだもん」

「はいはい、おやすみなさい。まったく、ラブラブなのかバカバカなのか」

「あきらかに後者ね。私達も休みましょう、明日もある事だしね」
「ハ―イ。茉弥ちゃん寝んねですよ」

ルコが茉弥を抱き上げ沙羅達も和室に入ってしまった。

隆羅は、上着とズボンを脱いでベッドに潜り込んだ。

「ねえ、隆羅。そっちに行っても良い？ 1人で寝るのなんだか落ち着かないよう」

「ほら」

「ありがとう」

「ふわあゝ」

隆羅が布団を捲ると海が嬉しそうに飛び込んでくる、すると隆羅が大きな欠伸をした。

「おやすみ」

そう言いながら海が軽くキスをする、と隆羅が海を抱しめたまま目を閉じた。

「うふふ、可愛いな隆羅って。おやすみなさい」

翌朝はゆっくりとスタートした。

「隆羅、起きようよ。お腹の虫が鳴いてるよ」

「いただきます」

隆羅が海にキスをしてきた。

「ん、ん。もう、チュウじゃお腹いっぱいにならないもん」

「ご馳走様でした」

隆羅が目を閉じてまた眠ろうとする。

『トン トン』

隆羅達のドアをノックする音が聞える。

「パパ、朝ごはん食べに行くよ。早く準備して」

「分かった」

ルコが痺れを切らして呼びに来たのだ。

隆羅がゴソゴソとおきだしズボンを履きボーとしてフラフラと歩き出す。

「隆羅、危ないよ」

海が隆羅の手を引いてドアを開ける。

「ルコ、おはよー」

「おはよう、海 パパ」

「おーす」

まだ、隆羅は寝ぼけ眼だった。

「もう、パパ子どもみたい。海に連れられて寝癖までつけてまるで子どもみたい、こんなパパ見た事無いよ」

「あらあら、隆羅は相変わらずなのね」

「ええっ、ママ。パパってこんななの？ 私は朝からシャキッとしたパパしか知らないよ」

「OFFの時の朝はこんな感じよ、いつも。ねえ、海ちゃん」

「うん、可愛いでしょ」

「パパの事を可愛いなんて言うの海ぐらいだね」

「それより早く朝ごはん食べに行こう。私お腹ペコペコなの」

「そうね、行きましょうか」

皆でレストランへ向かう、隆羅は海に手を引かれたまま歩いて連れられていく。

「いただきまーす」

「パパはまだ目が覚めないの？」

沙羅だけが和食で3人は洋食だった。

隆羅が熱いコーヒーを飲み大きく伸びをした。

「あゝあゝ、起きているぞ」

「隆羅、何時ごろ出発するの？」

「そうだな、3〜4時間くらいのコースだが余裕を持って、この後で準備して出るか」

「うん、分かった」

「ルコは茉弥と2人で大丈夫なのか？ 危ない所には行くなよ」

「大丈夫だよ、それに連休中で他のお客さんもいっぱい居るから」

「そうだな、誰かに声を掛ければ助けてくれるだろうからな」

「私はエステ三昧よ。溜まった疲れを全部取って若返るのよ」

「そうだな沙羅婆さん」

「まだ、言うかこいつは」

沙羅が隆羅の鼻をつまむ。

「痛たたたた」

朝食を終え、トレッキングに行く準備をする。

海はGパンを履きTシャツの上に少し厚手のシャツを着てスニーカーを履いていた。

隆羅は普段とあまり変わらない格好をし、少し大きめのザックに荷物を詰めている。

手を止めて隆羅が海の姿を見つめていた。

「隆羅、どうしたの？ 私の格好なにか可笑しいの？」

「いや、パンツルックも可愛いなと思って。とっても似合ってるぞ」

「うふふ、ありがとう。普段はスカートばかりだもんね」

「そろそろ、出るか」

ルコと沙羅に出かける事を告げホテルを後にする。

太陽もなんだか嬉しそうに光り輝いている。

ホテルから少し歩くとトレッキングの出発地点の『美し森』に着いた売店で昼飯と飲み物を買って10分くらい登ると山頂に着いた。

「隆羅、凄い綺麗だよ」

「ハケ岳や富士山が良く見えるな、今日は天気が良いから最高かも」

しれないぞ。さあ、まだまだ先だ行くぞ」

「うん」

そこから登山道に入り羽衣池に向かう。

木々の中を20分ほど歩くと看板が見えてきた。

「池と言うより、湿原だな。少しだけ水芭蕉が咲いているぞ」

「何だか羽衣池ってロマンチックな名前だね」

「昔、天女達が羽衣を洗い清めたという伝説があるらしい」

「へえ、そうなんだ」

そして再び登山道を歩き出す、しばらくすると沢に出た。

「顔でも洗うか」

隆羅がザックを降ろし沢の水で顔を洗う。

「冷てえ！」

「でも、気持ちがいいね」

「ありがとう」

海も真似して顔を洗っていた。隆羅がタオルで軽く顔を拭き海にタオルを渡して沢の岩場で少し休憩をする。

沙羅はエステ三昧をスタートさせて、ルコはホテルの前にある池の畔を茉弥と散歩していた。

「ねえ、茉弥。少し外に行ってみようか？ この近くに遊歩道もあるらしいし。少しだけなら平気だよね」

その頃、隆羅と海は牧場の中を歩いていた。

「ねえ、隆羅。写真撮ろう」

「そんなに、撮っているとメモリーいっぱいになるぞ」

「平気だよ。だってこれ私専用のメモリーカードだもん、沙羅さんが今朝貸してくれたの」

「そうか、じゃ2人で撮るか」

「うん」

南アルプスをバックに杭の上にカメラをセットして写真を撮った。

そしてひたすら牧場の中を歩く。

「疲れたか？ 海」

「平気だよ。とっても気持ちが良いし、草原みたいだね」

「そうだな。この先に展望台があるはずだからそこで昼飯にしような」

「うん、賛成」

ここまで1時間半くらいだろうか。

しばらく歩くと展望台が見えてきた、ベンチに腰を下ろし昼飯にする。

展望台からも南アルプスが一望できた。

「もう、お腹ペコペコだあ」

「海はいつもペコペコだろう」

「いいの。若いんだから」

「そうだな、若さの証拠か」

「そうだもん」

冷たいお茶を飲みながらサンドウィッチやおにぎりを食べる。

風は少し冷たいがお日様がポカポカしてとても気持ち良かった。

同じ頃、沙羅とルコもホテルのレストランで食事をしていた。

「ママはこれからどうするの？」

「そうね、温泉にでも入ってゆつくりするわ」

「ルコはどうするの？」

「ホテルの周りを少し歩いてみようかなあって」

「そう、でも遠くに行っちゃだめよ。分かった」

「うん、大丈夫だよ。茉弥も居るんだし」

「それもそうね」

沙羅は温泉に行き、ルコはフロントで何かを聞いて外に出て行った。

「さあ、もう一息だ」

「出発進行！」

下りながら雑木林の中を抜けて天女山の登り口に着く。

目の前にはかなり勾配のキツイ階段があった。

「隆羅、待つて早いよ」

「若いんじゃないのか、海？」

「それとこれとは別だよ」

「同じなんじゃないかなあと思うんだが」

「何で、隆羅は息一つ上がらないの？」

「鍛え方が違うからな」

10分くらい階段を上がると頂上に着いた。

「隆羅、観光客多いね」

「ここは車でも登ってこられるからな」

「えっ、ええっ！」

「でも、気持ちが良いだろ大自然の中を歩くのも」

「そうだね、自分の足で1歩ずつが良いよね。それに頑張ったから

景色もこんなに綺麗に見えるし色んな物を感じられるしね」

「誰かに写真を撮ってもらおうか」

山頂からは富士山、南アルプスや八ヶ岳の山々が一望できた。

「うん、そうだね。私頼んでくる。」

海が少し年配の夫婦に声を掛けた。

「この、ボタンを押せば良いのね」

奥さんが海にカメラの操作を確認している。

「はい、そうです。お願いします」

「では、撮るわよ。はい、チーズ」

「ありがとうございます」

「どうも」

海と隆羅がお礼をする。

「仲の良い恋人さん達ね。お幸せに」

「あ、ありがとう」

海が何だか赤くなり照れていた。

「良かったな、親子に見られなくて」

「うん、仲の良い恋人だつて嬉しいな」

「じゃ、来た道を戻るぞ」

「うん」

海が嬉しそうに歩き出した。

隆羅が声を掛けると海がつまりて転びそうになる。

隆羅が後ろから手を回し海の体を支えた。

「浮かれていると危ないぞ。言っているそばからこれだ」

「やつちやつた。えへへ」

ルコはホテルから少し離れた赤い大きなアーチ型の橋の近くにある
ドライブインに来ていた。

「凄い、お薦めの場所だけあつて綺麗だな。これを絶景って言უნ
だろうな」

「ここにも遊歩道見たいのがあるんだ。ちょっとだけなら大丈夫だ
よね」

少しだけ急な階段を降り沢に着いた。

「気持ち良いな、少し散歩しちゃう」

軽い気持ちだった。

しばらく歩くと少し険しくなってきた。

「これから先は少し無理かなあ。あそこに上に行く階段があるあそ
こから戻れるかも」

たて看板を見ながら進む。

道は少し荒れていたが、歩くには苦にならなかった。

少し開けたところに出ると山並みが見えてとても綺麗な景色だった。

「わあ、綺麗」

少し踏み出すと足元の落ち葉が崩れた。

「キヤー！」

尻餅をつきそのまま数メートル下の窪地に落ちてしまった。

「あいたたた、茉弥は」

ルコが茉弥を見ると「キヤツキヤツ」と喜んでいる。滑り台か何か

で遊んでくれているんだと思っっているのだろう。

「良かった、痛い！」

ルコが立ち上がるうとすると足首に痛みが走った。

捻ってしまったのだろうか何度も立ち上がるうとするが動く事が出来ないでいた。

上を見ると足がなんでもなければ登れそうだが、今の状態では無理そうだった。

「どうしよう」

携帯を見るが圏外になっている、人が通る気配も全く無かった。

「困ったなあ。パパ、ママ」

幸いな事にその窪地は陽だまりになっていて冷たい風も吹き込まず温かった。

「誰か通るかもしれないから、少し待ってみよう」

茉弥を抱しめじっとし待つ事にした。

ホテルでは沙羅がルコを探していた。

「あの子、何処に行ったのかしら。まあ、そのうち帰って来るでしょ茉弥も一緒なのだから」

しかし、しばらくしても戻らなかった。

そこに隆羅と海がトレーニングからホテルに戻って来た。

「沙羅さん、ただいま。とっても気持ち良かったです」

「沙羅、どうした？ ルコの姿が見えないけれど」

「それが、少し前にホテルから出て。まだ、戻らないのよ」

「しょうがない奴だな」

沙羅が少し心配そうな顔をしている。部屋に荷物を置き少し休んでいたがルコは戻ってこなかった。

「隆羅、どうしよう。あの子に何かあったんじゃない」

沙羅が動揺していた。

「フロントにでも聞いてみるか」

3人で急いでフロントに向かう。

「子どもを連れてた若い母親を知りませんか？」

「それでしたら、この先の赤い橋からの眺めが素敵だと案内いたしました」

フロントのスタッフに隆羅が聞くとフロントの女性スタッフが答えた。

「あそこには、確か沢沿いのトレッキングコースがありましたよね」

「ええ、東沢のコースですね」

「あいつ、まさか」

「隆羅……」

「茉弥も一緒に、あのスリングで出掛けたんだな」

「ええ」

「それなら直ぐに場所は判る俺が迎えに行ってくる」

隆羅がフロントから車のキーを受け取り駐車場に止めてある車へ向かう。

「海は、部屋で待っていてくれ。戻ってくるかもしれないからな」

「うん、分かった」

海が隆羅の指示で部屋に向かう。

「隆羅、直ぐに判るって？」

「あのスリングのリングの部分に発信機が埋め込まれているんだ。万が一の時のために」

「隆羅、そんな事まで」

「俺は前に言った筈だぞ、何をしても守ると」

車のエンジンを掛けナビをGPSの画面に切り替える。

「居た。沢から少し外れたエスケープロードの近くだ」

「沙羅もホテルで待っているんだ」

「私も一緒に……」

「悪いが、足手まといだ。ホテルで海と待っている、直ぐに連れて戻るから」

「お願いよ」

「ああ、当然だ」

ゴールデンウィーク - 4

隆羅は車を出し赤い橋に向かう。

少しずつつ日が傾きかけていた、山の日暮れは早かった。

「どうしよう、誰も通らないよ」

どの位時間が経ったのだろう、ザワザワと風で煽られる木々の音が余計に恐怖心を煽り。

日が傾きルコの居るくぼ地は陰になり気温が下がってきた。

「パパ、ママ。ゴメンなさい、助けて……」

茉弥はルコの不安なんてどこ吹く風で何も分からずはしゃいでいた。

隆羅が赤い橋の袂に着き、車からロープを取り出しトレッキングコースに入る。

「この先のはずだが」

橋の袂から沢に下りて辺りを見渡してエスケープロードを探す。

しばらく歩くと本コースのその先は険しくなっていてその脇に階段があった。

「ここだな」

隆羅が階段を駆け上がり少し荒れた道を進む。

「おい。ルコ、何処だ！」

隆羅が声を掛けながら歩いた。

ルコの耳にも隆羅の声が聞えてきた。

「パパ、ここだよ！」

「ルコ、下に居るのか？」

ルコが不安を吹き飛ばすようにありたけの声で叫ぶと直ぐ上の道から隆羅の声がした。

「うん、足を捻って動けないの」

「じつとして居ろよ」

隆羅がロープを太い木に結び崖を降りて窪地に降りた。

「パパ。ゴメンなさい」

「もう、安心だ、お前が泣いたら茉弥が不安がるだろ。こっちの足か？」

「痛い！」

隆羅の姿を見て安心したのかルコが泣き始めた。

隆羅がルコの左足を触り周りを探し当て木になりそうなし字に近い木を見つけてきた。

すると隆羅が上着のシャツを脱ぎ腰に下げていた小さなナイフでシヤツを裂き始めた。

「パパ、何を？」

「動くな、痛めた足首を固定するから」

痛めたルコの足に木を当て裂いたシャツで固定する。

「これで平気だな」

ルコの足首を固定すると、隆羅が茉弥をスリングごと受け取り体に掛けてルコをおんぶする。

「パパ、これで上に登るの？ 無茶だよ」

「俺を、信じる。しっかりつかまって居ろよ」

隆羅がロープをつかみながら上に登り始めた。

高さはそれ程無いのだが落ち葉がかなり積もっていて登りづらい。

茉弥が前にそして、ルコが背中に掴まっていてバランスの取り方が難しかった。

手を伸ばしロープをつかんだ時に、踏ん張っていた隆羅の右足が滑った。

「キヤー」

ルコが悲鳴を上げる。

茉弥とルコをかばい右脇から崖に衝突して、落ち葉の下にあった岩か何かに隆羅の脇に当り鈍い音がした。

隆羅が歯を食いしばり堪える。

「うっ！ くう……」

「パパ、大丈夫？」

「ルコは怪我していないな」

「うん、私は大丈夫。でも今、変な音が」

「俺は大丈夫だ」

右手で枝をつかみ体制を整えて登り始める。

そしてエスケープロードまで登りきった。

「ふう、ここまでくれば一安心だ」

「パパ、怪我したんじゃ」

「たいした事無いよ、それより車まで行つてとりあえず沙羅達に連絡してから病院だな。ルコの足を見てもらわないとな」

ルコをおんぶして歩き出し東沢に向かう。

階段を下りてしばらく沢を歩くと赤い橋が見えてきた。

茉弥を見ると疲れたのかぐずりと寝ていた。

「もう少しだからな。茉弥はいい子だ、しばらく寝ていてくれよ」

登りが続く、そして赤い橋に上がる最後の階段を登り始める。

ルコが隆羅の様子が変なのに気付いた。

「パパ、本当に大丈夫なの。何だか様子が変わだよ」

「さっきぶつけた所が痛むだけだ、なんとも無い」

隆羅の呼吸が妙に浅く肩で息をしていた。

階段をゆっくり登り橋の近くの駐車場に向かう。

隆羅が車のスライドドアを開けルコを座らせ茉弥を預けると携帯を出し電話を始めた。

「沙羅か、ルコと茉弥を保護した。今、何処に居る？」

「隆羅、本当にありがとう。今、ロビーに居るわ」

「悪いがフロントでこの近くの病院を調べてくれ。ルコが足を捻挫したらしい」

「分かったわ、少し待って」

沙羅がフロントで病院を調べ、フロントのスタッフが病院に連絡を入れてくれた。

「30分くらいの所に少し大きな病院があるらしいわ。」

沙羅から住所を聞き隆羅が車を出した。

その病院はこの辺りでは一番大きな病院だった。連休中だったがホテルのスタッフが連絡をしていたので医者が待機してしてくれた。

整形外科の外来に行きルコの足を見てもらう。

「軽い捻挫だな、少し安静にしていれば治るだろ。一応レントゲン撮っておくかな。おや、あんたその脇腹をちよつと見せなさい」

ルコが車椅子に座らされ看護婦さんが付き添いレントゲンを撮る為に診察室から出て行った。

先生が椅子から立ち上がり徐に隆羅のＴシャツを捲る。

「あんたの方が酷いかもな。一緒にレントゲンだ」

Ｔシャツに血が滲み隆羅の脇がどす黒く青痣になっていた。レントゲンを撮って外来に戻る。

「娘さんは軽い捻挫だ。お父さんの方は肋骨に２本ヒビが入っているな、サラシで固定しておくから。シャツを脱いで」

隆羅がシャツを脱ぐと先生がサラシで固定していく。

「まあ、体をこれだけ鍛えていれば、大丈夫だな」

「ありがとうございます」

「娘さん、処置するから入ってきなさい」

ルコが呼ばれて茉莉を抱っこしたまま車椅子で看護婦に付き添われ入って来ると、隆羅の体にはサラシが巻かれている。

「パパ、その包帯」

「はい、お父さんはこれで終わり。足を出して」

ルコと入れ違いに隆羅が待合室に出て行く。

「あのう、パパの体は？」

「たいした事は無い、肋骨にヒビが入っただけだ。体もかなり鍛えてあるし安静にして居れば問題ないよ。しかし、あんたの足は見事なまでの応急処置をしてあったが、あれはお父さんが」

「はい、そうです」

「たいしたもんじゃ。はい、これでお終い。可愛らしい赤ちゃんだな、大人しく寝ている」

医者が優しい目で茉弥の顔を覗き込んだ。

「茉弥って言います」

「若いのに大変じゃな、頑張りなさいよ。じゃが無理は行かんぞ」

「ありがとうございます」

ルコが松葉杖を一本持って、車椅子で出てきた。

「さあ、帰るか。沙羅と海が待っているからな」

「うん」

「ほら、茉弥おいで」

隆羅が茉弥をゆっくり抱っこするとルコが松葉杖を突いて立ち上がった。

看護婦さんに一礼をして受付で支払いを済ませた。

「ルコ大丈夫か？」

「うん、私は大丈夫。それよりパパは」

「なんとも無いぞ。慣れているしな、タコとつるんで居た時はこんな怪我しよちゅうしていたからな」

車に向かい、ドアを開け沈んだ顔のままのルコを座らせ茉弥を渡す。そしてホテルへ向かった。

ホテルの正面玄関に車を着けるとロビーから沙羅と海が心配そうな顔で出てきた。

「沙羅、茉弥を頼む。俺は車を置いて来るから」

「分かったわ、茉弥いらっしやい」

沙羅が茉弥を抱っこすると「よいしょと」ルコがゆっくり車から降りて松葉杖を突きながらロビーに入っていった。

隆羅は車を駐車場に置いてロビーに向かった。

沙羅がフロントのスタッフにお礼をしてソファに座っているルコの所に戻ってきた。

「本当に、あなたって子は。何かあったらどうするの」

「でも、無事で良かったよね。ルコも茉弥ちゃんも」

「本当に、ゴメンなさい。茉弥まで危ない目に遭わせて、それにパパにまで怪我をさせて」

ルコがポロポロと涙を流しながら泣き出してしまった。

「海ちゃんの言うとおり無事で良かったわ」

すると茉弥が目覚まし愚図り始めた。

「はいはい、お腹がすいたのね」

沙羅が用意してあった哺乳瓶でミルクを与える。

「でも、隆羅の怪我って？」

海が不安そうな顔をしてルコに聞いた。

「私が崖から滑り落ちてしまって、茉弥を抱っこして私をおんぶして崖を登っている時にバランスを崩して脇を岩か何かにぶつけたの。病院で肋骨にヒビが入っているって」

ルコが泣きながら話をした。

そこへ隆羅が戻ってきた。

「隆羅、怪我は大丈夫なの？」

「大丈夫だ、このくらい心配するな」

海が立ち上がり隆羅に駆け寄ってＴシャツを見ると右脇に血が滲んだ後があった。

隆羅が安心させようと優しく海の頭を撫でる。

「本当に？ 良かった」

「沙羅もあまりルコを責めるなよ、無事だったんだし怪我もたいした事無いんだしな」

「隆羅、あなたって本当に甘いんだから。でも、ありがとう」

「気にするな、それより食事にしないか腹が減って倒れそうなんだよ」

「そうね、隆羅は着替えないとね」

「そうだな、こんなボロボロじゃレストランにも入れないしな。ル

コは着替えなくて平気なのか」

「私は大丈夫」

「そうか、今日は風呂にも入れないしな。海、悪いが体拭くの手伝ってくれ」

「うん、分かった」

隆羅と海が部屋に戻り、海がバスルームでタオルをお湯で濡らし隆羅の上半身を拭く。

「悪いな、こんな事させて」

「遠慮なんてする事ないじゃんね」

「そうだな」

「右手を上げて」

「こうか、うつ！」

隆羅が顔を歪めた。右手は肩の高さまでしか上げられなかった。サラシを外している脇がどす黒く痣になっていた。

「痛むの？」

「流石に、キツイな。ルコ達には絶対に言うなよ」

「うん、分かってる。でも、こんなに無茶して」

「守らなければならないモノはどんな事をしても守る。それじゃ駄目か？」

「駄目じゃないけれど、怪我までして。もし隆羅に何かあったら私……」

「昔、ある人に言われた事があるんだ。命懸けで誰かを守るのは良い事だけど、自分も守れなければするべきじゃないってね。命と引き換えなんて奇麗事に見えるけれど、悲しむ人が必ずそこに居るんだって」

「それでも、守れなかったら」

「その時は、スーパーマンかウルトラマンにでも頼むさ」

「もう、隆羅のバカ」

「さあ、飯食いに行くぞ」サラシを巻き直しフリースだけを着て海とレストランに向かった。

食事を済ませて部屋のリビングでゆっくりする。

ルコと茉弥は部屋に戻ると直ぐに風呂に入り横になった。余程疲れたのだろう。

今は海が風呂に入っている。

隆羅と沙羅がソファ―に座って話をしていた。

「隆羅、今日は本当にありがとう。生きた心地がなかったわ」

「無事だったんだから良いじゃないか」

「でも、またあなたに怪我をさせてしまった」

「こんなの、怪我の内に入らないよ」

「腕も上げられないくせに」

「よく分かったな」

「当たり前でしょ、伊達に10年も一緒に居たわけじゃないのよ」

「そうだったな」

「私達親子って駄目ね、あなたに助けられてばかりいて。あの時も隆羅が大怪我してそのおかげでこの命が助かった。そのうエルコを育てるって言うてくれたのに」

「お互い様なんだよ、みんな。助けたり助けられたり、俺だって何度もルコや沙羅に助けられているんだ。卑屈になる事も媚を売る事にも必要も無い人間は全てファイティー・ファイティーなんだ」

「そうね、私達がそんな事をしたら隆羅と一緒に居ないわよね」

「そうだ、それで良んだ」

「でも、いつまで隠し事をするつもりなの」

「それは……」

隆羅が伏し目がちに言葉に詰まっていた。

「いつまでも隠せる物じゃないでしょ」

「そうだな、覚悟が出来ればだな」

「それじゃ、バレルのが先か覚悟が先かよ」

「海の事を考えると……」

「そうね、私達の問題じゃないわね。隆羅と海ちゃんの問題ね」

「私がどうかしましたか？」

すると海がバスルームから出てきた。

「隆羅と何処まで行ったのかなあって話」

「うっ、それは隆羅しゃべったの」

「俺は、何もしゃべっていないぞ」

海と隆羅が2人して少しうろたえている。

「あらあら、そっちの覚悟もまだなのね駄目な隆羅」

「邪魔ばかりする親子が近くに居るからな。海、もう寝るぞ」

「うん、沙羅さんお休みなさい」

「おやすみ、明日もよろしくね」

「じゃな」

「また、明日」

隆羅と海がベッドルームへ入っていくのを見て、沙羅が和室に歩き出した。

「私もそろそろ寝ましょう」

隆羅と海がベッドで横になって話をしている。

「ねえ、隆羅。沙羅さんと何を話していたの？」

「他愛の無い話だよ」

「教えてくれないんだ」

「気になるのか？」

「だって沙羅さんは隆羅の元奥さんで、今も仲の良い友達なんですよ」

「元奥さんって言ったってルコから聞いているんだろ」

「聞いているけれど」

「時期が来たらキッチンと話すよ」

「そんなのばっかり。でもいいや隆羅が話してくれるまで側に居るから」

「側に居てくれるか。嬉しいな」

「本当にそう思うの？」

「ああ、本当だ。俺も海とはいつまでも一緒に居たいからな」

「嬉しいな、隆羅」

海が抱きついてきた。

「くうっ！」

「あっ、ゴメン痛かった？」

隆羅の顔が一瞬痛みに歪んだ。

「少しな、そんな顔をしないでくれ。こうすれば平気だからな」
左手で海を抱き寄せると海が隆羅の左胸に耳をあてた。

「隆羅の鼓動が聞える」

「しばらくは無理は利かないな」

「大人しくしてないとね。でも、またお預けだ」

「何がだ？」

「隆羅のバカ。そこまで言わせるの」

「そうだな、焦る事もないさ自然体でな」

「そうだね、おやすみ」

「おやすみ」

ゴールデンウィーク - 5

翌朝は、昨日の騒ぎで疲れていたのか皆ゆっくりとしていた。

「うん、痛てててて……あつ痛！」

「もう、バカみたい」

隆羅が目を覚まし伸びをすると脇に痛みが走り海が目を覚ましてしまった。

「バカ言うな。忘れていたんだ」

「ちゃんと診てもらった方がいいんじゃないの？」

「そうだな、帰ったら病院だな。その前に腹ごしらえだ」

「もう、隆羅は食べる事ばかり」

「育ち盛りだからな」

「それ以上、もう育ちません」

「じゃ、こう出っぷりと中年親父みたいに」

隆羅が手でお腹が出ているゼスチャーをする。

「別れるもん」

「即答ですか？ 海さん」

「そんな、隆羅見たくないもん」

「それじゃ、ヨボヨボと猫背で無精髭で」

「傷口触るよ」

海がふざけて隆羅の痛めている右脇に手を伸ばすと隆羅が顔をしかめた。

「うっ！……なんて」

「えっ、ゴメン大丈夫。隆羅が嫌がる事言うからだよ。もう、信じられない」

隆羅が舌を出してゆっくり体を起こし、海の頭を撫でて軽くキスをした。

「さあ、食事に行くぞ」

「うん」

着替えをして顔を洗いルコや沙羅を呼びに行く。

「おい、食事に行くぞ」

「もう準備は出来ているわよ。遅いくらいよ」

沙羅が部屋から出てきた。

「悪いな」

「パパ、昨日はありがとう。体は大丈夫なの？」

「大丈夫だ。頑丈なのが取り柄だからな。茉弥おはよー」

「だあゝ」

「よし、茉弥来い」

茉弥が隆羅に手を伸ばしてきた。

隆羅が茉弥を抱っこしてレストランに歩き出した。

隆羅は左手で茉弥を抱きながら食事をしていた。

「パパって、子どもの扱いとても上手だよね」

「そうか？」

「そうだね、何でなの？ 隆羅」

「いろんな仕事していたからな。保育所の手伝いもしていた事あるしな」

「隆羅が、似合わないよ」

「失礼だな、海。人気あつたんだぞ、若い頃だけだな」

「それは、子ども達に？ それともママ達に？」

ルコが笑いながら突っ込んだ。

「両方だ、今と変わらないだろ」

「そうだね、生徒にも保護者にも人気だもんね」

海が妙に納得した。

「それを、海が独り占めにして」

「ルコ、酷いよ。独り占めなんて、でもそうなら良いなあ」

「それって、結婚したいって事？」

「だって、女の子の夢じゃん」

「いいな、海には夢があつて」

ルコが羨ましそうに海の顔を見ていた。

「何をルコはしょぼくれた事を言っているんだ。お前もこれからだよ」

「そうかな」

「当たり前でしょ、もっと前向きに生きなさい」

沙羅が力強く言った。

「そうだね、頑張らなくちゃ！」

「さあ、そろそろ出発するぞ」

「はい」

部屋に戻り荷物を持ってフロントへ行き隆羅が清算を済ましている間、沙羅とルコがフロントにお礼を言っていた。ホテルを出て車に乗り込む。

「パパ、今日は何処に行くの？」

「アウトレットモールで買い物三昧だ」

「やった！　パパありがとう」

ルコがはしゃいで飛び跳ねている。

「沙羅に買ってもらえな」

「ええ、ママに？」

「出発の時に約束していただろ」

「隆羅！　余計な事を」

「そうだった。ママありがとう」

「仕方ないわね。もう」

車で30分ほどでアウトレットモールに到着した。

駐車場に車を入れてモールまで歩く、しばらくすると入り口が見えてきた。

「凄い、こんな気持ち良さそうな所で買い物なんて素敵だね。パパ」
広いショッピングモールの中は緑生い茂る木々に囲まれた綺麗なお店が立ち並んでいて、少し雪を残している八ヶ岳が良く見えた。

「そうだな、広いから携帯で連絡取り合いながら買い物しよう」
「そうだね」

「茉弥は、私が面倒見るわ。隆羅ばかりじゃ悪いものね。ルコは足を怪我しているし」

「任せよ、沙羅……」

「ストップ！ それ以上言ったら脇を殴るわよ」

「怖い、怖い、ではグランマ宜しく」

「ルコ、行くわよ」

「沙羅。欲しい物があれば連絡しろよ」

「もちろんですよ、欲しい物だらけだもの」

「お手柔らかに。海、俺達も行こうか」

「うん！」

二手に分かれて買い物をする。

隆羅と海は腕を組みながらモール内をブラブラしていた。

「海は、何が欲しいんだ？」

「んん、これといって無いかも。隆羅とこうしているだけで幸せなんだもん」

「何処かの誰かさん達と違って安上がりだな」

「でも、大好きな人との時間ってお金じゃ買えないでしょ」

「そうだな、プライスレスだな」

しばらくショップを見ていると、隆羅の携帯が鳴った。

「どうした、ルコ。分かった直ぐに行く」

「隆羅？」

「どうしても欲しい物があるらしい。沙羅には断られたみたいだ」

「行って見よう」

少し歩くとショップの前にルコと沙羅が居た。

「パパ、こっち、こっち」

「何が欲しいんだ？」

ルコに手を引かれて連れられて隆羅がショップの中に入る。

「この、バッグが欲しいんだけど」

隆羅が手にして見たとたんに「却下かな」と隆羅が即答した。

「ママの言ったとおりでしょ」

「ねえ、パパなんで駄目なの？」

「大きさが中途半端だし使いづらい」

「でも、欲しいのに」

「ルコ、今まで隆羅が駄目だって言った物で良かった物なんて一つも無いでしょ」

「そうだね、パパのそういう所は確かだもんね」

「ねえ、ルコ。それってどう言う事なの？」

海が不思議そうな顔をしていると沙羅が教えてくれた。

「海ちゃん。あのね、隆羅と買い物に来て隆羅が駄目って言った物は必ず使わなくなるのよ。私も駄目って言われたのに後でこっそり買って何回も後悔をしているの」

「沙羅の無駄遣いの元凶はそこか。まったく、しょうがないな」

隆羅が呆れて沙羅の顔を見た。

「でも、隆羅。なんでそんな事が分かるの？ そんなに詳しいの？」

「隆羅はファッションの事なんかあまり詳しくは無いはずよ、私も知りたいわ」

「パパ、何でなの？」

3人が一斉に隆羅に詰め寄り聞いてきた。

「インスピレーションかな」

「また、そんな曖昧な事を言う」

ルコが不機嫌そうに言った。

「他に言い様が無いんだ、しょうがないだろう。欲しいと言う人が着ていたり、持っているイメージが出来たらOK、それ以外はNGなんだ」

「自分は無駄遣いばかりしているくせに」

まだ、ルコは剥れていた。

「自分で稼いだ金だ良いじゃないか。さあ、海行こう」

「ハイ」

「また、絶対に電話するからね！」

隆羅が手をヒラヒラとさせながら上げて答えた。

しばらく歩いていると海がショップの前で急に立ち止まりウィンドウの中に飾られている洋服に釘付けになっていた。

「どうしたんだ？」

隆羅がショップの中を覗くとカップルのマネキンがシンプルで落ち着いた感じの柄違いのシャツと色違いの軽そうなカーディガンを着ていた。

女性の方は薄いグレーのチェック柄のシャツにカーキ色のカーディガン、男性は淡いブルーのシャツに薄いグレーのカーディガンで見ペアルックに見えないペアルックだった。

「中に入って見てみるか？」

「う、うん」

店内に入り海が覗き込んでいた洋服を店員を呼んで見せてもらう。

「こちらは一点物になっています」

「海、試着してみたらどうか」

「えっ、良いの？」

「構わないさ」

海が入りしばらくして「どう？ 隆羅」と言いながら海が出てきた。

「ん……」

隆羅が首を傾げ店員を呼び何かを告げる、しばらくすると店員が小さな花柄のフレアースカートを持ってきた。

「これも？」

海が尋ねると隆羅が何も言わずに頷いた。

「どう？」

不安そうに海がフィッティングルームから着替えを済ませて出てくると隆羅が今度是一回ゆっくり瞬きをした。

「良いんじゃないか、とっても似合っているぞ」

「本当、でも高いよこれ。勿体無いよ」

「聞かなかったか？ イメージできた物しかOKしないって」

「でも……」

店員を呼びタグを全て取ってもらい支払いを済ませ、着ていた物をお店の袋に入れてもらう。

「少し待っててくれ」

「えっ、隆羅どこに？」

海を待たせて店の奥に隆羅が歩き出し、しばらくすると隆羅が着替えをして現れた。

「隆羅、それって」

少し着崩しているものの、お揃いの男物のシャツとカーディガンだった。

「どうかな？」

「えへへ、格好良いよ隆羅。本当にありがとう」

「泣く事はないだろ」

「だって、凄く嬉しいんだもん」

海が涙声になっていた。

海の持つているお店の紙袋に隆羅の着ていた物も入れて隆羅が肩から下げた。

「そろそろ合流して食事しよう」

「うん！」

海が隆羅の腕に跳び付いた。

隆羅が沙羅達に連絡を取るとちょうどモールの真ん中にあるイタリアンレストランで待ち合わせる事になった。

端正な顔立ちの海の髪が風になびいて輝いている。

横には長身の隆羅がいて2人は買ったばかりのペアルックの服を着て歩いている。

すれ違う人の多くが振り返った。

「隆羅、何だか恥ずかしいね」

「でも、こうしてこの服で歩きたかつたんだろ」

「うん、隆羅は何でもお見通しなんだね」

海が頬を薄っすらと赤く染めて隆羅の顔を見上げた。

「何でもじゃないさ。俺だって完璧じゃないんだから」

「そうだね、完璧な人なんていないもんね」

「完璧な人間なんて詰まらないだけだからな」

「隆羅、ここで待ち合わせなの？」

「そうだが、まだ来ていないな。いつもの事だけだな、中で待つか」
モールの中心にあるイタリアンレストランに着き、店の中に入ろう
とすると後ろから声を掛けられた。

「すいません。私こう言う者なのですが」

女の人が名刺を隆羅に差し出した。

名刺には編集部の名称と卯月美樹うづきみきと書かれていた。

「雑誌Kanonの人が私達に何か用ですか？」

「あのう、とてもお似合いだったので取材をさせて頂きたいと思
いまして」

「隆羅、凄く有名な雑誌で学校の皆も必ずチェックしているから絶
対駄目だよ」

海が隆羅の袖を引っ張り耳打ちした。

「今、あまり時間が無いので」

「そこを何とかお願いします」

卯月と後ろのカメラマンが深々と頭を下げた。

少し離れた所からルコと沙羅が歩いてくるのが見えた。

隆羅が目で沙羅に合図をする。

ルコが隆羅に声を掛けようとするのを沙羅が止めた。

「どうしたの、ママ？」

「何か取材を頼まれているみたい。少し大人しく見てみましょう」
会話が聞えるところまで近づき2人が立ち止まった。

「お願いします。Kanonの特集で是非、お2人の記事を」

女性記者が深々と頭を下げながら懇願した。

「ええっ、ママ。K a n o n ってあの超有名なファッション誌だよ
ね」

「そうね、隆羅のお手並み拝見と行きますか」

「大丈夫なの？」

「見ていなさい。断れる状況じゃないけど、交渉次第でどうにでもなるのよ」

遠巻きに隆羅と海を見守る事にした。

「どうする、海？」

「私は少し嬉しいけど、でも無理だよ。友達にばれちゃうもん」

「そうだな」

「あのう、駄目ですか？」

卯月がとても渋い顔をして本当に困っている様子だった。

隆羅が沙羅の視線に気付いた。

「こちらの条件だけクリア出来れば構わないですよ」

「本当ですか？ ありがとうございます。必ずクリアしますので、これで投稿に間に合う良かったです」

卯月が胸を撫で下ろした。

近くのオープンテラスで取材が始まった。

隆羅の出した条件は男性のアップはNG、そして年齢は公表しない。それと出版前にチェックさせる事だった。

「隆羅、もし守ってくれなかったらどうするの？」

「俺が全力で叩き潰す」

ワザと聞えるように強い口調で言う、卯月とカメラマンが驚いて萎縮していた。

「あああら、隆羅は本気ね」

沙羅がぼそつと言った。

「何が本気なの？ ママ」

「もし、隆羅の出した条件をクリアしないで出版したら、あの出

版社潰されるわよ」

「でも、そんな事」

「隆羅の実家で言っただでしょ、日本の何割かを仕切っているって」

「ママ、そんな事したら……」

「2人の事がバレたら大騒ぎになるわ、1番傷つくのは海ちゃんだもの。本気で潰すわよ」

沙羅の声も女性記者には聞こえていた。

すると卯月が沙羅達に近づいて来た。

「あのう、スイマセン。あのカップルのお知り合いですか？」

「ええ、友人よ」

「今のお話って本当なんですか？」

「本ただけど、そんな事を公表したら大変な事になるわよ。ねえ茉弥ちゃん」

沙羅が茉弥の顔を覗き込んで茉弥に話すように言った。

「そ、そんな事しませんよ。失礼しました」

卯月の顔が少し青ざめて、カメラマンの所に戻った。

「ママ、わざと聞えるようにしゃべったでしょう」

「あの位じゃ、ルコと茉弥のお礼にもならないわよ」

沙羅がルコのおでこを軽く突付いた。

「そうでした、命の恩人なんだもんね」

「そうよ、ママもルコも茉弥もね」

「でも、あの2人良く似合っているね。ベストカップルって感じで」

「だから取材に捕まったんじゃない」

取材が終わり、卯月が隆羅と簡単な確認をしていた。

「最後にお名前だけでも記載させて頂けませんか。それと雑誌をお送りする住所も」

「良いですよ。彼女が海と書いてカイ、苗字はNGで。私は高良たからと言います、名前の方は色々と問題がありますので勘弁してくださいね。ここに送ってください、私は忙しくてあまり家に居ないので知り合いの家です。編集の仕事をしているんで」

卯月に手渡されたノートに隆羅が書いて渡した。

記者の卯月とカメラマンが深々と頭を下げて走り去った。余程、切羽詰まっていたのだろう。

「ふう〜疲れたな。海」

「もう、隆羅。私ドキドキしっぱなしだったんだから」

「待たせたな。沙羅、ルコ。食事にしよう」

「お疲れ様」

沙羅が笑いながら言った。

「パパ、学校でまた大騒ぎになるよ」

「大丈夫だ、その時は学校ごと潰すから」

「ば、馬鹿な事言わないで」

ルコが真に受けて後ずさりした。

「冗談だよ」

「ママの話を聞いていたら冗談に聞えないんだもん。だけど2人もその格好とつても素敵だね」

「ルコ、ありがとう」

海が隆羅の腕をつかんだ。

「さあ、がつつり食事にしよう」

「そうだね」

食事をして沙羅やルコそして茉弥の買い物をする。

「本当に、パパを納得させるの難しいよ。海は良いよな」

「海はセンスが良いんだよ」

「えへへへ、そうなのかなあ」

「そうね、隆羅とそういう所は似ているのかもね」

「でも、海はパパに怒られる事あるの？」

「えっ、あるよ。凄く怖いけど」

「そうなんだ、怒った事無いのかと思っていたよ」

「俺だって駄目な物は駄目とちゃんと言うし怒りもするぞ。お互い本気でぶつからないとな」

「そうね、言いたい事をはっきり言うのが1番ね。気兼ねなんてしていたら相手の事なんて分からないものね」

「そろそろ、帰るぞ。それだけ買えば十分だろ、明日から学校だからな。タコのお土産は買ったのか？」

「ええ、漬物をいっぱいね」

「相変わらず渋いな、親父臭い」

「しょうがないじゃない、好きなんだから」

駐車場に向かい車に乗り帰路につく、中央自動車道に乗り都内へと向かった。

それ程遅くならないうちにマンションに到着した。

「お疲れ様でした。隆羅、無理しちゃ駄目よ、無理も出来ないでしょうけれど」

沙羅が茉弥を抱っこして言った。

「そうだな、しばらくは大人しくしているよ。ルコも明日、学校でな」

「うん、明日。バイバイ、海。また明日ね」

「うん、じゃね」

部屋に入ると、マロンが出てきた。

「マロン、お留守番ご苦労様」

海が抱き上げる。

「ニヤア〜」

「いつの間にか我が家の住人になったな」

「だって、この子のおかげで隆羅と恋人になれたんだもん」

「そうだったな」

隆羅がソファに腰を降ろすと海がキッチンに歩き出した。

「今、コーヒー入れるね」

「サンキュー」

マロンが隆羅の膝の上に乗って来た。

「お前が大人しい猫で良かったよ」

「ナァ〜？」

マロンが甘えた声で鳴いた。

「大人しくなかったらどうするの？」

「ゲージの中かな」

「ええ、可哀そうだよ」

「していないだろ。海がまめに掃除をするから毛も気になんないしな」

「だって、私が飼い主だもん。はい、コーヒー」

「ありがとう」

海が隆羅の横にポンと勢いをつけて座った。

「痛！」

「あつ、ゴメンなさい。響いた」

「少しな。大丈夫だ、気にするほどじゃないから」

海が隆羅の肩に頭をのせてきた。

「やっと、2人きりになれたね。でも楽しかったなあ、また思い出が増えちゃった」

「まだまだこれからだよ。辛い事や哀しい事もあるかもしれないけどな」

「隆羅と2人なら乗り越えられるって信じているもん」

「信じているか」

「隆羅は？」

「そうだな、信じているよ」

海を抱き寄せキスをする。

そして、海を強く抱しめると脇に痛みが走った。

「痛ったたた」

「大人しくしていないと、駄目だよ」

「ルコにまた邪魔されたな」

「ふふふふ、そうだね」

「あはは……痛ったたた」

「笑っても痛いのか？」

「響くんだよ、ちょっとした呼吸の差で。本当に厄介だな」

「もう、しょうがないなあ」

「しばらくは静かにしてないとな」

「そうだね」

2人寄り添いながら静かな時間を楽しんだ。

後日、あの雑誌が波乱を巻き起こす事など今の2人に関係なかった。少しずつ確かに2人は強い絆で結ばれ始めていたのだから。

トラブル - 1

大型連休も終わり、その後に待ち受けていた試験も無事終了して。そろそろ鬱陶しい梅雨の時期になろうとしていた。

海は昼休みに弁当を食べて終わり、窓際の自分の席で外を見ていた。向かいの校舎の廊下で指をパチンと鳴らす音が微かに聞えた。

目だけを動かし音の方に視線をやると隆羅が何かを言っている、言っているのではなく口を動かしているのだ。

『ルコと屋上』と。

海が席を立ちルコを誘った。

「ルコ、行こう」

「えっ、何処に？」

「いいから、いいから早く」

ルコの手を引っ張りながら自分達の教室のある校舎の屋上に連れ出す。

「海、何の用なの？」

「ちょっと待っててね」

しばらくするとガチャンと屋上のドアが開く音がして隆羅が屋上に来た。

「ええっ、いつの間に約束したの？」

「さっき、ルコと屋上について」

「でも、パパは教室には。あっ、向うの校舎に居たっけ読唇術みたいなやつだ」

「テストはどうだったんだ2人とも」

「そこそこかなあ」

「私はギリギリかなあ」

海は嬉しそうに答え、ルコは気まずそうに答えた。

「ルコはもう少し頑張らないとな。茉莉の事もあるけどそれを理由には出来ないぞ」

「うん、分かってる。私はママで高校生なんだもん」

「でも、海とパパって凄いいよね。口元を見るだけで分かるんでしょ」
「少しだけね、長い会話は分からないけれど単語だけなら分かるかなあ」

「屋上は気持ちが良いが、そろそろ次の授業だ。戻るぞ」

隆羅が海とルコの頭を撫でる。

「うん」

「はい」

向かいの校舎の廊下から同級生が見ていた。

「あれ、如月先生と海じゃない」

「ええっ、どれどれルコも一緒じゃん問題ないよ」

「そうだね、それに海もだいぶ明るくなって来たもんね」

「そうそう、如月先生とルコのおかげだもんしょうがないよ。あの3人が仲の良いのは」

「海の両親。まだ、見つからないのかなあ」

「見つかったても、海は戻らないんじゃないの？」

「そうか、もう直ぐ1年になるんだもんね」

「おい、お前ら先生が早く準備しろって」

男子生徒が声を掛けた。

「あっ、いけない次の授業の準備の係りだったんだ」

「コラア、廊下を走るな！」

女生徒2人が走り出すと直ぐに先生に見つかって注意される。

「すいません。早く行こう」

「うん」

校内で3人で会話する機会が増えてきて周りの生徒達にも次第に認知され始めていた。

そんなある日、あの雑誌が発売日より早く隆羅の元に送られてきた。
「海、あの雑誌が来たぞ」

「ええっ、本当？」

「どれどれ、凄いなこれは大騒ぎになるぞ」

「えっ……」

海が雑誌を見て固まっていた。ちょうどその時携帯がなった。

「もしもし、高良さんの携帯で宜しいでしょうか？」

「はい、そうですけど」

「先日のアウトレットモールで取材をさせていただいた雑誌Kanonの卯月ですが、雑誌は見ていただけでしょうか？」

電話の声はあの女性記者の卯月で、とても不安げな声だった。

「はい。今、拝見させて頂いています。彼女も喜んでいきますので約束を守っていただいてありがとうございます」

「そうですか、良かった。発売日に謝礼と雑誌の方を送らせていただきますので、これで失礼致します」

隆羅の言葉に安堵して電話口の向うで「やったー」と言う声が上がっていた。

「脅かしすぎたかな。海、海？」

「大丈夫か？ 海」

「ど、どうしよう。隆羅」

海が雑誌の見開きを見て固まったままだった。

目次にも海の写真が使われていて、次の見開きは一面2人の記事だった。

ゴールデンウィークのベストカップルの見出しがあり。

全身のツーショットはあるが隆羅の顔は写真の大きさがそれ程大きくなくメガネも掛けているので分かりづらかった。

そして大きな目のツーショットは海がメインで隆羅の顔は判りにくい様に写されていた。

そのほかの写真も総て海がメインだった。

名前の方も約束どおり「高良さん」「海さん」とだけ記載されていた。

沙羅とルコに連絡をすると直ぐに部屋に来た。

「見せて、見せて！ 凄い事になっているよ、ママ」

ルコが雑誌を見て驚いていた。

「あら、隆羅。洋服以外は本当におまけね」

「しかし、俺達以外に居なかったのか。あのヘタレ記者」

「でも、カメラマンの腕は確かね。隆羅の顔を上手く隠しているわ」

「まあ、そうしなければマジで潰すけどな」

「あれだけ脅してこれだけの仕事が出来れば良いんじゃない」

「さつき、連絡があつて。お礼を言ったら電話口の向うがお祭り騒ぎだったぞ」

「可哀そうに生きた心地がしなかったんでしょね」

「沙羅があんなに脅すからだろうが」

「あら、聞えていたのね」

「もちろんだ」

沙羅が呆然としている海の顔を覗き込んだ。

「海ちゃんはどうかしちゃったの？」

「さあ、雑誌を見てからあんななんだ」

海が放心状態でソファーにヘタレ込んでいた。

「海ちゃん。どうしたの？」

「沙羅さんどうしよう、もう学校に行けないよ」

海は今にも泣き出しそうな声で沙羅に訴えかけた。

「大丈夫よ、最近は校内で隆羅と話す機会が増えたんでしょ。それに旅行には私達も一緒だったんだしね。隆羅が何とかしてくれるわよ、ねえ、隆羅」

「それで、3人で話をする様になったんだ」

ルコが驚いたような顔をしながら感心していた。

「そうね、少しずつなら誰も不審がらないしルコが一緒なら問題ないものね」

「えっ、この為にわざわざあんな事を、私の為に？」

「少しでも廻りに3人の関係を認めさせておけば多少違うだろ。で

も直接は助ける事はできないからな、そこは頭に入れておいてくれ」
「海ちゃん安心しなさい。隆羅は雑誌の取材なんて安請け合いです様な男じゃないの、絶対に守ってくれる男よ。今までだって自分の事は投げ打ってでも助けてくれたでしょ」

「はい、隆羅を信じます」

海が沙羅の眼を真っ直ぐに見て答えた。

「そう、それで良いの。こんな雑誌の取材なんてめったに受けられないのよ、ラッキーだと思いなさい。それと彼氏が居ると分かれれば変な虫も寄ってこないしね。そうそう海ちゃん。ルコと下の部屋からお茶菓子でも持ってきてくれないかしら。それと茉弥がそろそろ起きる時間だからルコ連れて来なさい」

「はい、海。行こう」

「うん」

2人がルコたちの部屋に向かうのを確認して沙羅が少しキツイ口調で隆羅に言った。

「隆羅、あなた何を考えてあんな取材を受けたの？ 危険すぎるでしょ！」

「そうだったかな、海の両親の目にも留まればと思ったんだが」

「海ちゃんの両親の手がかりを探す為に……そうだったの。そこまでは気が付かなかったわ、他に手段がないんだものね」

「ああ、手を尽くしてみたんだが何も判らなかったからな」

隆羅は実家の力を借りて海の両親の行方を捜していたが、未だに見つけられないでいた。

「キッチンを借りるわよ、お茶を入れるから」

沙羅がキッチンに向かうと2人が茉弥を連れて戻ってきた。

隆羅の部屋でお茶会が始まった。

数日後、雑誌Kanonが発売された。

校内は海の話で持ち切りになり大騒ぎになっていた。

「おい、見たか？ Kanon」

「見た、見た。あれA組の水無月だろうあんなに可愛かったんだ」
「でも、隣の彼氏もすげえ格好良いぞ」

「本当にベストカップルだよな。でも、彼氏はこの学校の奴じゃないよな」

「そうそう、でも女子の話じゃ如月に似ているって言ってたぞ」

「でも、高良ってどう考えても苗字だろ、如月は名前が隆羅だぞ。字も違うし」

ルコと海が登校して教室に入るとあつという間に人ばかりが出来た。

「海ちゃん。誰と旅行してたの？」

「彼氏は何処で知り合ったの？」

「何処に行ったの、2人きりなの？」

一方的に質問攻めに合い海は戸惑っていた、ルコが助け舟を出す事さえ出来なかった。

「おい、そろそろ予鈴が鳴るぞ席に着け。他のクラスの生徒は教室に戻りなさい」

如月が海の事を気にして早めに教室に入ってきた。

「先生、今日はやけに早いな」

男子生徒が怪訝そうに言ってきた。

「たまには、良いだろ。テストも終わって少し弛み気味だからな、気を引き締めに来たんだ」

「相変わらず厳しいなもう」

「ちゃんとしていれば先生は何も言わないだろ」

「はい」

予鈴が鳴り、生徒が予鈴に気を取られている時に、隆羅の口が動いた「大丈夫か」と海はただ頷いて答えた。

授業が始まり授業の間の休憩時間は教室の移動やクラスメイトからの質問に少しだけ答えていた。

昼休み前の授業の終わりに隆羅は教室の向かいの廊下に居た。

そして海と目が会つと「ルコと弁当」と口を動かした。

「えっ？ ルコ？ 弁当？」

海が不思議に思っ居ると授業が終わり鐘がなる。すると直ぐに校内放送が始まった。

「3年A組の水無月 海さん至急進路指導室まで」

「海、何をしたの？」

ルコが心配して海に聞いてきた。そこで隆羅の言葉の意味を理解した。

「ルコ。お弁当を持って一緒に進路指導室まで来て」

「うん、分かった」

2人で弁当を手に教室を飛び出した。

「あつ、海ちゃん。待ってよ、聞きたい事いっぱいあるのに」

海の回りに集まりかけていた女生徒が地団駄を踏んでいた。

海がノックをして進路指導室に入る。

「失礼します。3-Aの水無月です」

「こつちにいらっしゃい」

進路指導室の中に居たのは副担の英語の堤先生だった。

「堤先生、私何か？」

「そうじゃないの、何だか雑誌の事で大変な事になっているから如月先生がここで食事させてやってってくれて」

「そうなんですか？」

ルコがほっと一息ついて安心した。

「ゆつくり食事しなさい、先生はこれで失礼するわ。30分位したら鍵を閉めに来るからね」

「あのう、如月先生は」

「今、来客中よ」

「そうですか有難うございました」

「良かったね、海」

「うん、でもこの後どうしよう」

「覚悟して教室に戻るしかないよね」

「そうだね、とりあえずお弁当を食べよう」
「そうしよう」

ゆっくりと弁当を食べ終わって教室に戻ると、大勢のクラスメイトや生徒が待ち受けていて廊下まで人だかりが出来ていた。

「海ちゃん、誰と旅行に行ったの？」

「海、ルコ達も一緒だったよね」

ルコが必死にフォローするが焼け石に水だった。

「じゃ、あの彼氏は誰なの？」

「それは……」

ルコが詰め寄られて困っていた。

指が鳴った気がして海が隆羅を探す。

向かいの校舎に隆羅の姿が見えた。

すると「俺の甥っ子」と隆羅の口が動いた。

「如月先生とルコの家族と一緒に、その人は先生の甥っ子なの」
海が周りに集まったクラスメイトにはつきりと答えるとルコが驚いていた。

もう覚悟を決めるしかなかった、隆羅の事を信じて。

「ええっ、先生の甥っ子なの？ だから似ていたんだ」

「じゃ、付き合っている訳じゃないの」

「うん。でも、とっても良い人だよ優しくって」

「先生に聞いてみようよ」

「でも、先生は何処にいるのかなあ」

その時、渡り廊下で声がした。

「コラ！ 廊下を走るなよ」

「す、スイマセン」

廊下を走っている生徒を注意する如月の声だった。

「居た！ 渡り廊下だ」

誰かがそう叫ぶとクラスメイトが一斉に渡り廊下に向かった。

「流石だね、パパ」

「うん！」

隆羅が海への好奇心を一遍に自分に向けた。

「先生、如月先生！」

「どうしたんだ大勢で？」

「あの、ゴールデンウィークにルコちゃん達と旅行したって本当ですか」

「そうだが何か問題でもあるのか？ 水無月も葉月達と暮らしているから一緒だったか」

「この、男の人は誰ですか」

1人の女生徒が雑誌Kanonを指差した。

「こいつは、クソ生意気な先生の甥っ子だ。葉月と水無月だけじゃ退屈だろうと誘ったんだが失敗したよ、こんな大騒ぎの原因を作るなんて」

隆羅の声は普段より大きかった。そして渡り廊下は声がよく響き渡った。

周りの生徒も聞き耳を立てていた。

「なんだ、そうだったんだ。やっぱり高良って苗字だったんだね」

「でも海ちゃんて凄く可愛いよね」

「そうだね、先生はどう思いますか？」

「どうと言われてもな、良いんじゃないか雑誌に載る機会なんてめったに無いしな」

「これからも2人で会ったりするのかなあ」

「それは、2人の自由じゃないのか、連絡先も聞いていたし」

「先生の甥っ子か、良いなあ」

「先生、私達にも誰か紹介してくださいよ」

「そんなに甥っ子や親戚がいる訳無いだろうが、そろそろ予鈴が鳴るぞ教室に戻りなさい」

「はい」

そろそろと各々の教室に戻って行った。

見事な隆羅の一本勝ちだった。

トラブル - 2

学校での『ファッション雑誌Kanon』の騒ぎは静まって行つた。海が可愛いと言う事と如月先生ともルコ達の関係で仲が良い事を生徒たちに植え付けて。

試験も無事終わり後は夏休みを待つだけとなっていたがそれは突然訪れた。

もう一つの騒ぎが起きようとしていた。

授業が終わり放課後の校内放送が始まりだった。

「3年A組の水無月 海さん至急校長室までお越しください」

「ええっ、今度は何？」

海が一番驚いていた。

「海、付き合うからとりあえず行かなきゃ」

「う、うん」

ルコに付き添われ海が校長室に向かう。

「廊下で待っているからね」

「ありがとう」

「失礼します」

海がノックをして校長室に入るとそこには校長と如月先生が座っていて、その向かいには海の母親が座っていた。

「えっ、お母さん？」

「そこに座りなさい」

「はい」

海の方を見て如月先生が座るように促すと海が如月の言葉に素直に従い母親の隣に座った。

「如月先生どうしたのですか」

校長が困惑の表情を浮かべて如月に尋ねた。

「少し話を聞きましょう」

「お母さん今頃何をしに来たの？ 1年も連絡もくれないで」

「海、ゴメンなさい。雑誌のあなたを見たら会いたくなって。お母さんも大変だったのよ。お父さんと別れて生活をしなきゃいけない」

「それで、今更何の用なの？」

「お母さんと一緒に暮らして欲しいの」

「嫌だ！」

「あなたは、まだ、未成年なんだし、親の言う事を聞きなさい」

「嫌！ そんな未成年の私をを1年間もほったらかしにしたのは何処の誰なの？」

「だから、謝っているじゃない」

様子を伺っていた如月は母親に僅かに男性の影を見た。

「お母さん、水無月さんは未成年と言ってももう直ぐ20歳です。

彼女の意見を尊重してあげませんか？」

「先生は人の家庭まで口出しをするんですか？」

「お母さん、いい加減にして！ 誰のおかげで私がこの学校に居られると思っているの？ 私、お母さん達がマンションを引き払って居なくなつた時に本当に死のうとしたの。それを助けてくれたのは如月先生なんだよ」

海が唇をかみ締めスカートをギュツと握り締めている、母親は俯いて何も答えなかった。

「き、如月先生そんな事が」

「校長、この件に関しては私に一任して頂けませんか？」

「判りました、お願いしますよ」

校長が思わぬ水無月の言葉に動揺していた。

如月が校長を落ち着かせるように全責任を負おう事を告げる。

「どうしますか、お母さん？ 水無月さんはこう言っていますけれど。それに私の目の前で葉月の母親にお願いしますと言い、生活費も支払うと約束しましたが守られていないようですが。それと授業料の方は私が立て替えて支払いをしています」

「お金の事なら少しずつお返ししますから」

「そう言う事を言っているんじゃないんですよ」

如月の声が優しくなった。

すこし間を置いて如月が諭すように話し出した。

「今、男性と暮らしているんじゃないのですか？」

「な、なんで、そんな事を？」

「人と係わる仕事を長くしていると判るんです、なんとなくですがね。今の家庭環境では水無月さんをお渡しする事はできません。私も彼女を１年間見守ってきた責任がありますから教師生命をかけてもお渡ししませんがどうなさいますか？」

「そんな、先生」

如月が何かを言おうとした海を一瞥して制した。

「もう少し時間を置いてそれからでも遅くは無いと思いますが」

「この子は未成年なんですよ！」

母親が突然声を荒げた。

「彼女が言いましたよね。あなたは１年も何故連絡すらしなかったのですか？ それでも親だと言えますか？ 彼女がどれだけ不安だったか考えた事がありますか？ 私も子どもを育ててきました。そしていろいろな生徒を何百人と見てきました。どんな事しても親子の縁は切れないんですよ、たとえ親の事を嫌っていても」

如月の言葉はとても力強く、そして真つ直ぐな言葉で母親にはとても重い言葉だった。

「海、そんなにお母さんと一緒に嫌なの？」

「今の生活が一番幸せなの」

「どうでしょうか、お母さん？」

その時、廊下の方が急に騒然として話し声が校長室まで聞こえてきた。

「困ります、いくら保護者だと言われても」

「娘に会いに来てないが悪い、会わせろ」

すると校長室のドアが蹴り飛ばされた。

「おお、お前が海か。結構、可愛いじゃないか」

校長室に乱入してきたのはガラの悪いチンピラ風の男だった。

「あなた、やめて頂戴」

「お母さんこの人は？」

海が怯えている、如月が海を守るように海の前に立ち上がった。

「ああっん、何だてめえ！」

「彼女の担任だ」

「先公か退けや」

男が隆羅の胸座をつかもうとした。

次の瞬間、何かを叩くような音が数回したかと思うと隆羅が男を後ろ手に取り押さえ、男の耳元で囁いた。

「如月のツインドラゴンを知っているな。2度は無いと思えいいな、生きて居なければ他言は無用だ」

男が何も言わずに頷き、恐ろしいほどの殺気を感じたのだろう男がガタガタと震え出している。

校長、海そして母親はあつという間の出来事に呆然としていた。

「校長、どうしますか？」

隆羅の声に3人が我を取り戻した。

「仕方が無いですね警察に連絡しましょう」

「海、ゴメンなさい。後から荷物を取りにいらっしゃい。如月先生申し訳ございませんでした、これから娘の事を宜しく願います」

海の母親が涙を浮かべながら深々と頭を下げた。

しばらくして警察がやって来て男を引き渡す。

そして海の母親からも事情を聞きたいからと警察に連れて行かれてしまった。

隆羅の口が「すまない」とだけ動いた。

「水無月君、シヨックだろうが今日はこれで帰きなさい良いね」

「はい、判りました」

校長に海が優しく言われて校長室を後にしようとして、隆羅を見るととても申し訳なさそうな哀しい目をしていた。

校長室を出るとルコが不安な顔をして鞆を持って待っていてくれた。

「海、怪我は無い？ 大丈夫なの？」

「うん、ありがとう」

「もう、帰ろうね」

「うん」

海はルコに付き添われ昇降口に向かい歩き出した。

「如月先生、これからどうしますか？」

「校長、この件は」

「そうでしたね、一任しますからお願いしますよ。大切な生徒達ですから」

「これから警察に行き、もう一度母親と話をしますよ」

「そうですか、ご苦労ですけど頼みましたよ」

「はい」

隆羅は警察に出向き事情を話し海の母親に面会した。そして連絡先を聞いて男と別れない限り海を渡さないという約束を取り付け。

しばらくは会わせられないと告げると母親は流石に観念したのか了承した。

隆羅がマンションに戻ると海は居なかった、ルコの所にもいるのだろう。

ソファアに座って居るとマロンが体を摺り寄せてきた。

「お前は気楽で良いな」

「ナァ？」

腕を組んでうつむき目を閉じて考え事をして居るとドアが開く音がした。

「隆羅、帰っているの？」

海の声に隆羅が何も言わずに海の顔を見上げる。

隆羅の瞳はとても哀しそうだった。

「そんな顔しないで隆羅。私の為に……お願いだから」

海の頬を涙が伝った。

「隆羅、私……」

「こっちに、おいで」

隆羅がゆっくり息を吐いて優しく海に言った。

海が静かに泣いた、隆羅の胸のなかで……

「本当にこれで良かったんだな？」

「うん、だってもう隆羅のいない生活なんて考えられないよ」

「でも、親子なんだぞ」

「あんなのお母さんじゃないよ」

「そうか」

隆羅は確信した時間だけが癒してくれると、そして海が母親になった時に判ってくれるだろうと。

一番辛いのは海自身なのだから、優しく包み込んだ。

「隆羅、ありがとう。また助けられちゃったね、教師生命かけてなんて駄目だよ」

「言っただけだぞ。大切なモノを守る為なら何でもすると」

「えへへ、嬉しいなあ」

海が子どものように隆羅のシャツを握り締めたまま眠ってしまった。隆羅はいつまでも優しく抱しめていた。

翌日は終業式だった。

ルコが朝、海を迎えに来た。

「海、おはよう。学校に行こう」

「おお、ルコ。最近は不法侵入してこないなあ」

隆羅がドアから顔を出した。

「挨拶もしないでいきなり失礼でしょ。パパ」

「すまん、すまん。おはよう」

「おはようパパ。海はどうしてる？」

ルコが心配そうな顔をした。

「いつも通り、元気だぞ。海！ 行くぞ」

「ハイ」

海が元気良く走って玄関に来た。

「行くぞ」

「うん」

「はい」

隆羅が2人に声を掛けてエレベーターで下に降りる。

3人一緒に学校に向かい歩き出した。

「あれ、パパ。バイクじゃないの、今日は？」

「車検に出しているんだ。車じゃ目立つからな」

「じゃ、今朝は一緒に学校に行けるんだ。やったー」

海が嬉しそうに両手を突き上げて飛び跳ねた。

「良かった。海が元気そうで、心配していたんだよ」

「ルコ、ありがとう。でも平気だよ、私には隆羅が居てくれるんだもん」

「そっか、心配しなくても大丈夫なんだ」

ルコが照れくさいような嬉しいような顔をしながら体を左右に揺らしていた。

「俺は、ルコの赤点の方が心配なんだがなあ」

「ブー」。気持ちの良い清々しい朝から、そんな事を言っかな普通」

「先生だからな」

「でも、パパは知っているんでしょ。もう」

「いや、知らないぞ。各教科の先生が付けるからな」

「えっ、本当に？」

ルコが立ち止まって固まってしまう。

「おいおい、勘弁してくれよ。夏休みの間中補習なんて」

大学の付属高校だけあって、赤点には厳しかった1つでも赤点があれば夏休みの大半を補習に費やす事になってしまう。

それ以外の事に関してはかなり寛容な学校だった。

「どうしよう。でもパパも学校なんだよね」

「残念でした。当番の日以外は交代で有給を消化するのが職員の間では慣例になっていているんだ」

「ええっ、本当に？ 夏休みの間ずっと学校かと思っていたのに。一緒に居られるの？ ヤッホー」

海が両手を挙げてピョンピョンと飛び跳ねて喜んだ。

「いいよね、海は赤点なんて縁が無いもんね。いつも上位の成績だし。ズルしてないよね」

ルコが隆羅の顔を睨んだ。

「バーカ。俺と暮らす前から海は成績良かったじゃないか」
「そうでした」

そうこうしている内に学校に着いた。
生徒達が楽しげに校門に入っていく。
皆、夏休みが待ちどろしいのだろう。

「おはようございます。先生」

「おはよう」

他の生徒に挨拶されると隆羅が先生の顔になった。

「ルコ、海。先生、おはよー」

「今日は3人で登校が羨ましいなあ。でも海が元気そうで良かったよ、後からね」

クラスメイトが声を掛けてくる。

「うん、ありがとう」

「水無月、良かったな」

「うん、先生のおかげだもん」

「葉月もこれから宜しくな」

「了解！ 任せなさい。海、教室に行こう」
「うん」

2人が走り出した。

教室に着くと一斉に皆が海の顔を見た。

「おはよー」

海が笑顔で元気に挨拶をした。

「おつはー」「おはよう」「おす」

各々挨拶をし元気そうな海を見たクラスメイトは何も聞く事はしなかった。

「良かったね、海」

「うん、そうだねルコ」

「みんな、そろそろ体育館に移動するよ」

クラス委員長が声を掛けるとゾロゾロと体育館に移動して簡単な終業式が行われた。

教室に戻りホームルームが始まる。

「明日から夏休みが始まるが規則正しい生活をして、羽目を外さない様に。まあ、成績が悪かった人は夏休みなんて殆ど無いけどな。」

葉月、聞いているのか？」

ドツとクラスが沸いた。

ルコが両手を握り締めて何かに縋るような神妙な顔をしていた。

「成績表を返すぞ」

主席番号順に名前が読み上げられていく、そして1人ずつ声を掛けていく。

「葉月 ルコ」

「は、はい」

ルコが緊張の面持ちで教壇の前まで歩いてくる。

「良かったな」

如月が声を掛ける。成績表をドキドキしながら開けると赤点だけはどうにかギリギリ免れていた。

「ヤッホー！ これで遊べる！」

あまりの嬉しさにルコが飛び上がった。

「葉月！ 先生が羽目を外すなと言ったばかりなのに」

「ご、ゴメンなさい」

クラス中が大笑いした。ルコが真っ赤になって席に戻り机に顔を埋めた。

「水無月 海」

「はい」

「いろいろな事があつたが良く頑張つたな。クラスストップだ」
「すげー」

歓声が上がつて拍手する生徒も居た。

海は照れながら席に戻つた。

成績表を皆に渡し如月が閉めの挨拶をする。

「それでは、これで今学期を終了する。また新学期に元気に会いましょう。怪我なんかしないように、それとくれぐれも課題は忘れなように。委員長」

如月に促されて委員長が号令をかける。

「起立。礼」

「よっしゃ！ 終わつた！」

「これから何処に行く？」

クラスメイトが教室をぞろぞろと出て行つた。

クラスがざわついている中で「校門で」と隆羅の口が動いた。

「先生。さようなら」

「気を付けて帰れよ」

生徒に声を掛け教室を後にして如月が職員室に戻る。

「如月先生は、今学期大変でしたね」

「まあ、仕方の無い事です。いろいろな事情の生徒が居ますから」

「でも、すべて解決してしまうなんて凄いですよ」

「そうですね？ 教師として当たり前かと」

「いえいえ、ご謙遜を。当校の鏡ですからね」

「では、私はこれで失礼しますが。問題は無いですね」

「ええ、どうぞ」

「相変わらず仕事の片付けも早いんですね」

「普段からしていますから。それでは」

他の先生に一礼をして職員室を後にする。

校門ではルコと海が待っていた。

「待たせたな」

「先生、帰ろう」

「ああ」

夏休み - 1

これから楽しみな高校生活最後の長い夏休み。

それはとても熱い熱い夏休み楽しみ。

夏休みの前半は如月パパが当番で毎日のように学校に行ってしまった。土日も補習の準備でバタバタとしていたけれど。

私は海と茉弥を連れて買い物に行ったり、ベランダで水浴びをさせたりして過ごしているんだ。

それでも時間があれば如月パパは3人を連れてプールに行ったり、みんなで食事をしたり楽しく過ごす時間も大切にしてくれたんだよ。そして夏休みも残り半分になった時に……

海が楽しそうにハミングしながら大きなバッグに荷物を詰めていた。

「海、何をしているんだ？ 旅行か？」

「あれ、聞いて無いの？ 沙羅さんが旅行に連れて行ってくれるって。隆羅の荷物も一応詰めておいたけど」

「そんな話、聞いてないぞ。何処に行くんだ？」

「それは、知らないよ。とっても楽しい所だって、隆羅も明日からしばらく夏休みなんですよ」

「ああ、確かに有給を取ってあるが。明日の午前中は引継ぎがあつて学校だけだな」

「そうなんだ、変だなあ。お昼頃出発って聞いたけど」

「まあ、楽しんで来ればいいさ」

「そうなの？ 隆羅と一緒にゃなければ私ちょっと嫌かも」

「沙羅に誘われたんだろ、行って来いよ」

「でも、少し詰まんないなあ。隆羅の居ない時間なんて」

「海、自分の時間も大切にしないとな。今は今しかないんだ、今楽しいと思える事が一番楽しんだぞ」

「そうだね」

翌日、隆羅は補習の引継ぎの為に学校に居た。

それ程時間が掛からずに引き継ぎはスムーズに終わり校庭を見ると暑い中でも運動部が部活をしていた。

しかし夏休みと言う事もあってそれ程大人数ではなかった。

「さあ、休みは何をするかなあ。しかし、海が居ないと……って。俺は何を言っているんだろうなまったく」

海とまったく同じ事を考えてしまう自分がそこに居た。

「とりあえず、帰るか」

独り言を言いながら校舎を出ると携帯が鳴った。

「タカちゃん、迎えを行かせたから急いでね」

「おい、お袋？ 切れたナンなんだいたい、迎えって？」

綺羅が用件だけ矢継ぎ早に言々と携帯が切れた。

少しするとヘリコプターが近づいてくるのが見えた。

しかし、どこからどう見ても軍用ヘリなのだ。

嫌な予感がするが仕方なく校庭に向うと隆羅の近くにUH-60ブラックホークが着陸した。

「まったく無茶な事ばかりしやがって」

校庭で部活をしていた生徒は深いオリブグリーンの軍用ヘリコプターが突然校庭に着陸して、呆気に取られていた。

校舎に居た先生方も驚いて何事かと校庭に出てきた。

そんな先生方に一礼をして隆羅が乗り込むと直ぐにブラックホークは飛び立った。

「如月先生ですよね、あれはどう見ても」

「ええ、そうですね」

「そうそう、私聞いた事があるわ。確か如月先生は大企業の御曹司だって」

「それは、本当なんですか？ 堤先生」

「いえ、私も人伝で聞いただけですから」

その頃、海達は羽田空港ビッグバードの南ターミナルに居た。

「飛行機で何処かに行くんですか？ 沙羅さん」

海が不思議に思い沙羅に尋ねた。

「そうらしいんだけど」

「そうらしいって、もしかして沙羅さんも詳しい事を知らないんじゃない」

「ええ、そうなのよ」

「ママ、しっかりしてよね」

「しょうがないじゃない、おば様にここに来るように言われたんだから」

「おば様って、隆羅の？」

「そうよ」

「皆さんお揃いね。こっちにいらっしやい」

そこに綺羅の声が響き綺羅が迎えに現れゾロゾロと綺羅の後を着いて行く。

「あのう、おば様。何処に行くんですか？」

「あら、海ちゃんお久しぶりね。南の島よ」

「南の島って何処の？」

「大丈夫、とても楽しい所だから。さあ、これで移動しましょう」

綺羅の先には、映画でしか見た事も無いような大きな黒塗りのリムジンが止まっていた。

リムジンに乗り飛行場内を移動する、しばらくすると黒いジェット機が見えてきた。

ジェット機と言ってもジャンボよりは小さいがかなり大きな機体だった。

「荷物は置いたままで、飛行機に乗ってね。運ばすから」

綺羅に言われるまま飛行機に乗り込む。

「沙羅さんとルコちゃんはここ、海ちゃんはそっちに座ってね。茉莉ちゃんはこのカプセルがいいかもね」

そのカプセルは揺りかごのようになっていた。

「あの子は、遅いわね。何をしているのかしら」

「他に誰か来るんですか？」

「主役よ、ご到着みたい」

ルコが綺羅に聞くとヘリコプターの音がしてジェット機の横に軍用ヘリのUH-60ブラックホークが着陸した。

そしてドアが開き眩しそうな顔をしてスーツ姿の隆羅が降りてきた。

「海、凄いよ！ ハリウッ드의映画みたい」

「……………」

ルコが興奮して海に声を掛けるが海の返事が無かった。

「海？ 海！」

「ルコ、呼んでも無駄よ。2人の世界にトリップしちゃったみたいだから」

いくら呼んでも返事はなく、海はトロンとした表情をしていた。

そんな海を見て沙羅が呆れていた。

隆羅がタラップを上がり機内に入ってくる。

「皆さんお揃いで。お袋、一体この騒ぎは何があるんだ？」

「ゴールデンウィークに顔を見せてと言ったのに、タカちゃんは皆で仲良く清里に旅行に行ったでしょ。ママを仲間はずれにして、だから今回は仲間はずれにならないようにしたの」

「で、この騒ぎか。学校に軍用ヘリまで着陸させて」

「あら、許可はちゃんと取ってあるわよ」

「許可とかそんな問題じゃ無いだろ。どこまで行くつもりなんだ」

「沖縄の石垣島よ」

「俺は、降るぞ」

隆羅がそう言っただけ振り返るとそこでドアが閉められた。

「嵌めたな。沙羅は知っていたんだろ」

「隆羅。私がおば様に逆らえると思っただけ？」

「そうだな。しょうがないか。しかしだな、この機体は開発中の筈だが」

「テスト飛行よ、ちょうど良いでしょ」

「皆の命を懸けてのか？」

綺羅は暢気に答えているが隆羅の顔は真剣そのものだった。

「お、おば様、それって大丈夫なんでしょうね」

「うちで開発した最新鋭機よ、ジャンボの倍は速いわよ。茉弥ちゃんは今カプセルに入れてあげてね、その中は地上と同じ環境になるようにセットされているから」

「心配するな、大丈夫だから」

「隆羅がそう言うなら……」

沙羅が心配そうな顔で言うが既に乗り込んだジェット機は離陸する為に滑走路に向かい。

茉弥はとうにカプセルの中で気持ち良さそうに眠っていた。

隆羅が上着を脱いでネクタイを緩め海の隣に座った。

海は満面の笑顔だった。

「海、やけに嬉しそうだな？」

「だって、隆羅が清里のホテルで話してくれた沖縄の島に隆羅と行けるんだよ」

「そうだな、夏休みだもんな。楽しまなきゃな」

「そうそう、今楽しいと思えることが1番なんですよ」

「そうだな」

ジェット機が滑走を始めた。

そして飛び立ちかなりの高度まで上昇した。

「そろそろ、大丈夫かな。俺は寝るぞ」

隆羅がシートを倒すとそれに合わせて海もシートを倒し隆羅の肩に頭を置いた。

「2人は相変わらずね。でもこの飛行機凄いわ」

「あら、沙羅さんには判るのねたいしたものね。私も少し休みましよう、1時間ちよつとで到着するからね。おやすみ」「ママ。1時間ですって早すぎない？」

「おば様が言ったでしょ。ジャンボの倍だって、外を見て御覧なさい。戦闘機と同じ高度を飛んでいるのよ」

「嘘でしょ。うわあ、凄い真っ青だ」

そこは今まで見た事も無いような青い世界だった。

綺羅の言うとおり1時間もすると徐々にジェット機が高度を下げ始めた。

「到着するわよ。シートを戻しなさい」

「隆羅、起きて。着くつてよ」

「分かった」

「海、俺に掴まっている」

「なんで？ 分かった」

海に起こされて隆羅がシートを戻して隆羅が前のシートに手を着いた。

海は少し不思議に思ったが隆羅の言うとおりに隆羅の体に掴まった。着陸した途端に逆噴射と急ブレーキがかかり前のめりになりそうになった。

「きゃあ！」

ルコが声を上げた。

「ビ、ビックリした。隆羅、何だったの？」

「石垣島の空港は滑走路が短いから着陸と同時に逆噴射を掛けないと止まらないんだ。さあ、降りるか」

タラップに出ると真夏の太陽の強い日差しが刺す様だった。

歩いて到着ロビーに向かいそのまま外に出る。

「ねえ、隆羅。荷物はどうするの？」

「運んでくれるさ」

「誰が？」

「ほら」

飛行機の方を見るとスーツ姿の男達が荷物を運んでいた。

「お袋、車はあれか」

「そうよ」

駐車場にあったのは清里に行った時の様なとても大きなワゴンだっ

た。

隆羅が運転席のドアを開けて乗り込む。

海は助手席に、沙羅とルコ、綺羅は後ろに乗り込んだ。

しばらくすると後ろの扉が開けられ荷物が運び込まれた。

「何処のホテルなんだ？」

「ホシザキ リゾートよ」

「了解」

隆羅が車を出す。空港から20分ほどでホテルに着いた。

そのホテルは沖縄独特の赤瓦のコテージタイプのホテルだった。

チェックインを済ませ、部屋に向かう。

館内にはハイビスカスやブルーゲンビリアなどの南国の花が咲き乱れていた。

「この、3軒がそうだな」

ルームナンバーを確認して隆羅が荷物を持って端のコテージに入っていく。

「隆羅、待つてよ」

海が隆羅の後を追いかけた。

「じゃ、私達は真ん中のお部屋にしましょう」

「そうだね」

沙羅がそう言つてルコが茉弥を連れて部屋には入る。

「残ったのが私のお部屋ね」

綺羅も自分の荷物を持ち部屋に入った。

「隆羅、素敵な部屋だね」

部屋の中は籐家具で統一されたアジアチックな部屋だった。

「着替えるかな」

「隆羅、いつもの服しか持つて来て無いよ？」

「問題ないさ」

隆羅が着替えを済ませベッドで横になり伸びをすると海が隆羅の横に寝転んだ。

「石垣島か……」

「いつ頃、ここに居たの？」

「大学をでてしばらくな」

「そうなんだ」

「やけに、嬉しそうだな」

「だって、まだ知らない隆羅の事を知る事が出来るかもしれないんだもん」

すると隆羅の携帯が鳴った、綺羅からだった。

「なんだ、お袋？」

「夕食を7時に予約してあるから、それまで自由時間にしましょう」
「分かった、お袋は明日からどうするんだ？」

「タカちゃんと海ちゃんの顔を見られて満足だし、それにあのジェットの報告もあるし別行動ね。用があれば連絡するわ」

「そうか」

隆羅が携帯を切ってベッドから起き上がって海に声を掛ける。

「海、ホテルの中でも散歩するか」

「うん、行こう。でも、沙羅さん達は？」

「大丈夫だ。前に来た事があるしな」

「えっ、そうなんだ。家族旅行だったの？」

「そうだな、散々連れ回されたけどな。行くぞ」

「うん！」

部屋を出てビーチに向かう、防風林の中に道があり遊歩道みたいな感じになっていた。

林を抜けると目の前に綺麗な海が広がっていた。

「あっ、栈橋がある」

「転ぶなよ」

「子どもじゃないんだから。キャー」

海が急に走り出して隆羅の注意も届かないうちに海が躓いて手を着いてしまった。

隆羅が海を抱き起こすと目を細めて海を見ていた。

「子どもみたいだな。よつこらしよと、大丈夫か？」

「う、うん。隆羅、笑っているんでしょ」

「ぜんぜん、そんな事はあるぞ」

「ぶうー、変な日本語だし」

「ほら、行くぞ」

「うん、ありがとう」

隆羅が手を出すと海が嬉しそうに隆羅と手を繋いで棧橋の端まで行く。

「しかし、暑いなあ」

「でも、潮風が気持ちいいよ」

海の髪の毛が海風に揺られてキラキラと輝いていた。

「綺麗だな」

隆羅がしばらく見惚れている。

「ねえ、隆羅。どっちが綺麗なの？」

「髪が」と口を動かした。

「う、ずるい。似た言葉は区別付かないよ」

「海がだよ」

「えへへ、ありがと。でも海も綺麗だよね」

「ここは、名蔵湾の中だから泳ぐにはあまりお勧めは出来ないけれどな」

「ええつ、こんなに綺麗なのにな？」

「そうだな、もっと綺麗だぞ石垣島の海は。さあ、行こうか」

ビーチに戻り砂浜を2人で手を繋ぎながら歩く。

「砂の感じも違うんだね」

「手に取って見たらよくわかるぞ。白い砂の中に細かい珊瑚の欠片や貝の欠片で出来ているだろ」

「本当だ、いっぱい混ざっているね。あれ、この変わった形の砂は何？」

海の掌には子どもが描いた太陽みたいな砂と海星の様な砂が付いていた。

「海は幸せになれるかもな。それは太陽の砂、そしてこの小さいのが星の砂だ」

「この砂浜にも星の砂があるんだ」

「大抵の砂浜にはあるぞ。有孔虫と言う珊瑚の仲間に近い生き物の骨格だな」

「生き物なのこれが」

「死骸だけだな」

「ムードぶち壊しじゃん」

「悪かったな」

「でも、幸せにしてくれるんでしょ」

「それは、少し違うかな。幸せになりたいのなら自分も頑張らなとなれないぞ」

「頑張るもん。誰よりも幸せになるんだから」

「海は頑張り屋さんなんだな」

「うん。隆羅、上に何かあるよ」

ビーチより一段高くなった所に傘の様な屋根が見えてその横にはビーチパラソルが並んでいた。

「プールとプールサイドバー、そしてバーベキューテラスがあるんだよ。トロピカルジュースでも飲むか？」

「飲みたい」

プールサイドバーに行きカウンターに座ると、真っ黒に日焼けをした青いポロシャツの良く似合う女の子の店員がメニューを出してくれた。

「凄い、海がキラキラしてる」

「何を飲むんだ」

「隆羅のお薦めは何？」

「オゾンビールかなあ」

「もう、それは自分が飲みたいんでしょ」

「マンゴー、グワバ、パッションフルーツ、パイナップル、シークワー

サー何でもあるぞ」

「ねえ、このティーダってどんなの？ 第一回八重山カクテルコンペティション ソフトドリンク部門 最優秀賞作品って書いてあるよ」

「美味しいぞ、甘くて」

「じゃ、これ」

「俺は、ヒラミを」

「はい、かしこまりました」

店員の女の子が笑顔で返事をして注文したドリンクを作りはじめた。

「隆羅、ヒラミなんてどこにも無いよ？」

「シークワサーの別名でヒラミレモンでも通じるぞ」

「ふうん、そうなんだ」

カウンターの中では女の子が手際よくドリンクを作っていた。

ミキサーの中にバナナやアイスクリーム、赤いジュースや赤いシロップを入れてミキサーにかけていた。

ティーダはトロピカルグラスに入っていて黄色いハイビスカスがデコレーションされた綺麗なピンク色のジュースだった。

「こちらが、ティーダになります。こちらがヒラミです。ごゆっくりどうぞ」

「わあ、可愛い。どれどれ」

海がストローでティーダを一口飲んだ。

「た、隆羅。凄く美味しいよ」

「よかったな」

「隆羅のは、どんな味がするの？」

「ほら、味見してみろ」

海が隆羅の前にあるグラスを手に取り黄色いジュースを少しだけ飲んだ。

「レモンみたいな感じかなあ」

「沖縄特産の柑橘系のミカンの原種に近い果物だからな」

「このティーダってとっても美味しいけど何が入っているんだろう」

「グワバジュース、バナナ、バニラアイス、カルピスとグレナデンシロップにレモン果汁」

「なんで、隆羅が即答出来るの？」

「企業秘密です」

「企業じゃないくせに。ケチ」

「ケチ言うな。コラ」

そんな話をして居ると、バーベキューテラスの入り口の方から数人の男女が駆け出して近づいて来た。

「居た！ やっぱ先輩だ！」

「本当だ！ 主任！」

「お、久しぶりだな。みんな元気だったか」

駆け寄ってきたホテルのスタッフ達に隆羅が笑顔で答えた。

「主任、いつ来たんですか？」

「おいおい、山中。主任は止めてくれよ。今日、着いたんだ」

「あれ、その女の子は？ 娘さんじゃ無いですよね」

「彼女、だな」

隆羅が照れ臭そうにはにかみながら答える。

「か、彼女って。バツイチで娘さんみたいな彼女、犯罪ですよ」

「犯罪って言うな」

「ああつ、彼女にティードですか。自分が考えたドリンクなんて嫌らしいなもう。主任は」

「た、隆羅。この人達は？」

海が突然現れ親しげに話をしているスタッフ達に困惑している。

「このスタッフだぞ」

「はじめまして、山中 藍やまなか あいつて言います。昔、如月先輩と働いていたんです、そのドリンクは如月先輩が考えて、私がコンペで作って優勝しちゃったんです。先輩に半分無理矢理に嫌々出されたんですけどね」

「ええつ、隆羅ここで働いていたの？ それでこのドリンクは隆羅が考えたって」

「まあ、そうなんだが。後でゆっくり説明するからとりあえず紹介だけな。後ろに居るのが黒崎と杉田、そして坂上だ」

名前を呼ばれたスタッフが順ににこやかに海に手を振った。するとひよろつとした杉田が音頭をとった。

「先輩、そのめちやくちや可愛い彼女の紹介をヨロシク！」

「彼女の名前は水無月 海。世界で1番大切な人だ」

隆羅の言葉に反応して海が耳まで真っ赤になった。

「ウオオオー！」

スタッフ達の歓声が上がった。

「今回は2人きりなんですか？」

「沙羅達も来ているぞ」

「沙羅さんって前に来た時の奥さんの？」

「今は大切な友達だからな、それに娘のルコと俺のお袋と孫付きだ」

「孫って？ 先輩、お爺ちゃんなんですか？ すぎえなあ」

真っ黒に日焼けした黒崎が目をまん丸にして驚いた。

「如月さんってグランパなんだ。でもなんだか格好いいかも」

「それより、お前達。時間は大丈夫なのか？」

小柄な女の子の真面目そうな坂上が照れるように言うと、隆羅が腕時計に目をやって時間を確認した。

「やばい、マネージャーに怒られる」

「後からな」

「ハイ」

4人が慌ててレストランの方に向かって走り出した。

「隆羅、ちゃんと説明をしてちょうだい」

「何だか、沙羅みたいだな。海？ 海ちゃん」

とても低い海の声がして隆羅がからかうように言っても海の返事は返ってこず、代わりに海の怖い視線が返ってきた。

「大学を出てから、何年かここで働いていたんだ。このドリンクも山中が言っていたとおり俺が考えた物なんだけど他に聞きたい事は？」

「少し驚いちゃった。知らない隆羅がいて、あんな風に楽しそうに私以外の人と話すのはじめて見た」

「この島はそんな島なんだ。肩書きや年齢なんて関係なく自然体で居られる島なんだよ。今回はこんな形で石垣島になったけどな。本当は俺が海を1番連れてきたかった所なんだよ」

「そうなんだ、私も自然体で居られるかなあ？」

「海なら大丈夫だよ。2、3日すれば分かるさ」

それは直ぐに実感できるようになった。

「あの、山中さんとお知り合いなんですか？」

カウンターの中に居た日焼けした女の子が聞いてきた。

「昔、ここで働いていたからね。このプールサイドバーを考えて立ち上げたのも俺達だしね、1週間くらいステイするからヨロシクね」

「はい、こちらこそ」

女の子が笑顔で答えた。

そしてもう1人ヘルプの女の子がバーに入ってくる。

「海、そろそろ行こうか、ここも夕食の準備で大変だから」

「うん、そうだね」

隆羅が伝票にサインをして席を立った。

テラスを見るとスタッフが忙しそうに準備をしている。

さつき隆羅と話をしていたスタッフと目が合うと手を振ってくれた、海も自然に笑顔になって手を振り返していた。

約束の時間まであったのでブラブラして売店を覗いて見ていた。

「可愛い髪留めが沢山ある、これも可愛いなあ。隆羅？」

「良いんじゃないか、似合いそうだな」

「本当に？」

「ああ」

レジで会計をしていると売店の外からルコの声がした。

「居たよ、ママ。探したんだよ、パパ」

「プールサイドバーにしばらく居たけどな」

「また、海が何か買ってもらってる。ずるい」

「いいんだもん。隆羅が買ってくれるって言うし」

「この頃、海も言うようになったよね」

「良い事じゃないか」

「そうね、良い事よね」

沙羅が珍しく隆羅の言葉に同意した。

「ママまで言うかなあ」

「海ちゃんが心を開いている証拠。そろそろ時間よ」

皆で綺羅が予約をした、島料理&寿司処『ゆんたくはんたく』に向かう。

レストランとは別の棟になっていて、店の前で綺羅がド派手なアロハを着て立って待っていた。

「みんな、揃っているのね、行きましょう」

「お袋、なんだその派手なアロハは？」

「良いじゃないの南国チックで、駄目なの？ タカちゃん」

「駄目じゃないけどなあ」

「じゃ、OKなのね」

「まあ、よしとするか」

「おば様、予約の時間が」

「そうね」

店に入る、店内はとても落ち着いた昔の沖縄独特の民家のような造りになっていた。

「いらっしやいませ」

「予約してある如月です」

まだ、時間が早いのかお客はまばらだった。

入り口から直ぐのところにカウンター席があり、そこから板前の男の人が出てきた。

「あいや、隆羅じゃないか。久しぶり」

「お久しぶりですカニさん。ご無沙汰しています」

「こつちの人達は、前に来た時に一緒だったよな」

「ええ、そうです。今は友人ですけど」

「だあだあ。可愛いワラバーが、もしかして孫？　そんでこつちのチュラカーギーが今の彼女かな。藍から聞いたけど」

「そうですよ。娘と同級生です」

「ハツシエ、デージなあ。この犯罪者、このこの」

「カニさんまで言いますか。もう、藍に言われましたよ」

板前のカニさんが隆羅のわき腹に肘鉄砲を入れていると他のお客さんが数組入ってきた。

「隆羅、ゆつくりしていけな」

「はい、有難うございます」

そして、案内された座敷もとても落ち着いた感じで白い壁には綺麗な青いミンサー織が飾られていた。

「凄いね、隆羅。みんな優しくって今の人は誰なの？」

「あの人は、宮里さんって言って。和食の総料理長だよ」

「そうなんだ、凄い人なんだね」

「そうだな、でも酒を飲むととても面白い人だぞ」

「隆羅、明日の予定はどうなっているの？」

「拉致されてきた、俺に聞くか？　沙羅」

「だって、おば様は別行動なんですよ」

「そうだが、何も予定は無いぞ。島内観光でもするか？」

「街まで連れて行ってもらえれば、私はいいわ」

「ルコはどうするんだ？」

「私は、特に考えてないけど」

「じゃ、ルコ。隆羅に島を案内してもらおうよ」

「そうだね、海がそう言うなら」

「じゃ、決まりだな」

そんなお喋りをしていると料理が運ばれてきた。

島魚のマース煮、ゴーヤチャンプルー、海ぶどうやお刺身が沢山乗っているサラダ。

ジーマミー豆腐の揚げだし、ジューシーにアーサー汁、まだこれから出てくるようだった。

すると目を輝かせながらルコが隆羅に聞いてきた。

「パパ、さっきおじさんが言っていた。ワラバーって何？」

「子どもの事だよ」

「じゃ、チュラカーギイーは？」

「美人という意味だな」

「ハツシエ？ デージナー」

「本当に凄いなと言う感じかな。沖縄の言葉にはその使う時によって多少ニュアンスが違うからな」

「じゃ、隆羅。今度は料理の説明をして」

今度は海が沖縄の料理について質問してきた、海の顔は興味津々といった顔だった。

「このマース煮は塩で炊いた魚、魚はミーバイだなハタの仲間だ。

そして苦瓜の炒め物、海ぶどうは海藻の仲間、下の野菜は青いパパイヤだな。ジーマミーはピーナッツの事、ジューシーは沖縄風炊き込みご飯、アーサーは岩海苔だ、さあ、食べないと冷めちゃうぞ」

「いただきまーす」

隆羅と沙羅そして綺羅の3人はお酒を飲みながら料理をつまんでいた。

「隆羅、何を飲んでいるの？」

「島酒、泡盛の古酒だ。味見してみるか？」

「うん」

海が恐る恐る一口飲んだ。

「不思議な香りがするけど、まろやかで甘みがあって美味しいね」

「海ちゃんは、良い酒飲みになれるわよ」

沙羅が微笑みながら海に言った。

「もう、沙羅さんは酔っ払っているんですか？」

「うふふ、そうかもね。隆羅」

「酒飲みだけにはならないでくれよな」

「隆羅までそんな事を言うかなあ」

「でも、まだ外は明るいなだね。パパ」

「暗くなるのはこの時期だと8時頃かな、東京と1時間ぐらい違うからな」

「へえ、そうなんだ。でもその分いっぱい遊べるね」

「そうだな」

その後も料理が運ばれてきた。みんなで次々に空いたお皿を作り出した。

「もう、お腹いっぱい」

「美味しかったね」

「そうね、お部屋でゆっくりしましょうか。大人はみんな酔っ払いだし」

「そうだな」

「ご馳走様でした」

料理長の宮里さんにお礼を言ってそれぞれ部屋に戻った。

隆羅が先に風呂に入ってシャワーを浴びている。

海は鼻歌を歌いながらベッドに座り、家から持ってきた目覚まし時計を枕元において着替えを準備していた。

「海、出たぞ」

「なんだか眠そうだね」

とても眠そうな欠伸をしながら隆羅がバスルームから出てきた。

「毎日、補習できつかったからな。また、目覚まし持ってきたのか？」

「だって、これじゃなきゃ起きられないんだもん」

「そうだったな」

「隆羅？」

隆羅がベッドに腰掛けている海の横に座るとキスをされ押し倒された、そして隆羅の顔が首筋に……

「駄目だって。お風呂まだだし、心の準備が。あれ？」

「スウゝ スウゝ」

「隆羅の大バカ！」

海が黙り込んで耳を澄ますと隆羅の寝息が聞えた。

枕もとの目覚ましをつかみ、隆羅の頭を叩くとガチャンと大きな音がしたが隆羅は起きなかった。

「もう、信じられない」

海も風呂に入り、怒ってもう一つのベッドに潜り込んで目を無理矢理閉じた。

夏休み - 2

翌朝。1人で寝ていたせいか早く目が覚める。海が時計を見ると6時を廻ったところだった。

「隆羅のバカ。散歩でもしてこよう」

隆羅の鼻をつまみ、海は外に出た。

空は白みはじめていて、朝の風がとても気持ち良かった。部屋の脇を通ってビーチの栈橋の方へ歩き出す。

海は凪いでいて波一つなくとても静かでサラサラと潮風がそよいでいた。

「うーん、気持ち良い。最高！」

両手を上に伸ばし体全体で伸びをして深呼吸をした。

少し散歩をしながらレストランの方を歩いていると声を掛けられた。

「海ちゃん、おはよう」

昨日出会ったばかりの山中が笑顔で手を振っていた。

「山中さん、おはようございます。早いですね」

「朝食の準備があるからね。海ちゃん。藍でいいよ。」

「でも、山中さんは年上だし」

「関係ないじゃん、もう友達なんだし」

「えっ、でも」

「イチヤリバチヨーデー。沖縄の言葉で1回言えば兄弟の様なものって言う意味なの、如月先輩の大好きな言葉よ。このホテルはそんなフレンドリーで心の触れ合いを大切にすることをモットーにしているの。先輩が居た頃に提案した事なんだけどね」

「係長、何しているんですか？」

中山を見つけて走ってきたのは杉田だった。

「ごめん、スギ。今、行く」

「あっ、海ちゃんだ。おはよう」

杉田が海を見ると笑顔で挨拶してくれた。

「スギは可愛い女の子には目聡いネ」

「おはようございます。杉田さん」

「スギでいいですよ。それより準備しなきゃ」

「そうね、海ちゃんまたね」

「じゃあ」

藍とスギがレストランへと走った。

海は何だかとても嬉しくなった、この島にはまだまだ海の知らない隆羅が居そうでワクワクしていた。

自分達の部屋に近づくと目覚ましの鳴る音が聞えた。

「いけない、目覚ましいつもの時間にセットしたままだ」

海が慌てて部屋に駆け込むと隆羅が手探りで音の鳴る物を探していた。

急いで目覚ましを止めると隆羅が頭を押さえながら起きだした。

「痛ったたた」

「おはよー、隆羅」

「なあ、海。頭が凄く痛いんだが？」

「お酒の飲み過ぎじゃない？」

「いや、飲み過ぎの痛みじゃなくて、何かで殴られた様な痛みがコブも出来ているし」

隆羅が顔を顰めながら頭を擦っていた。

「ええっ、どこ？ 本当だ、どうしたんだろね」

「その手にあるのは？」

海が恍けて隆羅の頭を触る。そして海の手には目覚ましが握られていた。

「これ？ 目覚まし」

「少し、凹んで無いか？」

「し、知らないよ」

「首筋にキスマークが」

「えっ、嘘？」

海が慌てて首筋を確認しようと鏡を探していた。

「嘘だ、引つかかったな」

「もう、隆羅のバカ。昨日、隆羅が酔っ払って抱きついてきたから」
「それで、殴られたと」

「少し、違う。酔っ払って直ぐに寝ちゃったから、ゴメンなさい」

「それは悪かったな」

海が隆羅の横に座った。

「隆羅……」

海が隆羅の目を見つめる。

「なあ、海。絶対にルコが呼びに来るぞ」

「でも……」

隆羅が海に軽くキスをした。

「パパ、海。おはよー」

するとドンドンと部屋のドアをノックする音とルコの声が聞こえてきた。

「ほらな」

「本当だね」

2人で大笑いして外に出ると、完璧に出掛ける準備をしてルコと沙羅に茉弥が待っていた。

「早く、朝ごはん食べて出掛けよう」

「朝飯はいいが。こんなに早く出掛けても、どこの店も開いてないぞ」

「隆羅。とりあえず朝ごはんにしようよ」

「そうだな」仕方なく着替えをしてレストランに向かう。

「ねえ、海。やけに嬉しそうだね」

「何が？ ルコ。いつもと同じだよ」

「そうかなあ」

「そうそう」

海とルコが楽しそうに並んで歩いている。

「隆羅、海ちゃんに何かしたんでしょう」

「痛っ！」

海の嬉しそうな様子を見た沙羅が頭を小突いた。すると隆羅が頭を擦った。

「やっぱり、何かして殴られたのね」

「逆だ、疲れて何もしなかったから殴られたんだ。毎日毎日、補習授業だぞ」

「学校の先生も大変なのね」

「出来の悪い生徒が居るとな、中には赤点ギリギリで喜んでいる生徒も居るけどな」

「ば、バカ。パパ、それは……」

ルコが振り向いて慌てていた。

「どうした、ルコ？ 俺はルコだとは一言も言っていないぞ」

「し、しまった」

ルコが慌てて口を手で押さえたが『覆水盆に帰らず』『後悔先に立たず』発してしまった言葉は飲み込めなかった。

「ルコ、あなた。成績が悪かったら何処にも連れて行かない約束だったのに、帰ったら猛勉強ね」

「嫌だよ、学校でも勉強、家でも勉強」

「それが、学生の仕事だからな」

「プー。パパのバーカ」

朝食を済ませ、ホテルを出発する。

沙羅を街まで送り東回りで車を走らせる。

「石垣島もだいぶ変わったな、車も増えたとし建物も様変わりしている」

「そうなんだ」

「俺が石垣島に来た時は、コンビニが1軒しかなかったからな」

「1軒だけなんて信じられない」

「今じゃ、市内のいたる所にあり、ハンバーガショップも大手が2つ、ドーナツ屋にフライドチキン屋もあるからな」

「今と昔とどっちが良かったの？」

「それは、立場によつて違うからな。地元の人には便利になり生活は良くなったかもしれない、でも一方で街が汚れてきたと言うナイチャーがいる」

「ナイチャーって？」

「本土、つまり沖縄以外の土地の人間の事だ。でも、石垣島の人には沖縄本島の事を沖縄と呼ぶけどな」

「変な感じなんだね」

「本島に行く事を沖縄に行くと思つた。そして自分たちの事を島ンチューと言い、沖縄本島の人の事をウチナンチュー、宮古島の人を宮古ンチューと呼ぶ。島によつて言葉も文化も全く違つからな」

「それは、離島でもなの？」

「そうだな、離島でもだ」

「ねえ、パパ。海はどうしたの？ さつきから一言もしゃべらずに外を見ているけど」

「さあ、どうしてだか。ちょっと寄り道するぞ」

大きな大型店舗の駐車場に入り車を止め店舗に入りエスカレーターに乗ろうとして声を掛けられた。

声を掛けてきた男の人は白髪交じりに短い髪で真っ黒に日焼けをしたがつちりとした体型の男の人だった。

「おんや、隆羅じゃないか」

「竹さん、お久しぶりです」

「あらあ、こちらの娘さん方は？」

「娘のルコと」

「許婚の水無月 海です」

「ば、バカ。海はなんて事を……」

突然、海がありえない様なことを口走り隆羅がうろたえていると、竹さんの唇がにやりとして大きな目が光っていた。

「隆羅、許婚つて？ お前、不味いんじゃないの？」

「竹さん、か、彼女です。本当に。それと孫の茉弥です」

「孫が出来たのに、こんな若い彼女と隆羅もまだまだヤンチャだな」

「また、後からお店の方に顔を出しますんで」

「ああ、無理しなくていいよ。楽しんで来い」

隆羅の方をポンと叩き軽くルコ達に会釈をして竹さんが立ち去った。

「パパ、今の人は？」

「昔、ホテルで世話になった和食の板前さんだ。噂になるな確実に」

隆羅が少し困ったような顔をしている。

とりあえず2階に上がり買い物をする。

「何を見に来たの？」

「キャップだ、暑くて敵わないからな」

色々と見てみたが気に入った物が無かった。

ルコはあまり興味を示さなかったが海だけは嬉しそうにキョロキョロ

口していた。

「行こうか」

「うん」

大浜、宮良、白保と抜けてしばらく走り、玉取崎に着き、展望台に上がる。

「うわ、綺麗だよ。見てみて茉弥凄いね」

「ルコ、本当に綺麗だね。ハイビスカスの花がいっぱい咲いてる。

茉弥ちゃんも嬉しそうに笑ってるよ」

展望台の上まで上がると目の前に景色が広がり眼下には光り輝く珊

瑚礁の海が広がっていた。

「海が凄い綺麗！」

「気持ちが良いね、風が吹いていて」

「右側の海が、太平洋。左の海が東シナ海だ」

隆羅が指を差しながら案内をする。

「東シナ海なんて始めて見たよ。隆羅」

「ここから先の石垣島の最北端の灯台はここよりも凄いだ」

「パパ。早く行こう。海もほら」

「うん」

車で、20分位だろうか曲がりくねった一本道を走る。

明石を抜けてしばらく車で走り、平野と書いてある標識から横道にそれる。

牧場の中を進み小さな駐車場に車を停めて、脇にある坂道を歩いて登っていく

「……」

「……」

海とルコが言葉を失っていた。

坂道を登りきると少し広くなった場所があり下に降りる階段がある。その先には真っ白な灯台が建っていて、その先には大きな大きな海がどこまでも広がっていた。

すると隆羅がルコから茉弥を受け取り灯台がある階段とは反対側の少し小高くなった丘に登って行く。

「ほら、こっちに」

「凄い、水平線があんなに」

「海が、光ってる」

白い砂浜に、エメラルドグリーンの海。そしてコバルトブルーの海。お昼前で真上とまでは行かないが太陽の光が海に差し込んでいた。

「隆羅、あそこから海の色が違うけど」

「あそこが、リーフの切れ目なんだ。あの先は深くなっているんだよ」

「パパ、ここの海は？」

「太平洋と東シナ海の合わさる場所かな」

しばらく、キラキラと輝く海を眺める。

「ルコ、下の灯台に行ってみよう」

「そうだね」

「海、行こう」

「うん」

海とルコが手を繋いで丘を降り、階段を下りて灯台へと向かう。

「隆羅、この灯台の名前は？」

「平久保崎灯台だ」

「ここも気持ちが良いね。パパ」

「そうだな。ここは日の出も綺麗だけど、サンセットがおすすめの場所なんだ。よく、1人で見に来た場所なんだ」

「本当に1人で？」

ルコが少しふざけて疑うような目で隆羅を見た。

「1人でだ。休みの日に気が向いたらブラッと来てたからな」

「1人でなんだ。彼女とか居なかったの？」

ルコが少し冗談っぽく聞いてきた。

「居なかったと言えば、嘘になるかな。若かったしな」

「どんな人だったの？」

「どんなって普通の子だよ」

「海より可愛かった？」

「ルコ。怒られたいのか？」

「えへへ、冗談だよ。もう」

海はルコと隆羅の会話が聞えているのか、聞えない振りをしているのか海を眺めていた。

「海、そろそろ観光客も増えて来たから移動するぞ」

「はい」

車で来た道を戻っているとかなりの数の車とすれ違った。

「パパ、車が多いね」

「レンタカーだな、殆ど」

「なんだか小さな島だと思っていたのになあ」

「そうだな、でも観光で成り立っている島だからな」

「仕方がないのかあ」

「残念だけだな」

しばらくして三叉路に出てきた。

「少し、早いけど飯にするか。この辺で知っている店はこの先の店くらいなんだ」

「でも、お店いっぱいあったじゃん」

「俺が居た頃は、こんなに無かったんだよ」

「そうなんだ。やっぱり観光客が増えたからなんだね」

少し行くと、黄色い可愛らしい平屋建てのお店が見えてきた。

「隆羅、ここなの？」

「そうだけど、何かあるのか。海？」

「う、うん。なんでもないよ」

裏手の駐車場から小道を通って表の入り口へ向かう、中から女の人
が手を振っていた。

それに気付いた隆羅が会釈をした。

「お久しぶりです」

「久しぶりだな、隆羅。今、何をしているんだ？」

背の高い男の人が声を掛けてきた。

「一応、高校の先生を」

「あの隆羅がか？ 笑わすなよ」

「笑ってください、本当なんですから。食事したいんだけど、今日
はチビが居るけどいいですか？」

「チビって赤ん坊がか？」

「ええつと、孫なんですけど」

「はあ？ 孫」

「あらあら、可愛い。お名前は？」

手を振っていた小柄な女の人がルコに聞いてきた。

「茉弥って言います」

「茉弥ちゃんか、あなたがママ？」

「はい」

「隆羅君の娘さん？」

「はい、パパは私の育ての親なんです」

「そうなんだ、この可愛らしいお嬢さんは？」

「同級生の海です」

「こんにちは、はじめまして」

海が少し恥ずかしそうに頭を下げて挨拶をした。

「同級生って、高校生なの？」

「はい、そうです。担任はパパなんです」

「隆羅が、学校の先生って本当だったんだね」

「隆羅、ちゃんとして」

海が少し戸惑いながら隆羅の袖を引っ張っている。

「悪い、悪い。こちらは、昔、世話になった石田さん夫婦だ。」

「ヨロシクね。奥のテーブルへどうぞ」

「ありがとうございます」

テーブルに着くと直ぐにルコが茉弥にミルクを与えると美味しそうに飲んでいた。

「ここのお薦めは、石垣牛のシチューかタコライスだけど何にする」

「「お肉！」」

海とルコの声が揃った。

「セットで3つお願いします」

「はいよ」

「でもさあ、何で娘さんの同級生と一緒に旅行に来ているの？」

「今、海は自分と一緒に暮らしているんですよ」

隆羅が普通に言つと、しばらく間があり……

「ええっ！」

「それって、意味分らないけど。生徒と同棲って事なの？」

「というか、少し事情があつて。それに彼女ですから」

「やっぱり、隆羅だね。変わってないや」

「変な事、言わないで下さいね。お願いしますよ」

「言わないわよ。はい、どうぞ」

奥さんが力ボチャの冷静スープと島魚のカルパッチョを運んで来てくれる。

「それにしても、隆羅のところはなんでそうなのかなあ。高校生の娘に子どもが居てその同級生が彼女で別れた奥さんも一緒に来たんでしょ？」

「変ですか」

「ええ、十分ね。さあ、召し上がれ」

「いただきまーす」

海とルコは話なんて殆ど聞く耳持たずに美味しそうな料理に釘付けになっていた。

「冷たくって美味しい、このスープ」

「この、カルパッチョのお魚も美味しいよ」

「はい、ご飯とシチューね」

「隆羅、このご飯は何？」

「黒紫米と言う、古代米が入ったご飯だよ。味があって美味いぞ」

「この、シチューのお肉柔らかくってとろけそうだよ。パパ」

「石垣牛の頬肉を使っているからな」

ルコと海が黙り込んで黙々と食べている、隆羅もゆっくりと食事を楽しんだ。

食後にセットのコーヒーや紅茶を飲みながら、デザートのアイスを食べて居ると海が隆羅の脛を軽くつけた。

「海、何か用か？」

「えへへ、ゴージャー」

照れながら脛をまた蹴ってきた。

「それで、ニコニコしていたのか。海は」

「パパ、何のこと？」

「石神島、大型店舗で買い物、許婚、玉城崎で石神牛の煮込み」

「ああ、それってアクアマリンの」

「そうだ、石垣島がモデルだからな」

「あの、橋にも、ビーチパーリーのビーチにも連れて行ってやるからな」

「うん、ありがとう」

海が満面の笑顔で答えると石田さんが、あのライトノベルを手にしていた。

「なあ、隆羅。もしかしてコレってお前が？」

「石田さん、そ、それを何処から？」

「少し、前にお客さんが持ってきたんだよ。これってココですか？
って」

「遊びで書いていた物を、編集をしている親友に持ち出されて連載するはめになったんですよ。勝手にモデルにしてスイマセンでした」
「いやいや、全然構わないよ。その代わりサインしてくれ、お客に自慢するから。かなりの人気らしいぞ」

「サインは構わないですけど、あまり」

「無理だな。『仲村 歩』はウチの友達だとアピールしないとな」

「お手柔らかにお願いしますね」

笑いながら隆羅が本と色紙にサインをした。

「でも、あまり表には出ないよな」

「一応、教師の副業は禁止されているので不味いんですよ」

「そうか、そうだったな。写真はNGか？」

石田さんがデジカメを持ち出してきて隆羅の顔色を伺った。

「この格好で、みんなで集合写真なら良いですよ」

「それじゃ、1枚だけ」

みんなで店の中で写真を撮る。

「これで、自慢が出来るぞ。でもサインなんてあまりしないんじゃないのか？」

「しないですね。誰も顔も知らないですから、それが1枚目ですよ」

「世界で1枚だけって言う事か？ 高く売れそうだな」

「勘弁してくださいね」

「冗談だよ」

ココでも、観光客が何組か訪れたので席を開ける為に出る事にした。

「石田さん、ご馳走様でした。また来ますんで」

「隆羅、元気だな」

挨拶を済ませ店を出る。

後ろで観光客が驚いている声が聞えた。

おそらく早速石田さんがサインを自慢したのだろう。

車を西海岸へと向けて走り出す。

右手には海が見え左手には鬱蒼と緑が生い茂った山並みが見えた。

「パパ、何だか海の違いが違うね」

「そうだな、西海岸は東シナ海だからな」

「なんだか、優しい感じがするね。隆羅」

「海もそう思うのか。俺も東海岸は男性的で西海岸は女性的だと思うていたんだよ」

「パパ、何が違うの？」

「それは、言葉にするのは難しいな。ビーチの感じや泳いでそう感じたんだから」

「隆羅、あの山。変わってるね」

その山は遠くからでも直ぐに判るような、矢じりの様に尖がった感じの山だった。

「あの山は、野底のマーペーだな」

「野底のマーペー？ 変な名前だね」

「マーペーは女の人の名前だよ」

「そうなんだ」

「悲しい伝説のある山なんだ。昔、黒島にカニムイとマーペーと言う恋人が居た。2人は道を挟んで向かい合った家に住んでいて。そしてある日、琉球の役人が来て道の右半分は島に残り左半分は石垣島の野底に強制移住させられ。そしてマーペーは野底に移住させられ開墾をさせられた。どうしてもカニムイに逢いたいマーペーは黒島を見ようとこの野底岳に登った。しかし、目の前には沖縄最高峰の於茂登岳があり黒島を見る事が出来なかった。悲しみに暮れたマーペーは泣きながら山頂で石になってしまった。と言うお話だ、民謡にもなっていたはずだ」

「そんな、お話がある山なんだ」

「重税や強制移住に苦しめられた、昔の人達の話は今も民謡や伝説になって島々で語り継がれているんだ」

「楽しいだけの南の島じゃないんだね」

「そうだな、もつと島の事を知ってもらいたいと思うぞ」

「隆羅、いっぱい教えてね」

「そうだな。でもそんな悲しい伝説があるけれど、ここの山頂からの眺めは絶景だけど茉弥がいるんじゃないかな。かなり急な登りもあるからな」

しばらく、走ると民家が増えてきて米原キャンプ場に着いた。

キャンプ場内に車を止めてビーチにでる。

「眩しい」

「ここも、凄く綺麗だね。隆羅」

「ここで、毎日の様に泳いでいたんだ」

「凄く、遠浅なんだね。パパ」

「あそこの、色が青くなっている所が珊瑚礁の切れ目でリーフと呼んでいる。ビーチから切れ目の手前までをラグーンと言って、いつも波が穏やかなんだ」

「あつちにも、何かあるの？」

「あそこには、駐車場があり売店もあつて便利だけど完全に観光地化しているからな。あまり好きじゃないんだよ、海も汚れてきているしな」

「そうなんだ」

「それは、しょうがない事なのかもしれないけれど、何とかしないと数年先にはこの綺麗な海も汚れてしまつたろうな。せめて皆がゴミを捨てないようにしないと」

「そうだね、まずは1人ひとりからだね。茉弥が大きくなつたら、またこの海を見たいもんね」

「でも、ココのリーフの外は綺麗だぞ。魚がいっぱい居てな」

「私は、茉弥が大きくなつたら連れてきて遊ぶんだ」

「その頃、俺はヨボヨボのお爺ちゃんかな」

「ぱ、パパ。海が怖い顔してるよ」

「冗談だよ、海。バカだな」

隆羅を睨みつけている海の頭を撫でるが海は拗ねたままだった。

「隆羅、次は何処に行くの？」

「ああ、海を怒らせちゃった」

「ほら、行くぞ」

隆羅が手を出すと海が少しだけつまんで来た。

車でまた走り出すと丁字路に出て左折する。

しばらくすると標識が見えてきた。

「おがみ崎？」

「うがん崎と読むんだ。沖縄の母音は「あ」「い」「う」と3音が基本で。「え」「は」「い」「に」「お」「は」「う」と発音する事が多いんだ」

「この辺で、牧場が多いんだね」

「黒毛の和牛を育てているんだよ、石垣島の牛は温暖で海が近いためにミネラル分を多く含んだ草を食べて足腰が強く、胃袋が大きい為に有名ブランド牛として育てる為に仔牛の殆どが県外に出荷されてしまうんだ」

「なんで、胃袋が大きいと良いの？」

「胃袋が大きいと大きく育つんだよ、大きく育てばそれだけ取れる肉の量が違っただろ」

「なんだか、ちよつとグロイ話だね」

「昼に石垣牛を食べて美味しいと言ってたじゃないか」

「えへへ、そうだった」

「海は、まだ機嫌直らないのか？」

「そんなんじゃないもん」

海は少し落ち着きが無かった。

「それならいいけどな」

坂を下り、急な上り坂を登ると灯台が見えてきた。駐車場に車を止める。

「着いたぞ。石垣島の西の端、御神崎灯台だ」

「た、隆羅。その……」

「ほら、あそこだ」

海にトイレットペーパーを渡して隆羅が指をさすと海が走り出した。

「パパ、あそこって？」

「トイレだよ」

「私も行きたい」

茉莉を隆羅に抱っこさせルコも走り出した。

しばらくすると2人で楽しそうに話をしながら出てきた。

「さあ、行くぞ」

「はい」

灯台の横の階段を登ると目の前にコバルトブルーの真っ青な海が広がった。

「わあ、凄い青い海！」

「平久保とは、また違う感じで綺麗だね」

ルコと海が走り出す。

「足元気を付けろよ」

「うん」「はい」

「凄い、絶壁だね。隆羅」

「そうだろ、直ぐに外海だからな。波は荒いし流れも速いからな」

「泳げるの？」

ルコが不思議そうな顔をする。

「この下の、ビーチで泳げるぞ。もの凄くリーフの珊瑚は綺麗だぞ。」

潮の流れが強くなって危険だけどその分、人が入らないし水が綺麗だからな」

「隆羅、舟がいっぱい」

「ダイビング船だな、この辺はダイビングポイントがいっぱいあるからな」

右手に見える珊瑚礁が広がる海に小さな船が何艘か浮かんでいる。

「パパはダイビングするの？」

「何回かした事があるけど、この島はダイビングしなくても綺麗な珊瑚や魚を見る事が出来るからな。嵌まりはしなかったぞ」

「そうなんだ」

「ねえ、隆羅。あの島は？」

「西表島だな」

「大きな島だね」

「八重山群島の中で一番大きな島だからな。こんどは、ゆっくり離島めぐりなんて良いかもな」

「隆羅と2人でね」

「私は、ココでも邪魔ですか？」

「そんな事、言っていないだろ。さあ、次の場所に行こうか」

車に戻りしばらく海岸線を走り、隆羅が途中で車を止めた。

「パイナップルでも食べるか？」

「うん、食べたい」

「スイマセン、パイナップルを下さい」

隆羅が声を掛けると奥からオバーが出てきた。

「はいはい。観光の人ね？」

「昔、石垣島に住んでいたんですよ」

「ええ、そうね。じゃ、美味しいところをカットしてあげようね」

その場でパイナップルをカットしてくれた。

少し小ぶりだけど、とても甘い匂いがした。

「いただきます」

「うわ、甘い！」

「凄い、美味しいよ。隆羅」

「完熟のパイナップルだからな。でも食べ過ぎると口の中が痛くなるからな」

「うん、でも止まらない」

「隆羅、あそこってもしかして名底湾？」

海が店の前に広がっている海を指差した。

「そう。名蔵湾だ。ここで冬場カニ獲りをするんだ。今はどうか知らないけれどもかなり獲れるんだぞ」

「美味しいの？」

「タラバや松葉に比べたらどうか分からないけどな。甘みがあつて獲れたては格別だからな」

「ふうん、そうなんだ」

しばらくパイナップルを食べのんびりした。

「出発するぞ」

車を出すとオバーがいつまでも手を振っていた。

その後、八重山民俗園に立ち寄る。

「隆羅、ココは？」

「ここは。昔の家や生活がよく分かるように展示されているんだよ。観光スポットの1つなんだ」

園内を歩いて回り海人の家や土族の屋敷、農民の屋敷などを見ながら観光客の団体に紛れて説明を聞く。

「パパ。あそこに居るの、水牛だよね」

「凄い、立派な角だね。隆羅」

「昔のトラクターだな。水牛で畑や田んぼを耕したり、物を運んだりサトウキビを搾る原動力だったりな。頭が良くて働き者だからな」

「隆羅って何でも知っているんだね」

「そんな事はないさ。あつちにリスザルが居るんだぞ」
リスザル園に入る。

団体の後に入つた為かあまり寄つてこなかった。

「なあ、海。そんなにしがみ付かなくなつてもいいだろ」
海が怖いのか隆羅の腕にしがみ付いてきた。

「だ、だつて。何だか怖いんだもん。ひゃあ」

リスザルが海にちよっかいを出した。

「大丈夫だつて、何もじゃないよ。ルコ、茉弥は寝てるのか」

「うん、ぐっすり。車の中でミルクあげたから」

「そうか、茉弥にも見せたかったな」

「そうだね」

「しかし、暑いな。どこかで一休みしたいけど、何処も観光客でいっぱいだなあ。少し市内まで戻って涼しい所に行こうな」

「うん」

市内に戻り、コンビニに寄って買い物をする。

隆羅はお茶やジュース、お菓子などを買っていた。

「パパ、アイス買って」

「いいぞ。海も食べたい物あれば言えよ」

「うん」

「海、どれにしようか。迷うね」

「そうだね」

アイスを買い、食べながら車に戻る。

隆羅が後ろのドアを開けクーラーボックスにお茶やジュース、タオルなどを入れていた。

「パパ、これから何処に行くの？」

「見晴らしのいい展望台だな」

「じゃ、レッツ ラ ゴー」

ルコが拳を突き上げた。

車で10分もすると、一方通行の山道に車は入って行く。

くねくねと蛇の様な坂道を進んでいくと色々な木々が生い茂って太陽の光りを遮り所々薄暗くなっている。

「隆羅、恐竜が出てきそうだね」

「そうだな、あの大きなシダに似ているのはヒカゲヘゴと言って3億6千年前からあったとされていて生きた化石と言われているからな」

「木陰は涼しいんだね。パパ」

「東京みたいに蒸し暑くないからな」

「着いたぞ」

山頂の駐車場に着くと視界が一気に開けて市内が一望できた。

ルコが茉弥を抱っこして海が駆け足で展望台に上がる。

隆羅はクーラーボックスをもって展望台に上がった。

「わぁ、小さな島がいっぱい見えるよ。隆羅」

「あの大きな島が西表島、その手前が小浜島、一番近い島が竹富島
そしてその向うが黒島でその脇にあるのが新城島」

「涼しい、風が抜けて気持ちが良いね。パパ」

「そうだろ、ココはあまり観光客も来ないからな」

「あっちにも展望台があるよ」

「あそこは、バナナ公園の展望台だよ。道が綺麗に整備されて展望
台も大きくなって観光バスも上がってくるからな」

「えへへ、公園見つけた」

海が展望台にあるローラー滑り台を見つけた。

「遊んで来ても良いぞ。ほら、茉弥を抱いていてやるからルコも遊
んで来い」

「ええ、だって私達もう高校生だよ」

「1回、滑ってみる。お尻を着くと汚れるからな」

「うん、ルコ行こう」

海に引つ張られルコも渋々ついて行く。

「なんだかんだ言っても、キヤーキヤー喜んでいるじゃないか」

しゃがんでローラー滑り台を滑り降りると、その先にある小さなフ
ールドアスレチックで追いかけてこをして2人が遊んでいるのを
隆羅が見つめていた。

「待て！ 海。やったな」

「やだもん」

2人の声が響いていた。

少しすると息を弾ませながら戻ってきた。

「楽しかった。汗だくだ」

「もう、海はずるいんだから」

「ほら、冷たいタオルだ」

隆羅がクーラーボックスからよく冷えたタオルを出して2人に渡した。

「気持ち良い」

「パパは、本当に凄いな」

2人が隆羅を挟み隣に座ってもたれかかって来た。

「暑いぞ」

「隆羅」

「私もたまにはいいじゃんね」

海が甘えて隆羅の肩に頭を置くとルコモ海の真似をして隆羅の肩に頭をもたげた。

「しょうがない奴らだな」

「パパ、本当にここってゆっくり時間が流れているよね」

「そうだな、こんな時間の流れが人間本来の時間の流れなのかもな」

「癒しだね、隆羅」

「ああ」

しばらく飲み物を飲みながら3人でボーとしていた。

「そろそろ、行こうか」

「そうだね」

車で再び山道を走る、しばらく走ると天文台と書かれている標識が見えてきた。

「天文台なんかあるんだ」

「石垣島は北回歸線のすぐ北側の北緯24度に位置していて、ジェット気流の影響も少なく大気が安定していて星がまたたかず、南十字星など本土では見られないたくさんの星を観測することができるらしいからな。でもこの時間じゃ入館は無理だな」

時計を見ると5時前になっていた。

「もう、こんな時間なんだ」

市内に向かい車で青いアーチ橋のサザンゲートブリッジを目指す。

「海、ここがあの橋だよ。サザンゲートブリッジと言う橋だ」

「本当に、青くってアーチ型凄いな」

「沙羅に連絡取ってみるか」

隆羅が携帯で連絡を取っている。

「パパ、こんな街中なのにこんなに海が綺麗なんだね」

「ここは、潮の流れが強いんだよね」

「そうだ」

海が答えて隆羅が海の頭を撫でた。

「向うに公園があるんだね」

「まだ、公園しか出来てないけどな。沙羅を迎えてホテルに戻ろう、今日はバーベキューだぞ」

「やったー！ お肉！」

沙羅を市内で拾いホテルに戻る。

部屋でシャワーを浴び前日に7時に予約したバーベキューのテラスに向かうと藍が出迎えてくれた。

「いらっしやいませ」

「海ちゃん、ルコちゃん今日は楽しかった？」

「うん、石垣島を観光してきたの」

「そうなんだ、良かったね。先輩、とても詳しいでしょ」

「凄い面白かったよ」

「私も、先輩にいろんな事教わったからね。さあ、こちらの席にどうぞ」

1番海側の席を用意してしてくれた。

「先輩、飲み物は？」

「生ビール2つと、お薦めの甘めのロングカクテルを2つヨロシクな」

「かしこまりました」

藍がウインクしながらプールサイドバーに向っていった。

「隆羅、今日。おば様はどうしたの？」

「連絡がないからな。那覇に居るのかもしれないし、何処にいるの

やら気まぐれだからな、お袋も」

「パパみたいだね」

「ルコ、それは違うな。俺は巻き込まれているだけだ」

「でも、石垣島に居たんでしょ。何で？」

「大学の時に、冬場に長野のスキー場でバイトをしていて、そこで世話になった人に誘われたんだ。沖縄の石垣島で仕事を手伝わなかった」

「隆羅、その人ってもしかして浜木町の」

「ビンゴだ、海。アクアマリンにどっぷりだな、今日の海は」

「あの隆羅の私小説の」

「私小説じゃないフィクションだ。沙羅、間違うなよ」

「同じじゃない」

「全く違うからな」

「お待たせしました」

藍が注文した飲み物を運んで来てくれた。

「こちらはグアバジュースと泡盛のカクテル、こちらはパッションジュースとラムのカクテルになります。名前は先輩に聞いてね」

海がバーの方を見るとあの女の子が手を振ってくれた。

そして周りのスタッフも皆楽しそうに仕事をしている。

「パパ、カクテルの名前教えて」

「この、赤い方がハイビスカスレディ。この綺麗なオレンジと赤のグラデーションの方がF・サンセットだ」

どちらのカクテルもカットされたパイナップルやオレンジそしてハイビスカスの花が飾られていてとても綺麗だった。

「隆羅、ここのスタッフって楽しそうに仕事をしているよね」

「そうそう、それに数年前に1回だけ来た私の事も覚えていてくれたし」

「スタッフが楽しめなきゃ、お客さんも楽しめないだろ。お客が主役でスタッフは脇役だけど、ここは1つの舞台の上なんだよ。仕事さえキチンとしていればかなり自由なホテルだからな。乾杯しよう

か」

「乾杯！」

テラスのトーチに火がともり、日が傾いて水平線の上に太陽がある。他のお客さんもスタツフもしばし見とれている、海が眩いた。

「凄い、綺麗な、サンセット。生まれて始めて見た」

「このカクテル美味しいね」

ルコが声を上げると藍が料理を運んできた。

「料理の方、お待たせしました」

「うわあ、美味しそう。お肉にシーフードに沢山ある」

「あちらに、ご飯やスープやフルーツもありますからご自由にどうぞ。それと先輩、明日はどうするんですか？」

「せっかく石垣島に来たんだから綺麗な海で泳ぎたいからな。でもチビが居るから米原はキツイし、海が石崎に行きたいって言うてるから石崎だな。川平に寄ってからだから昼後ぐらいになると思っけど」

「奥ですか？ 手前ですか？」

「奥だな。砂浜が広いしな、どうかしたのか？」

「いいえ、ちよつと聞いてみただけですよ」

藍が隆羅たちに気付かれないようにスギに合図を送っていた。

「そうか、じゃ食べよう。どんどん焼くからじゃんじゃん食べてくれ」

「ハイ」

「沙羅も明日は一緒に良いのか」

「ええ、大丈夫よ。隆羅にも楽しんでもらわなきゃ罰が当たるわ」

「十分、楽しんでいるぞ」

心地よい海風に吹かれながら、リゾートを満喫した。

「パパ、明日は泳ぎに行くの？」

「そうだ、ちゃんと日焼け止めをしてな。太陽がキツイから茉弥には気を付けるよ」

「うん、大丈夫。ママとちゃんと準備していくから」

「お腹、いっぱいだ」

「満足してもらえたかな」

「隆羅、ありがとう」

「パパ、ご馳走様でした」

「さあ、部屋でゆっくりするか。明日は9時頃に集合でいいかな」

「パパ、もっと早くに集まって出発しようよ」

「ルコ、せっかく石垣島にいるんだからのんびりしよう。時間を自由に使えるそれが1番の贅沢だからな」

「そうだね」

藍やスギに見送られテラスを後にする。

彼女達が何を企んでいるのかは、隆羅達は何も知らなかった。

夏休み - 3

翌朝、隆羅は珍しく誰にも起こされずに目が覚めた。
目を開けると海が着替えをしているようだった。

隆羅が伸びをする。

「ん、ん」

「た、隆羅、駄目！ こっち見ちゃ」

「着替えぐらい恥ずかしく無いって」

隆羅の顔に枕が飛んで来た。隆羅が難なく手で受け止めてしまう。

「水着に着替えてるの、やっぱり裸は恥ずかしいもん」

「分かった。終わったら起こしてくれ」

そう言い寝返りをうつて海に背を向けた。

「隆羅、終わったよ。隆羅？ 怒ってるの？」

「ふうわあ」

返事が無く顔を覗き込むと隆羅が両手を広げ大きな伸びをした。

「何でだ？ 俺は海が嫌だと言う事は絶対にしないだけだぞ」

「でも、男の人って…… やっぱり」

「それは、そうだけだな」

隆羅が海を抱き寄せキスをする。

「いつも、このタイミングで必ず来るだろ」

「そうだね」

「ルコが」

2人の声が揃った。その時、ノックする音が聞えた。

「ほらな」「ほらね」

「今、行くよ」

呼ばれる前に返事をした。

朝食を済ませ、駐車場に向かい車に荷物を積み込む。

「パパ、この車の荷物は何？」

「皆のシュノーケリングの3点セットなんかだけど」

「いつの間に、準備したの？」

「企業秘密だ」

「海、パパとずーと一緒にたんでしょ」

「うん、そうだけど」

「知り合いのダイビングショップに頼んであったんだ。フロントにキーを預けてあるから積んでおいてくれて。俺の3点セットはお袋が持ってきた奴だけだな」

「出発だね」

「行くか」

「隆羅、今日行くビーチはあそこなの？」

「少し違うかな、砂浜がとても綺麗なビーチだぞ。ビーチパーリーのビーチはその隣のビーチだけど似たような感じだぞ」

名蔵湾沿いに車を走らせ。

昨日、行かなかった川平湾に向かう。

海の中に生簀のような物が見え通り沿いにある大きな黒真珠の店に入る。

『黒真珠』の文字に沙羅の瞳が爛々と光り輝いていた。

「ここは黒真珠でも有名なんだ。仕方が無い少し寄り道をするか」

「綺麗な黒い真珠だね。隆羅」

「黒真珠の黒蝶貝は東南アジアの珊瑚礁にしか生息していなくて、ここ川平で世界で始めて養殖が成功したんだ」

「隆羅。これ綺麗じゃない、どう？」

沙羅がネックレスを首に当てて見せた。

「それは、タコに買ってもらえな。沙羅」

「ここに居ないのに？」

「買って帰って請求すればいいだろ」

「そんな事、彼には出来ないわよ」

「俺には、請求するくせに。俺よりタコの方が稼ぎが良いだろ」

「細かい事言わないの」

「隆羅、このティアラ凄いな」

「海が、もう少し大人になったらな」

「ラブラブな事、行くわよ隆羅」

沙羅が少し拗ねていた。

「親子揃って直ぐに拗ねるからな」

「何か？」

「別に」

川平湾に向かうとレンタカーに観光バスが沢山停まっっていて観光客がいっぱいだった。

車を何とか駐車場に止めて公園に向かい歩く、少し歩くと真っ白な砂浜とエメラルドグリーンの海が見えてきた。

「隆羅。なんだか何処の海とも違う不思議な色をしているんだね」

「そうだな、七色の海なんて言われているからな。養殖場もあり潮流が激しいから遊泳禁止になっているいな」

「でも、あのグラスボートの多さは興醒めね」

真っ白いビーチに係留されているボートの多さに沙羅が呟いた。

「そうだな、日本100選にも選ばれているのにな」

「砂浜に下りてみるか？」

「パパ、もう泳ぎに行こうよ」

「分かった、そうするか」

車に戻り底地ビーチ方面へと向かう。

「この先にもビーチがあるんだね」

「底地と書いてスクジと読むんだ、とても遠浅で海水浴向けなんだけど。今は、魚や珊瑚が見られる米原の方が人気があるからな。少し覗いて見るか」

底地ビーチの駐車場に向かい車の中からビーチを見る。

「パパ、とても静かだね」

「のんびりするにはいい所だけどな」

観光客も殆ど居なくとても静かなビーチだった。

少し道を戻り石崎に向かう、途中から未舗装の農道に入っていき段々道が険しくなっていく。

「隆羅、ジャングルみたいになつて来たけど」

「大丈夫だ、少ししたら開けるからな」

しばらくガサガサと道に覆いかぶさった草木を掻き分けて、進んで行くと車を止められるスペースが見えてきた。

すでに2台の車が止まっていた。

「今日は、平日なのにやけに車が多いな」

「そうなの、パパ？」

「ああ、観光客はめつたにここに来ないし。地元の人も土日の休み以外はあまり来ないからな」

車を止めて、荷物を降ろしビーチに向かい歩く。

ルコがビーチの入り口で止まっていた。

「す、凄い。綺麗」

目の前の小道の向うには真っ白な砂浜と色とりどりに輝く海が見えた。

「さあ、行こう」

ビーチに着くとこれぞ沖縄の海と言う様な海だった。

何処までも続く白い砂浜、エメラルドグリーンの海。

そこはまるで別世界だった。

海とルコが走り出した。

「先輩！ 遅いですよ」

不意に声を掛けられた。その声は藍達だった。

「ビーチパーティーしましょう！」

「隆羅、ビーチパーティーだって。やったー！」

スギヤクロが準備をしているのが見える。

海が目を真ん丸くして隆羅の手をつかみ飛び跳ねた。

「海、良かったな」

「うん、凄く嬉しい」

「よし、準備するか」

隆羅が藍達の所に行き準備に加わる。

沙羅達を木陰で待たせ隆羅が荷物から簡易テントの様なタープを取り出した。

「パパ、それ何？」

「日よけだよ」

隆羅が手際よく1人であつという間に張り終わった。

「すげええ」

スギとクロが手を止めて見ている。

タープの下にシートを敷いて荷物を置く。沙羅達もタープの下に入った。

「これなら、涼しくて良いわね」

「茉弥をここに寝かせておけな」

隆羅が大きな目のビーチタオルを畳んでシートの上に引いてくれた。

「ありがとう、パパ」

「ほら、スギもクロも何をボーとしているんだ」

隆羅がテキパキと指示をしてバーベキューの準備もあつという間に終わり炭に火を入れるだけになった。

「やつぱり、先輩って素敵だね。憧れちゃうよね」

「ええ、それって」

藍が呟き、海とルコが驚いていた。

「ああ、違うの。好きとかじゃ無くて憧れかな。いろんな事知っていて何でも出来ちゃう。そして凄く優しくしてくれるもんね」

「昔から、変わってないんだ。隆羅って」

「そうなの先輩は昔からあのまんま。歓迎会や送別会、ビーチパーティー、クリスマスパーティーなんかいろんな事を仕切ってくれて。スタッフの誕生日にはケーキや花束を準備してくれて皆を楽しませてくれるの。相談や悩み事も聞いてくれるし、けど決して表にはあまり出ようとしないでいつもバックアップしてくれて。海や星を見に沢山連れて行ってもらったんだ」

「そうなんだ、凄いねパパって」

「それに、スタッフの中には先輩とだったら結婚しても良いなって言う子まで居たんだよ。先輩は知らないだろうけれどね」

「海、本当に凄いね。パパ」

「うん、私、隆羅で良かった」

「海ちゃんが羨ましいもん」

「ほら、茉弥は見ていてあげるから皆で遊んできなさい」

沙羅が声を掛けた。

「クロ、スギ。舞ちゃん、行くよ」

藍が声を掛け、水着になり走り出した。

舞が笑顔で手を振っていた。

「ああ、バーの女の子だ」

「ルコ、私達も行こう」

「そうだね」

2人も水着になり駆け出した。隆羅が一息ついて沙羅の横に座りお茶を飲んでいた。

「隆羅は良いの？」

「一休みだ。茉弥も気持ち良さそうだな」

茉弥が海風で揺れるタープを見て1人遊びをしていた。

「隆羅は、ここでも人気者だったのね」

「仕事では、何度も怒鳴った事もあるけどな。ONはON、OFFはOFF楽しまないとな。俺は俺のままでいい」

「それがいいんじゃないの」

「そうかもな」

海達がフリスビーやボール遊びをしているのを眺めている。

「先輩！」

「パパ！」

「隆羅！」

皆に呼ばれて隆羅も水着になり仲間に加わった。しばらく、皆と遊んで隆羅が戻ってくる。

まだ他のメンバーは泳いだりして遊んでいた。

隆羅が炭に火を入れると、少ししてパチパチと炭が熾きてきた。

「隆羅は、相変わらずマメね」

「沙羅は泳がないのか？」

「日焼けが怖いからいいわ。お日様が少し傾いたら水浴びするけどね」

「じゃ、代わりに海に入ってきて来るか」

隆羅が海に入っていく。

入れ違いで藍達が戻ってきた。藍が辺りを見渡した。

「あれ、炭に火が入っている。先輩は？」

「海に行ったわよ」

沙羅が藍に教えて指差した。

「藍、あそこにいるぞ。また浮いているよ」

「本当だ、よく浮いていられるよな。スギ」

海が波打ち際のほうを見ると仰向けになり隆羅が浮いていた。

「私、呼んでくるね」

海が隆羅に向かって走り出した。

「じゃ、クロ。焼く準備しようか」

「そうすね」

海が隆羅が浮いている所に呼びに来た。

「隆羅、お昼にしようって」

「ああ、海か。分かった」

「それ、どうやってるの？」

「浮くだけだぞ。簡単だ」

海が真似をして仰向けになりバタバタとしていた。

隆羅が起き上がり海の手をつかんで教え始めた。

「体の力を抜いて、おへそを突き出す感じで頭を少し下げるんだ」

「こう？ 本当だ、浮いている。凄い」

「手を離すぞ。それで手首を左右に振ってこらん進むから」

「こんな、感じ？」

海が水の中で手をグルグルと振ると体が進んだ。

「そうだ」

「凄い、凄い」

「片方だけ振ると振った手と逆に回れるぞ」

「本当だ、面白いね」

「もう。パパ、海。お昼だよ」

ルコが呼びに来て2人で海から上がり皆の所に戻った。

「はい、先輩、海ちゃん」

藍が手際よく紙皿と割り箸を渡した。

「悪いな、なんだかこんな事してもらって」

「今まで、先輩には沢山お世話になりましたから。このぐらいなんでもないですよ、ねえ、クロ、スギ」

「もちろんですよ、俺なんか彼女とシフト同じにしてもらったりしたし」

「自分は、車をよく借りましたしね」

スギが照れながら言うところクロが続いた。

「大好きな、石垣島を好きになって欲しいからな。皆で楽しむのも好きだしな」

「さあ、焼きまくるから食べてくださいね」

藍が腕をまくる真似をした。ワイワイと賑やかなビーチパーティーが始まった。

「そう言えば、何で皆さん石垣島に来たんですか？」

「皆、理由はそれぞれかな。私は何となく遠くに来たくってかなあ」

「俺は、南の島に憧れがあって」

「自分は、友達に誘われて。でもその友達は先にいなくなりましたけど」

「私は、ホテルのパンフレットを見て、こんなプールサイドバーで仕事したいなあって」

ルコが聞くと藍やスギにクロが答えて最後にバーの女の子の舞が答

えた。

「舞は、如月先輩に会いたかったんだよね」

「もう、藍は。言わないでって言ったのに。憧れだったんです、どんな人がバー考えたのかなあって」

「で、どんな人だったの。私の言ったとおりの素敵な人だったですよ」

「はい」

舞が照れていた。

「藍、褒めすぎだぞ。何も出ないからな」

「そうそう、係長は先輩ラブですからね」

「スギ、憶えておきなさいよ」

スギが藍をからかうと皆が大笑いした。

食事の後は自由な時間を過ごす。

海が隆羅を探して辺りを見渡すとビーチを歩いていた。

沙羅は茉弥とお昼寝。

ルコは藍と舞とおしゃべりをスギとクロは海に入っていた。

海が隆羅の後を追って歩き出し、少しして追いついた。

「隆羅、何しているの？」

「ビーチコーミングだ」

「それ、何をするの？」

「面白い漂流物や貝を拾っているんだ。海、上着も着ないで来たのか日焼けするぞ。コレでも羽織っておけ」

隆羅が羽織っていたシャツを海に渡した。

「ありがとう。隆羅の匂いと潮の香りが気持ち良いな」

「そうか、おお。有ったぞ」

「何が、見せて。凄い綺麗な玉だね」

「そろそろ、戻ろうな」

「うん」

2人で手を繋ぎながら戻る。それにルコ達が気付いた。

キラキラと輝く海をバックに真っ白い砂浜を2人が手を繋いで歩いている。

「うわぁ、凄い絵になっているね。お似合いのカップルだ」
舞が眩しそうにしながら呟いた。

「先輩、凄いや」

「でも、かなりバカツプルな時もあるけど」

「でも、羨ましいよね。舞」

「うん、絶対に素敵な人ゲットするぞ」

「「「おー！」「」」

藍・ルコ・舞の3人が声をそろえた。

「何を叫んでいるんだ？」

「素敵な恋人を見つけるぞーって」

「見つかるさ、きつとな。みんな輝いているからな」

「照れちゃうな、何だか」

ルコが照れていた。

「あれ、海ちゃんそれってガラス玉じゃないの？」

海が青緑色のガラスの玉を持っていた。

「隆羅が見つけたの」

「それって何？ パパ」

「昔の漁具の浮き球だな。今はこんなプラスチックになっているけどな」

隆羅が足元にあった、プラスチックの玉を拾い上げて見せた。

「今じゃ滅多に見つからないんだよ。さすが先輩」

「ラッキーなだけだよ。たまたまさ」

「藍、自分達はそろそろ」

するとクロが声を掛けた。

「そうだね。クロと舞はこれから仕事だもんね」

「じゃ、先輩」

「今日は、ありがとうな。舞ちゃんも」

「はい、失礼します」

2人が簡単に荷物をまとめて帰って行つた。

「パパ、これから仕事なの？」

「島じゃ普通の事だぞ、通勤時間も殆ど無いから。かなり自由に時間を使えるんだ、海も近いしな」

「へえ、出勤の前や後に海に行けたりするんだ」

「もう少し、泳いだら俺達も撤収するぞ」

「ハニー」

少しずつだが日が傾きかけていた。

沙羅も茉弥を連れて海に浸かっていた、藍とスギは片付けを始めている。

海とルコ、隆羅は海に入り遊んでいる、しばらくして帰る準備をした。

「今日は、ありがとうな。お前達は、今日は休みなんだろう」

「そうですよ、これから友達と飲み会なんです」

「あまり、飲みすぎるなよ。またホテルでな」

「じゃ、先輩。お先です」

「海ちゃん、ルコちゃん。またね」

「はい。また」

車に荷物を積み込みホテルに戻る。

直ぐに部屋でシャワーを浴びて今日は早めに食事をする事にした。

今日も綺羅からは何も連絡が無かった。

レストランでコース料理を食べたが海に余り元気が無く、食欲も無いようだった。

「海、具合でも悪いのか」

「少し、疲れちゃったみたい」

「パパ、大丈夫なの？」

「隆羅？」

「もう少し様子を見よう」

ルコと沙羅が心配そうな顔をして隆羅に聞いてきた。海を部屋に連

れて行きしばらくするとぐったりとして返事もなくなった。

海の体を触るととても熱かった。

直ぐに沙羅に連絡をし病院に連れて行く事を告げると、沙羅が慌てて部屋に来た。

「隆羅、大丈夫なの？」

「今から病院に連れて行く。太陽に中つたんだろう体を冷やして点滴をすれば直ぐによくなるさ。ルコには心配ないからと伝えてくれ」
「分かったわ」

隆羅が海を抱き上げて騒ぎにならない様に裏門から出て車に乗せ病院に向かった。

時間外の窓口で受付をし救急で見てもらった。

外来の一室で直ぐに点滴をして氷嚢で体を冷やして溜まっている体の熱を取った。

隆羅がベッドの横に座り海の様子を見守る、少しするとだいぶ落ち着いてきたようで海が目を覚ました。

「あれ、隆羅。ここは何処？」

「病院だ」

「私、どうして？」

「熱中症になったんだよ。もう、大丈夫だからな。少し眠りなさい」それはいつもよりもとても優しい声だった。

1時間ほどで点滴も終わり、海が目を覚ますのを待った。
しばらくすると海が伸びをして起き上がった。

「大丈夫か？」

「うん、もう平気。ありがとう、少しだけフラフラするけどお腹も空いているし」

「そうか、良かった。立てるか？」

海が立ち上がると少しふら付いた。

海の腰に手を回し体を支え看護婦に気が付いた事を伝える。

先生の許可が下りて、待合室の長いすに海を座らせ会計を済ませ車に向かう。

「隆羅にまた、迷惑を掛けちゃったね」

「そんな言い方するもんじゃないぞ」

「そうだね、えへへ。怒られちゃった」

車で病院の近くのコンビニに寄り野菜ジュースと消化に良さそうな食べ物を買ひ、海に渡す。

「ゆつくり、食べるんだぞ」

「ありがとう、もう平気だから」

少し声に張りが出てきて食欲も戻ってきたようだった。

「ねえ、隆羅。ホテルはもう少し先を曲がるんじゃないの？」

「いいんだよ、ここで」

しばらく車を走らせる。

名蔵大橋を越えて少し行つた所で車を止めて車のライトを消す、あたりは闇に包まれた。

「隆羅、ちよつと怖いかも」

「大丈夫だ」

隆羅が先に車から降りて、助手席に向かいドアを開ける。

「ほら、車から降りてごらん」

「えへへ、えい」

車から飛び降りて隆羅に抱きついてきた。

「危ないだろ」

「隆羅なら平気でしょ」

「そうだな」

「た、隆羅。星が降ってるよ」

ドアを閉めて、隆羅が空を仰いだ。

夜空を見上げている海に自分の上着を掛ける。

そこには、満点の星空が輝いていた。

清里の澄んだ空気の下で見た星空より遥かに凄かった。

「清里で約束したろ」

「うん、ありがとう」

隆羅が防波堤に座り、膝の上に海を座らせた。

「あの白い帯のように見えるのが、天の川。白鳥座のデネブ ワシ座のアルタイル 琴座のベガ、3つを繋いだのが夏の大三角形だ」
隆羅が織り姫や彦星の話や他にも星座の話や星の話をいっぱいしてくれた。

時々車を通ったが大きなワゴンの陰にいたので気にならなかった。

「寒くないか？」

「大丈夫。隆羅が温かいから」

「そうか」

爽やかな夜風が優しく吹いていた。

「凄い星空だね。昨日から生まれて初めて見る物ばかりで、どれもが素敵でとても綺麗で……あれ？ 星が滲んで見えるよ」

「どうしたんだ？」

「よく、分からない。でも嬉しくって、とても幸せで涙が出てきちゃった」

海が大粒の涙を流して少ししゃくり上げていた。

「隆羅、ありが……」

隆羅が抱しめてキスをした。

とても優しくそして力強く、海が隆羅の首に腕を回した。

「隆羅が好き。どうしようもないくらいに大好き」

「愛してるよ、海」

「もう1回、言って」

「海を愛してる」

「うん」

海が隆羅の胸に顔をつけて泣いていた。

しばらくすると隆羅の携帯が鳴る、沙羅からだった。

「沙羅か、俺だ。もう少ししたらホテルに戻るから、海は大丈夫だ。後からな」

「海、心配しているから戻ろうな」

「うん、そうだね」

隆羅が指で海の涙を拭った。

ホテルに戻ると沙羅が待っていた。ルコは疲れて眠ってしまった様だった。

「海ちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫です。心配を掛けてスイマセン」

海が沙羅に頭を下げる。

「海ちゃんが大丈夫ならいいのよ。隆羅もとても落ち着いていたしね」

「沙羅、明日は別行動で構わないか？ 海を午前中だけでも休ませたいんだ」

「いいわよ、ルコと茉弥を連れて竹富島にでも行って来るわ」

「隆羅、私はもう平気だから」

「駄目だ。明日の午前中は寝ている、そうしたら遊びに連れて行ってやるから」

「うん、隆羅がそう言うならそうする」

「部屋で休もう」

部屋に戻り横になる、隆羅は疲れていたのか直ぐに眠ってしまった。

「また、隆羅に助けてもらったね。ありがとう」

寝ている隆羅にキスをして、海も目を閉じた。

夏休み - 4

翌朝、海が目を覚ますと隆羅の姿が見当たらなかった。

しばらくベッドの上でボーとして居ると部屋のドアが開く音がした。

「隆羅、何処に行っていたの？」

隆羅がトレーを持って部屋に入ってきた。

「朝食をテイクアウトさせて貰ったんだ」

「はあう」

海があくびをして時計を見ると9時半になっていた。

「ほら、朝ごはんだ」

隆羅が海にトレーに乗った朝食を渡す。

綺麗に盛り付けられた洋食だった。

「何だか、映画の主人公みたいだね。ベッドの上で朝食なんて」

「そうだな、こぼすなよ」

海はベッドの上で足を伸ばし、足の上にトレーを置いて食べ始め。

隆羅は横のベッドに座り膝の上にトレーを置いて朝食を取った。

朝食を食べ終わり隆羅が片付けを始めた。

「海、このカップを持っていてくれ」

「うん、私も手伝うよ」

「大丈夫だ」

隆羅が食器をティッシュで軽くふき取り重ねて部屋の外にトレーに乗せて置いた。

「海、カップをくれるか」

「はい」

海が隆羅にカップを渡すと、ステンレスボトルから何かを注いで渡してくれた。

「隆羅、これは？」

「舞、特製のカフェオーレだ」

「美味しい。隆羅もここに座って」

「ああ」

隆羅がベッドに上がり海の横に座りカフェオーレを飲む。

海が寄り掛かってきた。

「幸せ。こんなに幸せでいいのかなあ。淒く自由に居られて皆と居ると自然に笑顔になるの。これが隆羅の言っていた自然体って言うやつなんだろうな。皆がこの島が好きになり住み着いちゃう理由が判る気がするなあ」

「海にも判って来たんだな」

「うん、何となくだけどね。今日は何処に遊びに連れて行ってくれるの？」

「米原の海でシュノーケリングをしようかと思っているんだ。綺麗な海の中を見たいだろ」

「本当に、海の中を覗けるの？」

「ああ、とても綺麗だぞ」

「早く、準備して行こうよ」

海が普段どおりの海に戻っていた。

「そうだな。それじゃ水着に着替えてくれるか」

「うん、あれ？ でも水着は」

「軽く水洗いしてベランダに干してあるぞ」

「ええっ、隆羅がやったの？」

「他に誰がするんだよ、海水がついたままじゃ不味いだろ」

「そうだけど、恥ずかしいよ。もう」

「俺が取り込んでくるか？」

「もう、駄目」

海が赤くなりベッドから飛び出し水着をとりバスルームに入ってしまった。

準備を済ませ米原キャンプ場に向かう。

キャンプ場には入らずに大きな駐車場と売店があるとところに車を止めた。

「車がいつぱいだね、殆どレンタカーだ。ここが一昨日言っていた所だね」

「そうだ」

隆羅がメッシュバッグとライフジャケットを車から取り出して、ビーチに向かい歩き出した。

「人がいつぱいだ。でもゴチャゴチャとしてないんだ」

「内地の海は異常なんだよ。あんな芋洗いみたいな海水浴場はゴメンだよ」

「内地って本土の事だよな」

「ああ、そうだ。海は凄いな」

「えへへ、褒められちゃった」

ビーチに荷物を置いて、準備を始める。

「海、これを着てくれ」

「隆羅、これって何？」

「日焼け止めの為と珊瑚や岩から体を守ってくれるんだ。足は日焼け止めを塗っておけよ」

海が隆羅から受け取ったラッシュガードを着て日焼け止めを塗りマリンブーツを履いた。

「少し、シュノーケリングの講習を浅瀬でするぞ」

「うん」

2人で海に入っている。

最初は、マスクだけを着けてマスクとシュノーケルの使い方を隆羅がお手本を示しながら教える。

その後でフィンを着けてフィンの漕ぎ方と立ち上がり方などひとつひとつ講習した。

「隆羅って、ダイビングショップの人みたいだね。とっても教え方が上手、分かりやすいし。それに、ふふふ」

「何が可笑しいんだ？」

「隆羅、周りを見て」

隆羅の耳元で海が囁いた。

周りを見ると何組かの観光客が隆羅の講習に耳を傾けて居た。

「それじゃ、リーフの外に出てみるか」

隆羅がライフジャケットと2人のフィンとマスクそれにビニール袋を持って歩き出した。

「隆羅、その袋に何が入ってるの？」

「刺身の残りだよ、ホテルで貰ってきたんだ。魚を呼ぶのに使うんだ少しだけな、行くぞ」

隆羅が海の手を引きながら器用に大きな岩のような珊瑚の上を歩き出す。

海も転ばないように注意しながら隆羅の後の続いた、少し歩くとリーフの上に出た。

そこから先は海の色が全く違った。

「深そうだね」

「それなりにな、これを着けていれば溺れる事はないさ」

隆羅が海にライフジャケットを着ける。

「さあ、マスクを着けてくれ」

「うん」

隆羅は既にマスクを着けていた。

「俺が先に行くから、合図したら海も来てくれ」

「分かった」

隆羅が先に海に入りフィンを着けている。

そして海に手招きをした、海が恐る恐る海に入った。

ライフジャケットの為に体は簡単に水に浮いた、隆羅が海のフィンを指差す。

海が足を少し上げると隆羅がフィンを着けてくれた。

「海の中を見てごらん」

隆羅に言われて海が海の中を覗くとそこには青い世界が広がっていた。

何処までも青く黄色や青などのカラフルな魚達が泳いでいた。

波打ち際から珊瑚礁が海の中に落ち込んでいて底は見えないけれど

恐怖感は無かった。

真上から太陽の光が差し込み光のシャワーを浴びているようだった。隆羅が刺身を取り出し細かく揉み解すと無数の小魚が集まって来た。隆羅が海に刺身を渡す、すると海の手にも魚が集まった。

しばらく魚達と戯れていると隆羅が行こうと手で合図をする。

海の手を取って珊瑚礁に沿うように泳ぎだす、少し泳ぐと淵の様になったところに出た。

隆羅が顔を水面から出した。

「どんな感じだ。海の中は」

「もう、感激だよ！ 凄く綺麗で、まるで、空を飛んでいるみたい。帰りたくなくなちゃうよ」

「それは、嬉しいな」

「ねえ、隆羅。ジャック何とかやって」

「潜る所を見たいのか？ 良いぞ」

海の手を離して隆羅がシュノーケルをくわえると海もシュノーケルをくわえて海の中を見た。

隆羅が息を軽く吸い、体を水中に向け足を伸ばすとスウーと何の抵抗も無く潜り始めた時々鼻をつまんで耳抜きをしている。

まるで青い世界の吸い込まれていくようだった。

海の真下で隆羅が息を少し吐いた、隆羅の吐いた息が気泡になって上がってくる。

それを追いかけるように隆羅も上がってきた。

「隆羅、凄い。私にも出来るようになるかなあ」

「練習すれば直ぐになれるさ、でも深く潜るにはそれなりの練習が必要だけだな」

「こんな青い世界が同じ日本にあったんだね」

2人で海中散歩を楽しみ、浅瀬に戻りしばらく遊ぶ。

ビーチで横になりからだを温める。

「そろそろ、いい時間かな」

「隆羅、何の時間が良いの？」

「美味しいパンがそろそろ焼き上がる時間なんだ。体を拭いて買いに行こう」

「うん」

体を拭いてＴシャツを羽織って車に道具を放り込み車を出すしばらく走る、海側にある小さな木の看板を目印にわき道に入ると可愛らしい真つ白な建物のパン屋が見えてきた。パンの焼けるいい匂いが漂っていた。

「隆羅、美味しそうだね。何がお薦めなの？」

「カレーパンが美味しいけど、凄く辛いからな。紅芋のアンパンも美味しいぞ」

いくつかのパンを買って店を後にする。

「体が塩ばいね。べとべとだあ」

「水浴びをするか」

少し車を米原の方に戻り小さな橋の所に車を止めた。

「ここに、何があるの？」

「小さな滝があるんだよ。今は誰も居ないからラッキーだぞ」

隆羅が橋の脇から下に降りた。

海も後を着いていく、直ぐに小さな滝が見えた。

隆羅がゆっくり滝壺に入って行く。

「冷たくって気持ちが良いぞ。海もおいで」

「つ、冷たい。でも体が日焼けで火照っているから、気持ちが良いね」

海が足をつけてゆっくり入り滝の下で髪に着いた海水を洗い流した。

「ヒカゲヘゴがお日様を遮って涼しいね」

「静かだな」

海が隆羅に寄り添った。滝の水音と蝉の鳴き声しかなかった。しばらくするとガヤガヤと誰かが降りてくる気配がした。

「そろそろ、行こう」

隆羅が海の手を引き滝壺から上がる。

入れ違いで地元の子ども達がやってきた。

「気を付けて遊べよ」

「はい。ナイチャーのニニイ、ネエネエ。バイバイ」

隆羅が子ども達に声を掛けて橋に上がり体を拭いて車に乗る。

「いい子達だね。隆羅」

「そうだな、シャイな子が多いけどな」

車を於茂登トンネルに向けて走らせた。

トンネルの手前の公園の駐車場に車を止めて、クーラーボックスから飲み物を出しパンを持って木陰に座った。

近くで家族連れが水遊びをしている。

「隆羅、ここは何？」

「ここは、トンネルから湧き出す水を使って小川を造り市民の憩いの場所になっているんだ。ここなら小さな子どもでも安全に水遊びが出来るからな」

隆羅が、紙袋からパンを取り出した。

「紅芋パンで良いか？」

「うん。わぁ、まだ温かいね」

そして隆羅はカレーパンを食べ始めた。

「紅芋も餡子がいっぱい美味しい。フランスパンの生地なんだね」

隆羅は普通にカレーパンを食べていた。あれ程、激辛だと言っていたのに。

「隆羅、カレーパン1口ちょうだい」

「大丈夫か？ 辛いぞ」

「大丈夫だよ、隆羅だって普通に食べてるじゃん」

隆羅からパンを受け取り1口かじる。

かじった瞬間、海の顔つきが変わった。

「ん、んん」

目に涙を浮かべ、口を半開きにして首を振っていた。

「しょうがないやつだな」

隆羅が海の口元に手を出すと海が1口だけ噛んだパンを出した。

「かりやいひよ（辛いよ）、たきやりや（隆羅）」

「ほら、ゆつくりお茶で口をゆすぐ様に飲むんだ」

「ひいゝ、たかりやのバカ」

「自分で大丈夫だって言っただろ、バカなのは海だ」

海が出したパンを口に放り込んだ。

「ああ、ばつちいよ」

「何でだ？ ただの食べかけだろう、ルコが小さい時はしょっちゅうだったぞ」

「それは子どもの頃の話で」

「子どもも大人も関係ないだろ、親子か恋人の差だけだろ」

「そうだけどさ」

近くで遊んでいた家族連れの小さな子どもが海に向かって歩いてきた。

1〜2才だろうかまだ頼りない歩みだった。

「うふふ、可愛いな。おいで」

海が手を差し出すと海の手を小さな両手でシッカリ握り海の顔をみて笑っていた。

そこへ子どもの母親がやって来た。

「ユー君、駄目よ。お邪魔しちゃ、ゴメンなさいね」

母親が子どもを抱きかかえ会釈をして帰って行った。

「いいな、あんな可愛い子」

「やつぱり、女の子は子ども欲しがるものなのかなあ」

「それは、好きな人の子どももならね」

「海が、ちゃんと高校を卒業したらだな」

言い終わらないうちに隆羅が立ち上がった。

隆羅の言葉が良く聞き取れずポカンとした顔を海がしている。

「ほら、行くぞ」

隆羅の呼ぶ声に海がハツとした。

「ねえ！ 隆羅。今なんて言ったの？ 私がちゃんと卒業したら何なの？ ねえてば！ 隆羅」

「早くしないと、置いていくぞ」

海が慌てて隆羅の後をおいかけ隆羅が車に乗り込んだ。

「ねえ、本当に卒業したらなの？」

「何がだ？」

「だから、結婚とか」

「結婚なんて俺がそんな事を言ったか？」

「ずるいよ。隆羅が卒業したらって言ったじゃん」

「前に、いつも側に居てやるとは言ったけどな」

「隆羅のいけず！ 私はさっきの言葉忘れないし、信じるからね」

「一寸先は闇と言うからな」

「もう、隆羅のイヂワル」

海が可愛い頬を膨らませた。

「怒った顔も可愛いぞ。海」

「もう、バカ」

車はトンネルを抜け市内へと向かっていた、しばらく走ると左側に湖みたいなものが見えてきた。

「隆羅、あれは何なの？」

「農業用のダム湖だよ。石垣島には大きな川が無いから幾つものダムがあるんだ」

ダムの近くまで車で入っていく。

「何だか、島にいるって感じがしないね」

「そうだな。観光農園にでも寄ってフルーツでも食べてみるか？」

「うん、良いかも」

車を出し、しばらく走り観光農園に向かう。窓から山並みが見えてきた

「隆羅、あの山凄いいね」

「あれが、於茂登岳だよ。頂上にテレビ塔が見えるだろ」

「隆羅は登った事あるの？」

「1回だけな。景色もあまり見えないし、野底のマーペーの方が登

るなら楽しいぞ」

「私は、山登り苦手だなあ」

「じゃ、今度はマーペーに登ろうな」

「苦手だつて言ってるのに」

「頂上は気持ち良いのになあ」

観光農園に着き、車を止めて園内に入る。

入り口の壺にお金を入れて園内を散策する。

「隆羅、いろんな色のハイビスカスがあるんだね」

「街中でも注意してみればいろんなハイビスカスを見られるんだぞ。赤、白、黄色、オレンジ、ピンクそれに八重咲きのハイビスカスもある」

「椰子の木やブーゲンビレアもいっぱいだ。隆羅フルーツは？」

「食べる事ばかりだな」

「フルーツは美容にも良いんです」

「分かったよ、あそこの建物にあるからな」

建物に入ると色とりどりのフルーツが並べられていた。

「隆羅、見た事の無いフルーツばかり」

「パインは食べただろ。マンゴ・パイヤ・パッションフルーツ・レンプ・アテモヤ・スターフルーツ・カニステルかな」

「隆羅、凄い。レンプってどんな味？」

「梨の味に似ているかな」

「じゃ、このイボイボのフルーツは？」

「アテモヤ。森のアイスクリームと呼ばれていて、甘くてクリーミーな感じかな」

「この星型のフルーツは？」

「これも、梨みたいな食感かな、甘みは少ないぞ」

「この黄色いのは？」

「別名エッグフルーツ、卵の黄身を食べてる感じだよ」

「何だか、微妙な感じ満載だね」

フルーツの盛り合わせを隆羅が頼んだ。海が食べながら不思議な顔

をしていた。

「やっぱり、パイナップルかマンゴーが1番かな」

「そろそろ、ホテルに戻ってプールにでも行つてゆっくりするか」

「そうだね、待ち合わせの時間までだいぶあるからね」

今夜は食事を市内で食べようと沙羅達と約束をしていた。

観光農園をでてホテルまではそれほど時間は掛からなかった。

駐車場に車を止めてフロントで鍵を受け取りそのままプールに向かう。

隆羅はプールサイドのサマーベッドに横になり、海はプールで泳いでいた。

「隆羅、とっても気持ちが良いよ」

日が傾いていたが、まだまだ明るかった。

隆羅が起き上がり海の所に歩いていく。

「海。もう、ゆっくりした方が良いぞ。バーでのんびりしよう」

隆羅が海の手を引っ張りプールからあげた。

海が笑顔で答えてから軽くシャワーを浴びタオルで濡れた体を拭きシャツを羽織りバーに向かう。

バーには舞が居た。

「舞ちゃん。今朝はカフェオーレありがとう」

「美味しく入れられたかなあ」

「とても、美味しかったよ」

「如月先輩もいらつしやい」

「あれ、今日は1人なのか？」

バーベキューテラスのオープン時間が間近なのに舞が1人でバーに居るのを海が不思議がった。

「そうなんですよ、ヘルプの子が体調を崩して急に休んでしまったから」

「この時期は、どこも忙しくってヘルプ頼めないからな」

「でも、みんなが手伝ってくれるから大丈夫だと思うんですけど」

ジュースを頼んで海と2人でまったりとしていた。

今日は少し雲が多く綺麗なサンセットは望めそうになかった。

「オープンするよ」

藍の声が響いた、藍に目をやると手を振っている。

海が手を振り返した。

藍の声と同時に待っていたお客がバーベキューテラスに流れ込んできた。

最初のうちはドリンクのオーダーに何とか間に合わせていられたが、慣れないヘルプのせいでオーダーが溜まりだし舞が焦りだした。

「隆羅、舞ちゃん大変そうだよ。何とかならないかなあ」

海が心配そうに隆羅に声を掛ける。

「仕方が無い、俺が何とかしよう」

「隆羅、大丈夫なの？」

「任せる」

海が不安そうな目で隆羅を見た。

隆羅がシックなアロハシャツと短パンのままバーカウンターの中心に入り藍に目で合図をする。

藍が頭の上で両手で大きなOKサインを出して大きく何度も頷いた。それを見た隆羅がヘルプの子に声を掛ける。

「アップテンポの曲に変えて」

「わ、分かりました」

ヘルプのスタッフがカウンターを飛び出し藍に耳打ちをする、藍が直ぐに指示を出していた。

その間に隆羅はお酒を並べ替えてレシビを確認していた。

「飲み物はまだですか？」

「ビールは？」

お客の請求の声があちらこちらで聞え始めザワザワし始めていた。流れていた曲が小さくなりアップテンポの曲のイントロが流れ始めた。

隆羅がお客に聞えるように片手を挙げ指を鳴らし声を上げた。

「さあ、今宵も楽しもう！ イツァ ショータイム！」

隆羅の声がテラスに響くと、ザワザワしていたお客が一斉に隆羅に注目した。

次の瞬間、隆羅が曲にあわせて踊るようにお酒のボトルを操りながらカクテルを作り始めた。

クルクルと手の平の上でボトルが回り。

グラスに氷が注がれ。

次々にシェーカーを心地よい音を鳴らしながら連続して振りカクテルを仕上げていく。

それをいつの間にかカウンターに付いた藍がテーブルに運んでいく。カクテルを出すと今度は生ビールを注ぎ始めた。

そしてビールを注いだジョッキをカウンターの上を次々に滑らせる。それをスギと藍が交互に受け取りテーブルに運び出す。

舞が呆氣に取られて隆羅を見ていた。

長めの曲が終わると殆どのドリンクがテーブルに行き届いていた。隆羅が両手を広げ挨拶をするとお客さんからは拍手や歓声が上がった。

カウンターの前ではお客に藍とスギがお辞儀をしていて入り口の方を見るとレストランのスタッフも見に来ていた。

「凄い。憧れのショータイムだあ！」

「舞ちゃん、あれは何なの？」

舞が啞然として海も驚いていた。

「あれは、先輩が昔やっていたのよ。ここで毎晩」

藍が不意に声を掛けてきた。

「係長。私、感激しちゃいました」

「舞は、ちゃんと先輩を見て良い所を吸収しなさい。2度とこんなチャンスは無いわよ、憧れていたんでしょ」

「はい！」

舞が笑顔で返事をした。

すると藍がサラダとソーセージの盛り合わせを持ってきてくれた。

「海ちゃん、これサービスだから食べてね」

「藍ちゃん、隆羅はあんな凄い事をしていたの？」

「そう、毎晩ね。最初は遊び半分でやっていただけ、今日みたにパニックになった日があつて先輩が機転を利かせてお客さんを楽ませたの。それが好評で先輩が居る時はいつもね。実は舞はお客さんとして先輩のショーを見て懂れてここにやってきたの、でもその時はもう先輩は居なくつて残念がつていたの」

隆羅を見ると舞にボトルの扱い方をレクチャーしていた。

「でも、信じられないな。学校ではあんなの想像できないもん」

「先輩つて学校ではどんななの？」

「髪の毛を綺麗にセットして、ビシッとスーツを着て。真面目で厳しくつて、でも凄く気配りしてくれる優しい先生」

「ここでも、レストランに居る時はそうだったなあ。蝶タイして黒服着て、でもOFFは凄くラフで楽しくつて優しかったよ」

「そうそう、ONとOFFではまるで別人。だけど堅苦しい格好は嫌いつて言つてたけ」

「もう1日だけ、先輩ショーをやつてくれないかなあ」

「私が頼んでみる」

「ええっ？ 海ちゃん本当に」

「うん、やつてくれるか分からないけど」

「嬉しい。舞や他の皆に、もう1度見せたいんだ、お願いね」

海の手元に置いてある隆羅の携帯が鳴つた。

海が隆羅に向かい携帯を持ち「電話」と口を動かすと隆羅が目で合

図した。

「舞ちゃん、また今度な。先客があるんだ」

「ありがとうございます」

舞が深々とお辞儀をした。

隆羅がカウンターから出てきて電話を掛ける。

「さあ、海。行こうか沙羅達が待つているから」

「うん」

「先輩、今日はありがとうございました」

藍が深々と頭を下げた。

「なんでもないさ、この間のビーチパーティーのお礼だよ。待ち合わせがあるからこれで行くからな。後は頼んだぞ」

「はい」

海と一緒にプールサイドバーを後にしてフロントに向かい、タクシーに乗って待ち合わせの居酒屋『湖南』に向かう。居酒屋に入ると沙羅とルコが先に始めていた。

「パパと海は遅いんだから、またラブラブしていたんでしょ」

「違うよ、イツァ ショータイムって」

席に着き飲み物を頼むと海が片手を挙げて隆羅の真似をした。

「何それ？」

「凄い、格好良かったんだよ。隆羅がカクテルを踊るように作って、生ビールをカウンターの上がサーって滑らせて」

海が興奮して振り付きでしゃべりまくっていた。

「海、興奮しすぎだよ」

「まるで、映画のカクテルみたいなのね」

「そうそう、沙羅さん。そんな感じ」

「パパが？ 信じられないよ。それより今日は何をしていたの？」

「米原のリーフの外をシュノーケリングしたり、焼きたてのパン食べたり、滝に行って水浴びしたり。凄く楽しかったよ」

「なんだか、海はっかかりずるいなあ」

「ルコは何を言っているの。子どもの頃に同じ様な事をしてもらったじゃない」

「ええ、でもママ。今が良いんだもん」

「茉弥が大きくなったらね」

「しょうがないか」

ルコと沙羅が料理に箸を伸ばした。

海は神妙な顔つきになって隆羅の目を見て話し始めた。

「ねえ、隆羅。お願いがあるんだけど」

「何だ、海？」

「もう1度見たいな、ショータイム。駄目？」

「勘弁してくれよ」

「だって舞ちゃんなんか隆羅のショーを見て憧れてあのホテルに來たんだよ。お願いだからもう1回だけ」

海が手を合わせて隆羅を見つめた。

「そんな目をして見るな。沙羅、悪いが」

「分かったわ、貸しよ。海ちゃん私達と明日は西表島をツアーで觀光しましょう」

「えっ、でも隆羅は？」

「やるんならトコトンなのよね、隆羅」

「しょうがないだろ、海の頼みなんだから」

「じゃ、やってくれるの？」

「ああ、ちゃんと舞ちゃんにもレクチャーしないとな」

「ありがとう。隆羅大好き」

海が嬉しそうに隆羅に抱きついた。

「はいはい、ラブラブしてたら料理が冷めるから頂きましょう」
「はい」

夏休み - 5

翌朝、海達は朝早く集合場所の離島ターミナルにタクシーで向かった。

隆羅はフロントで藍の出勤時間を聞いていた。

しばらく棧橋で時間を潰しレストランに向かう。

レストランには藍以外にも数人のスタッフが居るた。

「おはよう」

声を掛けながら隆羅がレストランに入る。

「おはようございます。あれ、先輩？ 海ちゃんと一緒にじゃないんですか？」

「海に、頼まれてな」

「ええっ、もしかしてまた今夜やつてもらえるんですか？」

「ああ、それで少し条件があるんだが」

隆羅が藍と話を詰め始めた。

「そんな事ならお安い御用ですよ。舞も喜ぶし、早速バーに行きましよう」

藍が他のスタッフに指示をだし準備させ隆羅達はプールサイドバーに向かった。

「あれ、係長に先輩。今日はどうしたんですか？」

藍が舞に事情を説明をすると舞の顔が輝きだした。

「直ぐに、着替えてきます」

舞が走り出して着替えに行くとかクロが舞の代わりにバーに入る。

「クロ、何だか悪いな」

「とんでもないですよ、自分は昨日休みで見逃して悔しい思いをしたんです。今夜見られるなら、このぐらいなんでもないですよ」

しばらくすると舞がＴシャツに着替えを済ませ走って戻ってきた。

「さあ、始めるぞ」

隆羅がビーチに向かい歩き出した。

「せ、先輩。何処に？」

「ついていきなさい」

藍に言われて栈橋近くのビーチの手前の木の下に向かう、そこには長テールとシェイカーや水の入ったボトルが数本準備されていた。

「舞、いいか厳しく行くからな」

「はい」

舞の顔が真剣になった。

「練習は砂の上や芝の上ですればピンを割る事も無いからな、暑いのは我慢しろ」

「基本はこんな感じかな。基本さえ出来れば後は組み合わせただけだから」

初めに簡単なボトルの回し方を教える。

隆羅が目の前でやってみせ、隆羅の実演を見て舞が同じように練習する。

「なかなか良い感じじゃないか」

「前に見たのを真似してっただけ練習していたんです」

「じゃ、次は組み合わせで行こうか」

少し難易度が高くなる、それでも舞は必死に吸収しようと懸命に練習を繰り返す。

木陰とはいえ砂浜のの照り返しが強く汗が噴出した。

「お疲れ様です。舞、頑張っているじゃん。先輩、差し入れです」

スギが様子を見に顔を出して冷たいドリンクを持ってきてくれた。

「悪いな、スギ。舞、少し休もう」

「でも……」

「根詰めても良い事はないぞ」

「はい」

木の下に座り汗を拭きドリンクを飲んで一休みする。

「先輩、どんな感じなんですか？」

「かなり、良い線いってるぞ。頑張り屋だしな」

「そうなんですか、良かったな。舞」

「はい、頑張ります」

しばらく休憩をして練習を再開する。

「今からは、本番向けの練習だ。2人で同じ動きをしてカクテルを作る、最初はゆっくりとそして徐々にスピードを上げていくからな」

「はい、分かりました」

「1・2・3・4 2・2・3・4 3・2・3・4……」

隆羅の掛け声だけが響いたしばらくするとテンポが上がってくる。

「1・2・3 2・2・3 3・2・3……」

ガチャンと音がして舞がボトルを落とした。

「大丈夫か？」

「大丈夫です、汗で滑っただけです」

「よし、最初から」

「1・2・3・4 2・2・3・4 3・2・3・4……」

段々形になり始めていた。

気が付くと桟橋にギャラリーが集まっていた。

調理場・レストラン・フロントのホテルのスタッフ、それにお客さ

んも数人。

「凄い！」

「格好良いな」

周りの声で舞のリズムが狂いだす。

「舞、集中しろ。笑顔を忘れるなよ」

「はい！」

ギャラリーが集まった事で良い緊張感が生まれてくる。舞が笑顔になった。

「そうだ、自分が楽しむんだ。そうすればお客さんも楽しんでくれるからな」

何度と無く繰り返し練習して形になり始め、段々舞が自分の物にしていく。

そして最後の決めのポーズをとった時、ギャラリーから歓声と拍手

が上がった。

「先輩！ そろそろ時間です」

藍が数人のスタッフと呼びに来た。

「分かった。舞は俺が寮に連れて行くから、片付けを頼む」

「舞、どんな感じなの？」

「まだまだ、かなあ」

「そんな事はないぞ、8〜9割がた出来ているからな。時間が無い、行こう」

「はい」

隆羅と舞が駐車場に向かうと見物していたレストランのスタッフに藍が声を掛けた。

「ねえねえ、どんな感じだった？」

「凄い、格好良いんです。練習であれだけなら本番がめちゃ楽しみですよ」

「良かった」

藍が胸を撫で下ろした。

寮はホテルから車で数分の所にあった。

「舞、どの位で準備できる？」

「15分くらいで」

「じゃ、20分したら迎えに来るから」

「はい、分かりました」

舞を迎えてホテルに戻り、直ぐにプールサイドバーに向かう。

「ほら、弁当だ」

「ありがとうございます」

「腹ごしらえしないと仕事にならないからな」

隆羅が出来立ての弁当を舞に渡して、カウンターで弁当を食べているとカウンターのの中では藍が準備を始めていた。

「舞は凄いなだね。見ていた子が感心していたよ」

「憧れだったから、今でも夢見たいですよ」

「本番は、これからだからな」

食事を済ませカウンターでビールジョッキを滑らせる練習をする。並々と水の入ったジョッキをカウンターの上を滑らせる。

最初はこぼれていたが段々こぼれなくなっていくた。

「要領をつかめばなんて事はないだろ」

「そうですね」

その頃、海達は西表島ツアーから離島ターミナルに戻ってきていた。

「パパ達、どうなっているんだろうね」

「隆羅、大丈夫かなあ。舞ちゃん泣いてないかなあ」

「もう、2人とも。あなた達はいつも学校で隆羅から授業を受けているんでしよう、隆羅はそんなに厳しく教えているの？」

沙羅が呆れていた。

「えへへ、ママ。そうでした分からない事は優しく分かるまで教えてくれるんだった」

「そうそう、不真面目にすると凄く怖いけどね」

「さあ、私達もホテルに戻らなきゃ」

送迎のバスには乗らずタクシーに飛び乗った。

ホテルに戻りシャワーを浴びてバーベキューテラスに向かう。

テラスの方がワイワイと騒がしかった。

「何があつたのかな？ 凄い人がいっぱい居るよ」

オープン前なのにテラスには人だかりが出来ていた。

藍を見つけ海が声を掛ける。

「藍ちゃん！」

「ああ、海ちゃん。こちらへどうぞ」

「いいの？ オープン前でしょ」

「今日は、特別よ」

藍がテーブルに案内してくれた。

その席は海側のカウンターが良く見える特等席だった。

海が隆羅の方を見る、舞と打ち合わせをしていた。

気付いた隆羅が「楽しかったか？」と口を動かした。

「うん、とっても楽しかったよ」

「相変わらず、2人は凄いなあ」

海が声を出して答えてルコが感心し席に着いた。

カウンターでは藍が隆羅に近づきインカムを渡す。

「先輩、お願いします」

「俺が、やるのか？ また？」

「これだけ騒ぎになったら誰が仕切るんですか？」

「了解した」

隆羅がインカムを付けマイクテストをして藍にOKサインを送る。

「何が始まるんだろう。ワクワクするね、ルコ」

「何だか凄い事になって来てた気がするけど」

「これが、本当のショータイムなんですよ。隆羅の最後の」

「でも今度来た時には、またやってもらえるんじゃないの？ ママ」

「それは、どうかな。あの舞ちゃんだってこれからドンドンと成長してこれからは彼女のショータイムとして始まるんじゃないかしら」

その時、スピーカーから隆羅の声が流れた。

「バーベキューテラスをご利用いただきありがとうございます。ショータイムは8時過ぎを予定しております。ごゆっくりどうぞ」

隆羅の声がテラスに優しく響くと集まっていたお客達も動き始めた。

「流石ね。パニックにならない様にお客を誘導したわ」

「良かった。どうなるかと思いましたが」

沙羅が関心していると藍が海達のテーブルにジュースを運んできた。

「前も、隆羅がしゃべっていたの？ 藍ちゃん」

「そうよ、凄く素敵だったんだから。楽しみにしていてね」

海が藍に聞くと藍が海にウィンクした。

「オープンします」

藍が声をスタッフに掛けた。

隆羅の案内もありゆっくりとお客が入り始める、それでも直ぐに満

席になった。

ドリンクのオーダーも徐々に増えだしたが2人はゆっくりと出していた。

日が傾き始めてお客が集まり始めた。

「石垣島の夜は、まだまだこれからです。今は目の前に広がる雄大な自然の贈り物を楽しみましょう。日本一美しいサンセットです」
隆羅の声と共にスローなBGMが流れる。

「海？ もう、乙女な顔をしちゃって。でも素敵だよね、いつもと違うパパって」

「うん」

「また、好きになった。海ちゃん？」

「はい、沙羅さん」

日が海に沈んであたりは暗くなってきた。

ショーの時間が近づくと噂を聞いたギャラリーが集まり始めてテラスの周りには人だかりが出来始めた。

「舞、準備はいいか？」

「は、はい」

隆羅が舞を見るとガチガチに緊張していた。

そんな舞の様子を見て隆羅が急に变な事を言い出した。
緊張していた舞は隆羅の言われるまま言葉に従った。

「お腹をへこませて体の中の空気を全部吐き出す。」

「お腹を膨らませながら鼻から大きく息を吸う」

「もう、1回初めから」

それを見ていたルコが不思議に思い沙羅に聞いた。

「ママ、あれ何をしているの？」

「腹式呼吸をさせて落ち着かせているのよ。舞ちゃんは今日がデビューなんですよ、緊張でガチガチなのよ」

「凄いなパパは、やっぱり」

海は何も言わず、ただ隆羅を見つめていた。

「そろそろ、行くぞ。大丈夫だな。舞」

「はい、ありがとうございます。落ち着きました」

「ギャラリーの皆様にお願ひがあります。他のお客様にご迷惑にならない様にお願ひいたします」

隆羅が声を掛けた。

時計の針が8時を回っている、オーダーもかなり溜まっていた。

「それでは、今宵もお楽しみください」

隆羅と舞が片手を挙げ指を鳴らす。

「イッア！」

隆羅が掛け声を上げる。

「ショータイム！」

2人の声と共にお客さんやギャラリーも叫んで場内が同じ空気に包まれた。

アップテンポの曲にあわせて隆羅が踊るようにカクテルを作り。

舞が生ビールを注ぎながらカウンターの upper を滑らせる。

それを藍・スギ・クロ3人が華麗に受け取りテーブルに運んでいく。

「す、凄すぎる。海、昨日もこんな感じだったの？」

「昨日は、隆羅1人だったけど。今日はもっと凄いかも、2人とも息がぴつたりで」

「驚いたわ、1日でここまで出来るなんて。隆羅の教え方が上手いだけじゃなくて、舞ちゃんに元々才能があったのね」

クルクルと回るボトル。

そしてキン・キン・キンと心地よい音がしてシェーカーを振りグラスに氷が注がれカクテルが出来上がっていく。

それに合わせる様にジョッキがカウンターの upper を滑っていく。

隆羅が、舞に目で合図を送ると舞が隆羅の横に立つ。

そして曲が終わり、隆羅が藍に合図を送る。

先程より更にアップテンポな伴奏が始まり、隆羅がリズムを取る。

「1・2・3 ゴー！」

2人が目の前にそれぞれ2つのシェーカーを置き。

グラスをその横にリズムに合わせて置いていく。

次の瞬間、ボトルが宙を舞う。

それをキャッチし手のひらでクルクルと回しシェーカーに正確に注いでいく。

2人の息がぴったり合い全く同じ動きをする。

マイクは切られていたが海には分かった、隆羅が舞の横でリズムを口ずさんでいるのを。

そして、2人同時にシェーカーを振る。

隆羅が舞のリズムに合わせている。

グラスに注ぎフルーツを飾り付け2人の前に4種類の違うカクテルが出来上がり、2人が両手を広げた。

「ウオー!!!」

と歓声が上がリ拍手が鳴り響き、舞は肩で息をしていた。

藍がカクテルをテーブルに運びカウンターに戻り、藍・スギ・クロそして隆羅と舞がお辞儀をした。

「アンコール!」

何処からか1人の声が上がった。

それは次第に大きな掛け声に変わっていた。

「アンコール!」「アンコール!!」「アンコール!!!」「アンコール!!!!」

藍が指示を請うために隆羅を見る。

「舞、どうする? もう1つのトリプルをやるか?」

「でも、あれはまだ自信が」

「大丈夫だ。自分を信じろ、今までは完璧だ」

「はい。やります!」

舞の目が自信に溢れていた。

舞自身も今なら何でも出来る気がした。

隆羅が藍に合図すると、藍が手を上げて入り口のスタッフにOKサインをだす。

曲が別の曲に変わった。

2人が今度は3つのシェーカーとグラスを並べると曲が流れ始める。今度は隆羅のインカムが入っていた。

「さあ、皆さんも一緒に」

隆羅が両手を挙げ手拍子をしてリズムを取る。

「1・2・3　ゴー！」

リズムに合わせてお客さんやギャラリーが手拍子をした。

クルクルとボトルを回しながら隆羅が面白可笑しくリズムを取った。

「ボトルを回して！　シェーカー　1・2・3！」

「3・2・1で！　ボトルをポン！」

「右・左　右左！」

舞が失敗しそうになっても隆羅の掛け声で修正して行った。

「凄い、凄いよ！　ルコ」

「もう、ビックリ」

海やルコ達もリズムに合わせて手拍子をする。

ギャラリーに混じって手の空いたホテルのスタッフも沢山見に来ていた。

そして、2人同時にシェーカーを次々に振り。

グラスに注ぎリズムに合わせて飾り付ける。

曲が終わると同時に6種類のカクテルが仕上がり、2人が手を広げた。

拍手と歓声が鳴り響いた。

舞が涙を流している。

「先輩、ありがとうございました」

舞が感激のあまり隆羅に抱き付いた。

指笛が鳴り、お客が歓声を上げる。

「舞、まだお前の仕事はこれかだからな」

「はい、スイマセンでした」

舞が涙を拭いた。

「後は頼んだぞ」

隆羅がお客に一礼をしてカウンターを後にし、海達のテーブルにやって来た。

「パパ、お疲れ様」

「茉弥はぐっすりお寝んねかぁ」

隆羅が茉弥の顔を覗き込んで海の横に座る。

「隆羅、凄かったよ」

「西表島はどうだったんだ？ 海」

「水牛車に乗ったり、板みたいな根っこの木を見たり、それとボートで川を上ったの。とっても楽しかったよ」

「ええ、海。本当に？ 私には上の空にしか見えなかったけど」

「ちゃんと観光も楽しんだもん」

「海ちゃんは、隆羅の事が気になってしょうがなかったのよね」

「もう、沙羅さんまで」

そこに藍が料理を運んできた。

「藍、頼んでないけど」

「これは、ホテルからのサービスです。支配人にOKも貰ってます」

ホテルの支配人もショーを見に来ていたのだ。隆羅が一礼をすると支配人も軽く片手を上げて合図した。

「遠慮なく、頂こう」

「わーい。もうお腹ペコペコ」

皆でバーベキューや料理を楽しんだ。

舞を見ると活き活きとし笑顔が輝いていた。

クローズの時間も近づき、お客もまばらになってきた。

舞が隆羅達のテーブルに挨拶をしにやってきて深々と頭を下げた。

「先輩や皆さん、本当にありがとうございました」

「そんなに畏まらなくても、私達もとても楽しかったし」

ルコが舞に言う。

「海ちゃんが先輩に頼んでくれたんでしょ」

「えへへ、私ももう1回見たかったしね。これからもショーはやるの？」

「本当は、ホテルを辞めようと思っていたんです。憧れだけでこの島に来てしまつて目標も何も無く。仕事は楽しかったけど、やっぱり何か違つて思つていました。でも、今は違います。絶対にショーを自分の物にしたいと思います。憧れの先輩のショーを間近で見られて、そして一緒にショーに参加できてとても幸せです。後輩も育てないと、私でショーを終わらせたくないから。必ず自分の物にしますから見に来てくださいね」

「絶対に来るよ、隆羅を連れてね。約束するよ、舞ちゃん」

「本当にありがとうございます」

「舞。オーダーだよ」

「はい。今、行きます。じゃ、失礼しました」

藍が呼ぶと舞が一礼をしてカウンターに戻る。

「良かったね。隆羅」

「そうだな」

「隆羅、あなた知つていたのね。彼女が辞めようとしていた事」

「さあ、俺は何も知らないぞ」

藍が隆羅達のテーブルにやつて来た。

「先輩、本当にありがとうございます。舞もこれで残つてくれると思います」

「やつぱり、藍ちゃんがパパに言つたんだ。舞ちゃんが辞めるかも知れないって」

「いいえ、私は何も言つて無いですよ」

「でも。今、残つてくれると思つて」

「先輩は、分かるんですよね。何となく雰囲気で」

「何の事を言つているんだ？」

「本当なの？ 隆羅」

隆羅がとぼけると海が問い詰める。

「何がだ、海？」

「海ちゃん、本当なんだよ。だって私も舞みたいに引き留められて今があるんだもん、大好きな人ともここで出逢えたし。全部、先輩のおかげなんだ。仕事が残っているので私はこれで失礼します」

藍がお辞儀をして仕事に戻った。

「パパって本当に底が見えないよね。裏でとんでもない事をしてたりして」

「うふふ。案外そうかもよ」

「ルコも沙羅さんも怖い事言わないで下さい」

沙羅が不敵な笑いを零すと海が隆羅の腕をつかんだ。
すると隆羅が優しく海の頭に手を置いた。

「さあ、部屋に戻ってゆっくりするか。今日は、疲れたからな」

「隆羅、明日は今日の貸しを返してもらうわよ。買い物に1日付き合ってね」

「へいへい。了解いたしました。倍返しですか」

「隆羅、何か文句でも？」

「ごさいません。沙羅お嬢様」

海の手を取り逃げ出すように隆羅が席を立った。

「明日は9時集合よ」

沙羅の声が後ろから聞えてくる。

隆羅が手で合図した。

部屋に戻りのんびりする。

隆羅がシャワーを浴び出てきてベッドに寝転ぶと海が隆羅の横に座った。

「知らない隆羅の事、あとどれ位あるのかなあ？」

横目で海が隆羅を見る。

「なんなんだ、その目は？」

「別に、なんでもないけれど」

「海にだって、俺にいけない事の1つや2つあるだろう」

「私に？ 無いもん。だって隆羅の半分しか人生歩いてないもん」

「そうだったな。俺の半分か……」

「隆羅、そんな顔しないでよ」

隆羅の目がとても寂しそうだった。隆羅が体を起こして真剣な顔で海に向き合った。

「海、実は俺……」

「嫌！ そんな目をした隆羅の話なんて聞きたくない！」

海が耳を両手で塞いだ。

その時、隆羅の携帯が鳴った。

「もしもし、タカちゃん絶対に駄目！」

「お袋、何が駄目なんだ？」

綺羅の声に隆羅の声が笑っていた。

「ええっ、あつ。そのママね、あのう。ずるい鎌掛けたのね！」

「明日、9時に集合だからいいな。来ない時は、皆にバラスからな」
隆羅が電話を切ると海が不思議そうな顔をしていた。

「隆羅？ いったい何が？」

「別に何も無いけど」

「そうやって、いつもはぐらかすんだから。隆羅なんか嫌い」

「嫌いか……」

「えっ、隆羅。ゴメン」

海がベッドに潜り込むと隆羅が立ち上がり海が慌てて起き上がる。

隆羅の口が「トイレ」と動きトイレに入っていく。

「もう！ 隆羅のバカ！ 本当に信じられない。大嫌い！」

海が涙目になって叫び布団に包まった。

隆羅がトイレから出てきてベッドに横になり、布団に包まっている海を布団の上から抱しめ言った。

「俺は、こうしていられるだけで幸せなんだがな」

「隆羅、私も。あれ？ 動けないよ。隆羅」

布団に包まれ身動きが取れなくなっていた。

「嫌いなんだろ？ 海は」

「違う、そうじゃなくて。隆羅、隆羅ってば」

しばらく動けないで居ると隆羅の腕から力が抜けた。

「隆羅？」

海がやつとの思いで布団から這い出して隆羅を見ると疲れて眠ってしまっていた。

「お疲れ様、隆羅。本当に子どもみたいなんだから」

海が隆羅の腕の中に潜り込んだ。

夏休み - 6

翌朝、時間通りに集合場所のフロントに行くとき、綺羅が待っていた。沙羅が少し驚いたような顔をして挨拶をする。

「あら、おば様。おはようございます」

「はい、おはよう。あらあら、茉弥ちゃん、オハヨ」

「おお、お袋。ちゃんと来たんだ」

「皆に嫌われたくないですからネ」

綺羅は少し拗ねていた。

「食事をして、何処に行くか決めてくれいな。沙羅」

「ええ、たくさんお買い物するからね」

「俺達は、付き合うだけだからな」

レストランに入ると知らない顔のスタッフばかりだったけど、皆笑顔で迎えてくれて、中には手を振るスタッフもいる。

「凄いいね、皆、笑顔で迎えてくれるよ」

「今じゃ、俺達はちよつとした有名人だからな」

「俺達じゃなくて隆羅がでしょ」

「でも、パパが居ない時でも手を振ってくれるよね」

「イチヤリバチヨーデーだね。隆羅」

「ああ、そうだな」

「また。2人の世界だ」

隆羅が笑顔で答えるいつもの様にルコがからかう。

「沙羅、何処に行きたいんだ？」

「とりあえず。織物が見たいわ」

「了解した」

食事を済ませて車で市内にあるみんなー工芸館に向かう。

「隆羅、ここは？」

「みんなー織と言う織物が置いてあるんだよ」

館の中に入ると右側に展示販売している場所があり左奥に工房があった。

工房の脇の階段を上がる。

「うわぁ、凄い」

「織物の歴史なんかが分かるんだね。隆羅」

「そうだな」

「パパ、みんなー織の説明をして欲しいな」

「歴史や起源なんかはそこに書いてあるだろう」

「面倒くさがらないでさ。いいじゃん」

「昔、通い婚の風習があつた時代に男性からのプロポーズを受けた証として女性が、木綿糸を藍で染めて織り上げた『ミンサーフ』と言う帯を送つたんだ。そして5つと4つの絻模様には「いつ（5）の世（4）までも末永く」という願いが込められており、両脇のムカデの足に似た模様は「足しげくおいでください」という意味が込められていると言われているんだ。これでいいかなルコ」

「凄いね、パパは」

「前にも同じ説明をしたけどな。勉強と同じで覚えが悪いと言うか何と言うか」

「大丈夫よ、隆羅。帰つたら残りの休みは猛勉強させるから」

「要らない事、言わなければ良かったよ」

沙羅が腕組みをしてルコの顔を覗き込みながら言つと海と綺羅が笑つていた。

「あら。この八重山上布つて品が良いのね」

綺羅の目が怪しく輝いていた。

「お袋の悪い虫が出てきたか」

「隆羅、おば様の悪い虫つて？」

「下に降りれば分かるさ」

「でも、凄いね。紅白に出る歌手の衣装も手がけていたりするんだね」

「天皇や首相の写真なんかもあるんだぞ」

ひと通りみて1階に降りると直ぐに店員が声を掛けてきた。

「手織りの体験なんかもありますがどうですか？」

「海、ルコ。やってみるか？」

「うん。織ってみたい」

「私も！」

海が直ぐに返事をしてルコが海の後続いた。

そうして、2人は1番簡単なコースターを指導員の説明を受けながら工房で織り始めた。

沙羅がその様子をデジカメで撮っていた。

「隆羅、おば様とミンサーを見たいから茉弥をヨロシクね」

沙羅が茉弥を隆羅に預け展示販売場に向かった。

隆羅は茉弥を抱っこして入り口近くのベンチで座りながら茉弥をあやしていた。

しばらくすると海とルコがやって来た。

「隆羅、出来たよ」

「どれどれ、上手いじゃないか」

青いコースターが綺麗に出来上がっていた。

「パパ、私も一応出来ただけど」

「どれ、ルコのもいい感じじゃないか味があつて」

赤いコースターだった、少し不恰好だが上出来だった。

「本当に？ 嬉しいな。ねえ、海」

「うん、大切に使うんだ」

「お前たちも、向うで買物でもしたらどうだ」

「うん、そうする」

隆羅も茉弥を抱きながら立ち上がり2人の後に着いていった。

「ルコ、このストラップ可愛いね」

「そうだね、お土産に良いかも」

「欲しい物があれば言えよ、買ってやるから」

「はい」

「でも、ちよつと高いよね」

バッグなどを見ながらルコが小声で言った。

「しょうがないさ、手織りで1つひとつ作っているんだから」
海も色々と見て回っていた。

ネクタイの所で立ち止まって楽しそうに見ている。

「あら。素敵なネクタイね」

「おば様？ 綺麗ですよ。隆羅だったら似合うかって、でも私には買ってあげるお金もないし」

「あら？ お小遣いとか貰ってないの？」

「そんなもの隆羅から貰えないですよ。生活だつて見てもらって、欲しい物は買ってもらっているのに。これ以上迷惑は」

「隆羅がそんな事、知ったらどうするかしら。迷惑なんて思っていないわよ、遠慮する必要は無いのよ。隆羅だつてそんな氣を使つて欲しくないはずよ」

「本当は、アルバイトをしようか考えていたんです。少しでも生活費を入れようと」

「寂しい事を海ちゃんは言うのね」

「寂しいですか？」

「そうよ。もつと隆羅に甘えなさい、そして甘えた分は心で返せば良いの。お金よりも、ずーと大切なネ。隆羅の事。大好きなのですよ」

「はい」

海がまつすぐに綺羅の目を見て答えた。

「じゃ、これを私が海ちゃんにプレゼントするわ。隆羅には内緒よ」

「でも、そんな事」

「海ちゃんは私の娘よ。遠慮なんかしないの」

「ありがとうございます」

海がとても嬉しそうな笑顔をした。

「キヤー。海ちゃん可愛い！」

「お、おば様？」

綺羅が海に抱きついて海の顔が真っ赤になった。

その後の、綺羅と沙羅の買物ぶりは凄まじかった。

店員が啞然とするような買い方をした。

「隆羅、あれが……」

「そうだ、悪い虫だ」

隆羅はうな垂れて、海は呆然としていた。

街の中心に向かい、旧離島棧橋に新しく出来た有料駐車場に車を止めて歩いて街の中を見て回る事になった。

「お土産屋さんがいっぱいあるんだね。隆羅」

「ここら辺は、街の中心だからな。市役所もあるし消防署なんかもこの近くだしな」

「でも、通りの向うはあまり人が居ないよ」

海が市役所通りの反対側にある繁華街を指差した。

「むこうの一角は、美崎町と言って夜の繁華街なんだよ」

「隆羅も行ったことがあるの？」

「昔な。バーに良く行っていたからな」

「そうなんだ」

お土産屋が立ち並ぶアーケードにやって来た。

次から次へ沙羅と綺羅はお土産屋を物色していく、隆羅はいい加減飽きてきていた。

「沙羅、まだ見て回るのか？」

「まだまだよ」

「はあ」

隆羅が溜息をついて海を見て口を動かした。

『わき道 抜ける 2本目 待て』

すると隆羅が直ぐ側のわき道を見ている。

「でも……」

隆羅は振り向かなかった。

仕方なく海がわき道に入り、そして次の通りで立ち止まった。

「2本目ってどう言う事？ 隆羅、抜けられないよ」

しばらく立ち止まり考えて目の前の店の間の通路に入っていく。

「あれ、通り抜けられるんだ」

その通路は行き止まりに見えるが通り抜ける事が出来た。通り抜けた所で隆羅を待つことにした。

「あれ？ 海が居ないよ」

「しょうがない奴だな。探してくる」

ルコは海が居なくなっている事に直ぐに気が付いた。すると隆羅が走り出した。

「タカちゃんまで何処に行くの？」

綺羅が隆羅を呼ぶが気が付かなかった。

「もう、また逃げられたか」

「ママ、どう言う事？」

「隆羅は、海ちゃんを使って逃げたのよ。飽きちゃったんでしょ、買い物に付き合うのに」

「ずるい、私もパパと一緒にきたかったのに」

「茉弥はどうするの？ ルコママ。それに隆羅はこの辺の地理に精通しているわ、追いかけても絶対に見つからないわよ」

「えへへ、ママにママって言われちゃった」

「私が、お昼をご馳走するから。美味しい物でも食べに行きましょう」

ルコが照れながらぺろつと舌を出した。

すると綺羅が沙羅達に言った。

「そのつもりで、隆羅はおば様を呼んだんじゃないかしら。ねえ、おば様？」

「わ、私は別に。仕事が片付いて一段落したから」

沙羅が横目で綺羅の顔をうと、惚けるように綺羅が沙羅から視線を外した。

「何をしたのかしら？ 隆羅達に」

「少し、お部屋の様子をネ」

「ネって、私達の部屋もですよね？」

「だって、私だけお仕事で仲間外れみたいで。ちょっとだけよ」
綺羅が済まなさそうな目をして沙羅を見た。

「ルコ、何が食べたいの？ おば様が何でもご馳走してくれるって
言っているけど」

「もう、沙羅さんまで。何でもご馳走します、欲しい物があれば言
いなさい。買ってあげるから。それでチャラにしてちょうだいな」

「どうする？ ルコ」

「やったー。石垣牛！」

「また、お肉なの？」

「だって、美味しいんだもん。早く行こう」

隆羅は直ぐに海の待つ場所に走ってきた。

「海、こつちだ」

海の手をつかんで走り出した。

「隆羅、何処に行くに？」

「とりあえず、この辺は不味い。何処かに移動するぞ」

少し走り大きな交差点近くのレンタルバイク屋に逃げ込んだ。

「スクーターを借りたいんだけど」

「今はこのスクーターしかないけれど良いかな、ちょっと型は古い
けど2人で乗っても快調に走るよ」

「隆羅、私、スカートだけど」

「海が嫌なら、別に考えるけど」

「うーん、大丈夫。ミニスカートじゃないし」

「じゃ、行こう」

スクーターをレンタルして2人乗りで走り出す、店主の言うとおり
型は古いけど良く走るスクーターだった。

「隆羅、何処に行くの？」

「まずは、腹ごしらえだ。パスタで良いか？」

「うん、パスタ。大好き！」

スクーターで坂を上がると左手に教会が見えてきた。

道を挟んで両側に学校があり教会の隣の学校の脇道を入りスクーターを止める。

「この先は一方通行だから、歩いて少し坂を下るぞ」

「うん、分かった」

隆羅がスクーターを押しながら、その少し後ろを海が歩いた。

少し坂を下ると看板が見えてきた。

「マッド ティー パーティーって不思議の国のアリスに出てくるお茶会の事だよ」

「そうなのか？」

「隆羅は知っていて来たんじゃないの？」

「ここは、島に居た頃に良く来た事があるけど。店の名前の意味までは知らないぞ」

隆羅が店の前にスクーターを止めて中に入る。

その店は小ぢんまりとしているがとてもお洒落な感じの店だった。

「あら、久しぶり。隆羅じゃない。どうしたの？ 突然」

オーナーは女性だった。

すらっとした長身でショートヘアがとても似合っていた。

「久しぶりだな。静しず」

「まあ、あんたはいつもそんな感じだからね。あら、そちらのお嬢さんは？ 娘さん？」

「彼女だけど」

「悪い冗談は止めなさい。犯罪者になりたいの？」

静が隆羅を真顔で睨みつけた。

「彼女の、海だ」

「始めまして、水無月 海です」

「始めまして、私は下坂静穂しもさかしずほ。静って呼ばれているわ。隆羅、本当に彼女なの？」

「俺が冗談言っている顔に見えるか？」

「もちろん。この犯罪者め」

静が隆羅の顔を、今度は悪戯っぽく睨みつけた。

「まだ、法律は犯していないけどな」

「海、何が食いたい？ あそこにメニューが書いてあるからな」
隆羅が壁に掛かっている黒板を指差した。

「隆羅、あの女の人是谁？」

「俺が、ホテルに入った時に出会った一応先輩かな。歳は同い年だけどな腐れ縁みたいな仲だよ」

「ふうん、そうなんだ。何で隆羅の知り合いは女の人ばかりなんだろう」

「海ちゃんでしたっけ」

「はい」

「そんな心配は要らないわよ。隆羅は男でも女でも同じ1人の人間として付き合っているのだから腐れ縁みたいな付き合いが多いけど、男友達もいっぱい居るのよ。だけど男連中は皆忙しいからね」

「そうなんですか？」

「誤解は解けましたか？」

「誤解はしていないけど、ちょっと」

「隆羅は、一途だからよそ見は絶対にしないわよ。しないんじゃないわよ。不器用だから出来ないんだけどね」

静が笑いながら言った。

「何にしますか？」

「何でも良い」

隆羅が海に再度聞いた。普段なら拗ねないのに虫の居所が悪いのか拗ねていた。

「静、お薦めで。パスタを2種類セットで頼む」

「良いのそれで？」

「大丈夫だ」

「少し時間が掛かるけど、待ってくれな」

「うん」

「海、そんなに拗ねないでくれよ」

隆羅が真剣に困った顔をしていた。

「海ちゃん、あまり隆羅を虐めちゃ駄目よ。私は今まで隆羅が付き合ってきた女の子たちを知っているし。隆羅は私が付き合ってきた人の事も良く知っているの。知りたければ全部話すけれど、隆羅のあんな楽しそうな顔は初めて見たの。あなたの事をどんなに思っているか良く分かったわ。それでもまだ、隆羅を責めるの?」

静がサラダとフォークとスプーンのセットを持ってきた。

「そんな、隆羅。本当なの?」

「ああ、知りたければ静に聞けば良い。俺が全部話しても良いが」

「ゴメンなさい。隆羅もいろんな事があって今の隆羅があるんだもんね。私は今の隆羅が好きだから何も聞かない。それに今は、私だけなんだよね」

「もちろんだ」

しばらくして、静がパスタを持ってきてくれた。

トマトのパスタとバジルを使ったパスタの2種類だった。

「あらあら、お熱い事。パスタも熱いうちに召し上がれ」

「いただきます。うわあ、凄い美味しい!」

「ありがとう、喜んでもらって嬉しいわ」

「隆羅のはどんな味なの」

「ジェノベーゼソースが少し使ってあるけどアーリオ・オーリオソースで少しピリ辛かな」

「えっ? ジェ? アーリオ・オー?」

「ほら、交換しよう」

「うん」

海が難しい顔をしながら皿を交換した。

「こ、これも凄く美味しい! バジルソースでペペロンチーノみたいに少し辛いけど」

「良かったわね、隆羅」

「ああ、悪かったな」

「そんな、遠慮する仲じゃないでしょ」

海を見る2人の目がとても優しく感じた。

「静さんの目も、隆羅が料理を作ってくれた時と同じ目だ。とっても優しい目」

「静とは、美味しい酒と美味しい料理と一緒に飲んだり食べたりしたかな」

「私も、美味しい料理を食べている人の顔を見るのが好きなの」

「隆羅も、同じ事を言っていたっけ」

「そんな所が共通するものがあるから今までこうしていられるのかもね。はい、これ隆羅が好きだったパンよ。海ちゃんが殆ど食べちゃったものね」

「あつ、ゴメン隆羅。つい美味しくって」

「いいさ。海がそれで元気になるんならって、このパンも気になっ
てしょうがない目をしているだろう」

「だって、隆羅が好きだったパンってやっぱり気になるじゃん」

「少しだけだぞ」

「うん、ありがとう」

そのパンは胡桃入りのライ麦のパンだった。

「美味しいね、隆羅」

「こうやって千切りながら、パスタソースをつけて食べるのが美味しいんだ」

「本当だ。私、幸せかも」

「はいはい、ご馳走様。デザートよ」

静がデザートを持ってきてくれた。

「このデザートも絶品だぞ」

手作りのデザートも堪能して、静に礼を言ってお店を後にする。

「さあ。次は何処に行きたい？」

「あのね、隆羅が住んでいた所見てみたい。遠いの？」

「ここから、目と鼻の先だけど」

「じゃ、行こうー！」

海が手を挙げて合図した。そこには1分もかからずに到着した。

「あのマンションだけど」

「何階に住んでたの？」

「あそこの部屋だ。3階の」

「へえ、そうなんだ」

「こんな所見て楽しいのか？」

「うん。隆羅の事をいっぱい知る事が出来るから」

スクーターを出してサザンゲートブリッジを渡り公園に向かう。

「海が綺麗だね」

「そうだな」

サザンゲートブリッジを渡ったところにある公園の防波堤の上で追いかけてこをする。

「もう、隆羅はずるいよ。そうやって直ぐに下に降りちゃうんだから」

「海は、真似するなよ。怪我をしたら困るから」

「どう、困るの？」

隆羅の動きがピタリと止まった。

「どう答えて欲しいんだ？」

「何で質問を質問で返すかなあ」

「人を困らすような質問をするからだ。海が怪我をしたらデージ
チムグルしくなるサーネ」

「ずるい！ 島の言葉じゃ判んないよ」

「ずるく無い。行くぞ」

「隆羅のバーカ」

「また、拗ねたのか？ 今日良く拗ねるな。しょうがない、ほら
スクーターに乗ってくれ」

何も言わずに海が後ろに乗った。

「隆羅、ここは？」

サザンゲートブリッジから直ぐの通り沿いにあるお洒落な外観のお店だった。

「ジェラートでもいかがですか？ 王女様」

「じゃ、マンゴーとパインのダブル！」

「俺は紅芋とシークワーサーをダブルで」

「美味しいね、隆羅」

「機嫌は直ったかな？ 王女様」

「王女様って、あつ！」

海が何かを思い出して赤くなった。

「ジェラートにスクーターって隆羅の部屋で見た『ローマの休日』みたい」

「ほら、交換だ。こっちのも気になるんだろ」

「うん、隆羅。ありがとう」

「少し、静かで涼しい所で一休みしよう。それに嫌な予感がするから、もう出よう」

「ええつ、嫌な予感って？」

隆羅と海がスクーターで店を出ると入れ違いで沙羅達がタクシーでやって来た。

「ああつ！ パパ達だ」

「まるで、アン王女とジョー見たいね。しかし、相変わらず良い勘しているわ。見てなさい絶対に捕まえてギャフンと言わせてやるから」

沙羅が隆羅達に向かい中指を立てた。

「隆羅、今のルコ達じゃないの？ 沙羅さんが怒っていたみたいけれど」

「良いんだ。放っておけ」

730交差点を越えて左折する、少し走ると大きな赤瓦の建物が見えてきた。

「隆羅、大きくって綺麗な建物だね」

駐輪場にスクーターを止めて、建物の中に入るとそこは静寂に包まれた図書館だった。

「静かで、涼しいだろ」

「うん、大きな図書館だね」

「夏はここが1番なんだ」

図書館の1番奥に歩いていく、そこには大きなソファが設置されていて隆羅が腰を掛けた。

「隆羅も、本を読みに来たの？」

「寝る為だが」

「もう、隆羅ってば」

「ここは静かだし涼しいし、何より無料だからな。魅力的だろ」

「もう。私、何か探してこよう」

しばらくすると海が数冊の本を持って戻ってきた。

「何を読むんだ？」

「読むんじゃないぞ調べてべるの。ほら、沖縄方言の本」

「たぶん判らないぞ、そんな本じゃ」

「また、そんな事を言う。いいもん」

海が隆羅の横に座り本を開いて調べ始めた。

「チム、チム。あつ、あつた。肝？」

「デージは無いや。隆羅」

切なそうな目で隆羅を見る。

「どうしたんだ？ 海。そんな目をして」

隆羅が腕組みをしたまま横目で海を見てから俯いて目を閉じてしまった。

「判らないの！」

「隆羅ってば、教えてよ」

隆羅の体を揺さぶる。

「静かにしないと怒られるぞ」

「だって」

「さっきの言葉は、ウチナーヤマトグチといって最近の方言なんだ。本当のオジイ、オバアーがしゃべる方言を解る人は少なくなっているんだよ」

「で、あの言葉の意味は？」

「チムは肝から意味が転じて心と言う意味。グルシーは苦しい。デージは凄くとか大変とかニュアンスによって違うかな」

隆羅が目を閉じたまま教えた。

「チムが心で、グルシーが苦しい。デージが凄くって隆羅……」
「シー」

隆羅が口到人差し指を当てる。

「凄く、心苦しいって。ゴメンなさい私いつも……」

隆羅は何も言わず目を閉じていた。海が隆羅の腕にしがみ付いてくる、ほんのり甘い匂いがした。

「海は、なんだか甘い匂いがするな」

「隆羅」

海を見ると海が顔を近づけてきた。

隆羅が海の口到人差し指をあてる。

「来た。行こう」

「えっ、何が来たの？」

訳も解らず隆羅に手を引かれていく、隆羅が本棚の影から館内を見渡す。

「こっちだ」

体を屈めながら青少年ラウンジに入り通り抜けて玄関が出る。

そして急いでスクーターに乗りスクーターを出した。

「隆羅、どうしたの？」

「沙羅達だよ。何があっても捕まえたいらしい」

来た道を戻りジェラート屋の前を通り漁港の方に向けてスクーターを走らせた。

学校が見えてきて学校の裏の防波堤で止まった。

「隆羅、なんでこんな所に？」

「ここはアパートから程近い海岸、サウスウエストブリッジが良く見える。考え事をする時に、良く来る場所だ。防波堤の上に腰を下

ろして海を眺める」

隆羅がスクーターの下を覗きながら言った。

「ああ、ここもアクアマリンの場所なんだ」

「おお、こつちもあつたぞ」

隆羅がシール見たいな物をスクーターから剥がした。

「隆羅、それは何？」

「さあ、何でしょう」

ちよと通りかかった白と黒のツートンカラーの車にそのシールを付け、隆羅が防波堤の上に駆け上がった。

「気持ちが良いな」

両手を上に挙げ全身で隆羅が伸びをした。

「隆羅、ここには良く来たの？」

「ああ、夜に月を見に来たり。昼間釣りをしに来たりな」

「1人で月を見に来たの？」

「さあ。それはどうだったかなあ」

「絶対、1人じゃなかったでしょう」

「昔の事だからなあ」

「そつやつて恍けるんだ」

「昔は昔、今は今だよ」

隆羅がテトラポットの上を歩きながら水際に近づく。

隆羅が1番下のテトラポットの上に立っている。

漁船が近くを通り過ぎようとしていた。

「隆羅、危ないよ」

「これからはいつも海の側に居て、これから……だけの思い出にするかな」

漁船の音に隆羅の言葉がかき消され、波が打ち寄せてくると隆羅がテトラポットを駆け上がった。

海の横を優しい風がフワツと通り抜けると後ろに隆羅が立っていた。

「さあ、行こうか？」

「隆羅、よく聞えなかったの。もう1度お願い」

すると隆羅の口が動いた。

「本当に良いんだよね。私で？ 本当に私だけなんだよね」

「もう、既に2人だけの想い出は始まっているだろ。楽しい事も辛い事も色々あるけれどな」

「うん。そうだね」

「まだ、俺の過去の事が気になるか」

「うん、気になるよ。だって大好きな人の事いっぱい知りたいもん」
「たとえば、ここでキスした人との事もか？」

「ええっ、隆羅。今なんて言ったの？ だ、誰と、キ、キスしたって！」

隆羅が笑いながら海 of 言葉を無視してスクーターに向かう。

「ねえ、隆羅ってば。教えなさい！ 絶対に許さないんだから」
海がスクーターの後ろに乗り隆羅にしがみ付く。

その頃、沙羅達は街中に出来た真新しい警察署の駐車場に居た。

「悔しい！ 隆羅にしてやられたわ」

「沙羅さんも懲りないわね。隆羅に1度でも勝った事があるの？」

綺羅が困り顔で呟いた。

「色ボケしている今なら行けると思ったのに！」

「あらあら、色ボケの隆羅に負けちゃったのね」

「おば様！」

沙羅が綺羅を睨んだ。

「おお、怖い。怖いお婆ちゃんですね、茉弥ちゃん」

「おば様。ママが凄い顔になっているけど」

「ルコまで、笑わないの！」

「ママ、もう諦めてホテルでゆっくりしようよ。私、疲れちゃった」

「そうしませんか。沙羅さん」

「解りました」

隆羅と海はスクーターを返して車で牧場の中を走っていた。

「隆羅、ここって何処なの？」

「ほら、あそこ」

「ああ、私達が泊まってるホテルだ」

高台から下を見ると宿泊先のホテルが見えた。

少し走り整地された場所に車を止め、車から降りた。

「綺麗だね」

目の前に広がる名蔵湾がオレンジ色に輝いていた。

隆羅が石の上に座り胡坐をかいた、海が隆羅の横に座ろうとすると

隆羅が膝を叩いた。

「まだ、教えてもらってないですけど」

海が隆羅の膝の上に座り隆羅の目を見た。

「何の事だ？」

「誰とキスしたの？ あそこで！」

「子どもの頃のルコだよ。ルコにキスされたんだ。ほっぺに」

「なんで、紛らわしい事言うかな」

「知らない女の子だったらどうしたんだ？」

「分からない」

「そうか」

「うん」

海の体から力が抜けて隆羅に体を預けてきた。

「今までちゃんと付き合った事がある女の子は3人だけだ。沙羅は別としてな。もう10年以上前のことだよ」

「何で別れちゃったの？」

「若さ故、すれ違い、そんな所かな」

「そうなんだ。何でそんな話をしてくれたの」

「海だからかな」

「私だから？ 本当に？」

「本当だ」

「ありがとう」

「そろそろ、ホテルに戻るか」

「そうだね、皆待つてるね」

「1人だけ怖い顔をしてな」

ホテルに戻るとロビーでルコが待っていて沙羅は見当たらなかった。

「ルコ、どうしたんだ。1人で」

「パパ達を待つていたの。料理長さんが一席設けたからどうぞって」
「悪かったな待たせて。行こうか」

『ゆんたくはんたく』に着くともう宴会は始まっていた。

支配人、藍、スギそして沙羅やルコ、綺羅、皆が賑やかに料理やしやべりを楽しんでいた。

「おおつ、主賓のご到着だあ」

「遅いよ」

「ラブラブで」

スギが叫ぶといろんな冷やかしの言葉が飛んで来る。

しばらくすると通り雨でクローズになったプールサイドバーの舞も合流して石垣島最後の夜を楽しんだ。

翌日の昼過ぎにテスト飛行の例のジェットで帰路に付く。

青い海がドンドン遠ざかりやがて見えなくなる。

そうして1週間の楽しく色んな事があった石垣島での夏休みが終わった。

羽田に着き遅めの昼食をとり綺羅と別れ夕方マンションに到着した。

「隆羅、マロンを迎えに行こうよ」

「そうだな、荷物を部屋に置いてからだな。沙羅達はどっするんだ？」

「少し、休んでから考えるわ。ルコ食事は外で済ませましょう」

「うん、分かった。パパ達は？」

「マロンを迎えに行つて買い物をして部屋でゆっくりだな」

「そうなんだ。じゃ、海またね」

「うん、明日ね」

マロンを近くのペットショップに迎えに行き買い物を済ませて、隆羅が簡単な料理を作り夕食を食べることにする。

「わぁ、隆羅の手料理久しぶりだ。おいひいなぁ」

「食べるか、しゃべるかどっちかにしろよ」

「えへへ、怒られちゃった」

「明日から、また仕事だな」

「頑張って働いてね」

「そうだな、海も勉強シツカリな」

「うん。分かってる」

食事を済ませ片づけをして、リビングのソファでくつろぎながら2人でコーヒーを飲む。

「楽しかったか。石垣島は？」

「うん。今までで1番楽しい旅行だったよ、隆羅の事いっぱい知ることできたしネ」

「そうか、それは良かったな」

「それでね、はいこれ」

海が綺麗に包装された長細い包みを出した。

「なんなんだ、これ？」

隆羅が包みを開けると、ミンサー織の綺麗な青いネクタイが箱に入っていた。

「あのね、隆羅に似合うかなあって見ていたら。おば様が買ってくれたの」

「お袋が？」

「そう」

海が申し訳なさそうな顔をしていた。

「そんな顔をしてどうしたんだ？」

「怒らないの？」

「どうして、怒らないといけないんだ。海が見立ててくれたんだろ」

「そうだけど、おば様は内緒って」

「お袋は、海の事を娘だって言っていたんだろ」

「なんで、分かるの？」

「親子だからさ。ネクタイありがとうな」

「うん」

「何か言いたい事があるんじゃないのか？」

「えっ、別に何も……」

海が視線を隆羅から逸らした。

「遠慮なんかしていたら怒るぞ。海」

「あのね、隆羅。少しでもお小遣いが欲しいのだけど」

隆羅が真っ直ぐに海を見つめると海がモジモジしながら答えた。

「なんで、今まで言わなかったんだ？ 友達との付き合いもあるの
だろう」

「でも、いつもルコと一緒にでお金使わないし。それに、隆羅に生活
まで見てもらって欲しい物は買ってもらっていたし。言えないよそ
んな事」

「そうか」

隆羅が立ち上がり寝室に行く。

「隆羅、怒っているの？」

「怒ったりしないさ。俺からそう言う話をするべきだったな。すま
ない」

隆羅が手に何かを持って戻ってきた。

「隆羅が謝る事ないよ。隆羅にはいっぱいしてもらっているのに」
「毎月1万円を小遣いとして渡すから」

「そんなに沢山必要ないよ」

「使わなければ、貯金すればいい。それとこれは海の携帯だ」

隆羅が通帳と印鑑にカードと携帯電話を海の前に置いた。
海が通帳を開いて見る。

「た、隆羅、凄い沢山お金が入ってるよ」

「今まで、海の両親が入れていた生活費だ。それはお前のお金だ」
「でも、それじゃ」

「海が、大人になって必要な時に使えば良い。これは沙羅も了承し

ている事だからな」

「うん、分かった。ありがとう」

「こんな携帯、見たこと無いけど」

「今年の冬に発売の携帯だからな。ウチの系列の会社の物だ」

「まだ、出てない携帯なの？」

「そうだ、普通に使えるようにしてあるから。モニターとして使ってみたら良い」

「隆羅、本当にありがとうネ。私、何も出来ないのに」

「海。海がこうして側に居てくれれば良いんだよ。遠慮なんかしたりしたら本当に怒るからな」

「うん。でも、こんなにしてもらっているのに」

「海は、今、幸せか？」

「凄く、幸せだよ。だって大好きな人と毎日一緒に居られるんだもん」

海がとても優しく微笑みながら答えた。

「海のそんな笑顔を見られれば、俺は何も要らないんだ」

「嬉しい、おば様が言ってたの心で返せば良いって。私も隆羅が側に居てくれれば本当は何も欲しくない」

そうして、高校最後の夏休みも過ぎて行った。

思い出をいっぱい作り、また少し距離が近づいたような気がしていた。

転校生と後輩ちゃん - 1

楽しい沖縄の石垣島へ旅行も凄く楽しくって、また沢山の素敵な思い出が出来たんだ。

9月になり新学期が始まって転校生がやって来て大変な事になるんだけど。

そのお陰で大切な友達が出来たの。嬉しいな。

「隆羅、朝だよ。今日から新学期なんだから遅刻しちゃうよ」

「ふわぁ。分かってるよ、そんなに急かさなくっても」

隆羅がベッドから起き上がり洗面所に向かう。

「朝ごはん、出来てるからね」

「今朝は、俺の当番じゃなかったか？」

「だって、隆羅に合わせていたら遅刻しちゃうよ」

「明日は、ちゃんとするからな。最近、ルコが呼びに来ないな」

「そうなんだあ、最近忙しいみたいで一緒にあまり遊んでないの」

「どうせ、沙羅にでもみつちり扱われているんだろ」

「隆羅。私、先に行くね。行つてきまゝす」

「そろそろ、俺も出ないとな」

隆羅が準備を始める。

海が階段を駆け下りてルコを呼びに行く。

「ルコ、おはよう。学校に行こう！」

「おはよー。海」

ルコの顔には覇気が無く疲れきった顔をしていた。

「ルコ、何だか元気ないね」

「もう、クタクタだよ。沖縄から帰ってきてからずっとママが監視役で勉強だもん」

「じゃ、課題は全部終わったんだ」

「もちろん。天国から地獄だったなあ、夏休み」

「毎年、課題終わってなかったじゃん。今年は先生に怒られなくて済むじゃん」

「そうだけどさあ、夏休み最後はこうパーと行きたかったな。海は何をしていたの？」

「残っていた課題をして、お部屋の掃除、洗濯したり本を読んだりかなあ」

「まるで主婦みたいだね」

「だって、隆羅は毎日学校だったし。でも夜はドライブしたりご飯食べに行ったりしたよ」

「とりあえず、ラブラブだったんだ」

おしゃべりしながら学校へ向かう、校門が近づくと日焼けをした生徒が増えてきた。

学校に着き教室に入りホームルームまでの間、海とルコはお喋りをしていた。

「そうだ、ルコ。私の携帯だよ」

「ええっ、海の携帯？ 見せて」

「隆羅が使っていいって。それとお小遣いも毎月貰える様になったの」

「今まで、貰ってなかったの？」

「うん。だって生活まで見てもらって、欲しい物は買って貰っていたから」

「じゃ今度、何処かに遊びに行こう」

「うん。良いよ」

「ルコ、海。オハヨー！ あれ？ その携帯は」

クラスメイトが声を掛けてきて、目ざとく海の携帯を見た。

「海のだよ」

「でも、それって今年の最新冬モデルじゃないの？」

「ええっ、そうなの海」

「う、うん」

「海、ちよつと見せてね」

クラスメイトが海から携帯を取り携帯を開いた。

「あつ、まだ電話帳とか登録してないから」

「もしかして、この携帯って高良君からじゃないの？ ベストカットブルのそうなんですよ」

「ええつ、違うよ」

海の返答は歯切れの悪い返事だった。

「そうなんだ、どれ電話帳はと」

クラスメイトが速攻で携帯のアドレスを見始める。

「駄目だよ」

「じゃーん。登録してあるじゃん。高良^{たからとも} 朋って」

「系列の会社の携帯だからって、モニターとして使ってみてって」

「高良君って社会人なんだ。凄いなあ、夏休みは2人で何処かに出かけたの？」

「2人でなんて、何処にも行かないよ。夏休みはルコ達と沖縄に行つてたもん」

「いいなあ、沖縄か。で、高良君とはどうなの？」

「良い友達だよ」

「なんだ、まだこれからなんだね。また、後からね」

「うん」

「海、高良 朋って誰？」

「隆羅が登録したんだと思う。他にもルコや沙羅さん綺羅おば様も登録してあるし、あれ？ 隆羅も如月隆羅で登録してある」

「じゃ、誰かがふざけて電話を見ても大丈夫なようにしてあるんじゃないの。それに高良 朋って笑っちゃうね」

「えつ、何で？」

「だって如月って2月の事でしょ。朋は月が2つで2月。つまり隆羅 如月だもん。それに高良君って言うておけばクラスメイトにもばれないしね」

「本当に大丈夫かなあ？」

海が不安そうな顔をした。

「海は、パパを信じられないの？　パパだって意味も無く名前を言ったりしないと思うし。それに今までだって必ず助けてくれたじゃん。もつと甘えて良いんだよ」

「ルコもおば様と同じ様な事を言うんだね」

「そうかなあ、本当に大好きなら言いたい事言えば良いんだよ。そうしてお互いの事を知って行くんじゃないの？」

「そうなんだけど、知らなくてもいい事だってあるでしょ」

「でも、怖がついていたら何も進まないよ」

「うん、そうだね。隆羅は決して裏切らないもんね」

新学期が始まり、しばらくすると球技大会の季節が近づいて来た。ここ青葉台大付属青葉台高等学校では体育祭の代わりに球技大会がクラス対抗で行なわれる。

そんなある日の事、海とルコのクラスに転校生がやって来た。

「おはようございます。今日、如月先生は球技大会の準備の為、副担の私がホームルームを始めます」

副担の英語の堤先生だった。

同じ頃、如月は校庭で球技大会の1種目の野球の準備をしていた。準備と言ってもラインを引いたりする簡単な物で手伝いの野球部員と半ば遊んでいた。

「先生、投げるから打ってみてくださいよ」

「あまり、球技は得意じゃないんだが」

「そんな冗談、誰も信じませんよ。行きますよ」

教室から海がぼんやりと外を見ていた。

「水無月さん？　聞いていますか？」

「はい！」

「転校生の紹介をします。入ってらっしゃい」

堤先生に呼ばれて転校生が教室に入ってくる。

長身で髪は天然パーマなのかハーフばい顔立ちの男子生徒だった。

胸元のボタンを外し少しアウトローな感じがした。

「では自己紹介をして」

「大阪から来ました。文月空斗ふみつきかいとです、大阪でツウードラゴンの空殺のカイト言ったらワイの事や宜しゅう！」

文月の自己紹介にクラスは静まり返っていた。

「あら、外してしもた。って、そこ聞いてへんや無いか！」

文月が海を指差す。海は校庭の隆羅を見ていた。

校庭では野球部のバッテリーが如月をバッテリーボックスに立たせていた。

「如月先生、行きますよ」

ピッチャーがボールを投げる、如月は空振りをして尻餅をつきそうになった。

「何を見てんねん。あちゃーあの先公まるきつしセンスなしやなあ。おい、人の話を聞いておるんか。コラ」

文月が校庭を見てから海に近づいて言った。

海が気付き文月を見上げる。

「ああつ、K a n o n に出た娘やないかあ。そやなあ？」

海が驚いて立ち上がり怪訝そうな顔をした。

「この学校におったんかあ。めっちゃ探してん、ワイの理想の女性やねん彼女になつてーな」

海の両肩を文月がいきなりつかんだ。

尻餅をつきそうになった如月が上着を脱ぎ。

バッテリーボックスに立ち校舎を見て真剣な目つきになりバットをクルンとまわした。

「もう、一丁だ」

「行きますよ」

ピッチャーが投げた球を如月がバットの真芯で捕らえた。

弾丸ライナーでボールが飛んでいく。

ピッチャーが啞然としてボールを見送った。

「もう一丁」

ピッチャーが慌てて投げると再び真芯で捕らえ同じ軌道を弾丸ライナーで校舎に向かい一直線に飛んでいった。

「絶対に嫌です。離してください！」

「そんな事言わんと……」

海が嫌がって文月の手を振り解こうとした瞬間、空斗の頭に野球のボールが直撃して文月が横に吹き飛んだ。

「あいたた、何さらすねん！」

ボールが当たった頭を擦りながら起き上がり。窓から体を持ち出して校庭を見ると2発目がおでこに、もろに直撃して文月が再び後ろに吹き飛んだ。

海が校庭を見ると隆羅が敬礼の真似をして海にサインを送っていた。

「うふふ、変な人。馬鹿みたい」

海が文月に言い放った。

「まるで、ワイがヘタレやないかあ！」

空斗が尻餅を着いたまま叫ぶ。

クラス中が大笑いをした。

「はいはい、そのくらいにして。授業が始まるわよ、文月君は真ん中の一番後ろの席よ」

そんな事があっても文月はめげずに海に言い寄ってきた。

「なあ、家は何処なん？ 今度デートしてえなあ」

「ええやんか1度くらいなら」

クラスメイトも呆れていた。

「文月もしつこいね。海にはベストカップルの高良君がいるのに」

「そうそう、それに海は如月先生の大ファンだし高良君は先生の甥っ子だもんね」

「そんな、アホなあ。やっと巡り合ったのに。でも、諦めへんでえ」

その日の最後の授業は数学だった。

「君が、文月空斗君かあ。先程はすまなかったな、ボールを当ててしまつて。ワザとじゃないんだよ、許してくれ」

「当たり前じゃ。2度もまるきし同じトコに打てるバッターなんかおるかいなあ」

「やれやれ。また1つ問題が増えたかあ」

如月が文月に頭を下げるが空斗はそっぽを向いていた。

「では、授業を始めるぞ。昨日の続きからだ、文月は隣の子に教えてもらいなさい」

文月は如月の授業中は始終不機嫌だった。

授業が終わりルコと海がおしゃべりをしているのを見て空斗がクラスメイトの女子に話しかけた。

「なあ、あの2人。めっちゃなかいねんなあ」

「そりやそうだよ、大親友だし。今は事情があつて一緒に住んでいるしね」

「へえ、そうなんやあ」

「それに、海があんな風に笑つて居られるのはルコと如月先生のおかげだし」

「なあ、如月つてどんな奴なん？」

「女子生徒からも男子生徒からも人気があつて、ルコの育ての親で」

「はあ？ なんやそれ。ホンマかいなあ」

「なあ。自分らはどうなん？」

文月が今度は男子のクラスメイトに聞く。

「俺らは別に。如月は絶対に鼻屑なんてしないし授業は分かりやすいしな」

「そうそう。それに水無月にはあんな格好の良い彼氏も居るんだし、俺らは俺らつて感じかな。それに如月を敵に回したら全校の女子を敵に回すようなもんだしな」

「じゃないなあ」

空斗が海とルコに近づいてくると海は横を向いて無視した。

「なあ、さっきは済まんかったなあ。お詫びに帰りにお茶でもせえへんか？」

「文月もしつこいね。しつこい男は嫌われるよ、ってもう嫌われてるけどね」

ルコが文月に釘を刺した。

「きつい事言うわあ」

その時、海の携帯が鳴りルコが覗き込む。

「あつ。高良君からメールだ」

「どれどれ見せて」

『しばらくルコの所に居なさい』と言う隆羅からのメールだった。

「良いなあ。海は高良君とラブラブなんだ」

「うん」

ルコがワザと大きな声で言うとう海が笑顔で答えた。

「海、もう帰ろう」

「そうだね」

「じゃ、皆。バイバイ、また明日ね」

クラスメイトに挨拶をしてルコと海は教室を後にした。

帰り道の土手の上をルコと海は歩きながらおしゃべりをしていた。

「でも、文月って変な子だね。ツウードラゴンだって」

「ツウードラゴンの空殺は隆羅なのにね」

「えっ？ 何それ」

ルコが不思議そうな顔をして海の顔を見た。

「あれ？ ルコは聞いてないの。前に私が絡まれた時に隆羅と宅さんが助けてくれたでしょ」

「うんうん」

「その時に、ガラの悪い人が言ってたの。ツウードラゴンの空殺のサギと足技のタコって、それで2人に聞いたら昔の話だけだって」

「そんなに凄かったの？」

「隆羅も格好よかったけど、宅さんも素敵だったよ。10人くらいをキックだけでアツという間に倒しちゃうんだよ」

「信じられないよ。あの宅パパが？」

「今度、聞いてみたらいいじゃん。それに宅さんの実家って日本舞踊の宗家なんだってね」

「何で、海がそんな事まで知っているの？ 私、始めて聞いたよそんな事」

「ええっ、ルコ知らなかったの？ あんなに偉そうに言いたい事は言い合わないとなんて言ってたのに」

「う、うん。だってママの旦那さんって感じでパパって感じしないんだもん」

「それは、しょうがないよね。でもルコはルコで居ればいいじゃないね」

「海もパパと同じ事言うんだ。凄いな2人は」

「えへへ、そうなんだ。隆羅と一緒に、凄く嬉しいな」

海が赤くなった。

「もう、相変わらずなんだから。で、何であんたが後をついて来るの？」

ルコが振り向いて少し後ろを歩いてくる文月に言い放った。

「後なんかつけてへん！ ワイの家もこの先なんや。クソ胸糞悪いなあもう」

しばらくしてマンションに着き、海とルコが中に入って行く。

「ごっついマンションやなあ」

文月が見上げて呆気に取られていると1台のバイクがやって来た。

「文月、こんな所で何しているんだ？ ストーカーか？」

「ストーカーちゃうわ！ 腹立つなあ。どいつもこいつも。先公こそこんなトコで何してんねん？」

「ここが、俺の住んでいるマンションだからな」

「はあ？ 水無月と葉月もここに住んどるんちゃうか？」

「同じマンションに住んでいたら問題でもあるのか？ 一緒に住ん

でいる訳でもないし」

「しかし、先生はごついバイクに乗つとんねんなあ。Lightning XB12SSかいなあ、今度乗せてえなあ」

「丁重にお断りするよ」

「そやろうな。ほな、さいなら」

隆羅がバイクで地下駐車場に入っていく。

「クソ！ あかん。ガードがガチやあ」

文月がうな垂れて歩いて行った。

隆羅がルコ達の部屋の呼び鈴を鳴らすとルコが出迎えた。

「はい」

「海は居るか？」

「ちよつと待つてね。海！ パパが迎えに来たよ」

「今、行く！」

慌てて海が走って出てくる。

「しばらく、気を付けないとな」

「そうだね、でも何であんなメールを？」

「文月の住所がこの近くだったんだ。妹と2人暮らしい。ルコ達にもしばらく迷惑を掛けるな」

「パパ、迷惑なんて行ったらママも私も怒るよ。海を預かるってパパが行った時に決めたの、何があっても2人を応援するって」

「そうか、じゃ頼んだぞ」

「任せて！」

「海はこれからどうする？ ルコの所で遊んで居るか」

「いったんお家に帰る」

「そうか、じゃルコ。また後からな」

「バイバイ、海」

「またね」

転校生と後輩ちゃん - 2

翌日から空斗は相変わらずだった。

多少大人しくはなっているが隙があれば海に言い寄ってきた。

その日の昼休みルコと海が廊下を歩いていると後ろから空斗が話しかけてきた。

「なあ。1度でいいからお茶してくれへんかなあ」

「嫌です。私には好きな人がいるし、しつこい人は大嫌いですから」
「そんな言わんでええやんか。なあ」

その時、後ろから誰かが廊下を猛ダッシュして来る。

次の瞬間、空斗の体が吹き飛んだ。

猛ダッシュしてきた女の子がドロップキックを空斗の背中ににぶちかましたと思うと、後ろから馬乗りになって空斗の首を締め上げた。

「何さらしとんねん？ このクソ兄貴があ！ こらあ、ボケカス！
どっアホウの恥さらしが！ 下級生の間で関西弁の先輩がナンパしまくってるて噂になるとるから、誰かと思て来てみたら。クソ兄貴やないか」

「ギブ、ギブやあ」

空斗が廊下手で叩くと女の子が手を離れた。

空斗はぐったりして起き上がる気力さえない様だった。

女の子が立ち上がりルコと海に挨拶をした。

「ほんまスンマセン。ウチの馬鹿兄貴が迷惑を掛けてしもうて。私、2「Bの文月 陸ふみづき りく言います。宜しく」

ツインテールで小柄なとても可愛らしく礼儀正しい女の子だった。

「陸ちゃんって言うんだ。可愛いね、大丈夫だよ全然気にしてないから。私は葉月ルコ、彼女が水無月 海。宜しくね」

「いや、可愛らしいなんて、ほんまの事言ったら嫌やわあ。兄貴はしばき倒しておきますんで」

「そこまでしなくても」

「こいつアホやから、体に覚えさせんと」

「そんな事より、陸ちゃん達って引越して来たばかりなんですよ。今度、一緒に遊びに行こうよこの辺も案内してあげるから。いいよね海」

「そうだね、これも何かの縁だし。でも、あつちは勘弁して欲しいけど」

海が倒れている空斗を見る。

「ええっ、ほんまですか？ めっちゃ嬉しい。兄貴の事は放っておいてください。アホは死んでもアホですから」

しばらくすると隆羅の耳にも巷の噂が届いてきた。

宅が心配して隆羅に会いに来た。

「何だ、タコ。話って」

「サギ聞いたか？ T・Dの空殺が街で不良を潰して回っているって」

「ああ、知っているが。放っておけば良いだろ」

「それが、どうもお前の高校の生徒らしんだが」

「また、アイツか？」

「心当たりがあるのか？」

「最近、大阪から転校してきた文月空斗だ」

「何処かで聞いた事のある名前だなあ。そうだ前に大阪でゴロツキに絡まれていた兄妹を助けた事があってその兄貴が確かそんな名前だった気が」

「で、何でそれがT・Dなんだ？」

隆羅が怪訝そうな顔をした。

「そのゴロツキが知っていたんだよ。俺がT・Dのサギとタコのタコだって」

「しばらく様子を見るしかないな」

「でも、そのうちマジでヤバイのと当るぞ」

「そうになったら本人も気付くだろう」

「しかし、大怪我じゃすまないかもしれないぞ」

「俺にどうしろと言った監視しておけと？」

「そうだな、それは無茶な話だな」

そして日曜日。ルコ、海、陸の3人は地元から少し離れた街に行き
買い物をしていた。

「楽しいね」

「そうだね」

「ほんま、おおきに」

「そんな気を使う事ないよ、友達でしょ」

ルコが笑顔で陸に言った。

「嬉しいわぁ」

「ねえ、海。お腹がすいたんだけど本当にこの辺なの？」

海達は隆羅と宅の馴染みの店『洋食屋ボスコ』を探していた。

「あつ、あつたよ。ここだ」

海が2人を呼んだ。

「やっているの？」

「覗いてみよう」

階段を降り海がお店のドアをゆっくり開けた。

「はい、いらつしゃい。おんや、海ちゃんじゃないのか」

「マスター。食事、出来ますか？」

「どうぞ中へ」

海に続きルコと陸がキョロキョロと店内を見渡しながら店に入ってきた。

「あれ？ 今日はお友達と一緒になんだ」

「はい」

「じゃ、特別にスペシャルを作ってあげよう」

3人がテーブルにつくとマスターがお水を持ってきて言った。

「ありがとうございます」

その頃、隆羅は街を見回っていた。

不良達や知り合いに情報を聞きながら、すると直ぐに悪い情報が飛び込んできた。

それは馴染みの情報屋からの話だった。

「最近、こちら辺のグループのトップが躍起になって探し回っているらしいですよ」

「あいつらの島は、確かボスコの近辺だったな」

「そうですね」

「サンキュー助かったよ。これいつもの」

「毎度」

隆羅が情報屋に謝礼を渡し歩き出した。

そして空斗は裏路地の高架下で隆羅が見つける前に縄張りを荒らされたグループに捕まりボコボコにされていた。「何がT・Dだ。この偽もんが」

「大阪のなあ。東京の人間を舐めてんのか、ガキが」

「ウツウウ……」

薄れる意識の中で誰かがフェンスを軽々と飛び越えるのが見えた。

「俺が本物のT・Dの空殺の鷲だ」

ぞつとするような声だった。そこで空斗は意識を失った。

海達はビストロでT・Dスペシャルを3人でお喋りしながら堪能していた。

「本当に絶品だね、海。パパはあれつきり約束守ってくれないし」

「ルコ先輩、パパさんて誰なん？」

「そつだ、陸ちゃんはまだ知らないんだね。ルコの育ての親は如月先生なんだよ」

「ひえーそうなんや」

「私は今、ルコの家事情があつて居候中なの」

「皆、色々と大変なんやなあ」

「陸ちゃんはどうしてこつちに來たの？」

「親の仕事の都合かなあ。兄貴はあんなんやから前の学校にも居れんようになってしもて」

「そうなんだ。でも陸ちゃんはシツカリしてるよね」

「私がしつかりせえなんだら生活できへんもん」

「お互い、ファイトだね」

美味しいご飯を満喫してマスターにお礼を言って店の外へ出た。

階段を上がり裏通りに出ると誰かが人を担いで歩いてきた。

それに海が誰よりも早く気付いて海が駆け出した。

「た、隆羅」

「パ、高良君？」

「ええっ、何があつたん？」

海が隆羅に駆け寄ってきたて、後ろからこちらに向っている2人を見て海に言った。

「よう、海。久しぶりだな」

「えっ、うん。その人は誰？」

海も陸が一緒に事に気付き隆羅に合わせると、隆羅が担いでいた男を下ろす。

「その先でチンピラにボコボコにされて居たんだよ」

「文月じゃないの？」

「あ、兄貴！ どないしたん。誰か救急車呼んで！」

陸が動揺している。空斗が傷だらけになって気を失っていた。

「落ち着いて。今、車を呼ぶから」

携帯で隆羅が電話する。

すると数分もしないうちに黒塗りの大きなワゴン車がタイヤを鳴らしながら向かってきた。

空斗をワゴン車に乗せて急いで病院へ運ぶ。

隆羅は助手席に座り何処かに携帯で電話をしている。

後ろに空斗を寝かせて陸が付き添い、海とルコがその後ろの席に座っていた。

「兄貴……」

「大丈夫、気を失っているだけだから」

陸が空斗を心配して泣いていた。

隆羅が優しく声を掛ける。

隆羅が連絡を入れていたのだろう、病院に着くと入り口で待機していた看護婦がストレッチャーに空斗を乗せ処置室に運んだ。

「お前達はここで待っている」

隆羅が一言だけ言い残して処置室の中に入って行くと、陸が不安そうな目で海とルコを見つめた。

「なあ、あの人は誰なん？」

「心配ないから。あの人は、如月先生の甥っ子で海の彼氏なの。高良君に任せておけば問題ないよ」

ルコが陸に優しく言った。

「海先輩、ほんまなん？」

「うん。そうだよ。高良はとっても優しくって頼りになるからね」
しばらくすると空斗の処置が終わりストレッチャーに乗せられ出てきた。医者と隆羅も一緒だった。

「家族の方は？」

医者が3人を見て声を掛けた。

「はい、私です」

「今日1日安静にしていれば大丈夫だ。骨にも異常はないし打撲だけだからね」

「ありがとうございます」

陸が深々と頭を下げた。

文月がストレッチャーで病室に運ばれる。薬が効いているのか眠ったままだった。

「ほんま。すみませんでした。兄が迷惑掛けてもうて」

「気にする事ないさ、たまたま現場の近くを通っただけだから」

「でも、救急車を呼ばなくて良かったよね。呼んでいたら今頃、警察が来て大騒ぎだったもんね」

「そうだね、ルコ。面倒な事になっていたかもね、学校に連絡が行ったら停学じゃすまなかったよね」

「俺達はこれで帰るけど平気かな？　もし、何かあったらここに連絡をしてくれ。ここの病院は俺の知り合いだから」

隆羅が名刺を陸に渡した。

その名刺には『水神エレクトロニクスコーポレーション　代表取締役　高良　朋』と書かれていた。

「高良さんて社長さんなん？」

「お兄さんに付いていてあげなさい。何かあればいつでも連絡してきなさい出来るだけ力になるからね」

隆羅が陸に優しく言うのと陸がまじまじと隆羅の顔を覗き込んだ。

「しかし、如月先生によう似てんなあ甥っ子だけあって」

「あんな、堅物なおっさんと一緒にしないでくれよ」

陸はメガネのせいもあって如月だとは全く気付かなかった。

「せやな、如月先生はこんなに若くはないわな。兄貴をしばいてくるわあ。海先輩、ルコ先輩、今日はおおきに、また遊んでなあ」

「うん、また学校でね」

海達3人が病室を後にすると陸は溜息を吐きながら病室に入っていた。

病院を出ると隆羅が両手を上にして伸びをした。

「ふわあゝ疲れた」

「もう、パパたら。こっちがドキドキだったよ」

「でも、隆羅って凄いな。名刺まで用意してあるんだ」

「本当だよ。裏で何か悪い事でもしているんじゃないの？」

「ルコ。海との関係を守る為ならなんでもすると決めているんだ。こんな小道具なんて誰にでも作れるだろ」

「そうだよ、禁断の恋だもんね」

「もう、ルコはからかわないで」

「さあ、帰るか」

隆羅が海の手を取って歩き始めた。

「ええっ、もう帰るの？ 久しぶりにパパと外で会ったのに」

「美味しい飯を食べて来たんだろ」

「なんで、パパが知っているの？」

「海が昨日の夜、ボスコの事を聞いてきたからな」

「でも、何で隆羅が文月君を？」

「あいつが人の通り名を騙っていたからな。それにこの街で噂になつていたから気になっていたんだよ。必ずこんな事になるだろうとね」

「パパは大変だね」

「そうそう、世話の焼ける娘も居るしな」

「ブー、パパのバカ。それよりあのお店に連れて行ってくれるって約束を忘れていた訳じゃ無いよね」

「もちろん、忘れていた。忙しかったからな」

「じゃ、何処か連れて行ってよ」

「分かった。マンションに連れて帰ってやる」

「もう、パパの大馬鹿野郎！」

ルコが拳を握り締めて叫んだ。

「さあ、海。今夜は何処に行こうか？」

海が隆羅の顔を見上げて嬉しそうに腕を組んだ。

「パパのいけず！」

ルコが空いている隆羅の腕を取った。

「しょうがないなあ。買い物にでも行くか？」

「やったー」

ルコがジャンプした。

「ルコには参考書を沢山買ってやるからな。禁断の恋のお礼に」
「いぢわる」

ルコがほっぺを膨らまして拗ねた。

病院では、空斗がやっと目を覚ました。

「あつ痛たたた……ここは？」

「このボケ兄貴は何さらしとんねん。病院やあ、このどアホ！」
「そうや！ T・Dの鷺は？」

「まだ、そんな事言うてんのかボケが」

陸が空斗を叩く。

「痛いやんけ」

「当たり前や。海先輩の彼氏にまで迷惑掛けて」

「水無月の彼氏？」

「そうや。兄貴をここまで運んでくれたんは高良さんや」

隆羅から受け取った名刺を空斗に見せる。

「代表取締役 高良 朋？ 社長なん？ 水無月の彼氏って？ 勝

ち目あれへんやんかあ」

「兄貴、あんな素敵な人に勝てるわけないやん」

「いや、まだ行くでえ。トコトンまですんのが俺の流儀や」

「堪忍してなあ。兄貴にもしもの事があつたら、私どないしたらええのん。1人ぼっちは嫌やあ」

陸が空斗に抱きついて泣き出した。

「すまん、陸。もう無茶な事はせえへんから」

「約束やでえ」

「ああ、約束や」

翌日、空斗は足を引きずりながら包帯だらけで学校に登校して来た。教室にたどり着くとクラスメイトの視線が集まった。

「おお、文月。ミイラみたいでずいぶん派手だなあ」

全身傷だらけで体も何とか動かしている状態だった。

「いや、階段でコケてしもうてん。ゴロゴロとなあ」

「ええ、街で女の子にちよっかい出して男にボコボコにされたようにしか見えないけれど」

「まあ。ええやんか」

今日の文月は妙に大人しかった。そしてそんな文月が海とルコが話

している所に歩いて来た。

「昨日は、ほんまにスイマセンでした」

「別に気にしてないから」

文月が深々と頭を下げるとルコが素っ気無く答えた。

「水無月の彼氏にもお礼を言いたいんやけど」

「高良も気にしてないと言っていたから平気だよ。それにあまり人に会いたがらないからね」

「そこを何とか」

「無理無理、大体ねえ。人の彼女に言い寄る男に会う彼氏なんか居ないよ。海の彼に殴られたい訳？」

ルコが空斗に止めを刺す。

「そやな、お礼だけでも伝えてもらたらええわ」

「今日は、ずいぶん大人しいじゃん」

「怪我が治ったら。もっと上を目指すんやあ！ あっ痛たたた」

文月がガッツポーズして両手で体を押さえた。

「馬鹿に付ける薬は無いって本当なんだね。海」

「陸ちゃんも言ってたもんね。アホは死んでもアホだって」

「完全にヘタレやんけ」

「何処をどう見てもヘタレでしょ。最初から」

空斗がガクンとうな垂れた。

昼休み。海とルコは仲良く一緒に弁当を食べていた。

空斗は自分の机で購買のパンにかぶりついている。

そこへ陸が教室に駆け込んできた。

「せ、先輩！ 助けてえなあ」

「どうしたの？ 陸ちゃん慌てて」

「あんなあ、昨日、海さんの彼氏に会ったちゅたら大騒ぎになっ
てん」

陸の声に他の女子が鋭く反応した。

騒ぎになると思った時には手遅れだった。

海とルコ、陸の3人はクラスメイトの女子全員に取り囲まれていた。

「ねえねえ、その1年生。海の彼氏に会ったって本当なの？」

「そ、そうやけど」

「この人だよ」

1人が雑誌Kanonを出して指差した。

「う、うん」

「本当なら、どんな人だったの？」

女子全員の視線が陸に突き刺さり、陸が圧倒されていた。

殆ど脅迫に近い尋問だった。

警察でもここまでではないだろうとルコと海は思った。

「や、優しくって素敵な人やったで。如月先生によく似とったけど別人やったわ」

「へえ、何の仕事をしているのかなあ？」

「海先輩、ルコ先輩。助けてえなあ」

陸が泣き出す寸前だった。

すると空斗が名刺を投げた。

「ほれ、水無月の彼氏の名刺やあ」

「本物なんでしょうね」

「アホか。本人から陸が受け取ったんや、偽物のはずあるかいなあ」

「水神エレクトロニクスコーポレーション……代表取締役？」

「ええっ、あのMECの社長なの？」

女子の1人が絶叫した。

「それで、最新冬モデルの携帯な訳ね……」

「はあ」

クラス中がシーンと静まり返った。

そして陸を追いかけて来た下級生も一部始終を聞いていた。

その日の内に学校中に海の彼氏の話は広がった。

しかし、それ以来その話をする生徒はいなくなった。

話が凄すぎて誰も突っ込めなかったのだ。

昼休みも終わりに近づきクラスメイトは席に戻りだした。

「なあなあ、ルコ先輩。高良さんは如月先生の甥っ子なんやろ、甥っ子が大企業の社長なら先生の実家ってどんななん？」

「詳しくは知らないんだ、あまり実家の話はしないから」

「そうなん？ 海先輩も知らんの？」

「うん、知らないよ。先生は先生だもん」

「そうやなあ。そろそろ帰らんと、じゃまた」

「また遊ぼうね」

「うん」

陸がトボトボと疲れきってクラスに帰って行っただ。

「隆羅も高良も凄いね。ルコ」

「そうだね。パパってどんな頭の中してるんだろっ」

「うふふ、そうだね。今度聞いてみよう」

10月になり球技大会が2日間の予定で始まる。

男子がサッカーと野球、女子がバスケットとバレーでトーナメント方式で行なわれる。

隆羅がジャージ姿で校庭を歩いていた。

「やった！ 2日間、勉強しなくていいぞ！」

ルコが拳を振り上げジャンプして全身で喜びを表現していた。

「ルコはどれだけ勉強が嫌いかなあ」

「海、だって社会に出て役に立つとは限らないでしょ」

「でも、茉弥ちゃんに教えてって聞かれたらどうするの？」

「ど、どうしよう。あつ、パパが居るじゃん」

「ええっ、そこまで面倒見てもらうの？ その頃は近くに居ないかもよ」

「誰かさんと結婚して？」

「そ、そんなんじゃないよ。もう」

「あつ、如月。見つけた」

ルコが指差すと真っ赤になっている海が一目散に如月に向かい走り出した。

「如月先生！」

「水無月と葉月か、試合は無いのか？」

「この後からです」

「なんだ、水無月？」

海が嬉しそうに如月を見ていた。

「先生のジャージ姿ってなんだか新鮮で」

「そうか？ 楽だから好きだけだな」

それを少し離れた所で空斗が見ていた。

「この間の仕返しじゃあ。恥じさせやあ」

持っていた野球のボールを如月に目掛けて思いっきり投げた。

「葉月も水無月も靴紐が解けかけているぞ」

如月が2人に注意をし3人でしゃがむ、その上をボールが当てても無く通り過ぎた。

「クソ、なんやねん」

その後も何度と無く同じ事を繰り返す。

サッカーボールを如月に蹴っても他の先生と挨拶をしてかわさた。

如月の後をつけて様子を伺う、如月が体育館に入っていくと空斗も後を追った。

「絶対にチャンスがあるはずやあ」

「あつ！ 先生、危ない」

バレーのアタック練習していたボール如月の方へ飛んで行った。
ボン！と音がして如月の頭に命中すると如月がよろけた。

「先生、スイマセンでした」

「大丈夫、大丈夫」

女生徒が頭を下げると如月は笑顔で手を振りながら答える。

「さすが、如月先生。素敵だね」

そんな声が聞えてきた。

「なんで、あれが当たって、ワイのが当たらへんのやあ？」

「こら、馬鹿兄貴。何してんねん、まさか如月先生にちよつかいだしてへんやろうなあ」

空斗の頭の直ぐ後ろから陸の声が聞えてきた。

空斗の背中に冷たいものが一筋走った。

「せ、せえへんよ。なんも」

「じゃ、なんで。先生にボールを投げたり蹴ったりしてんねんや。

コラ」

「そ、それはやなあ」

「しばかれないんか？ 兄貴？」

陸が空斗の耳を摘み上げる。

「もう、せえへんから。ほんまに。堪忍したつてえなあ」

「しかし。如月先生は、ほんまに素敵やなあ」

陸の視線の先には如月が居た。

バスケットボールを拾い上げかなり離れた距離からシュートし綺麗に決まった。

「キヤアー！」と言う女生徒の黄色い声援が上がった。

「陸、お前。まさか惚れたんか？」

ポコッ！と鈍い音がすると「ウゲエ！」と空斗が断末魔を上げた。

陸の渾身の裏拳の突込みが空斗に炸裂したのだ。

「いらん事言わんでええねん」

その後も空斗は如月の様子を伺っていたが、付け入る隙は全く無かった。

転がってきたサッカーボールを如月が蹴ればゴールに吸い込まれ、飛んで来た野球のボールをキャッチャーに投げればまるでレーザービームの様だった。

「あかんは……何者なん、如月つて？ 訳分からんわあ」

そして球技大会の結果は散々なものだった。

男女とも1回戦敗退、男子は空斗の空回りの大活躍で最下位に終わった。

2人のクリスマス - 1

中間テストも終わってやつと一息。

でも直ぐに期末がやってくるんだけどその後は楽しいクリスマスと冬休みが待っている。

だけどそのクリスマスが海と如月パパにとって一生忘れられないクリスマスになってしまうの。

それは2人の運命をも変えてしまうような……

「海、クリスマスまでもう少しだね。パパと約束でもしているの？」

「えっ、何も約束なんてしてないよ」

「じゃ、これからかなあ。海の誕生日とクリスマスのダブルだもんね」

「そんな、でも嬉しいな。大好きな人との初めてのクリスマス」

「えっ、あっそうか。去年は……もう1年も経つんだね、あれから」

「そうだね。去年の今はルコは隆羅の実家に居たんだもんね」

海は複雑な気持ちだった。

隆羅と過ごすクリスマスはとても楽しみだったがルコにとっては大好きだった人と2度と会えなくなつて、まだ1年しか過ぎていなかったからだ。

でもそんな気持ちもルコの言葉で吹き飛んでしまったのだ。

「うん。でもね全然寂しく無かつたんだ。アイツが死んじゃったのは凄く悲しくつてショックだったけれどパパも育パパもママも、そして海がいつも側に居てくれたから。それに私はママなんだもん。私が悲しんでいたら茉弥も悲しむでしょ、だからそんな事は絶対にしたくないの」

「そっか、ルコは強いんだね。クリスマスはどうするの？」

「ママと茉弥と3人で過ごすと思う。育パパは忙しいみたいだし、茉弥の初めてのクリスマスだからね。パパは毎年クリスマスプレゼント

ントくれるしネ」

「ふうん、そうなんだ」

「あれ？ 海は去年貰わなかったの？」

「貰ったよ。この腕時計」

海が左手をルコの前にだすといつも大事にしている腕時計が見えた。
「ああ、いつも大切に見えていると思ったらパパからのプレゼントだったんだ」

「だって、これ見ていると隆羅の顔が……」

そう言つて海が赤くなる。

「本当に大好きでしょうがないんだね。そう言えばパパの誕生日つてお正月だったよね」

「ええっ、本当に？」

「海、知らなかったの？」

「うん、だって隆羅何も言わないし。去年はバタバタしていたから、どうしようプレゼント考えて無いよ。ルコ助けて」

「簡単じゃん。海にリボン結んで私がプレゼントって言えばいいじゃん」

「ルコの馬鹿。そんな事出来るわけ無いじゃんね」

「じゃ、2人で考えよう」

「そうだね」

そんな浮かれている世界とは全く無縁な所で、隆羅は憂鬱になっていた。

「スネークが脱獄して仲間を集めているらしいぞ。サギ」

「そうらしいな、決着をつけなきゃな。しかし……」

「海ちゃんの事か？」

「ああ、出来れば巻き込みたく無いんだ」

「でも、いつまでも隠し通せるもんじゃないだろ」

「そうだけどな。タコ」

隆羅が考えあぐねて途方に暮れていた。

「今のお前をスネークが見たら喜ぶだろうな」

「冗談に聞こえねえぞ。タコ！」

隆羅が声を荒げ立ち上がり宅に向かってきた。

「落ち着けよ。らしくねえだろうが、今のお前は。違うか？」

「そうだな。悪い」

「仕方が無いのかもな。ツインドラゴンの鷺が始めてした恋だもんな。俺も全力でフォローするからな」

「悪いな、タコ」

「これは、お前だけの問題じゃない筈だ。俺達3人の問題なんだ、そして沙羅やルコの運命さえ変えてしまいかもしれない問題なんだぞ」

「やるしかないな。ぶっ潰す！ 総ての力を使って」

「そうだ、それがお前だ。サギ」

12月に入り街中にクリスマスソングが流れ始める。

期末試験も終わり残すは試験休みだけになっていた。

そして隆羅は平静を装っていても、いつも感覚を研ぎ澄ませていた。

「隆羅、隆羅つてば。大丈夫なの？ もの凄く魔されていたよ」

「ああ、大丈夫だ」

魔されていた隆羅が目を覚まし起き上がった。

「最近の隆羅なんだか変だよ。何かあったの？」

「いや、何も問題は無いよ。ただ嫌な夢を見ただけだ。心配ないよ」

「そうなら良いんだけど。あのね、クリスマスどうするの？」

「そうだな、外で食事もいいけれど家でしかないか？ 俺が海の為に

腕を振るって料理やケーキを作るから」

「本当に、嬉しいな。とっても楽しみ！」

「期待してくれ」

「うん。それとね隆羅」

「何だ？」

「隆羅の誕生日ってお正月なの？」

「そうだけど、言わなかったか？」

「ルコに初めて聞いたの、でねプレゼントなんだけどどんな物が良いかなあって」

「俺は、海が選んでくれる物ならどんな物でも嬉しいけれど、そんな海の気持ちが一番うれしいかなあ」

「えへへ、隆羅大好き」

そんな、楽しくって素敵なクリスマスが最悪の状態になるなんて誰も気付きはしなかった。

裏では、もう既に準備が整い実行に移すだけとなっていたのだ。

12月22日

ルコと海はみんなのクリスマスプレゼントを選びに街に買い物に来ていた。

街中にクリスマスソングが流れ、イルミネーションで飾られて赤、緑、白のクリスマスストリコロールで彩られていて、街中がキラキラと輝いていた。

「凄いいね。街中がクリスマスだあ」

「そうだね、でも早く探そうよ」

「そうでした、今日は遊びに来たんじゃないんだよね」

「そうだよ、プレゼントを選ばないと」

「パパはどんなプレゼントを海に準備してあるのかなあ」

「でも、隆羅が選んでくれた物なら素敵な物なんだろうなあ」

「乙女の目になっているよ、海。パパが選んだのならそうだろうね、きっと良いなあ」

「ルコだって貰うんでしょ。隆羅に」

「そうだけど」

「参考書とかだったりして」

「海、怒るよ」

「うふふ、冗談だよ」

街のデパートでひと通りみんなのプレゼントを選び、隆羅の誕生日

プレゼントを見て回っていた。

その時、海の目に見覚えのある男の姿が飛び込んできた。

その男は海の姿を一瞥してエスカレーターで下に降りていった。

「お父さん？」

「ええっ、海。本当なの」

「うん。間違いないよ」

海が男が降りて行ったエスカレーターに向かって走り出して男を追いかけていつてしまった。

「待つて海！ 海つてば。もう、パパに連絡しなきゃ」

直ぐにルコが隆羅に電話した。

その時、隆羅はバイクで都内を走っていた。

ヘルメットに仕込んであるインカムで答える。

「ルコかどうした？」

「海と買い物していたら、海のお父さんらしい人がいて海が追いかけて行っちゃったの」

「今、何処にいる？」

「池袋の東口のデパート」

「分かった、ルコは直ぐにタコに連絡を入れて迎えに来てもらうんだ。良いな」

「何で育パパに？」

「良いから直ぐに連絡しろ」

「うん、分かった」

いつに無く緊張した隆羅の声にルコは驚いた。

駅から少し離れたビルが立ち並ぶ広い裏路地ではロケの為と、立ち入り禁止の札が立てかけられロープが張られていた。

スタッフらしき人が道を塞ぎ周辺一角に人が立ち入れないように見張っていた。

「この年末にロケだ。ふざけるなよ」

通行人の1人がスタッフに詰め寄る。

スタッフの眼光はとても鋭かった。

「な、なんだよその目は怖ええなあ、もう冗談だよ」

デパートの中ではルコが宅に連絡を取っていた。

「育パパ？」

「どうしたんだい、ルコ」

「海が急に男の人を追いかけて居なくなっちゃって、如月パパに電話したら育パパに迎えに来てもらって」

「分かった。今、何処にいるんだい」

「池袋のデパートなんだけど」

「10分でそこに行くから。絶対に動いちゃ駄目だよ、分かったね」
育郎の声は緊張していた隆羅の声とは違いとても落ち着いた優しい声だった。

「うん。育パパ、何が起きているの？」

「それは、後からね」

「うん、待ってる」

10分もするとルコの前にスーツ姿の育郎がやって来た。

「さあ、帰ろう。海ちゃんは隆羅に任せておけば平気だから」

「なんだか、凄く怖いよ。育パパ」

ルコがとても不安そうな顔を見ると優しく寄り添うようにしてくれた。

「大丈夫、家に帰ろう。沙羅と茉弥が待っているから」

「うん。分かった」

その頃、隆羅は綺羅に連絡を取っていた。

「お袋か、奴らが動き出した。海がヤバイ探してくれ、頼む」

「タカちゃん分かったわ、直ぐに出るから。携帯で探せるのね」

「ああ、そうだ」

「へりを出して、早く！」

綺羅が叫ぶ。

屋敷内から軍用ヘリが緊急スクランブルをかけ池袋方面へ飛んでいった。

駅前にバイクを止めて隆羅はあたりを見回しながら海を探し始める。余所見をして歩いていると男の人にぶつかってしまった。

「なんだ、今日は怪しげなロケやら人にはぶつかるわ。ふざけるな！」

「悪い、ロケって何処で？」

隆羅が声を掛けるとぶつかってしまった男が怒った顔をして叫んだ。

「この先の、広い裏路地だよ！ それより謝れよ！」

「スイマセンでした」

隆羅が男に頭を下げ走り出した。

海は裏路地のロケ現場に誘い込まれ、父親らしき人物を見失っていた。

「あれ？ 何処に行っちゃったんだろう。そう言えばこの辺はなんで人が誰も居ないの」

辺りを見渡すと人っ子1人居なかった。

「なんだか嫌な感じがする。どうしよう」

震え出す手で海が携帯を取り出した。

隆羅は、ロケ現場の近くで1人の男を取り押さえていた。

やつれていたが隆羅が見間違えるはずが無かった。

「あなた、海の父親だな」

「頼まれたんだ、金をやるから誘い出させて。借金で追い回されてしょうがなかったんだ」

「それで、自分の娘を売ったのか。クソが」

その時、隆羅の携帯が鳴った。

隆羅が携帯をポケットから出した隙に男は一目散に逃げ出した。

「海か？ 今、何処にいる？」

「良く分からないけど、誰も周りに居なくて怖いよ」
海の声が震えていた。

「直ぐに行く。今、近くにいるから安心しろ」

「うん」

隆羅は直感で海がロケ現場に居ると確信した。

隆羅が携帯を握りしめたまま走り出す。

通行止めの案内を飛び越し偽ロケ現場に走りこんだ。

海の耳にも誰かが走って近づいてくる足音が聞える。

足音のする十字路に向かうと隆羅が走ってくるのが見えた。

「隆羅！」

海が名前を叫ぶ。

その瞬間、隆羅は背後から凄まじい殺気を感じた。

「来るなあ！」

隆羅が叫んだ瞬間。

1発のライフルの銃声がビルの谷間に響き渡った。

隆羅の側頭部から血が吹き飛び隆羅が道路に倒れ込んだ。

「嫌あああああ！」

海の絶叫が裏路地に響き渡る。しかし隆羅はピクリとも動かなかった。

黒塗りのワゴンが滑り込んできて男が海を車に押し込め走り去った。
そこに軍用ヘリコプターの音が近づく。

「しまった遅かったわ」

綺羅がヘリコプターを隆羅の側に降ろし隆羅を回収させる。
そして隠蔽の指示を出して飛び立った。

ルコは育郎に連れられマンションに帰ってきた。
沙羅が茉弥を抱っこして2人を出迎える。

「育、何が起きているの？」

「たぶん、三度みたびだろう。おそらくスネークだ」

「そんな……」

「ママ、どうしたの？」

沙羅の顔が青ざめて家の電話が鳴り沙羅が慌てて出た。

「はい、そうですか。分かりました、外出は控えます。はい、お願いします」

電話に出た沙羅の顔から血の気が引いて震えていた。

「ママ、ママってば」

「ルコ、これから言う事を落ち着いて聞きなさい、良いわね」
「う、うん」

沙羅が深呼吸をして自分の気持ちを落ち着かせると、ルコが真剣な目をして沙羅を見た。

「隆羅が銃で撃たれて怪我を負ったわ。命に別状は無いけれど病院に搬送されたの」

「パパが銃で撃たれたって？ 海はどうしたの？」

沙羅はルコの問いには答えず首を横に振るだけだった。

「そんな、撃たれたってなんで？ 海はどうしちゃったの？」

沙羅は気が動転しているルコを抱きしめて落ち着かせた。

「落ち着きなさい。お願いだから。今は茉弥の面倒を見ていて頂戴
お願いよ。それと外出は当面禁止だから」

「ここは、大丈夫なの？」

「大丈夫、おば様達が全力で守ってくれるから」

「沙羅、俺はサギの所へ行ってくる。詳しい事はその後で」

「お願いよ。育」

「ああ、ルコと茉弥を頼むぞ」

育郎がマンションを後にして隆羅の居る実家に向かう。

「何でまた、こんな思いをしなきゃならないの……」

沙羅が震える声で呟く。

「ママ、何がなんだか全然分からないよ」

「ゴメンなさい、今は何も言えないわ。隆羅と海ちゃんが戻ってき

たら全部話すから。今は隆羅の回復を願いましょう」

「でも、銃で撃たれたんでしょ！」

「大丈夫よ、アイツは不死身だから。それに今まで一度だって口に出した事を守らなかつた事がある？」

「そうだね、必ず守ってくれた」

「でしょ、茉弥をお願いね。少し1人にしてくれない」

「うん、分かった。茉弥の所にいるね」

ルコが茉弥の寝ている奥の部屋に行くと沙羅は洗面所に向かった。

「隆羅、お願い帰ってきてちょうだい。海ちゃんはどうするの？」

もう、こんな思いは2度と嫌なの。あなたまで失ったら私どうしたら良いの……」

沙羅は洗面所で声を押し殺しながら泣き崩れた。

育郎が如月家の敷地内の病院に着き、ICU（集中治療室）に向かうとそこには綺羅が居た。

「隆羅の様子は？」

育郎が綺羅に冷静に尋ねる。

「弾は側頭部をかすただけよ問題は無いわ。今は暴れないように薬で眠らせて居るだけ。咄嗟に避けたのね信じられないけれど、あと数センチ内側だったらと思うとゾツとするわ」

「そうなんですか、海ちゃんの行方は？」

「それも、分かっているわ。こんな物が落ちていたから」

それは黒い紙に金で縁取られた赤い文字で書かれているクリスマスパーティーの招待状だった。

「そうですか、後はサギが目を覚ました時に冷静で居られるかですね」

「そうね。こんなお願いを出来る立場じゃないんだけど、出来ればここに居てもらえないかしら」

「そんな、言い方は止めて下さい。こいつとは何処までも一緒だつて誓ったんですから」

「ありがとう、お願いするわ。沙羅さん達には一切手出しはさせないから」

「それは、大丈夫でしょう。奴らの狙いはサギ1人ですから」

「でも、海ちゃんが心配ね」

「それも、たぶん平気ですよ。奴らも馬鹿じゃないはずです、隆羅をおびき出す罠ですから」

2人のクリスマス - 2

12月23日午後

隆羅が目を覚ますと体は拘束されていて自由にならなかった。

「タコ、そこに居るんだろ。これを外してくれ」

「サギ。今、おばさんを呼んでくるから」

「待てるか、関節を外してでも」

隆羅が体を無理矢理起こそうとする。

「待て、待ってくれサギ。今、外すから。無茶ばかりするな。それと暴れるなよ」

「暴れるか、至って冷静だ」

育郎がICUに入り隆羅の拘束を解いた。

「海の居場所は？」

「おばさんが案内状を持っている」

「沙羅やルコ達は？」

「安全だ、完全警護がついている」

「そうか、じゃ行こう」

「分かった」

隆羅と育郎は屋敷の地下に降りて行く。

地下には武器庫や射撃場が完備されていた。

そして、隆羅専用の部屋に入る。

「サギ、やるのか？」

「当然だ、もう海に隠す必要も無いだろう。俺の進む道はいつも暗く薄汚れた裏路地なんだ。俺のやり方で、俺が全力で奴等を叩き潰す！」

とても冷たい目をしながら真っ黒な2挺のベレッタM92FSの手入れを始めた。

「決めたんだな、もう何も言わない。おばさんから案内状を受け取

ってくる」

「悪いな」

「謝るな、俺を裏路地から日の当たる道に叩き出したのはお前じゃないか。この位なんともねえよ」

育郎が1階に上がり綺羅のもとへ向かう、そして沙羅に連絡を入れた。

「沙羅か。サギが目を覚ました。イヴの日に海ちゃんの救出に向かう。アイツはこのままだと全てを捨てて裏路地に戻る気だ」

「そんな事は、私が絶対にさせないわ」

「頼んだぞ。沙羅」

育郎が綺羅の部屋に着き声を掛ける。

「おばさん、隆羅が目を覚めました。案内状を」

「もう、あの子は何でそんなにせっかちなのかしら」

綺羅が育郎に真っ黒な案内状を渡した。

「おばさん、この中身は」

「開けて無いわよ。見たりしたらあの子が何をするかわからないでしょ」

「そうですね」

育郎が隆羅の居る地下に向かい綺羅から預かった案内状を隆羅に渡した。

「サギ、どうするんだ？ まさか1人で乗り込む気じゃないだろうな」

「タコは上で待つて居てくれ。直ぐに行くから」

「分かった」

育郎が屋敷に上がり居間で待つことにする。

「やれやれ、サギは相変わらずだな。周りを優先するかこんな時まで。クソが！」

育郎が廊下の柱に拳を叩き付けた。

そこに綺羅がやって来た。

「本当に困った子ね、タカちゃんは」

その時、隆羅のバイクが屋敷を出て行く音が聞えた。

「おばさん、アイツの行き先は」

「もちろん把握しているわよ」

「じゃ、俺も行きます」

「育ちゃん、駄目よ。あなたまで巻き込むわけには」

「おばさん、今の生活があるのは隆羅のお陰なんです。それに俺はアイツの相棒なんですよ」

「分かったわ、けれどこれだけは守ってね。あなたは後方支援だよ」

「分かりました」

その後、隆羅の足取りはぴつたりと途絶えた。

2人のクリスマス - 3

12月24日クリスマス・イヴ

街中は華やかにツリーが飾られてイルミネーションが光り輝き。
クリスマスソングが楽しげに流れている。

そしてもう少しすると華やかな世界とはかけ離れた所で闇のパーティーが開催されようとしていた。

沙羅達の部屋の呼び鈴が鳴る。

「ママ、誰だろう?」

「ちよつと待ちなさい」

沙羅に緊張が走る。

「沙羅、俺だ。開けてくれ」

「隆羅なの?」

その声は紛れも無く隆羅の声だった。

沙羅から力が抜けてドアを開けると頭に包帯を巻いているが、笑顔の隆羅がそこに立っていた。

「パパだあ」

「メリークリスマス!」

「あなた体は大丈夫なの?」

「何がだ、こんなに元気だぞ。ほら、クリスマスプレゼントだ」

綺麗に包装された箱をルコと沙羅に渡した。

隆羅が2人を見ると今にも泣き出しそうな不安そうな顔をしながら隆羅の目を真っ直ぐに見ていた。

「そんな顔をするなよ、2人とも。茉弥が不安がるだろ、海を迎えに行つて来る。必ず2人で戻ってくるから」

「パパ、約束だよ。約束のキスをして」

「ああ、分かった」

隆羅がルコと沙羅の頬に軽くキスをした。

「一緒にクリスマスしましょうね」

沙羅が隆羅を真っ直ぐに見て言った。

「そうだな、また後からな」

ルコと沙羅は隆羅の後姿を見送る事しか出来なかった。

「ママ、パパを信じて待つしかないね」

「ルコも大人になったのね」

「当たり前じゃん、私だってママだもん」

「そうね、母は強しね」

街外れの廃工場に海は監禁され毛布に包まり震え続けていた。

「隆羅、隆羅……」

海の手には携帯が握りしめられていた。

電源を切つてあるはずの携帯が突然マナーモードでメールの着信を知らせた。

「えっ、何で？」

恐る恐る携帯を開いてみた。

『メリークリスマス！ 今から迎えに行くからな。隆羅』

ハートの可愛い絵文字つきだった。

海の中から涙が落ちた。

「無事だったんだ、隆羅。信じて待っているから。こんな時にハートの絵文字つきじゃね。バカあ……」

海の不安と恐怖心は隆羅からのメール1つで吹き飛んだ。

今まで1度でも隆羅は約束を破った事が無いからだ。

その時、男の声がする。

「時間だ、こっちに来い」

海が毛布から出て男の指示に従う。

「頭、連れて来ましたぜ」

廃工場内の2階の通路に連れてこられる、そこには頭と呼ばれている男が立っていた。

目がギョロっとしていて細身で長身だった。

何処と無く爬虫類に似ていて生理的に受け付けがたい容姿と異様な殺気を漲らせていた。

「ドラゴンはこんな小娘の何処が良いのかね」

海は何も言わず俯いていた。

「どうせ2人で仲良くあの世行きなんだからな。ケツケツケツ」

男が不気味な高笑いをした。

「そろそろ、楽しいパーティーの始まりだ。奴は律儀だから時間通りにもう直ぐ現れるぞ。お前を迎えにな」

すると何処からともなく赤鼻のトナカイが流れてくる、それは口笛だった。

そして工場の1階に真っ赤な衣装を纏いプレゼントの入った袋を担いだサンタクロースが現れる。

「隆羅なの？」

海が呟いた。

「メリークリスマス！ 楽しいパーティーにお招きありがとう、スネーク。今日はサンタから悪い子に鉛玉のプレゼントだ」

それは紛れも無く隆羅の声だった。

「ふざけやがって、この道化が！ やれ！」

スネークの掛け声と共に銃弾の嵐がサンタクロースを襲う。

凄まじい銃声が消え、静寂が訪れると硝煙と土煙がモウモウと舞い上がっていた。

「跡形も無く消し飛んだか」

「隆羅！」

海が名前を叫んだ。

「お呼びですか？ お姫様。たとえ火の中、水の中。銃弾の嵐だつて潜り抜け助けに参る所存です」

隆羅の声がする。それはいつもの優しい声だった。

「貴様ら、今宵は生きて帰れると思うなよ！ 綺麗サッパリ消し去ってやるからな」

隆羅の声が今まで聞いた事の無い声に変る。

土煙の中から人影が現れる、黒いロングコートに黒いＴシャツ、黒のＧパンに黒のスニーカーを履き頭に黒いバンダナを巻いている。そして恐ろしいくらい冷酷で冷血な目をして隆羅が立っていた。

「現れたな、黒い死神 ツインドラゴン！ 死にさせ」
再び銃弾の嵐が隆羅を襲う。

隆羅が懷から２挺の拳銃を抜いて応戦する。

銃弾を掻い潜りながら銃を撃つ姿は、まるで漆黒の蝶がヒラヒラと空を舞っているようだった。

隆羅の２挺の拳銃が火を噴き、次々に銃を手にする男達が倒れていく。

隆羅の動きが止まると頭上から声がする。

「弾切れだろうが。これでも喰らえ！」

その瞬間、まるで黒い蝶が羽を広げたように黒いコートが翻り。

数人の男が呻き声を上げながら落ちて行った。

隆羅が拳銃を懷に入れ数本のナイフを両手で投じたのだ。

隆羅の後ろの方で何かが動いた。

「隆羅、後ろ！」

海が叫び。銃声が響く。

刹那、隆羅が紙一重で避ける。

同時に予備の弾倉をＧパンの後ろポケットから投げ出し。

拳銃を取り出して空の弾倉をイジェクトし振り向きざまに拳銃に弾倉をダイレクトに装着し撃ち抜いた。

男が呻き声を上げ倒れた。

「化け物め！ これを見る」

隆羅が見上げるとスネークが海の頭に銃口を突きつけていた。
海の表情が強張る。

「さあ、どうする？ 銃を捨てる。クリスマスと小娘の誕生日に俺からのプレゼントだ。小娘の血で真っ赤に染め上げて祝福してやる」

海は隆羅を信じ、隆羅を見つめていた。

すると隆羅の口が動いた「3つ 数える しゃがめ」と。

隆羅が銃を放り出すと同時にカウントを始めた。

「3！ 2！ 1！ GO！」

海が耳を塞ぎしゃがみ込んだ瞬間、背後でヒュンヒュンと何かが空気を切る音がした。

スネークが海に向けていた銃を隆羅に向け連射する。

その瞬間、海とスネークの背後から凄まじい音がして何かが打ち込まれる。

それは、今までに聞いた事がない様な巨大な雷が降り注ぐ様な音だった。

隆羅は放り投げた拳銃をキャッチし壁際に向かって駆け寄り。

置いてあった資材に足を掛け一気に2階の通路に飛び上がり海の体を庇う。

すると壁やガラスの破片が舞い上がった。

海が目を開けるとスネークの体が何かに踊らされている様に下に落ちて行った。

そして海が振り向くと背後にあったはずの壁に大きな穴が開き。

その向うに軍用ヘリのアパッチが風切り音をさせながらホバーリングしていている。

機体にあるM230 30mmチェインガンが煙を上げていた。

操縦席では綺羅が片手を挙げて合図した。

「お、おば様？」

すると軍用ヘリのアパッチが飛び去る。

「海、大丈夫か？」

「うん」

「立てるか？ すまなかった。巻き込んでしまつて」

それ以上、隆羅は何も言わず海を連れて下に降りて、スネークの様子を伺った。

「隆羅、死んじゃったの？」

「生きているさ。こいつが喰らったのはゴム弾だからな、体中の骨はボロボロだけだな」

「へへへ、これでも喰らえ」

スネークが何かのボタンを押したが何も起こらない。

「ありゃ？」

「無様だな。何で俺がツインドラゴンと呼ばれているか最後に教えてやる。この2挺拳銃だけじゃなく空と陸にシルフとサラマンダーと言つ2頭の竜を従えているからだ」

隆羅が工場の入り口に目をやると大きな四輪駆動車ハンヴィーに育郎が乗っついていて隆羅に合図をして走り去った。

「えっ、宅さんと誰？」

「親父だ。帰ろう、海」

「うん」

隆羅に連れられ廃工場を出ると乾いた銃声が1発だけ工場内に響いた。

隆羅のバイクに乗りマンションへ帰ってくるが一言も会話を交わすことは無かった。

そしてマンションに着いても隆羅は何もしゃべらなかつた。

ルコ達の部屋の前。

隆羅が呼び鈴を鳴らすとルコと沙羅が出てきた。

「海、怪我は無い？」

「うん」

「海ちゃん、本当に無事で良かったわ」

「パパ？」

「海を頼む」

海の姿を見て沙羅とルコが胸を撫で下ろして安心すると、隆羅が海の背中を押して玄関にいれドアを閉めた。

「えっ、隆羅。開けて、開けてよ」

海が必死にドアを叩く。

隆羅がドアに寄りかかり開かない様にしていた。

「隆羅、お願いだから。開けて……」

海が泣きながら崩れ落ちた。

「サギ、本当にこれで良いのか？ 奴が地獄に落ちたのを確認した。これで終わった筈だが」

「宅、すまない。1人してくれ」

隆羅が1人で自分の部屋に向かって歩き出した。

「まったく頑固な奴だ。沙羅頼んだぞ」

育郎は部屋に入らずドアの外で腕を組んで隆羅の代わりドアに凭れて立っていた。

「海ちゃん、話があるの。こっちにいらっしやい。ルコ、海ちゃんを連れて来て」

「うん、分かった」

ルコが玄関で泣き崩れている海を抱き上げ、付き添うようにしてリビングに連れて行く。

「2人とも、そこに座りなさい」

「はい」

体中から力も何もかも抜けてしまい気の無い返事を海がした。

「ルコもちゃんと聞いて欲しいの」

「うん、分かった」

「海ちゃん、良いわね」

沙羅の言葉に海は返事をしなかった。

「海ちゃん、良く聞きなさい。聞いてからどうするか決めなさい。」

隆羅は2度とあなたの前に現れないつもりよ。それでも良いの？」

「えっ、そんな……」

沙羅の『2度とあなたの前に現れないつもりよ』と言う言葉で海が我を取り戻した。

「今からする話は、ルコにも関係のある話だから時期が来るまで内緒にしていたの。これは隆羅との約束なの。だから隆羅は海ちゃん

に何も話せなかった。どんな気持ちで隆羅が海ちゃんに黙っていたと思うの？ 辛いのは海ちゃんだけじゃ無いのよ」

「分かりました」

海が真剣な眼差しで沙羅の目を見据えた。

「まずは、ルコの本当のパパの話からね」

「私の本当のパパ？」

「そう、名前は葉月 仁はづき じん。隆羅と育郎の大親友よ。2人がT・Dと呼ばれていたのを知っているわね、最初は3人だったの。空殺の鷺、足技の蛸、そして陣営の仁。彼は戦略を得意としていたの。ルコが産まれた頃にはもう隆羅の裏の仕事を手伝って居たわ。お金も貰えるし危険だけど何よりも楽しかったみたい。しばらくして、3人が調べていたグループ抗争の爆弾事件に巻き込まれたの。私が体調を崩してしまいルコの面倒を3人が見ていた時にね。育郎は直ぐに離れたから怪我はしなかったの、でも陣と隆羅は爆発を直接受けて重傷を負ったわ。そして、仁は2度と帰らない人になっちゃった」

「ママ。何で、2人だけ怪我を？」

「あなたを庇ったからよ」

「私を……」

「そう、ルコを助ける為に。そしてしばらくして育郎は隆羅から今の仕事を薦められて裏の仕事から手を引いたの。隆羅が辞めさせたのよ、これ以上誰も巻き込みたくないから」

「私の為に……」

ルコの目が揺れていた。

「ルコ、あなたの一生に係わる話よ。シツカリ聞きなさい」

「うん、判ってるよ。ママ、でも私は何も覚えてないよ」

「ルコはまだ小さかったしね。ショックで混乱していたから記憶から消してしまったのかもしれないわね。その、爆弾事件を起こしたのが今回のスネークなの」

海は沙羅の言葉を一字一句聞き漏らさないように聞いていた。

「それから数年後に再び事件に巻き込まれる事になる。私が経営コンサルティングの仕事を始めただけの頃、裏に精通する会社だとは知らずに仕事を引き受けてしまい困っていると隆羅が助けてくれた。ルコを隆羅の実家に預け私のボディガードを引き受けてくれたの。でも私が迂闊だった。相手の術中にはまり今回の海ちゃんのように拉致されそうになった。主犯格がスネークだったのよ。車を爆破され隆羅は瀕死の重傷を負いながらも私を助けてくれた、スネークにも重傷を負わせてね」

海とルコが揺れていた。

沙羅の話を聞いているだけで精一杯だった。

「そして隆羅は生死の狭間を彷徨い意識不明の状態が続いた。意識を取り戻した時に私に言ったの。しばらく2人を警護するって、自分の命なんてなんとも思ってたわ。だから言っちゃったの。命懸けで誰かを守るのは良い事だけど、自分も守れなければ生きじゃないってね。命と引き換えなんて奇麗事に見えるけれど、悲しむ人が必ずそこに居るんだって」

「沙羅さんが隆羅に言った言葉だったんですね」

「海ちゃんは聞いたことがあるのね」

「はい」

「そうして、3人の生活が始まった。仕事も順調に行ってたわ、隆羅の実家の系列企業のコンサルティングを手伝わせてもらって駆け出しの私の名前を売り出したくれた。生活も最初はぎこちなかったけれどだんだん良い感じになってきてとても楽しかったわ。育朗もちよくちよく遊びに来てくれるようになって、あつという間の10年だった」

「でも、どうして別れちゃったの？」

ルコが今まで1番知りたかった事だった。

「それは、育朗の気持ちに隆羅が気付いたからよ。守ってくれる奴が居るなら俺は用なしだって、隆羅の言葉に気付かされたの。私も育朗が気になっているんだって」

「それじゃ、パパはパパの10年は……」

「だからこそ、私は海ちゃんを隆羅を応援したいの。隆羅が居なければルコも私もこの世に居なかった。別れた今も守り続けてくれている。命懸けで茉弥までも」

「でも、裏の仕事って」

「それは、隆羅の実家が昔は裏社会に精通していたのは知っているわね。今は表の大きな企業体だけど奇麗事だけではどうにもならない事が出てくる。その処理を隆羅が一手に引き受けているの。その為に表ではどうにも出来ない警察関係の事件も隆羅を頼って舞い込んで来る」

「ママ、警察関係って？」

「裏社会に詳しくければそれだけ情報がつかみやすいと言う事よ。でもそれはとても危険な事なの、裏社会と警察は相反する物だから。」

でも隆羅はそれを遣って退けている。その方が隆羅達にも都合が良
いから」

「都合が良いって、ママと言う事なの？」

「考えても見なさい、今回の様な事件が表に出て来たら大騒ぎになるでしょ。まあ、隆羅の実家ほどの力があれば警察なんか押さえるのは容易いけれどね」

「そんなに大きな企業なんですか？ 沙羅さん」

「日本の何割かを仕切っていると言ったわよね。やっている事は世界レベルよ、医療、バイオテクノロジー、IT関係、世界最先端と言ってもいい研究をしているのよ。公に出来ない事ばかりなの、だからあらゆる方面からも注目をされ時には狙われる。その為の裏の仕事」

「でも、そんな大怪我を何回もしているのに怪我の跡なんて隆羅の体には何処にも」

「医療の最先端の技術よ傷跡を残さない、でも完全に総て消すなんて不可能なのよだから風呂上りだとか暗い所で見ると傷跡がうつすら見える事があるの」

「そんなに傷だらけなんですか？」

「海ちゃんはちゃんと向き合う勇氣ある？　ここまで話を聞いてまだ隆羅の事を？」

「私も隆羅と約束したんです。いつまでも一緒にいるって、隆羅の居ない人生なんて私には考えられません」

沙羅が海の瞳を真っ直ぐに見て真意を尋ねると、凜とした芯のある顔で海が真っ直ぐな気持ちを伝えた。

「もう、決めているのね」

「はい、私も隆羅が居なければ今の私は居ないですから」

「そう、それじゃ隆羅の心をこじ開けて来なさい。あの馬鹿をぶっ飛ばしてでも」

「はい。行つて来ます」

「海、これ忘れないでね」

ルコから小さな紙袋を受け取り海がルコ達の家を出ると外には育朗が立っていた。

「宅さん？」

「全部聞いたんだね」

「はい。聞きました」

「それでも隆羅の事を思ってくれるんだね」

「もちろんです」

海が育朗の目を真っ直ぐに見た。

「そうか、海ちゃんが居れば無敵だな。サギは部屋に居るよ、行つてやってくれ。サギを頼んだよ」

海が階段を駆け上がって行くのを見て育朗はドアを開け家に入っていた。

「育パパ。私」

ルコが泣きながら育郎に抱きついた。

「ルコも全部聞いたんだね」

育郎がルコを優しく抱しめる。

「うん。パパが……」

ルコの言葉は声にならなかった。

「大丈夫だよ、あの2人なら。海ちゃんはサギが認めた唯一の女の子だ、2人を信じよう。そうだと沙羅」

「そうね、ルコ。言ったでしょ2人はお互いに一緒に居た方が良かった」

「うん、そうだね。ママ少し安心したらお腹すいちゃった」

「何も無いわよ」

「俺が何か簡単に作るよ」

「育パパの手料理だ！」

2人のクリスマス - 4

海が家に入ると部屋の暖房が切られ真っ暗だった。

バスルームだけ明かりがついていてシャワーが出しっぱなしになっていた。

シャワーを止めて部屋の奥に進むと料理のいい匂いがしていた。

良く見るとテーブルの上に料理が綺麗に置かれケーキまで用意されている。

部屋にはサザンの切ないクリスマスソングが流れている。

その奥でベッドに寄りかかり虚ろな目をした隆羅が座り込んでシャパンをラッパ飲みしていた。

「ねえ、隆羅」

海が声を掛けるが隆羅の顔は無表情で返事もなかった。

隆羅の目の前に座りシャパンのボトルを取り上げ、隆羅の目をみてもう一度名前を呼んだ。

「隆羅、お願いだから返事をしてちょうだい」

海の目から大粒の涙が流れていた。

「どうしたんだ。海」

隆羅が表情を全く変えずに手で海の涙を拭った。

「沙羅さんから全部聞いたの、隆羅の事を全部」

「そうか、ゴメンな。今まで騙していて」

「そんな言い方はしないで騙してなんか居ないでしょ」

「私やルコの為に黙っていたんでしょ、辛い思いをして時々哀しい目をしながら。隆羅は何も悪くない。自分だけを責めないでお願いだから。前にも言ったでしょ」

海の目からは涙が零れていたが真っ直ぐに隆羅の目を見つめていた。

その目には揺るぎない決意が隆羅にも感じられた。

「これ以上、俺と居たらまた危険な目に……」

海が隆羅の口に手を当てて隆羅の言葉を遮った。

「隆羅は命懸けで守ってくれるんでしょ。だったら私は命懸けで隆羅の側にいる。もう1人ぼっちにしないで。隆羅の居ない世界なんて絶対に嫌!」

「本当にそれで良いのか?」

「本当も何も無いでしょ! いつも側にいるって、愛してるって言ってくれたじゃない嘘だったの?」

「そうだったな」

隆羅が冷たく閉ざそうとしていた表情が穏やかになっていった。

「隆羅、お願い。私だけの隆羅になって。そして隆羅だけの私にして」

海が隆羅のシャツを脱がし両手を隆羅の頬に当て優しくキスをする。隆羅が海を抱き上げベッドに寝かせキスをした。

「こんなに傷だらけなんだ」

隆羅の体中に傷跡が浮かび上がっていた。

「嫌か?」

「1つ1つが隆羅の歩いてきた道なんだよね。今からは1つ1つ私が見えていく。隆羅が好き、愛してる」

「海、愛してる」

「隆羅……」

海の20歳の誕生日に2つの半球体は1つのとても綺麗な球体になった。

そして、翌日。海が目覚めると隆羅の姿が部屋に無かった。

「隆羅! 隆羅! どこ?」

海が慌てて隆羅を探した。

すると隆羅が現れた。

「どうしたんだ、慌てて」

「隆羅が居ないから」

「もう、何処にも行かないよ。体は大丈夫か?」

海は涙目になっていた。

海の隣に座り隆羅が海の頭を撫でる。

「うん、少し」

海がモジモジしていた。

「そうか」

「私ちゃんと出来た？」

「大丈夫だ」

「何をしていたの？」

「料理を温めなおしていたんだよ」

「ねえ、今からパーティーしようよ」

「そうだな、それもいいかもな。でも、その前に服を着たほうが良いと思うんだが」

海が生まれたままの姿で毛布に包まっていた。

「なんで？ 別にいいじゃん」

「良くないだろ。頼むから」

「隆羅が照れてる」

「とりあえず、下着を着けてこのシャツぐらい着てくれ。風邪ひくぞ」

隆羅が部屋に掛けてあったシャツを海に渡した。

「このマンションはセントラルヒーティングだから寒くないもん」

「着ないと料理片付けるぞ」

「駄目、お腹ペコペコなんだから」

隆羅のシャツを海が着ると隆羅が食事の準備をして料理を運んできた。

「さあ、食事にしよう」

「いただきます」

「どれも凄く美味しいよ、隆羅」

「ご満足ですか、お姫様」

「うん。ケーキも絶品だしね」

お腹いっぱい食べて、海がベッドの上でコロコロしている。

片付けを終わらせた隆羅がシャンパンとグラスを持ってきた。

「隆羅、これからお酒飲むの？」

「もう、冬休みだろう。それに無断欠勤だしな」

「学校じゃ大騒ぎだね」

「そうだな。乾杯しないか？ 順番が逆だけど」

「えへへ、そうだね」

隆羅がシャンパンを開けてスリムなフルート型のグラスに注ぎ海に渡した。

「じゃ、メリークリスマス」

「メリークリスマス！ 綺麗なピンク色それに美味しいね」

「そうだな」

隆羅が優しい目で海を見つめていた。

海がグラスを傾けるとグラスの中で何かが転がり、チリンと澄んだグラスの音がした。

「ねえ、隆羅。何かグラスに入っているよ」

海が隆羅の顔を見て頭を少し傾けて不思議そうな顔をするが隆羅は何も答えなかった。

「何だこりゃ？」

海がグラスのシャンパンを飲み干しグラスから手のひらに取り出した。

「隆羅、これって……」

海の手の上に2つのシンプルなリングがあった。

「20歳の誕生日おめでとう、海。卒業したら結婚しよう」

「本当？ 隆羅？ 隆羅！」

海が隆羅に抱きついた。

隆羅からのクリスマス&誕生日のプレゼントはペアのリングとプロポーズだった。

「隆羅。はい、私とルコからのプレゼント」

「開けても良いかな？」

「うん」

「ありがとうな、良い感じだ。スティングレイの財布か」

隆羅が包みを丁寧に開ける、中からは財布が出てきた。

それはシンプルな黒いエイ革の長財布だった。

「気に入ってくれた？」

「もちろんだ、大切にに使わせてもらうよ」

「良かった。それじゃ隆羅」

隆羅の目を見て手のひらのリングを差し出す。

隆羅がリングを受け取ってリングを見ながら海に聞いた。

「なあ、海。返事を聞いてないんだが」

海は隆羅の目の前に左手を突き出したままで居た。

「隆羅のお嫁さんになってあげる」

「そつか、なってくれるか」

「ねえ、早く」

「分かった」

隆羅が海の左手を取り薬指にリングをはめる。

「じゃ、隆羅も」

海が隆羅の左手の薬指にリングをはめた。

ベッドの上で隆羅の胸にもたれながら海が左手の薬指のリングを見ている。

「嬉しいなあ。綺麗な石だね。それにこのデザインは？」

とてもシンプルなリングに青い石が埋め込まれていた。

「石はブルーダイヤモンドだよ、このデザインは指輪を2つ合わせると」

隆羅が海の指からリングを外し自分の指からもリングを外して重ね合わせた。

「あっハートだ。えへへ、あれ？ 変だな、こんなに嬉しくって幸せなのに涙が出てきた」

海の瞳から涙が溢れていた。

「どうしたんだ？」

「もう、私の知らない隆羅は居ないんだよね。もう、何処にも行か

ないよね」

「海が知っている事がすべてだよ。いつまでも海と一緒にだ」

「隆羅！ 隆羅！」

海が隆羅の胸で泣きじゃくった。

隆羅が海を優しく抱しめる。

少しすると海が落ち着いてきた。

「大丈夫か？ 海」

「うん……クチュン」

海がくしゃみをした。

「風邪ひくぞ」

隆羅が毛布を掛ける。

「隆羅、もう一度……」

海言葉に隆羅が海にキスをして毛布に潜り込んだ。

その後、学校やPTAに説明を求められ対応に追われ、
そして海の荷物を母親から受け取り片付けなどをして、慌しく年末
があっという間に過ぎていった。

新年・はじまり

私の家族にも、そしてパパや海にとっても一生忘れられないクリスマスが過ぎて。

新しい年が始まるの。

そしていろいろな事がはじまる予感がするんだけど期待と不安でいっぱいってかんじなの。

大晦日はルコ達の所で年越しそばを食べて、みんなで除夜の鐘を聞いて遅くまでおしゃべりをしていた。

新年を迎えても海はお昼近くまで寝ている。

隆羅は少し早起きをしてキッチンでコーヒーを入れていた。

「新年早々、海は片付けもしないでしょうがない奴だな」

キッチンのテーブルの上にある籐のバスケットの中に毛糸や編み棒が入ったまま置かれていた。

「そろそろ、行かないと間に合わないか」

隆羅が時計を見て海の寝ている寝室に歩き出した。

隆羅がベッドに腰を下ろし海を起こす。

「海、そろそろ起きてくれないか？」

海の頭を優しく撫でる。

「もう少しだけ、寝かせて」

「仕方が無い1人で出かけるかなあ」

「駄目！一緒に行く！」

海が飛び起きて、隆羅を見てボーとしていた。

隆羅が見慣れない着物を着て海の横に腰掛けていたのだ。

「隆羅？」

「出かけるぞ、約束に間に合わなくなるからな」

「約束？でもまだ早いよ。隆羅その格好は？」

「正月くらい良いんじゃないか？」

隆羅は大島紬の渋い茶系の着物を着ていた。

今日はルコや沙羅達と初詣に行く約束をしていたが約束の時間まではかなり時間があつた。

「今、準備するから」

海が不思議に思いながらも慌てて着替えを始めた。

「海、キッチンのテーブルの上にバスケットが置きばなしになっているけど」

海がしまったと言う顔をして固まった。

「見ちゃったの？」

「毛糸なんかが入っていたと思うけど」

「……」

「どうしたんだ？」

海が返事もせずになんかを少しだけ考えてからキッチンに向かい、何かを手にとって後ろに隠しながら戻ってくる。

「はい、これ」

「なんだ？」

「誕生日プレゼントだよ。お誕生おめでとう」

海が隆羅の首に手編みの青いグラデーションで落ち着いた色のマフラーを巻いた。

「ありがとうな。とっても温かいよ」

「隆羅は、教えてくれないから」

「誕生日か忘れていたよ」

「何日なの？」

「明日だよ。さあ、行こう」

隆羅が立ち上がり羽織を着る。

そして首にはマフラーを巻いていた。

「うん。でも、着物にマフラーって」

「こんな感じで巻けば変じゃないだろ」

隆羅がネクタイを締める様な感じに巻きなおした。

「そうだね」

隆羅が向った先は隆羅の実家だった。

大きな門をくぐり玄関に着くと綺羅が待っているのが見えた。

隆羅が玄関に車を止めて車から降りると、海も車から降りて綺羅に新年の挨拶をした。

「おば様。明けましておめでとうございます」

「おめでとう。今年も宜しくね」

「はい」

「さあ、早くこっちに来て。急いでね」

「ええっ、おば様？」

海が綺羅に手を引っ張られて部屋に入っていく。

しばらくすると、海が部屋から出てきた。

綺麗な水色の下地に淡い色でボタンの花が彩りよく染め抜かれている振袖を着ている。

帯も落ち着いた花柄の白っぽい帯を締めていた。

髪はアップにされ綺麗な髪飾りが付けられていた。

艶やかさの中にも落ち着きがあり、海に良く似合っていた。

「タカちゃん、どう？ 京友禅よ」

「良いんじゃないか。とっても似合っているぞ」

「おば様、この着物は？」

「海ちゃんは今年成人式なんですよ。そのお祝いよ」

「でも、こんな高そうな着物」

「それ以上は言わないの。海ちゃんは私達の娘なんですからね」

「隆羅、私……」

「ルコ達が待っているぞ」

「うん。ありがとう、おば様」

「その笑顔が嬉しいの。行ってらっしゃい」

海が笑顔でお礼を言うと綺羅が笑顔で見送ってくれた。

「隆羅？ どうやって乗る？」

隆羅の車の横で海が戸惑っていた。

「さあ、お手をどうぞ。姫」

「あれ？ 意外と簡単に乗れるんだ」

「袖を中に入れてくれ」

「うん。分かった」

海が車に乗り込み袖が汚れないように中に入れると隆羅がスイッチを入れる、するとサイドガードが上がってきた。

「着物が汚れるといけないからな、それにこれで風も巻き込まないから髪も乱れないしな」

「へえ、凄いんだこの車。レトロぽいけれど」

「形だけはそのままでけど、色々とは入れているからな。行くぞ」
「うん」

隆羅の実家から車を出しルコ達との待ち合わせの場所へと向かう。

快晴で風も穏やかだったので気持ちよく走れた。

都内は正月という事もあり道も空いていたのだ。

「寒くないか？」

「大丈夫だよ。気持ち良いくらい天気もいいし」

「そうか」

2人はとても目立っていた、唯でさえ目立つ車なのに着物を着た力ツプルが乗っているのだ。

直ぐにヤンチャな車やバイクに目を付けられ、冷やかされた。

「隆羅、なんだか怖いよ」

「本当に、厄介だな」

隆羅が路肩に車を止めると、直ぐ近くに車やバイクも止まりアクセルを吹かし挑発してきた。

「隆羅、無茶な事はしないで」

「大丈夫だ、直ぐに済むから」

隆羅が車から降りて挑発する車やバイクに向かい歩き出す。

「なんだ！ こらあ」

「そんなに粹がるなよ。元気の良い坊やだな」

「坊やだあ？ ふざけんな」

隆羅が男達の目の前に、袖から出したパスケースのような物を開いて見せた。

「け、警察？ ヤバイ！ 散れ！」

リーダーらしき男が叫ぶと蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

隆羅が海の待つ車に戻ってきた。

「隆羅、警察って何？」

「沙羅から全部聞いたんじゃないのか？ 警察関係の仕事もしているって」

「聞いたけど。そう言えば、大阪にバイクで行った時もパトカーにも見せていたよね。その手帳みたいの」

「本物だぞ」

海の膝の上にパスケースの様な物を置いた。

「えっ、これって警察手帳？ 隆羅は警察官なの？」

海がパスケースを開くと中には制服姿の隆羅の写真と金属製の記章がついていた。

「公安部 特別機動捜査課、通称 特機 決して表に出てこない部署だ。上司も部下も知らない。とりあえず身分証だけの手帳だけだな」

「凄い事を隆羅はしているんだね」

「もう、後戻りは出来ないからな」

「私も後戻りはしないよ。隆羅が嫌がったって何処までも隆羅について行くからね」

海が笑顔で言った。

海の笑顔を見て隆羅も笑顔で返す。

「さあ、急ごう。ルコや沙羅がお冠だぞ」

周りには色々な屋台が沢山出ていて着飾った家族連れやカップルが楽しそうに歩いている。

待ち合わせの駐車場では沙羅、ルコと茉弥そして育郎が待っていた。

「遅い！ パパは何をしているんだろう。もう」

「ルコ、新年早々カリカリしないの」

「だって、皆で出かけるのって久しぶりなんだよ」

「そうね、あの事件の後。学校やPTAへの説明や海ちゃんの荷物を取りに行つて、バタバタしていたし。大晦日は2人ともお疲れだったしね」

「でも、収まる所に収まったんだから良かったじゃないか」

「でも、育パパ。時間は守らないと……あつ来た！」

ケッターハムスーパ―7に乗った着物姿の隆羅と海が現れた。

「しかし、目立ちすぎだな2人は。まったくサギの奴は何を考えているんだか」

駐車場の場所取りをしていたルコ達の所へ車を止め、海の手を取つて隆羅が海を車から降ろした。

「悪いな、遅れて」

「もうパパ遅いよ、待ちくたびれたよ」

「ルコ、ゴメンね。着物着せてもらうのに時間が掛かっちゃったの。あれ？ ルコ？」

ルコが海の着物姿を見て固まっていた。

「凄く綺麗……」

「ルコの着物姿も良い感じだぞ。正月は和服が一番だよな」

ルコもピンク地に花柄の可愛い着物を着ている。

沙羅は落ち着いた感じの黒い着物を、育郎は藍染めの着物を着ていた。

「海ちゃんも、一段と大人ぽくなったわよね。やっぱり」

「やっぱりって沙羅さん、あんまり変な事言わないで下さいね」
海を見る沙羅の目が笑っていた。

「でも、そうなんですよ？」

「そんな事は言えません」

海が俯いて赤くなった。

「ほら、お参りしに行くぞ」

隆羅が海の手を取って歩き出す。

「そうだね、だけど海とっても綺麗で大人ばいよ」

「えへへ、ありがと。ルコ」

歩きながらおしゃべりしていると参道に近づくにつれて人が増えてきた。

「しかし、凄い人だな」

「去年は、お正月も無かったものね」

「今年は皆で来られて良かったね。パパ」

「そうだな、今年は仕事馬鹿のタコも居るしな」

「仕事馬鹿は無いだろサギ」

「じゃ、仕事中毒か？」

「良いの、育パパは私達の為に働いているんだから」

ルコが育郎の腕にしがみ付いた。

「おいおい、こういう風の吹き回しだ。俺にいつも孫の面倒まで見せるくせに」

「その孫が、最近言葉を覚え始めたみたいなのよね、茉弥」

沙羅が茉弥の顔を覗き込んで話しかける。

「でもねパパ。『ママ』って言っている訳でもなく良く判らないの」

「茉弥の母親がそれでどうするんだ？ ルコ」

「だって、判らないんだもん」

ルコが困ったような顔をした。

そんなおしゃべりをしているうちに参拝の列に入り中々進まなくなってきた。

「まだ、先は長いな。大丈夫か、海？ 慣れない着物で」

「平気だよ。おば様の着付けは全然苦しくないもん」

「そうか、それなら良いんだ」

海は嬉しそうに隆羅の手をつかんでいた。

「ねえ、パパ。そのマフラーはどうしたの？」

「海から貰ったんだが、誕生日プレゼントにと」

「そうなんだ、パパの誕生日って明日だったっけ」

「そうだ。ルコからのプレゼントは期待していないからな。プレゼントの代わりに頑張って成績を上げてくれ」

「ブー、パパの馬鹿。そう言えば海？　パパからのクリスマス&誕生日プレゼントってなんだったの？」

ルコが頬を膨らませて隆羅を睨んでから海の方を見て聞いてきた。

「えへへ、これ」

ルコの目の前に海が左の拳を突き出す。

薬指のリングが晴天の青空の下で光った。

「指輪？　それも何で左手の薬指に？」

「だって世界で一番大好きな人からもらった指輪じゃんね」

「いいなあ。海ばかり」

「ルコにも、ちゃんとプレゼント渡したはずだけだな」

「そうでした。はいはいゴメンね、茉弥」

慣れない人ごみのせいか茉弥が珍しく愚図り始めた。

「たーた、たーた！　やー、やー！」

「もう、何が言いたいの？　茉弥」

「しょうがないなあ。茉弥、おいで」

隆羅が茉弥の顔を見て手を出すと茉弥が笑顔になり両手を出して身を乗り出してきた。

隆羅が茉弥を抱っこをする。

「たーた、たーた。きゃっ、きゃっ」

愚図っていた茉弥が喜んでしゃぎだし、隆羅の顔を触って遊んでいる。

「ルコ、もしかして『たーた』って隆羅って言っているんじゃないの？」

「ええっ、まさか？」

「海ちゃん、いい勘してるかも。最近、茉弥は隆羅に抱っこしてもらってないし」

「うわあ、ショック。ママよりも先に如月パパの名前を覚えるな

んて」

ルコがあまりのショックに体から魂が抜けたような顔をしていた。

「どうしたんだ、ルコ。そんな顔をして」

「茉弥が言っている言葉、隆羅って言っているんだって」

「そうなのか茉弥？」

「たーた、あー、あー」

茉弥が嬉しそうに手を叩く仕草をすると隆羅が茉弥の顔を見ながら茉弥と何かを話していた。

「どれだけ私達が隆羅に頼っているかよね」

「そうだね、もっと頑張らないとね」

「ルコ、勉強のほうも頼むぞ。ちゃんと卒業してくれよ」

「はい、頑張ります」

「なあ、タコ」

隆羅が自分は関係ない様な顔をしている育郎に振った。

「ああ、そうだな。なんだか肩身が狭いなあ、サギなんで自分に振るかな」

育郎が気まずそうな顔をして隆羅を見た。

「育パパも、もう少しお家に居てね仕事ばかりじゃなくて」

「そ、そうだな。このままじゃ海ちゃんにも悪いしな」

「私は、皆が居てくれるから幸せなただけだなあ」

「さあ、そろそろ順番だ」

「茉弥、ママおいで」

ルコが隆羅から茉弥を受け取りスリングに入れて抱っこして、5人並んで参拝する。

拝殿に向かって右から隆羅、海、ルコ、育郎、沙羅と並んでいる。ルコがお祈りを済ませて隆羅と海の方を見ると手を合わせて参拝している隆羅の左手にも指輪が光っていた。

「これで今年もスタートだな。皆で飯でも食いに行くか」

隆羅がそう言って歩き出すとルコ達も隆羅の後に続いて歩き出した。人の流れに合わせて拝殿から脇に移動し始める。

「パパ、それより。その左手の指輪は？」

「海とペアリングだが、いけないか？」

「ルコは今頃気付いたの？ 駄目ねえ」

「だって、ママ」

「ルコ、あのね。実は」

海がルコの耳元で何かを囁いた。

「プ、プロポー……」

「駄目！ 誰かに聞かれたら大変でしょ」

海が慌ててルコの口を押さえる。

「でも、本当に良かったわ。海ちゃん、海ちゃんじゃなければ今頃隆羅はここに居ないものね」

「でもパパ、何で海なの？ 最初は溺れかけたのを助けただけですよ」

「どうしてなのか私も知りたいなあ。隆羅」

隆羅が笑みを浮かべて何かを少し考えるように海に話しかけた。

「海、大好きな綿菓子食べるか？」

「うん。あれ？ なんで私が綿菓子好きなの隆羅が知っているの？ それにここの神社、なんだか子どもの時に来た事があるような感じがするんだけど」

「食べ物を買って少しここの奥で休まないか、静かな良い所があるんだ」

「良いわよ、そうしましょう。たまには露店も良いかもね」

「そうだな、サギが言うなら」

各々食べたい物を買ひ、海は隆羅に綿菓子を買ってもらって参道から少し外れた神社の裏手に行く。

そこは見晴らしが良く、そして木々に囲まれて北風が吹き込まない場所だった。

そしてそこには楠の大木が1本立っていた。

「へえ、こんな静かな場所があるんだね。ママ」

「そうね、初めて来たわ」

沙羅達が楠の大木を見上げていた。

「ここって……」

海が楠の大木を見て何かを思い出した。

「海、どうしたの？」

「私、子どもの頃ここに来た事があるの」

「ええっ、本当なの？」

「うん、この大きな木憶えている。今日みたいに家族で初詣に来て私が迷子になったの」

海が少しずつ子どもの頃の事を思い出しながらしゃべりだした。

楠の大木の下に若い男が木の根元にもたれて座り込んでいた。
幼い頃の海が男に近づいていく。

何故だか判らないが怖くは無かった、ただ寂しそうな男の目が印象的だった。

「お兄ちゃん、どうしたの？ お腹が減ったの？ これあげる」

女の子が笑顔で綿菓子差し出す。

「ありがとう」

少しだけ笑顔になりその男は礼を言つて綿菓子を食べ始めた。

「なんで、お兄ちゃんはそんな悲しい顔をしているの？」

「なんでかなあ。みんな居なくなっちゃったからかなあ」

「1人ぼっちなの？ じゃ、海と一緒にいてあげるね」

自分の事を海と言う女の子が男の横に座つて男の顔を見上げて微笑んだ。

「ありがとう。海ちゃんって言うのか、1人じゃないよね」

「うん。海ね、迷子になっちゃってね……」

海が涙目になりポロポロと涙を流し始めた。

「じゃ、お兄ちゃんが綿菓子のお礼に一緒にパパとママを探してあげよう」

「本当に、ありがとう。お兄ちゃん」

立ち上がり手を繋いで参道の方へ2人で歩き出した。

迷子センターの近くで男が海に聞いた。

「海ちゃんは、綿菓子好きなの」

「うん、海。わたあめ大好き」

「そうか、じゃこれ」

「ええ、良いの嬉しいなあ。ありがとう」

男が綿菓子を買って海に渡すと海が嬉しそうに小さな手で受け取った。

迷子センターに行くとき海の両親と思われる男女が心配そうな顔で誰かを探していた。

「それでね、私両親に向かって走り出して。振り向いてこう言ったの『お兄ちゃんの名前は？』って。そうしたら……」「海、どうしたの？」

海の目から大粒の涙がこぼれていた。

海の頭の中にはお兄ちゃんが口だけを動かして名前を告げている場面が鮮明に浮かんでいた。

「今、はつきり思い出した。その時、お兄ちゃんの口が『た・か・ら』って動いたの。隆羅なんですよ、あのお兄ちゃんは？　ねえ隆羅」

隆羅の胸に海が顔を埋めると海の肩が震えていた。

隆羅が海を両手で優しく包み込む。

「パパ、本当にパパだったの？」

「ああ、そうだ。仁を失ってしまいタコも表に追いやって1人で裏の仕事始めて、何もかもが嫌になって自暴自棄になっていた。そんな時に、あの女の子の笑顔に救われたんだ。そして自分を取り戻す為に家を飛び出し石垣島にたどり着いた。あの女の子に出逢わなければ俺はいつまでも裏路地から抜け出せなかった。そして路地裏に戻ろうとして、またその女の子に助けられたんだ」

「いつから、海がその女の子だって気付いたの？　パパ」

「川で溺れかけた海を助けた後かな。部屋で会話をしている時に不

安と安心が入り混じっている海の顔を見た時に確信したよ。俺をどん底から救い上げてくれた、あの女の子だって。その時に何があっても守り抜くって決めたんだ」

「そんな事があったのね。あの時、それで私達の目の前から姿を消したのね」

「やれやれだな。大変だったんだぞ、サギがいきなり姿を消すから。まあ、もう済んだ事だし。海ちゃんとはそんな前から繋がっていたんだな。運命なのかもな」

「凄いな、ママ。育パパ」

「そうだな。サギ、そろそろ帰らないと凄く混むぞ帰り道」

「そうしよう。さあ、帰ろう。海」

「うん」

「ほら、涙を拭いて」

「ありがとう、隆羅。大好きだよ」

「こんな所でいちゃついたら罰が当たるわよ。2人とも」

成人式

短い冬休みと正月が過ぎて行き。

海とルコにとっては最後の高校生活が始まった。

海とルコがおしゃべりをしながらいつもの様に学校に向かう。

「また、学校だね。海」

「本当にルコは、勉強嫌いなんだね」

「学校に行ったら大騒ぎなんだろうなあ。終業式の日には3人がいっぺんに休んだんだもんね」

「そうだね。でも隆羅がきつと何とかしてくれるよ」

「パパに任せるしかないか」

「そうそう」

「ルコは卒業したらどうするの？」

「茉弥が大きくなるまで子育てに専念して、それから働くの」

「そうなんだ」

「海はパパのお嫁さんだもんね」

「うん。だけど私も何かしたいな。何がしたいかは今は判らないけれど」

「そうか。これから探せば良いじゃん」

「そうだね」

「早く行かないと予鈴が鳴っちゃうよ」

2人が走り出す、教室に入るとちょうど予鈴が鳴り始める。急いで席に着いた。

「おはよう」

如月が教室に入ってくるとクラス委員長が号令を掛けようとする。

「ああ、委員長。今日はこのままで。まず初めに皆に謝らないとな。終業式の日に急に休んでしまって本当に申し訳なかった。この通り

だ」

如月が号令を掛けようとした委員長を止めて頭を深々と下げた。

「先生、何があっただんですか？ 葉月さんも水無月さんも急に休んだし」

「面目ない。実は終業式の前日に葉月と水無月に手伝ってもらって探し物していたんだが、先生がイスに登って探し物をしていたら足を踏み外して倒れてしまい。その時に頭を強く打って怪我をして病院に担ぎ込まれてしまってな、気が付いたのが翌日の夜だったんだ。葉月と水無月にも迷惑を掛けてしまい申し訳事をした」

「そんな話あるかいなあ、3人で遊びに行つとたんちゃんかいなあ」

「文月、そんなに疑うのなら確かめて見るか？ その時の傷がまだ残っているが」

「よっしゃ。ワイがクラス代表として確かめたる」

空斗が教壇に向かい歩き出して、教壇に居る如月の側頭部の髪をかき上げる。

「うわあ、エグイわあ先生。ほんまなん？ こんな傷でよう生きとつたなあ」

如月の側頭部には何かでえぐられた様な傷が残っていた。

「勝手に先生を勝手に殺すなよ。誤解は解けたかな」

「そりゃ、そんだけの怪我ならしゃないわな」

空斗が納得して席に戻るとクラスの生徒も納得してくれたようだった。

「君達にとって高校生活最後の学期だ。杭の残らないようにな。委員長」

委員長が号令を掛けてホームルームが終わる。

数日後、成人式の日。

晴天で抜けるような青空が広がっていた。

海は隆羅に連れられ隆羅の実家で着付けやメイクをしてもらって

る。

隆羅はソファ―に座り海の準備が出来るのを待っていた。

「お袋、まだなのか？ 遅れるぞ」

「タカちゃん、もう少しだから」

奥の部屋から綺羅の声がした。

「はいはい。お待たせしました」

綺羅に連れられて海が正月の時の着物に着替えて現れた。

「おっ、正月の時より一段と大人ぽいな」

「それはそうよ、今日はメイクもばっちりだもんね」

「お袋、あのケサランパセラン見たいのは無いのか？」

「もう、タカちゃんは。これでしょ、プラチナフォックスのスト―ルよ」

お正月の時より華やかに着付けられ、髪も綺麗にセットされてメイクもばっちりだった。

「綺麗だぞ、海」

「隆羅もなんだかいつもと違う雰囲気でいい感じだよ」

隆羅は濃い茶系のスーツに綺麗なブルーのシャツで渋めのゴールドのネクタイを締めていた。

「そうか、海の晴れの日だからな」

「ねえ、隆羅。凄く高そうだね」

海がストールを手で広げて着物に目をやる。

「良いんだよ、お袋が好きでやっているんだから。お袋は海やルコの笑顔を見るのが何より楽しんだよ。遠慮なんかしたら怒られるぞ」

「さあさあ、時間が無いんですよ。急ぎなさい、タカちゃん今日は別の車で行きなさいね。判った」

「そのつもりだよ」

玄関に出ると既に車が用意されエンジンがかかっていた。

「あつ、この車は知っているよ。ミニだ」

赤いボディーに屋根は白くなっていて白いラインが入ったミニクーパーだった。

「海も知っているんだな」

「うん。可愛いくて大好きなんだ」

「そうなのか、数年前まで通学に使っていたんだよ」

「ええっ、本当なの良いなあ」

「海が免許を取ったら使えば良い」

「でも、もったいないよ」

「乗らない方が可哀そうだろ。さあ、行こう時間が無い」

「うん」

式典会場へ向かう。

成人式の式典は毎年地元の文化センターホールで行われる。

そこはレング調の真新しい大きな落ち着いた建物で隣に綺麗な公園が併設されていた。

駐車場から溢れた車が路上に列を成していた。

「止められる所無いね」

「大丈夫だよ、あそこが空いているだろ」

隆羅が指差したのはギリギリ車が1台入れるくらいのスペースだった。

「でも、あんな狭い所にどうやって入れるの？」

「簡単さ、つかまってるよ」

「うん」

隆羅が車を外側に振りスピードを上げてサイドブレーキを引いてターンさせながらスライドさせて空いているスペースに車をねじ込んだ。

「もう、無茶ばかり」

「怒った海の顔も可愛いぞ」

「バカ」

車のタイヤの音が鳴り響き会場の入り口にいた女の子達が騒ぎ出した。

「ねえ、あの赤い車って。もしかして」

「そうだよ、あの車は絶対に如月先生だよ」

「でも、なんで如月先生が成人式に来るんだろうね」

隆羅が車から降りると直ぐに声を掛けられた。

「如月先生！」

数人の振袖姿の女の子が声を上げて手を振っていた、隆羅が手を挙げて返事をする。

そして助手席に向かい海を車から降ろした。

「隆羅、あの女の子達は？」

「学校の教え子だよ。海の事も覚えているかも知れないぞ」

「うん。なんだか複雑だなあ」

海が不安そうな顔をする。

階段を上がり会場の入り口に向かうとあっという間に隆羅と海の周りに人だかりが出来た。

「先生、お久しぶりです」

「みんな、元気そうで何よりだな」

「先生、隣に居る子は？ あれ？ 確か水無月さんだよ」

1人の女の子が海の事を憶えていた。

「は、はい。でも私あまり憶えて無くてゴメンなさい」

「そんなに気にする事ないよ。だって水無月さんは体が弱くって小学校の時休みがちだったしね、しょうがないよ」

「ありがとう」

「水無月さんはまだ高校生くらいだよ」

「はい。高校3年です」

「今は、俺が担任なんだ」

「でも、先生が何で？ 水無月さんと一緒なんですか？」

「ちょっと事情があつて、先生が水無月の保護者代わりなんだよ」

「ええっ、如月先生が保護者代わりなんて羨ましいなあ」

楽しくお喋りをしていたが式典が始まる時間が近づいていた。

「さあ、皆！ 成人なんだから大人の対応をしてくれよ」

「はい」

隆羅の周りに居た女の子達はそれぞれ友達と会場に入って行った。そして、会場の入り口から少し離れた所でこちらを見ている視線に隆羅が気付く。

「海、こっちに」

隆羅に手を引かれて歩き出すと直ぐに海も気が付いた。

「隆羅、嫌だよ」

「駄目だ、言う事を聞くんだ」

2人が歩いている先には海の母親が黒いワンピースを着て立っていた。

「お母さん」

海が一言だけ喋るが母親は何も答えなかった。

「並んで写真を撮るぞ。いいな海」

「う、うん」

海が仕方なく母親の横に立つ。

2人ともぎこちなく硬い表情をしていた。笑ってと言う方が無茶な願いのだろう。

その時、隆羅の後ろに何処から現れて誰が着ているのか知らないがクマの着ぐるみが派手に転んだ。

すると、2人の表情が緩んで笑った。

その瞬間を見逃さず隆羅はシャッターを切った。

しかし、シャッターの音に気付いて2人の表情が強張った。

「お母さん、来てくれてありがとう。隆羅行こう」

海が前を向いたまま言うのと直ぐに歩き出した。

隆羅が海の母親を見ると無言で頭を下げていた。

隆羅が頭を下げて海の後を追う、クマの着ぐるみが手足をバタつかせて起き上がれないでいるのを隆羅が起こした。

「大丈夫か？ お袋、ありがとうな」

クマが頭を押さえて首を振り逃げるように走り去った。

「海、待てよ。あれで本当に良いのか？」

「隆羅、ゴメンなさい。今は無理だから」

「海が謝る事はないさ。時間と言う薬しか効かない事なんて人生にはいくらでもあるからな」

「ありがとう」

海が目には涙を浮かべていた。隆羅がハンカチを取り出し涙を拭う。

「晴れ姿が台無しだぞ」

「うん」

2人で会場に入る。

海は新成人の席には行かず隆羅の側に居た。

「ここで良いのか？」

「ここが良いの、隆羅の横が。だって知らない人ばかりで不安なんだもん」

海がそつと手を繋いできた。

式典は騒ぎだす者も居らず滞りなく終わった。

記念品を受け取り会場の外に出ると隆羅の教え子達が待ち受けていた。

「先生、一緒に記念撮影させてもらっていいですか」

「そうだな。お祝いだしな」

「やった！ 水無月さんも一緒に」

次から次へと隆羅はここでも引つ張り凧だった。

海はそんな人気者の隆羅を嬉しそうに見つめていた。

「水無月さんて、凄く綺麗になったよね」

海を憶えていた子が話しかけてきた。

「そんな事無いですよ。私なんか全然」

「そうかな、凄くいいと思うよ」

「如月先生って凄く人気あるんですね」

「今も変わらないんですよ。優しくって皆の事を見ていて、ちゃんと叱ってくれる先生」

「そうですね。昔からあのままなんだ」

そんな話を話していると見覚えのある女の人出现在了。

あの清里の旅行で取材を受けた卯月とカメラマンだった。

「やっぱり海さんだ」

「ええつ、Kannonの人がなんで？」

「今、成人式会場を回ってミス新成人を探せって企画で取材をしていたのよ。お願い出してくれないかなあ」

「また、ですか？」

海が教え子と楽しそうにお喋りをしている隆羅の方を見た。

「海さん、あの人は？」

記者の卯月が顔を近づけて小声で聞いてきた。

「彼の叔父さんです」

「ええ、あの怖い彼の」

「叔父さんはもつと怖いですよ。余計な事を言う」と

「ひえゝなんでそんな人ばかりなの海さんの周りって」

卯月の顔から血の気が引いていた。

隆羅が海の側にやって来ると海を憶えていた隆羅の教え子が聞いてきた。

「水無月さん、この人は？」

「あつ私、雑誌Kannonの記者をしていまして」

「えつ、あの有名な雑誌の凄い」

「あのう、もう1度取材をお願いしたいんですけど」

卯月が隆羅の顔を伺う。

「海、良いじゃないか記念に」

「うん。叔父さんの許可が出たのでOKですよ」

「海、詳しい説明を聞いて置けよ。トラブルの元だからな」

「せ、説明をさせて頂きます。取材は海さんのみで。特大号の企画にエントリーしてもらいファン投票でミス新成人を公平に決定させて頂きます。ミスに選ばれると当社の方から賞金と副賞が、準ミスにも副賞が贈られます。詳しい事は今月号のKannonに出ていますので」

卯月が隆羅の顔色を伺いながら海に取材の趣旨を説明する。
今月号のK a n o nを渡され海が記事を読むと取材がはじまった。

式典会場の入り口や隣の公園で撮影が行われている。

何事かと野次馬が集まって遠巻きに見ている。

「何の取材なんだ？」

「なんだか雑誌K a n o nのミスコンの取材らしいよ」

「あの美人は誰？」

「ほら、私達の学校に居たじゃない体が弱くって休んでばかり居た子が」

「ええっと、確か水無月さんって言ったけ」

「そうそう」

「凄い綺麗になったよね」

「凄いなあ、今からアタックしようぜ」

「無理、無理。だって左手の薬指に指輪していたもん。あんなに綺麗なんだよ、彼氏が居ないわけ無いじゃん。それにあんなじゃ確実に撃沈よ」

「ひでえなあ。もう」

隆羅は会場の脇にある公園に続く広い階段に座りながら海の取材を眺めていた。

海は隆羅に時々目をやりいつもの笑顔で取材や撮影に応じている。

そして隆羅に近づく影があった。

隆羅が振り返りもせず話しかけた。

「お袋か？」

「タカちゃん、怒ってないの？」

綺羅が隆羅の横に腰を下ろした。

「何でだ？ 怒ったほうが良いのか」

「そうじゃないけど、タカちゃんには敵わないわね。なんであのクマが私だって判ったの？」

「お袋が必ず覗きに来るだろうと言う予想と、要所にいる警護の気

配と言うか俺からすれば丸見えだけどな」

隆羅が静かに笑っている。

「まだまだね」

「今日はありがとうな。良い写真が撮れたよ」

「でも、親子なのに悲しいわね」

「親子だから余計にだろう、しょうがないさ。海が親になったら必ず判る時が来るさ、親になってみて親の言葉が身に染みるもんだからな」

「あら、タカちゃんも身に染みたのかしら」

綺羅が隆羅の顔を覗き込んだ。

「ああつ、ルコを10年育ててきて実感したよ。親の大変さをね」

「そう。それじゃ、ママはこれで撤収しましょ。海ちゃんに宜しくね」

「また、転ぶなよ」

「ええつ、わざとじゃ無いって気付いていたの？」

「当然だろ、誰の息子だと思っているんだ」

「はあ、じゃあね」

綺羅がうな垂れて帰って行く。

「本当に感謝しているからな」

隆羅が声を掛けた。

海が取材を終えて隆羅の所に戻ってきた。

Kanonの記者とカメラマンは隆羅に会釈をして足早に大型スクーターで別の会場に向かった。

「お疲れ様」

「ふう。緊張するね。また学校で大騒ぎになるのかなあ？」

「それは、大丈夫だと思うぞ。2回目だからな」

「隆羅、お腹が空いたよ」

「そう言えば、起きてから何も食べてないなあ。何が食べたい？」
「美味しい物」

「分った、行こうか」

「うん」

隆羅と車に向かう。

しばらくしてKanonの特大号が出版社から送られてきて大騒ぎになったのは海だった。

「海、どうしたんだ？」

「た、隆羅？」

「大丈夫なのか、海？」

隆羅が雑誌を広げて見ると有名雑誌Kanonだけあってかなりのハイレベルなお嬢様が掲載されていた。

その中でも海の笑顔が際立っていた。

「隆羅。私、お嬢様なんかじゃないのにどうしよう」

「他の子は着物をただ着ているけど、海は着物を着こなしている感じがして良いじゃないか」

「でも、みんな凄い着物を着て凄く可愛い子ばかりで恥ずかしいよ」

「そうか、海もかなり綺麗だと思うけど」

「それは、隆羅だからでしょ」

「それに海の着物やストールだって良い物だぞ」

「そうなの？」

「ストールだけでも数十万、着物はトータルで100は下らない筈だけど」

「へえ？ 嘘」

ポカンとした顔をして海が床にへたり込んだ。

「おいおい、大丈夫か？ ミスコンは着物を審査するんじゃないか？ 人を審査するんだろ。海はいつもの笑顔で良いじゃないか」

「そうだけどさあ」

「大丈夫、なんて言ってたって海はMECの社長の恋人だからな」

「バカ、バカ、バカ。隆羅の大バカ！ 人の気持ちも知らないで」

そんな冗談みたいな事を隆羅が笑うと海がポロポロと涙を流し泣き出した。

「少し調子に乗りすぎたかな。ゴメンな、海は普通の女の子だもん
な」

海を抱き上げて膝の上に座らせる。

「海、もう少し自分に自信を持つても良いんじゃないか、俺が唯一
認めた女の子なんだから」

「それは嬉しいけれど、私は私だもん」

「どんなに高価でゴージャスな格好をしていてもＴシャツにＧパン
だけでも、俺の大好きな海には変わりはないだろう。それに海は俺
が大きな企業の社長の息子でも普通の高校の先生でも関係ないだろ
う、違うか？」

「うん。私は隆羅が好きなの」

「海は海で居ればいいんだ。俺はありのままの海が好きなんだから」

「ありがと……」

優しくキスをされる。

海が隆羅の首に腕を回した。

修学旅行 - 1

高校生活最後で最大のイベントがやってきたの。

そのイベントは3泊4日のスキー場での修学旅行なんだ。

3年生のこんな時期にと思うかもしれないけれど、私達の高校は付属高校だから友達は殆ど推薦や内部進学で大学に上がるからなの。大学に行っても友達とは一緒に高校の時とあまり変らないんだけどね。

私もスキーとっても楽しみにしてるんだ。

クラス別でバスに乗りスキー場へ向かう。

如月はバスに乗ると直ぐに眠ってしまった。

ルコと海は隣同士で座っていた。

「海。パパ、疲れているの？」

「うん、最近帰りも遅いし帰ってきてから出かける事が多いから」

「それって裏のなの」

「そうみたい、危険な事はしないからって言うけど心配で」

「そうだよな」

バスの中では生徒達が話をして盛り上がっていた。

途中休憩の為、高速のサービスエリアにバスが止まった。

生徒達はトイレに行ったり飲み物を買って飲んだりしている。

如月もバスから降りて自販機でコーヒーを買い飲んでいて。

「ふわあゝ」

如月があくびをしながら大きく伸びをした。

「大きなあくびだね。如月先生」

「なんだ、葉月か」

「なんだは無いんじゃないの」

「いつも一緒の水無月はどうしたんだ」

「トイレだよ。そんなに疲れた顔をして。また無茶な事してないよ

ね」

「年度末が近いから書類や伝票の整理が大変なんだよ」

「えっ？ 危ない事しているんじゃないんだ」

「あのなあ、危険な仕事なんかそうそうあつてたまるか」

「それなら良いんだ。海が心配してたからね」

「バスで寝てるからな、遅れるなよ」

如月が調子悪そうにバスに向かい歩き出す。

そこに海が走ってやって来た。

「ルコ、お待たせ」

「今まで、如月が居たのに」

「えっ、何か言ってた？」

「危ない事はしてないみたいよ。書類や伝票の整理だって」

「本当に、良かった」

「でも、無理し過ぎな感じがする。大丈夫かなあ」

「今度は、ルコが心配してるの？」

「バスに戻ろうか」

「うん」

バスに戻り海が寝ている如月の横に小さな紙袋を置いた。

クラス委員長が点呼を取ってバスはスキー場に向かい走り出し昼過ぎにスキー場に到着した。

そのスキー場は、宿泊先のホテルの目の前にあり。

その大きなホテルの駐車場にバスが止まりバスを降りてホテルへ向かう。

隆羅も目を覚まし生徒に指示をする。

「忘れ物無い様にな。ロビーに入ったら班長、点呼をちゃんとして報告するように」

如月が最後にバスの中を点検する。

「なんだ、これは？ 海のやつだな」

紙袋に気付き中を見る栄養ドリンクが2本入っていた。

如月がポケットに小さな紙袋を入れてバスを降りてロビーに向かう。
「先生、点呼終わりました」

クラス委員長が報告をする。

「それじゃ、部屋に行き着替えをしてレストランに集合する事。時間厳守だからな」

「はい」

そろそろと班毎に部屋に向かう。

初日の今日は、昼食後ホテル前の広場で開講式が行われスキー教室が行なわれる予定になっていた。

各々のレベルにあったグループに分かれてインストラクターが指導をしてくれるのだ。

「でも、うちの高校って凄い時期に修学旅行があるよね」

「そうだね、だけど付属だけあって殆どの人がこのまま大学に行くんでしょ。凄いよね」

「まあ、そうなんだけどね。私なんかその為に青葉台選んだんだもん」

「進路も決まったんだし。高校最後のイベントを楽しもう」

「おー！」

他の受験生が聞いたなら激怒しそうな事を言いながらみんな盛り上がっている。

海とルコは初心者クラスに居た。

「ルコ、滑れるようになるかなあ」

「どうなんだろうね、私も自信ないよ」

2人がお喋りしているとそこへ文月が滑りながらやって来た。

「なんや、初心者かいなあ。迷惑かけんへんようになあ」

「うるさいな。運動神経だけは良いもんね、他は無神経だけど。ねえ海」

「なんやと、葉月！」

そこへ、綺麗なシュプールを描き黒いウェアが滑り込んで空斗に雪を撒き散らした。

「誰やねん。冷たいやんけえ！ 何すんねんなあ！」

「文月、中級クラスはもうリフトに進んでいるぞ」

「うわあ、ちよい、待ってーな」

黒いウェアは如月だった。空斗が慌ててリフトに向かった。

「しょうがない奴だなあ、まったく」

「如月先生はスキーも上手いんだね」

「毎年来ているからな。水無月も直ぐに滑れるようになるさ」

「先生、私は？」

「怪我だけはしないでくれな。葉月」

「もう。べーだあ」

ルコがあっかんべえをする。

「如月先生ですか、今年も宜しくお願いします」

初心者クラスのインストラクターが如月に向って挨拶をした。

「じゃ、もう少しコースの見回りをしてくるので」

如月が会釈をしてリフトに向かい滑って行く。

「インストラクターのお兄さん、先生を知っているの？」

ルコがインストラクターに聞いた。

「ええっ、もちろんですよ。青葉台の如月先生と言えばスキーもプロ級だしボードも凄く上手いですからね。インストラクターの憧れみたいなもんですから、明日は先生のボード姿が見られると思いますよ」

「へえ、そうなんだ」

「明日が楽しみだね。ルコ」

「楽しみなのは海の方でしょ」

「えへへ」

「それでは、これからスキー教室を始めます。今日は時間が短いのでスキーの扱い方と坂の上り方やボーゲンの滑り方まで行きたいと思います」

インストラクターの指示に従いながらスキーを練習していく。
ゲレンデではグリーンのウェアにオレンジのゼッケンを着けた生

徒達が黄色いウェアのインストラクターに連れられ講習をグルーブごとに受けている。

その頃如月はホテルの内で先生方とインストラクターの責任者でのミーティングに出席していた。

「明日の天気はどうなんですか？」

「明日は午後から崩れそうですね。吹雪くかもしれません」

「様子を見ながら行きましょう、あまり遠くには行かないようをお願いしますね」

「そうですね、でも中級クラスは明日は山頂の方まで行く予定なんですけれど」

「大丈夫ですかね？」

「まあ、崩れると言っても遅い時間からですから大丈夫でしょう」

「それでは、そう言う事で明日もお願いたします」

「如月先生は明日も見回りお願いしますね」

「はい。了承しました」

1日目の講習が終了し、ホテルで夕食をとり就寝時間までの自由時間に生徒達は部屋でくつろいだりホテル内を散策したりしている。如月はロビーで天気予報をチェックしフロントに詳しい状況を確認していた。

「明日は、少し早めに切り上げた方が良さそうだな　ゴホゴホ。まいったな、こんな時に風邪かな」

そこへ、ルコと海がやって来た。

「如月先生、見つけた」

「何だ、葉月。怪我でもしたか」

「怪我なんかしないです」

すると如月が咳き込んだ。

「先生こそ大丈夫なんですか？」

「ゴホ　ゴホ　大丈夫だ」

「本当に？」

海が切なそうな目で如月を見る。

「そんな目で見るな。いいか」

「うん。ゴメンなさい」

「さあ、そろそろ就寝時間だ。部屋に帰りなさい」

「はい」

如月が海の頭に手を置いて周りには聞えないように海に言った。

「ドリンクありがとうな」

「うん」

海とルコが部屋に戻って行った。2人を見送り如月が部屋に向かい歩き出した。

修学旅行 - 2

翌日は、朝から雪がちらついて曇っていた。

それでも生徒は元気にゲレンデに飛び出して行った。

「みんな元気だなあ。私なんか体中が筋肉痛だよ」

「ルコは運動不足なんだよ」

「海は平気なの？」

「うん。何でもないよ」

「さあ、今日はリフトに乗って少し上で練習しましょう。それじゃリフト乗り場に向かいます」

インストラクターに先導されゆくりとついて行きリフトに乗る。

2人ずつ順番に乗り込んでいく海とルコの順番になった。

「きゃっ。ビックリした」

リフトが足に当たりルコがイスにそのまま座った。

「ルコ。私の方が驚いたよ」

「でも気持ちが良いね」

「そうだね」

第1ゲレンデの上まで行くと数組の初心者グループが練習している。みんな腰が引けて転ぶ者が多かった。

「それでは順番に滑っていきましょう。昨日の復習ですよ、曲がりたい方向と逆の足に重心を掛けるんですよ。先に少し滑りますから合図したら順番に滑って来てくださいね」

インストラクターが少し斜面を下り合図する、1人ずつ順番にボーゲンで滑っていく。

海が滑りルコの順番になる、へっぴり腰で滑り始める。

「きゃっ」

ルコが尻餅をつき皆とは逆の方へ滑って行ってしまふ。

「止まって！」

インストラクターが少し慌てている。

そこに黒い影がボードで滑って来てルコを掴んで止めた。

「横に転べと教わらなかったのか？」

ルコを止めたのは如月だった。

「しょうがないじゃない。出来ないんだもん」

「怖がるからだよ。雪の上だから痛くは無い筈だ、後ろに転ぶと今の様に何処までも滑って言うてしまうぞ」

「分かった。気をつけます」

「さあ、立って方向転換してみろ」

ルコが立ち上がり昨日教わったように、足を上げて方向転換をし始める。

「こうして。こうだ。出来た」

「出来るじゃないか。そのままインストラクターの所まで滑っていきんだいいな」

「うん」

「皆さんも気を付けてくださいね。後ろに尻餅をつくと危ないですから必ず横に倒れてくださいね」

「はい」

「えへへ。やつちゃった」

ルコが頭を掻いた。

それを見届けて如月は他のグループの所まで滑っていった。

「それでは、少し長い距離を滑って見ましょう」

インストラクターが後ろ向きに滑り出し、それに続いて順番に滑って着いていく。

次第に上達し始め、何回か滑るうちにみんな自由に滑れるようになってきた。

昼食を食べ休憩をしてリフトで上に登る、そして今度は自由に滑り降りていく。

しばらくすると雪が強くなってきた。

「はい、ここに集合してください」

リフトから降りてしばらくした所でインストラクターの声が響いた。みんな並んで集まっている。

そこに黒いウェアの如月が滑って来てインストラクターに下に降りるように手で指示を出す。

そして違うグループの所に向かいスピードを上げて滑って行った。

「凄いね。海」

「うん。何でも出来ちゃうんだね」

海とルコが如月を目で追った。

「雪が強くなってきたので、今日はホテルに戻りましょう」

「はい」

インストラクターの指示に従いながらゲレンデを滑って降りて行く。ルコ達がホテルに戻ると先生方が慌しく連絡を取り合っていた。

「堤先生、何があったんですか？」

ルコが心配になり副担の堤先生に聞いた。

「上で生徒が怪我をしたらしいの、残っているグループはそこだけなんだけどイントラが1人しか居ないから対応に困ってるのよ」

「他の人はどうしたんですか？」

「それが、パトロールの人が他の事故で今、出払っていて居ないらしいの」

そこへ、如月が雪まみれになって駆けつけて来てインストラクターの責任者に事情を聞いている。

「状況はどうなっているんですか？」

「今、パトロールが出払っていて」

「それじゃ、私が行きます」

「大丈夫ですか先生。顔色あまり良くないですよ」

「これから雪が強くなる。時間が無いのでしょ」

「仕方が無い、それじゃお願いします」

「車の準備をお願いします」

「分かりました」

如月がスキー板を持ってゲレンデに飛び出した。

責任者は他の先生に事情を話し車の準備をさせる。

海とルコは見ているしか出来なかった。

「堤先生、大丈夫かなあ」

「ここで待ちましょう」

如月が頂上より少し下った休憩場に着くと頭に包帯を巻いた生徒と他の生徒が待っていた。

「どんな具合なんですか？」

「接触事故で頭を切ったみたいなんです。その時に片方のスキーをロストしてしまって、申し訳ございませんでした」

インストラクターが申し訳なさそうに頭を下げる。

「それより早く下山しましょう。吹雪いてきていますから」

「それじゃ、アキヤで搬送を」

「いや、時間が無い。君は他の生徒を連れて降りてください。私がこの生徒は連れて降りますから」

「先生、大丈夫なんかあ」

文月が後ろから声を掛けた。

「お前達のグループだったのか。ちょうど良いお前もインストラクターと一緒に皆を連れて降りるんだ早く行け。頼んだぞ」

「しゃないなあ、イントラの兄ちゃん行こか。この先生に任せれば大丈夫や」

「そうですね。急ぎましょう」

「ほな、先生。先行くで」

インストラクターと文月が生徒を先導して山を降り始める。

「傷は痛まないな」

「はい」

怪我した生徒を背負い如月が滑って降り始める。

いくら如月とはいえ男子生徒を背負いながら強い雪の中を滑り降りるのは至難の業だった。

ホテルではパトロール隊の4輪駆動の車が直ぐに出られるように待

ち構えていた。

しばらくすると残っていたグループが次々とが下山してホテルに入ってきた。

みんな寒さでガタガタと震えていた。

「めっちゃ、寒いやんけ」

文月が叫んだ。文月の声にルコと海が気付く。

「文月、如月先生は？」

「今、降りてくるはずや。しかしこの雪の中えらいでえ」

「大丈夫かなあ。ルコ」

「心配だね」

「あかん、風呂行ってくるわあ」

文月が震えながら部屋に向かい走り出した。

それから10分ほどして、如月が生徒を背負い戻ってきた。

「早くこの子を病院に」

「はい、分かりました」

他の先生とパトロール隊に怪我をしている生徒を引き渡す。

生徒の頭に巻いた包帯から血が滲んでいた。

安心したのか如月はロビーのソファに座り込んだ、生徒は直ぐに車に乗せられて病院に向かった。

「ふう、これで一安心ですね。如月先生、先生？ 大丈夫ですか。先生？」

インストラクターの責任者が声を掛けるが返事が無かった。

如月が肩で息をしていた。

「急いで先生を部屋に運んで！」

「おい、誰か。ストーブを準備しろ」

インストラクターの責任者が声を上げる。

直ぐに如月は担がれて部屋に運ばれた。

「ルコ、ルコ。どうしよう、隆羅が」

「海、落ち着いて。今は絶対に取り乱しちゃ駄目よ。私が何とかするから」

「う、うん」

海がどうすることも出来ずに震えていた。

ルコが海を連れて一旦部屋に戻る。

「ねえ、何があったの？　なんだか騒がしいけれど」
同じ部屋のクラスメイトが聞いてきた。

「如月先生が倒れたの」

「ええっ、倒れたって。ルコ、本当なの？」

「うん。今、どんな状態か聞いて来るから」

「そうだね、ルコのお父さんだもんね」

「海。落ち着いた？　行くよ」

「う、うん」

2人で如月の部屋に向かう、部屋の前では数人の先生が対応を話し合っていた。

「こら、部屋に戻らないか。部屋で待機しろと言われているはずだぞ」

引率の教頭がルコと海に注意する。

「如月先生の容態はどうなんですか？」

「こら、聞えないのか」

「うるさい！」

ルコが教頭に向かって静かに言い放った。

「先生に向かって何を？」

「父親が倒れたのに部屋に居ると言うのですか？」

ルコが教頭の顔を真っ直ぐに見て毅然とした態度で言った。

「そうだったわね。如月先生は葉月さんの育ての親だったわね。私から説明しますいいですね。教頭」

副担の堤先生が間に入ってくれた。

「いいでしょう。お願いしますよ、私は部屋に戻りますから何かあったら連絡くださいね」

立場を無くした教頭は面白くなさそうに歩き出して部屋に向かった。

「葉月さん、しっかり聞いて。良い材料は何1つ無いの、雪が酷く
って病院に向かった車は病院で足止めされている。救急車も出る事
が出来ない、お医者さんは先にあった事故で今ここには居ないの。
ただの風邪なら良いんだけどそうとも思えないのよ、あの状態は」
「パパに会って良いですか」
「ええ、この部屋の鍵よ。でも水無月さんは」
「パパは海の命の恩人です、それに私の親友です。だから手伝って
もらいます」

「分かったわ。私が責任を持ちます」
「先生に迷惑が掛かる様な事はしませんから」

2人で部屋に入りベッドに寝ている隆羅の様子を見る。

「パパ、大丈夫？」

「はあ、はあ、はあ ルコか？ 頼みがある。誰もこの部屋に入れ
るないいな」

隆羅はとても苦しそうだった。

「判ったけれど何で？」

「隆羅、大丈夫？ 今、体の汗を拭いてあげるからね」

海がバスルームに行きタオルを濡らして持ってきて隆羅の体を支え
ながら起こした。

シャツを少し脱がし体を拭き始める。

体には無数の傷跡が浮かび上がっていた。

「か、海。その傷跡って？」

「沙羅さんが言っていたでしょ」

「そんなにいっぱい……」

隆羅の体中にある傷跡を見てルコが愕然としていた。

「ルコ、堤先生に誰も入れないようにお願いしてきて」

「わ、判った」

ルコが部屋の外の堤先生に伝え他の先生にも了承を取ってもらった。
そしてフロントに行き紙に面会謝絶と書いてもらい部屋のドアに貼

り付ける。

時間はもう夕食の時間になっていた。

「海、夕食もらって来るね」

「うん。お願い」

ルコが堤先生に手伝ってもらい2人分の夕食を運んできた。

「海、一緒に食べよう」

「そうだね、私達が頑張らないとね」

「そうだよ、今まで助けてもらってばかりだもんね」

2人で隣のベッドに座って食事をする。

外の雪は激しさを増していた。

「そうだ、はい携帯」

ルコが海の携帯を差し出した。

「ありがとう」

「でも、電波の状態が悪くってあまり使えないけれどね」

「えっ、そうなんだ。もう消灯時間も過ぎちゃったんだね。私が看
てるからルコは少し休んできた方がよいよ」

「そうだね、後で交代しに来るからね」

「うん。大丈夫だよ」

「そんな訳には行かないでしょ」

「そうだね、お願いね」

「鍵、海が持っていて。誰も入って来ない様に」

「うん、分かった」

ルコが部屋に戻ってしばらくすると隆羅の容態は酷くなってきた。

「うつ。くううう……はあ、はあ、はあ」

「隆羅、隆羅」

時々とても苦しそうにする。

隆羅の名前を呼んでも虚ろな目で見るだけで返事もしなくなっ
てきた。

「どうしよう、神様助けて」

海が隆羅の手を握り締める。

すると海の携帯が突然鳴った。

「あれ？ どうして」

「もしもし、タカちゃん？」

海が携帯にでると相手の声は綺羅の声だった。

「おば様？」

「あら、その声は海ちゃんね。あらやだ間違えちゃったかな」

「おば様、助けて！」

海が泣き叫んだ。

それは尋常じゃない海の声だった。

綺羅が海の声に驚いて冷静に海に話しかける。

「海ちゃん、いったい何があったの？ 落ち着いて慌てないで話さない。いい事」

「はい……」

海が深呼吸をして自分自身を落ち着かせる。

「隆羅が倒れて死んじやいそうなの。旅行に来る時から調子悪そうで。今日、生徒が怪我をして吹雪の中を助けて来たのは良いんだけど、そしたら倒れて」

「今、隆羅の状態は？ 熱はあるの？」

「そばに何も無くて。凄く体が熱くって何もしゃべらないの目が虚ろで」

「お医者さんは居ないの？」

「隆羅が誰も部屋に入れるなつて。お医者さんも別の事故で居ないし、救急車も雪で来れないって。おば様、隆羅が、隆羅が……」

「良くない状態で最悪の状況なのね」

「おば様、たすけ……」

声にならずに海が泣き崩れた。

「海ちゃん。良く聞きなさい、絶対に私達が助けるから誰も部屋に入れちゃ駄目よ。判ったわね」
「うん」

そこで電話が切れた。

今は綺羅の言葉を信じるしかなかった。

綺羅は直ぐにエマージェンシーコールをかける。
直ぐに屋敷中の総ての機能が起動した。

「おい、綺羅何事だ」

「あなた、隆羅が危険な状態なの直ぐに助けに出るわ」

「しかし、あそこは今、猛吹雪の筈だぞ」

「それがどうしたの？」

「お前も、覚悟は出来ているだろう」

「そんな物はとつくに出来ているわよ！ でも今はもう状況が違うの。隆羅に何かあったら海ちゃんはどうするの？ 海ちゃんの一生が掛かっているのよ。あなたにその覚悟はあるの？ 私は絶対に海ちゃんの泣く顔なんて見たくないわ」

「そうだな、わしも出よう」

「開発中の緊急医療用の大型ヘリを出すわよ」

「あれは、テスト飛行もしてないんだぞ」

「ちようどいいじゃない。女は度胸よ、行くわよ」

「10分で準備しなさい緊急スクランブルよ」

綺羅の指示が飛ぶ。

「おい、出るぞ」

隆羅の父親の結も直ぐに大型車両に乗り込んだ。

大型ヘリが屋敷から飛び立つ。

その頃、沙羅は仕事を終えて会社を出た所だった。

「やっとひと段落ついたわ、年度末はこれだから嫌なのよね」

伸びをして空を見上げる。

その時頭上を見たことも無い大型ヘリが飛び去り、直ぐ横を大型車両数台が猛スピードで走り去った。

「何なのいったい。おじ様とおば様じゃないの？ 隆羅に何かあつ

たのかしら？ そうだルコに」

携帯でルコに電話をかける。

「もしもし、ルコ。何かあったの？」

「ママ、どうしたの？」

「今、隆羅のおじ様とおば様が尋常じゃない装備で何処かに向かつて行ったわ」

「え、良く聞えないよ。あのね、パパが体調を崩して倒れたの」

「倒れたって。隆羅の状態は……」

そこで電波が途切れて電話が切れた。

「もう、いったい何がおきてるの？」

「あれ、切れちゃった」

「ねえ、ルコ。先生の状態はどんななの？」

ルコが部屋に戻るとクラスメイトが心配そうに聞いてくきた。

ルコ達の部屋にクラスの女の子が集まっていた。

「今は、海が様子を見ているの」

「ええ、水無月さんが？ どうして？」

「それって、もしかして」

「うん、実は……」

海は祈り続けた。

今はそれしか出来なかった。

しばらくするとホテルの電気が落ち停電になる。

ヒーターも止まり非常灯だけになり室温が徐々に下がり始めた。

「駄目、何でこんな時に」

部屋にあるストーブをベッドに近づけるが広い部屋を暖めるだけの火力ではなかった。

隆羅の体が小刻みに震え出した。

隆羅に隣のベッドの毛布などを被せる。

「どうしたらいいの、そうだ」

海が隆羅のベッドに潜り込み洋服を脱いで隆羅に寄り添った。

綺羅は着陸に手こずっていた。

何とかホテルの上空まで来たものの雪で視界が遮られ、ホテルが停電している為に赤外線カメラも当てにならなかった。

「これじゃ、何も解らないわ。一瞬でいいのよ。照明弾を下に撃ち込みなさい」

「しかし、この状況じゃ危険です」

「バカね。この吹雪の中、外にいるバカなんて居ないわ。やりなさい」

照明弾がホテルに向け打ち込まれる。ちょうどホテル前の広場を照らした。

するとその光に驚いた生徒達が一斉にカーテンを開ける、赤外線カメラが直ぐ反応した。

「今よ！」

ヘリが降下する。

生徒達はその後静かになり何も起きなかったので訳がわからずカーテンを閉めた。

大型ヘリがホテルの目の前にあるゲレンデに着陸した吹雪の音でローターの音がかき消され誰も気付かなかった。

「ローターは回しておきなさい凍りつくわよ」

綺羅が的確に指示を出しホテルに突入する。

教頭がフロントでマスターキーを受け取り懐中電灯の明かりを頼りに隆羅の部屋に向かっていた。

「まったく、非常識過ぎます。教師を差し置いて生徒がしゃしゃり出てくるなんて、だからこんな事になるんです」

海が隆羅のベッドに潜り込み寄り添ってスキ一の疲れもあり眠ってしまっていた。

ルコは停電で動けずに部屋でどうするべきか考えている。

綺羅達がホテルに入りフロントで身分を明かし隆羅の部屋を確認し走り出した。

教頭が隆羅の部屋の鍵を開け中にはいる。

「誰も居ないじゃないですか。どうなっているんですか」

ベッドに近づき毛布に手を掛けようとした瞬間、綺羅達が部屋になだれ込んで来た。

「何事ですかいったい」

「如月隆羅の身柄は私達が確保します。出て行きなさい」

綺羅が教頭に向かって言い切った。

「いい加減にしろ。どいつもこいつも」

教頭が声を荒げる。

綺羅が教頭の耳元で一言何かを言うと、うな垂れながら教頭が部屋を出て行った。

「変ね、海ちゃんは何処かしら？」

毛布を捲ると隆羅に寄り添う様に下着姿の海が眠っていた。

「危機一髪ね。時間が無いわ急ぎなさい」

直ぐに隆羅の処置が行なわれる。

部屋の電源も切り替えられ部屋が暖まり始め、隆羅には点滴による投薬が始まった。

大型車両も到着し大型ヘリに燃料補給を始め、停電の原因を突き止め復旧作業にあたった

修学旅行 - 3

夜が明ける。

昨夜の吹雪が嘘の様に、お日様が顔をだし抜けるような青空が広がっていた。

「あれ？ 私いつの間に寝ちゃったんだろう。あっ隆羅」

海が目覚めると隆羅に抱きしめられて腕の中で眠っていた。目の前に隆羅の顔があり優しい眼差しで海を見つめていた。

「おはよう。海」

「隆羅、隆羅！ 良かった」

優しくキスをされ隆羅に抱きつきキスをする。

「海のお陰だよ」

「隆羅、駄目。駄目だってば……もう」

しばらくして海がシャワーを浴びて髪を乾かしていて、隆羅がバスルームから出てくるとルコの声がした。

「海、開けて」

ドアが開くとそこには隆羅が立っていた。

「ルコ、おはよう」

「パパ、もう大丈夫なの？ でも、その格好」

隆羅は腰にタオルを巻いているだけだった。

「ちゃんと穿いてるぞ」

「もう、バカ。海、早く部屋に戻ろう」

「うん」

海が髪をタオルで拭きながら出てくる。

「2人ともありがとうな」

「パパ、後からね」

「ああ」

海とルコが部屋に向かい歩き出す。

深夜の騒ぎには誰も気付いていない様だった。

「海、何があったの？」

「私も良く判らないの寝てしまったから。でもこれがルコに1枚のメモ書きを渡す。」

「えっ、おば様が助けに来てくれたの？」

「うん、そうだと思う」

昨夜の出来事をルコに一部始終話した。

メモ書きには『隆羅を守ってくれてありがとう 綺羅』とだけ書いてあった。

部屋に戻るとまだ、皆は眠っていた。

朝食時間の館内放送が流れて皆が起きだす。

「あつ海だ。おはよー」

「おはよう」

「2人とも戻って来てたんだね、先生は？」

「もう大丈夫だよ、たいした事無かったみたい」

「へえ、そうなんだ。愛の力だね、ルコと海の」

「お腹ペコペコだよ。ルコ、ご飯食べに行こう」

「そうだね」

皆で朝食会場に向かう。

朝食後はスキー教室が始まる。

ウェアに着替えてゲレンデにグループごとに集まった。

「今日は、昨日よりも上に行って長いコースを滑ってみましょう」

インストラクターがコースのボードを指差しながら説明をする。

インストラクターの後についてリフト乗り場にやって来た。

「ここの、リフトは少し早いですからタイミングに気を付けてくださいね」

3人乗りのリフトに海とルコが2人で乗る。

「気持ちいいね、朝は」

「そうだね」

しばらく乗っていると急斜面のコースが見えてきた。
リフトの前の方で歓声が上がる。

下を見ると黒いウェアのスキーヤーが粉雪を舞い上げながら滑っていた。

「隆羅だ！」

「凄い上手だね。インストラクターが憧れる訳だ」

海が声を上げるとルコも見とれていた。

リフトを降りて林間コースを滑りだす。

インストラクターの後に続いて滑っていく、みんな転ばずに滑りを楽しんでいた。

しばらく滑るとホテルが遠くに見えてきた。

緩やかな斜面で広いコースの上をみんな思い思いに滑っていると後ろの方から、もの凄いスピードで滑り降りてくるスキーヤーがいた。
ボーゲンで滑る生徒の間をすり抜けて滑走している。

ストックは持たずに何かを抱きかかえていた。

黒いウェアがルコの横をすり抜ける。

「きゃあー」

ルコが転んで黒いウェアが一瞥して滑っていく。

「如月のバカ！」

ホテル前のゲレンデに着くと如月がトランシーバーで何かを話していた。

「私、文句言ってくる」

ルコが如月に向かい進もうとするとインストラクターが宥めた。

「葉月さん、許してあげてくださいな」

「絶対に許さないんだから」

「それじゃ、これを聞いてください」

インストラクターからイヤホンを渡され、ルコが耳につける。

「急病の子どもは親と一緒に病院へ搬送完了しました」

「先生は、大斜面へ宜しく」

「了解」

「これは？」

ルコが良く判らずにインストラクターに聞いた。

「如月先生はパトロール隊の手伝いをしているんですよ」

「じゃ、あの時抱えていたのは」

「上で具合が悪くなつた子どもでしょう。如月先生ぐらいならリフトより早いし安全ですからね」

「そ、そうだったんだ。それなら仕方が無いか」

ルコが改めて如月を見るとウェアに雪をつけて何かを落としていた。

「こりや着替えないと駄目だな」

「先生、どうしたんですか？」

パトロールの隊員が近づき如月に聞いてきた。

「具合の悪い子どもを上から降ろしてきたら汚されてしまつて」

「それじゃ、私が上がりますので先生は着替えを」

「悪いが頼みます」

如月がホテルに向かった。

「ねえねえ、インストラクターのお兄さん頂上は危ないの？」

ルコが皆を代表してインストラクターに質問をする。

「そんな事はないですよ。初心者でも途中からゴンドラで降りることも出来ますから」

「それじゃ、行つて見たいなあ」

「ちよつと待つてくださいね。上の状況を聞いてみますから」

インストラクターがトランシーバーで連絡を取っていた。

しばらく確認の連絡をして皆に向かった。

「頂上は今、空いていると言う事なので行つて見ましょう」

「やったー」

ルコ達のグループが手を挙げる。

「でも、帰りはゴンドラで戻る事になりますのでくれぐれも逸れな

い様に皆さん注意して下さいね」

「ハニー」

ゴンドラに乗り山頂の下まで行く。

ゴンドラに全員乗り切らなかつたので2グループに別れる。

最初のグループが上で待っているとしばらくして残りのグループがゴンドラで上がってきた。

「綺麗な眺めだね。海」

「そうだね」

天気も良く白い雪が輝き、青い空と白い山並みのコントラストがとても綺麗だった。

「お待たせしました。次のリフトまで少し滑ります、着いて来てくださいね」

インストラクターに連れられて少し滑り乗り継ぎのリフトまで行き更に上がる。

そこは360度の大パノラマだった。

スキー場全体が一望できて周りの山並みがはっきり見えた。

「うわあ、来て良かったね」

「そうだね。凄い綺麗」

グループ全員が壮大な景色に見とれていた。

「それじゃ、そろそろ良いですか。行きますよ、ゆっくり降りますのでくれぐれも逸れないように。それと途中少しコースが狭くなりますので注意して下さいね」

インストラクターが先に滑り出す。

それに続いてみんな順序良く滑り出した。

樹氷の中を滑る、雪や氷がキラキラと輝いてとても幻想的だった。

そして登って来た時とは違うゴンドラ乗り場に向かう、ルコと海はグループの最後尾で滑っていた。

ルコが左に寄りゴンドラ乗り場へと向かった。

海もルコの後を追う様に左に寄ろうとすると、後ろから人が滑って

きて交差しそうになりバランスを崩し右方向へ滑っていつてしまった。

「海。こっちだよ」

ルコが海を呼ぶ。

「うん、分かってるんだけど」

海が思うように行きたい方向に進めないで戸惑っていると初心者らしい女の人が海に向かって滑ってきた。

「キヤー、退いて退いて。お願い！」

「えっ、そんな事言われても」

海が必死に逃げようとする。

何とかぶつからずに済んだが海は尻餅を着いて反対側の斜面に滑り落ちてしまった。

「海。そっちは駄目！」

「葉月さん？ どうしました」

ルコの声がゲレンデに響くとインストラクターが声を掛けた。

「海が人とぶつかりそうになってあっちの斜面の方へ」

ルコが急斜面の方を指差す。

「今、ヘルプを呼びますので、先に皆さんはゴンドラに乗って下で待機していて下さい」

ルコ以外の生徒に指示を出し、トランシーバーでヘルプを呼ぶ。

「第2ゴンドラ頂上で、1人ロスト。ヘルプ頼みます」

「了解！ 数分で向かいます」

「大丈夫かな、海」

ルコが心配してインストラクターを見上げた。

「今、直ぐヘルプが来ますので。少し待ちましょう」

「はい」

その頃、空斗達のグループも山頂にやって来ていた。

「うひょー。めっちゃ気持ちいいやんけ。絶景やな」

「凄い景色だな。最高！」

上級者グループの誰もがはしゃいでいる。

「しかし、こっちの斜面はあかん。マジ、びびるわぁ」

そこは上級者でさえあまり滑らない為に新雪が積もりかなりのテクニクを要する急斜面の難所だった。

そこに空斗達の後ろから目の覚めるような綺麗なブルーのウェアがその斜面に飛び出した。

「あはや、そんな勢いで滑れる訳あらへん」

空斗が呆氣にとられるが、そのスキーヤーがもの凄い勢いで急斜面を新雪やコブを物ともせず滑り降りていく。

「すげー！ あんなにスキー上手い人見たことねえぞ」

みんな見とれていた。

青いウェアがあつという間にその斜面を滑り降り、そのまま滑り去った。

数分もしないうちに、ルコと一緒に居るインストラクターに連絡が入った。

「今からロスト探します。下で落ち合いましょう」

「あの人ですね」

インストラクターが指差した。

腕にオレンジ色の腕章みたいな物を着けている、ブルーのウェアを着たスキーヤーがかなりのスピードで滑り降りてきてルコとインストラクターの近くに止まり手で合図をした。

「さあ、みんなが待っていますから葉月さん。彼に任せて下に降りましょう」

「はい」

ルコとインストラクターがゴンドラに乗り込んだ。

海はスキー板を外してしまい何とか外れたスキー板の所までたどり着いて板を着けようとしていたが、なかなか装着できずに焦っていた。

周りではみんな楽しそうに斜面を滑って下りていた。

「どうしよう、板がはまらないよう。みんなとも逸れちゃったみたいだし」

だんだん心細くなってくる。

滑る事に夢中で誰も海を助けようとはしなかった。

「あれ、何で填まらないんだろう。困ったなあ」

何回教わった通りに板を装着しようとしても外れてしまった。

そこへ綺麗なブルーのウェアを着たスキーヤーが近づいてきて声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

「あつ、板が填まらなくて」

「僕の肩につかまって足を上げて」

海が言われた通りに男の肩につかまり足を上げる。

男がストックで海のブーツの底に着いた雪と板の雪を落とした。

「これで填まるはずだから」

「はい」

海が板を填めると綺麗に装着できた。

男がトランシーバーで何かを話し始める。

「第2ゴンドラ山頂付近。ロスト者、確保しました。このまま連れて降ります」

「了解。第2ゴンドラ乗り場で待ちます。どうぞ」

板が填まったのは良いがこの斜面を降りる事は海には難しかった。

海が困ってモジモジしていると海の頭を男が撫でた。

「しょうがない奴だな。まだ気付かないのか？」

「えっ？ その声」

プチパニックになっていた海は全く気付かなかった。

ニット帽を深く被りゴーグルをしている為、顔も良く判らなかった。青いウェアにオレンジの腕章をしていたのでインストラクターだと思っていた。

「隆羅なの？」

ゴーグルを外すと海が隆羅の顔を見たときに泣き出してしまった。
「泣くな、もう大丈夫だから」

「だって、心細くて。みんなとも逸れちゃって。それに隆羅。ウェアの色も違うし」

「具合の悪い子どもを抱きかかえて降りたら汚されてしまったから着替えたんだよ。みんな下で待ってるぞ。行くぞほら」

「でも、こんな所滑れないよう」

「ボーゲンの格好をして」

「えっ、うん。こう？」

海が隆羅に言われるままボーゲンの格好をする。

「それでいい。そのまま」

隆羅が力二歩きをして斜面を登る。

ボーゲンをしながら海のスキー板の間にスキー板を滑り込ませて、海を後ろから抱しめ海の耳元に顔を寄せると海が隆羅の腕を抱しめた。

「隆羅。ありがとう」

「言う通りにするんだぞ良いか？」

「うん。分かった」

後ろから隆羅に抱えられながら2人で急斜面を滑っていく。

「右に重心を」

隆羅が的確に指示を出していく。

「ストックを上手く使って重心移動するんだ」

「こう？」

「そうだ、そうするとスムーズに重心の移動が出来るから」

「こうして、こう？ あっ本当だ」

海が隆羅に言われた通りにストックを突くとスムーズに曲がる事が出来た。

「少し、スピードを上げるぞ。ハの字の板を少し狭くして。海、そんなに体に力を入れていたら疲れるだけだぞ」

「う、うん」

「大丈夫だから。リラックスして」

「うわぁ、気持ち良いね」

「そうだろう」

少しだけスピードが上がり難しいと思っていた斜面を滑り終わる。

「ここからは1人で滑れるな」

「う、うん」

海が不安そうな顔をして隆羅の顔を見上げた。

「それじゃ、滑り方を教えながら下まで行こう」

「本当に？ 嬉しいな」

隆羅がお手本を見せながら滑っていく。

「まず、板をそろえて滑る。曲がりたい所で足を広げて曲がる。そして板をそろえる」

海がそれを見て滑りだす。

「上手いじゃないか、その調子だ」

しばらく練習をしながら滑り、今度は少しレベルアップをする。

「今度は、曲がる時にも板をそろえるんだ。見ていろよ」

隆羅が手本を見せる。

曲がる時に山側の板を少し持ち上げ板をそろえ滑っていく。

海が真似をしながら滑りだす。

「こうして、こうだ。キヤー」

「海、大丈夫か？」

「うん。平気だよ」

海が転んでしまい隆羅が声を掛けると直ぐに立ち上がり滑り出した。

「そうそう、良い感じだ」

「えへへ、隆羅の教え方が上手いからだよ」

「それじゃ、少し速く滑る練習をしよう。今まで見たいに大きなターンじゃなくて小さくターンを繰り返しながら滑るんだ。上手にストックを使って重心移動をする。行くぞ」

「よし！ 私も」

海が隆羅のお手本をじっと見て海が滑り出す。

「うわあ！ 気持ちいい。景色が流れてる」

隆羅の側まで滑りボーゲンで止まる。

「止まる時も、曲がる時と同じで少し強く踏ん張ると止まれるぞ。慣れない時は今の止まり方が一番良いけど。急に止まりたい時には試してみる、山側に体を傾けないと飛んでいってしまうけどな」

「うん。やってみるね」

「もう、これで海も中級者以上だな。さあ、みんなが待っているから急ごう心配してるはずだからな」

「そうだね。でももう少し隆羅と2人で滑りたいなあ」

「しょうがない奴だな、少し遠回りして帰るか」

「えっ、本当に？」

「みんなには内緒だぞ」

「うん」

ルコ達のグループはゴンドラを降りて、他のお客の邪魔にならないように少し移動して海の帰りを待っている。

ルコとインストラクター以外の生徒は目の前のゲレンデで滑って遊んでいた。

「大丈夫かな、本当に」

「大丈夫ですよ。ちゃんと見つかったって連絡もあったし。あそこからは滑って降りてくるしかないですから少し時間が掛かりますけどね」

インストラクターがルコを安心させる。

「そうだよね」

「それに……」

インストラクターが話そうとすると後ろから聞き覚えのある関西弁が聞えてきた。

「葉月、こんな所で何しとるんや？」

「海と逸れてしまつて戻ってくるのを待っているの。文月こそゴンドラなんかで降りてきて情けないなあ」

「 shouldn't you, 1番上で滑つたら1人が転んで足を捻ってしまっただけから」

「なんだ、そうなんだ。ビビって降りて来られなかったのかと思っただよ」

「あほか。それよりメチャ凄い奴が居てん。山頂の難所の急斜面をもの凄いスピードで降りて行きよっただけじゃ。青いウェアを着た奴やってんだけどな」

「あつ、戻ってきましたよ」

その時インストラクターが指差した。

「海！」

ルコが手を振ると海も手を振り返した。

「何があっただけでしょう？ 彼女もの凄く上達していますけど。やっぱり流石ですね」

「えっ？ 何が流石なんですか？」

「ほら、側にいる人ですよ」

海と綺麗なブルーのウェアの人がシュプールを描きながら滑り降りてくる。

あのオレンジの腕章を着けた人だった。

「本当だ、海。いつの間にあんなに上手くなったんだろっ」

海がとても綺麗な滑り方でルコに向かって来て目の前で綺麗に雪を舞い上げ止まった。

海がゴーグルを外しインストラクターとルコに頭を下げる。

「心配をかけてスイマセンでした」

「大丈夫だったの、海？」

ルコが海の肩をつかんだ。

「うん。凄く楽しかったよ」

「楽しかった？」

「先生、ありがとうございました。助かりました」

インストラクターが青いウェアの男に頭を下げた。

「先生？」

ルコが首を傾げる。

「葉月、どうしたんだ？」

「パパ？」

「先公？」

ブルーのウェアの男がゴーグルとニット帽を外すとルコと空斗の
声が重なった。

「あの、メチャ上手の奴は先公やったんか。クソ、むかつくわあ。

午後からわいと勝負やあ！」

「やれやれ。一難去ってまた一難か」

空斗が如月に宣戦布告し如月ががつくりと肩を落とした。

「葉月さん。今、パパって？」

インストラクターがルコに小声で聞いてきた。

「あの、実は。如月先生は私の育ての父親なんです」

「そうなんですか。素敵なお父さんですね」

「はい！」

その後、ホテルで昼食を食べながら海とルコはおしゃべりをしてい
た。

「もう、海はずるいんだから」

「でも、板が外れてなかなか填まらないし。誰も助けてくれなくつ
て心細かったんだよ」

「本当にパパは、いつも海を見ているよね」

「今日はたまたまだよ。たぶん」

「そうかなあ、怪しいなあ」

「でも、スキーってとっても楽しんだね」

「そうでしょうよ、ラブラブで2人きりで特別レッスンだもんね」

ルコがフォークで皿を突つつきながら拗ねていた。

「もう。ルコは直ぐいじけるんだから」

「そつだ！ この後、私もパパに教えてもらおう。海からも頼んで
ね」

「ええつ、でもパトロールの手伝いがあるんじゃないの？」

「大丈夫。海が頼めば絶対に嫌とは言わないから」

「もう、ルコのバカ」

午後からは自由時間になっていたが、文月が如月に勝負を挑む噂があつという間に広がってスノークロスコースの周りには人だかりが出来ていた。

ゴール地点近くに海とルコがいた。

スタート地点には如月と空斗それにインストラクター達の中から数人がエントリーして総勢六名が立っていた。

「文月、一発勝負だからいいな」

如月が空斗に確認をする。

「ええで、絶対に負けへんから」

スタートする。

一斉に6人が滑り出した頭は空斗が取った。

そして2連ウエーブ、バンクのコーナーを抜けて大きなウエーブが目の前に来る。

空斗がジャンプするとその横を青いウェアがすり抜ける。

「あかん、何であんなに安定してんねん。追いつかれへん」

「すげー」

「うおー」

とギャラリーから歓声上がる。

そして連続ウエーブ。

ジャンプすることに如月に離されて行く。

インストラクターでさえ着いて行くのが精一杯だった。

下から見ているとジャンプしながらもの凄い速さで滑ってくるのが見える。

「怖くないのかなあ」

「ルコもやってみたら」

「絶対に無理。怪我したらパパに怒られるもん」

「うふふ、そうだね」

そしてゴール直前の5連続ウェーブに如月が突っ込んでくる。
一気に飛び越すと最後のウェーブに着地してそのままゴールに滑り込み雪を舞い上げて止まった。

そして空斗がゴールする。

空斗に続いてインストラクター達が次々にゴールした。

「やっぱり、パパは凄いね」

「うん。もうビックリ何でも出来るんだね」

「これで、女の子の扱いが上手ければ完璧なんだけどなあ」

「ぶうー。そこは今のままで良いの」

「それもそうだね、これ以上モテモテじゃ海が困るもんね」

空斗が息を切らしていた。

そこに涼しい顔をした如月が近づいてくる。

「文月、これで満足だろ。手加減無しだからな」

「当たり前じゃ、手加減なんかされてたまるかいな。はあ、はあ」

「勝負ありで良いな」

「待ってえなあ、もう一本勝負やあ。今度は俺の得意なボードでジ

ヤンプ勝負や」

「やれやれ、しょうがない奴だな。それで最後だぞ」

「よっしゃ！ 次はこてんぱんにしたるさかいなあ」

それを聞いていたギャラリーや生徒達が次々にボードのコースに移動を始めた。

「おいおい、次はスノボーでエア勝負だつてよ」

「すげーのがきつと見られるぞ」

「行くきやないよなあ」

「しかし、文月もしつこいね。海」

「そうだね、でも隆羅の格好良い所もつと見たいけどね」

「そっか、ラブラブだもんね」

「もう、ルコはからかわないで」

ルコと海も移動を始めた。

如月と空斗は一度ホテルに戻りブーツを履き替えボードを持ってビツクキツカーのあるコースに向かった。

そのコースには大小2つのジャンプ台があるコースだった。

「文月、悪いが少し練習させてくれ。ジャンプはやった事が無いんだよ」

「ええで、いくらでも練習しいな。待つてるさかい」

如月がインストラクターと話をしはじめる。

ジャンプの仕方とトリックを聞いているようだった。

インストラクターが手を使って説明していた。

そして数人のインストラクターが手本を見せる為にジャンプし始める。

それを見ながら説明を受けている。

そして如月が練習を始めた。しかし、それは練習と言うより完璧にエアをマスターしている様にしか見えなかった。

「あれの、何処が練習やねん。ほんまに初めてかいなあ」

スリーシックスティ、ファイブフォーティ、セブントウエンティ次々に決めていく。

そして縦回転や捻りを入れていく。

練習を終えて如月が空斗の側にやって来た。

「文月、大体感覚が分かったから始めよう」

「先生、ほんま初めてなん？」

「ボードは初めてじゃないけれど、キツカーやエアはやった事がないんだよ。判定はどうするんだ？」

「そやなあ。3本滑って歓声が大きき方でいいんちゃうか」

「それで、いいんなら構わないが。これで最後の勝負だからな」

「ええで、ほんならワイが先攻で見本を見せたるわ」

空斗が先攻で滑る。キツカーでジャンプしてボードをグラブしエアを決める。

2つ目のキッカーでは逆手でクラブした。

「ウォー」と歓声が上がった。

次に如月が滑り始める。

ジャンプして体を斜めに大きく回転させエアを決める。

2本目は縦に回転する。

「すげー。なんだあれ」

「誰なんだあのボーダー。プロじゃないのか？」

歓声と言うよりどよめきに近かった。

「まるで鳥みたいだね。ルコ」

「これが本当の白鷺だね」

「さあ、文月。残り2本だ」

「あかん、もうええよ先生。完敗や」

空斗が力なくガックリとうな垂れた。

「しょうがない奴だな。男だろう、この状況をどうするんだ」

観客は次はまだかと期待満々で待っていた。

「文月、ちよつと耳を貸せ」

如月が空斗に耳打ちをする。

「分かったな良いか？」

「しないなあ。やつたろうやないけえ！」

2人でスタート地点に立つ、如月がビッグキッカー側。そして空斗がミデアムキッカー側に立った。

「何が始まるんだ」

「おいおい、何をするんだいったい？」

観客がざわめく。

「せーの、ヤッホー！」

空斗が掛け声を上げる。

2人同時に滑り出し全く同じタイミングでジャンプし別々のトリックを決める。

そして次のキッカーでも全く同じタイミングでジャンプした。

「すげーぞ！」

「超クール！」

もの凄い歓声が上がった。

そして最後のトライ、2人で交差しながら滑り降りてドンピシャでジャンプし今度は全く同じトリックを決める。

一系乱れぬ動きだった。

次のジャンプでも全く同じ動きをする。

「ウオオオオー!!」

歓声がコースを包み込んだ。

ランディングして如月と空斗が拳を当てる。

「メチャ気持ち良い！」

空斗が両手を空に突き出し雄たけびを上げる。

「文月これで満足だろ。俺はもう懲り懲りだからな」

空斗に片手を挙げて如月がホテルに向かった。

空斗は生徒達に囲まれていた。

「海、私達も行こう」

「うん」

2人で如月の元にむかった。

勝負の後は、ルコの建ての願い出で如月のスキー教室が始まった。

大勢の生徒が参加希望したがくじ引きで参加者が決められた。

海はインストラクターと如月のスキー教室を見ていた。

「いやあ、凄い物を見せてもらえて幸せですよ」

「そうなんですか？」

「ええ、毎年やってくれないかなあ」

「それはどうでしょうね」

海が笑った。

「でも、如月さんが学校の先生で良かったですよ」

「えっ？ 何ですか」

「だってスキー教室の先生だったら僕達失業しちゃいますよ」

「ふふふ、そうかも」

「教え方が凄く上手いですからね。私も勉強させてもらってます」
インストラクターが如月の方へ滑って行った。海はいつまでも隆羅の姿を眺めていた。

その日の夕食後、ホテル内の室内プールに女生徒が集まっていた。
みんな廊下からガラス越しに中を見ている。

「あつ痛たた、はしやぎ過ぎやな」

空斗が腰を擦りながらやって来た。

女生徒達が羨望の眼差しでプールを見ている。

「格好良いね」

「綺麗な泳ぎ方だね」

空斗がプールを見ると1人の男がゆっくり泳いでいて綺麗にターンしてまた、泳ぎ始めた。

「なあなあ、誰なん？」

「えっ、如月先生だよ」

「へえ、あのおっさんなん」

そこに、ルコと海が歩いてくる。

「よう！ 完敗男」

ルコが空斗に声を掛けた。

「うわ、感じ悪う。完敗って」

「本当の事じゃん」

「あんなあ。如月と対等にトリックを決めたんやでえ」

「それは、如月が文月に合わせたんじゃない。違うの？」

「そ、そうかも知れへんけどな。しかし、あのおっさん何であんなにタフなん？」

「何でも疲れた体をほぐすのにスイムが一番なんだって」

「へえ、そうなんや。知らなかったわあ」

「文月も泳いでくれば」

ルコが空斗の肩を力強く叩くと空斗が顔を歪めた。

「あつ痛たたたた」

「どうしたの、そんな顔して」

「いや。今日、はしやぎすぎて体中がガタガタやねん」

「ダサ、おっさん臭いなあ。どっちがおっさんだか」

「おっさん言うな。まるでヘタレ見たいやんかあ」

「転校初日から文月はヘタレでしょ」

「ふふふ、そうだったね」

如月を見ていた海が笑う。

「クスクス」と他の生徒達も笑いを堪えていた。

「ああ、もう好きにしいや。もう寝よ寝よ」

空斗が腰を擦りながら部屋に向かった。

「あはははは」

後ろで大きな笑い声が上がった。

「さあ、みんなもそろそろ部屋に戻らないと消灯時間だよ。如月の雷が落ちるぞ」

ルコが脅かすとみんながゾロゾロと部屋に向かった歩き出した。

海が如月の方を見ると、ちょうどプールからあがった所で目が合つて海がみんなに判らない様に小さく手を振る。「お・や・す・み」

と如月の口が動いた。

海は頷いて部屋に向かった。

色々な思い出がいっぱいの修学旅行も最終日になる。

朝食後少しだけ自由時間があり、生徒達はお土産を買ったりして過ごしていた。

その後、ホテル前の広場で閉講式があり、クラスごとにバスに乗り込み学校に戻る事になる。

「お世話になりました」

インストラクターやホテルの人にお礼を言う。

「如月先生。来年も宜しくお願いしますね」

インストラクターが声を掛けると「また、来年」と言って如月が最後にバスに乗り込んだ。

クラス委員長が班長から連絡を受け如月に全員の点呼を報告する。

「如月先生、点呼終わりました」

「それじゃ、出発するか」

「ほら、委員長」

クラスの女の子が委員長を急かした。

「あのう、先生」

「どうした、委員長？」

「先生の隣の席空いていますよね」

「空いているが」

委員長がメガネを指で直して深呼吸する。

「今回の修学旅行の殊勲賞として、水無月さんを隣の席に座らせてあげて下さい。お願いします」

委員長が頭を下げた。

「いいぞ！」

「先生の看病をしたんだもんね」

「ヒューヒュー」

などと声上がる。

「先生なら別に構わないが」

如月がOKを出すとクラスメイトが海に声を掛けた。

「ほら、海。早く」

「ルコ、どうしよう」

「いつてらっしゃい」

ルコが笑顔で手を振る。

「もう、ルコまで」

海が真っ赤になり席を立ち、如月の横まで来る。

「失礼します」

海が恥ずかしそうに席に着いた。

「じゃ、出発だ」

如月の合図でバスが走り出した。

しばらくすると海が疲れたのか如月の肩を枕代わりにして眠ってし

まづ、その写真もばっちり撮られていた。
その写真には幸せそうな海の寝顔ととても優しい如月の眼差のツーショットだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6036t/>

彼はグランパ!!

2011年11月17日21時22分発行